

きみにとどくまでシリーズ

田村くんの

うるわしきスクールデイズ

— 3 —

— 笹竹颯夜

1 うるわし...くない春！

春のうららの隅田川。

小鳥のさえずりと菜の花の薫り。

柔らかな陽射しと、蚊の鳴くような...

「.....らぁ...」

蚊の鳴くような...

「...たむらぁ.....」

...蚊の鳴くようななっさけねえ声で俺の名を呼ぶのは一一。

「田村ってばよお.....っ。起きて...」

枕代わりに抱きしめていた机を、サーッと引かれそのまま派手に床の上におっ転がっちゃまった。

「痛ってえっ！」

防衛する間もなく前のめりにつんのめったから、デコを思い切り床に打ち付けた。

「バカ...。新学期早々朝からずっーと居眠りしてるんだから。もう昼休みだよ？」

田村くんの安眠を妨害してくれたのは松山弟。

そして、ぶざまにコケた俺をせせら笑う小早川。

「うるせー、小早川。春の新学期だから眠いんだろーが。で、おめーはいったい何てことすんだよ、次郎！」

床に転がったままケツだけを上げたみっともない田村くんを、ふたりは高いところから見下ろしてくれちゃってる。

「さ、お昼にしよー。田村くん、そのたんこぶ冷やしてくれば？」

小早川はポニーテールをぶるんと振って回れ右をして、弁当箱を持って教室を出て行っちゃまった。

相変わらず可愛くねえヤツ。

3年になったって一のに、しおらしさとか大人らしさとかちっともねーし、口から出るのは憎らしい言葉ばかりだ。

まあ、付き合いも3年目になりゃ慣れたし、それが小早川環ちゃんってヤツだし、別にいいんだけど。

で。

人のことをとんでもねえ起こし方で目覚めさせてくれた張本人は、ここぞ一っとうっ立ったままだ。

「机引くことねーじゃんか。フツーに背中を叩くとか、腕を引っ張るとかできねーのかよ」

やること過激すぎなんだよ。

デコ痛えし…。

「悪い、悪い。まさかこんなマジメに居眠りしてるとは思ってなかったからさあ…」

「俺はいつでもマジメなの…。で、なによ？」

ふくれたデコをスリスリしながらやっと立ち上がった。

「田村、昼メシ食った？」

「食ってねえって…」

今までマジメに居眠りしてたんだから。

けど、起こしてもらったおかげで腹の虫も目覚めたようだ。

「そういや腹減った…。今からメシにする」

「じゃ、じゃ、じゃあさ、あああああのさ。なななな中庭で一緒に食わねえ…？」

「はあ？」

ランチのお誘いかよ？

松山弟とふたりで？

中庭で？

「気持ち悪りい…」

中庭ランチはやっぱり可愛い女の子と一緒にじゃなきゃ。

こんなムサイ顔と並んでメシ食ったってつまんねえし。

「おめーの気持ちが良いだろうが悪だろうが別にどうでもいいの。ななな中庭で、まままま…」

「麻耶ちゃんがランチしてるってわけだ？」

「そそ、そう。当たり前！」

「へえ…」

かなり積極的になってきやがったぜ。

自分から麻耶ちゃんのところに飛び込んで行こうなんてさ。

まあ、まだひとりで行く勇気はねえから、俺に付き合わせようっていうんだらうけど、それでも弟にしちゃずいぶんな進歩だぜ。

やっぱ、マチガイだろーがなんだろーが、キッスを経験したから多少オトコになったってことなのか？

「じゃ、付き合ってやる」

「おう」

「その代わりに、そのままそこで告っちまえ」

「なっ…！？それは無理っ！！」

「んじゃ、付きあわねえ」

「田村あ！」

情けねえ声を出し、弟は頭を抱えちまった。

けど、もうそろそろ決めてもいいだろう。

何度も言ってるけど....

「勢いってのが肝心なんだぜ？いつまでも遠くから眺めてるだけじゃしょーがねえだろ？麻耶ちゃんだっていつまでもおんなじ麻耶ちゃんじゃねーぜ？」

あかねがいつまでもおんなじあかねじゃなかったように....

「けど、心の準備が.....」

「んなもん、何とかなるって！とりあえず行くぞ！」

「まままま待てっ！たた、田村ああ」

「おめーが誘いに来たんだろーが」

「そーだけど、そーじゃねえし...！」

ジタバタする弟を引っ張って教室を出た。

田村くんのうるわしのデコに、コミカルなたんこぶ作るぐらいのことやってくれたんだから、ただ中庭でランチってのは許せねえだろ。

で、中庭に到着。

春のうららの昼下がりだもんで、いるわいるわ、1年から3年までの男女とりどり。さすが、本城高校の人気ナンバーワンを誇るランチスポットだ。

サーッと見回すと、一番に目に付いたのは柏木と小春ちゃんカップルだ。ふたりは木陰のベンチで仲良く並んでラブラブランチしてやがる。

で、小早川と大島、吉岡の3人古娘（こむすめ）たちも反対側のベンチで並んでる。

そして、簡易ステージの右側の上に麻耶ちゃん発見。あかねもヒカルも一緒だった。

「行くぞ、次郎。用意はいいか？」

「だから...ダメだって.....」

「腹を決めろ」

「決められねえよ...」

かまわず弟を引きずって、1年生たちがたむろしてる間を縫って一番奥のステージまで歩いた。

3年になってからというもの、校舎も離れちまったし部活はもちろんやってねーし購買部もあんまり利用しないしで、あかねともほとんど顔を合わせない日が続いてた俺にしてみりゃ、今日のこれはラッキーな昼下がりってわけでした。

「おう、お前たち！」

「あ、田村先輩とジロ先輩！」

声をかけると、3人乙女はすぐに反応してくれた。

「偶然だあねえ？そこに混じっていいかい？」

「どうぞどうぞ」

ヒカルがあかねと自分の間のスペースを開けてくれたんで、俺はそのあかね側にくっつく位置に座席を確保。後ろでもじもじしてる弟は端っこの麻耶ちゃんの横にさり気なく座らせた。

第一段階はこれでクリア。

あとは弟と麻耶ちゃんがふたりの話をしやすいように、俺はあかねとヒカルを引きつけときゃいいってもんだ。

で、早速軽音楽部のネタ。

「明日はいよいよオリエンテーションだな？」

「そうなんです。新入部員集まるかなあ…」

ヒカルがフーッとため息をついた。

「あたしも心配…。墨中のあの子たち、来るんですよね…？」

「たぶんなあ…。ヒビクの命令だし、律儀に従うんじゃねーか？」

「やっぱり…。あたし、大丈夫かなあ？」

あかねがため息つきたい気持ちはよくわかるぜ。

あのチビっこいヤツはいいとして、他のヤツらはどう考えても悪ガキのクソガキだ。

そんなヤツらがいっぺんに5人も来ちまったら、あかねひとりじゃ面倒見切れねえだろう。

「まあ、いざとなっちゃ俺が…、」

何とかしてやるさ、ってどこまで言いたかったのに、

「いつまでも甘えてちゃダメだよ、あかね。あんたが部長なんだから、最初から威厳を持って接しないとバカにされるよ？」

と、麻耶ちゃんが口を挟んできた。

「そんなこと、わかってるよ…」

あかねは口を尖らせて言った。

相変わらずキツイ麻耶ちゃんです。

「そうかなあ？あんたわかってないと思うよお？最初が肝心なんだよ？大丈夫かなあ？なんて言っちゃダメだよ」

麻耶ちゃんは隣でぼけーっというだけの弟には全然かまわずにこっちの話題に入ってくる。

—次郎。黙ってね—で会話に加われ。

弟に目配せ言葉を発信した。

けど、ヤツはバカみて—に目をパチパチ返して来ただけだ。

「麻耶ちゃんは剣道部の部長になったんだよな？」

作戦変更で、話題を麻耶ちゃんに持って行った。

「はい、そうです」

「女子で部長ってのも大変なんじゃねえ？なあ、次郎？そう思うよな？」

「お、おう...」

おう、じゃね—だろ！

繋げろよ、話を！

「しょ—がないです。男子、弱いのがかりだから」

う...。キツイ...

「おお、お、俺、きよ、去年部長の立松に楽勝したぜ...」

勇気を奮い立たせた弟がやっと会話に加わった。

「ああ！そうでしたよね！あの時のジロ先輩凄かったですよ！」

で、麻耶ちゃんもそれに乗る。

「ジロ先輩、剣道やってたんですか？」

「いや...、あん時が初めて...だったりして...」

「ほんとですか—？」

よし、いい感じ！

さすが体育バカなふたりだ。

このままふたりで剣道ネタで盛り上がれ。

んでもって勢いつけてそのままデートに誘っちまえ！

デートっていやあ、ヒビクとヒカルのジャックベリーなデートはどうだったんだろ？

ヒビクにつっこんどくの忘れてたけど...

「なあ、ヒカルよ？」

「はい？」

「お前とヒビク.....、」

って言いかけた時、

「ふざけんじゃねえっ！！もういっぺん言ってみろ！！！」

いきなり中庭中に響き渡った怒号に言葉が引っ込んじまった。
気が付くと、ざわついてた中庭がシーンと静まり返ってた。
みんな、怒鳴り声の出所を探してるようだ。

「何度でも言ってやるっ！！てめえの女でもねーのに、彼氏顔してんじゃねーよ！！！」

木陰のベンチの前で、そいつらは胸倉をつかみ合っていた。

「二度とアイツにちょっかい出すんじゃねえ！！」

「なんで、彼氏でもないてめーの指図を受けなきゃなんねーんだよ？！」

言い争ってるふたりは見たことねえ顔だった。
折り目正しい制服着てるところを見ると、入学したばかりの1年らしい。
しかし、すげーことでもめてんな？
女の取り合いかよ...？

「てめーみてえな薄汚れた手から、アイツを守ってやるのが俺の役目なんだよ！」

「めでてえヤツ！唯子はてめーに守って欲しいなんてこれっぽっちも思っちゃいねえよ！」

「うるせえっ！」

ボカッとやっちゃった。

やられたヤツもボカッとやり返し、木陰のベンチ前でボカスカ始まっちゃった。
本城高校に入学して以来、こーゆー光景には出会ったことなかったんで、

「怖え、1年...」

ってのが、見たまんまの印象だ。
ああゆう乱暴なヒトたちとは関わりたくありません。

「ねえねえ、キミたち。こんなところでやめなよ？みんなの迷惑だよ？」

勇敢にも仲裁に入ったのは、ラブラブランチの目の前で喧嘩をおっぱじめられちゃった柏木だった。

でも、
こういう血の気の多いヤツらに、そうゆう優等生的な戒めは通じないと思うぜ？

って、思ったそばから案の定、

「うるせえ！関係ねえヤツが口出すんじゃないねえ！」

と、ヤツらふたりはヤワな柏木を突き飛ばしやがった。
柏木は見事に吹っ飛んでコンクリートの床に叩きつけられた。

「直弥くん！！」

「柏木！！」

俺と弟は瞬時に木陰に飛んで行った。

「おい、柏木？大丈夫か？」

柏木は頭を強打したみたいで、完全に伸びちまってる。

「柏木やべーよ？脳震盪起こしちまってるみたいだぜ？」

柏木の様子を見てた弟が言った。

沢渡先生呼んで来る！と、小春ちゃんが中庭を飛び出して行った。

さて。

この暴れん坊ズのガキたちだ。

こいつら、柏木のことなんか全然気にしちゃいねえのか、はたまた気が付いちゃいねえのか、まだ暴れてやがる。

関わりたくねえけど、仲間が巻き込まれちゃ黙っちゃいられねえ。

とりあえず、つかみ合ってるふたりを、ヤツらの背中を掴んでひっぺがした。

そのままふたりを床の上に転がしてやったのと、廊下から女の子ふたりが飛び込んできて、

「圭吾に海東くん！何やってんのよ！」

と、怒鳴ったのが同時だった。

「なにすんだよ！？」

転がされた暴れん坊ズは声を揃えて叫び、俺を睨みつけやがった。

「なにすんだよ、じゃねーだろ？おめーら、誰に向かって口利いてんの？本城高校は1年が3年にタメ口利けるほど甘いところじゃねーんだぜ？」

暴れん坊ズは、あ、とマヌケな声を出した。

コイツら、自分たちのことしか頭になかったって様子だ。

やれやれ....。

「おめーらどっちも、そんなんじゃ女の子なんて守れねえな？俺がもらってやるからよこしてみろ」

「それは...」

いきなり小さくなっちゃって。

しょーもねえガキじゃんか。

しょんべんガキのくせに、派手な女の取り合いやってんじゃねーっての。

「田村くん、どうしたの!？」

小春ちゃんと沢渡センセが飛んできた。

沢渡センセはすぐに柏木を見て、

「柏木くん？」

と、耳元で声をかけた。

すると、柏木はようやく気づき、

「痛てえ...」

後頭部を押さえながら起き上がった。

沢渡センセは、柏木が起き上がるのを支えて手伝いながら、

「田村くん、松山くん、柏木くんを保健室まで連れて来てくれる？そっとよ？いい？」

と、俺と弟に指示をした。

それから、暴れん坊ズたちに、

「あんたたちはすぐに職員室に行きなさい！」

と、厳しく言い渡した。

暴れん坊ズたちはしゅんとしたまま頷き、沢渡センセに連れられて中庭を出て行った。

「田村先輩！柏木先輩！」

あかねたちが飛んできて、

「田村くん！松山くん！」

小早川たちも飛んできて、

「なになに？何の騒ぎ？」

ヒビクがのっそりとやって来た。

「本城高校始まって以来の乱闘騒ぎよ！柏木くんが巻き込まれて大変だったの！でも、今、田村くんがおさめてくれた」

と、ヒビクに説明したのは大島だ。

「乱闘!？ヒカルたちは大丈夫だったのか？」

「私たちは遠くにいましたから」

ヒカルの答えにヒビクはホッと息をついた。

「田村先輩って見かけによらず強かったんですねえ……」

麻耶ちゃんがいきなり呟いた。

「え？ま、まあ…」

「やっぱり男は強くなっちゃ！ですよ？」

「そ、そうねえ…」

中学の時はよく喧嘩もしたけど、今となっちゃ平和な毎日を送ってるもんで、実はちょっぴり足が震えてたりする田村先輩なんですけど…。

「あたし、強い人が好きなんです」

「あ…そう」

横で弟が肘鉄をくれやがった。うるせーなあ。わかってるって。

「…で、でも、俺に惚れるなよ？」

「惚れた！！」

どこかで誰かが叫んだ。

「ままま麻耶ちゃん！？」

泣きそうな声で弟が叫び、

「あたしじゃないですよ！」

麻耶ちゃんは強く否定した。

じゃあ、誰が俺に惚れたって？！

周りをぐるーっと見回してみたけれど、全部見終わる前に、

「からかわれてんじゃねーよ、田村…」

あっさりとヒビクに言われ、これまたあっさりと納得した田村くんです。

そんなことはどうでもいいことで、俺と弟は柏木を保健室に連れて行った。

ひとりで歩けるよ、と言う柏木を大げさに両脇から抱えるようにして歩いたのは沢渡センセの言いつけだったからだ。

「柏木くんは放課後まで横になってなさい。田村くんたちはもういいわよ？教室に戻って授業を受けなさい」

本鈴はとっくに鳴り終わっちゃった。

しかし、なんつう昼休みだったんだ…。

「せっかく、麻耶ちゃんと……」

弟がぼやくのも無理はない。

こんな騒ぎ、大島が言うとおりに本城高校始まって以来だろう。

とにかく平和で、1年が3年にタメ口利いたって全然問題ねえ学校が本城高校ってところだから。

「しょうがねえ。次のチャンスを狙え」

「…またあの気力奮い立たせるのかよお…」

弟はもろ脱力状態。

可哀想に。

けど、一番災難だったのはやっぱり柏木だろ。

「しかし、とんでもねえ1年だぜ…」

怖い怖い。

もう二度と関わりたくねえ。

マジでそう思っちゃった田村くんでした。

2 田村先輩ホモ説

オリエンテーションも無事に終わって、俺たち3年の部活での仕事は完全になくなってしまった。ってというか、本当は最初から出る幕はねーはずだったけど、あかねひとりで部員勧誘は心もとないってんで、俺が勝手に仕切っちゃった、ってのが正しい。

麻耶ちゃんには怒られちゃうかもしれないけど、やっぱどんな1年が集まってくるのか見定めとかねーと、今年の1年は墨中イジメボーイズしかり、中庭乱闘暴れん坊ズしかり、本城高校始まって以来の悪ガキが集まってるみてーだし、ほよよんなあかねがいじめられやしねーか、変な虫がつかねーかと心配でしょーがない。虫は群竹だけで十分だ。

しかし、軽音楽部。

何がどうしてこーなったのかわかんねえけど、11名の新入部員が入っちゃった。チビっこいやツも含めた墨中のヤツら6人と他に女子2名男子3名だ。

俺が見たところ、チビっこいやツー一名は綾瀬ー以外のどいつもコイツもー癖ふた癖ありそうなヤツばっか。

なのにあかねは嬉しそうにニコニコしちゃって、

「いっぱい1年生が来てくれたから、今年は部内のコンサートが出来そうです〜」

と、無邪気に喜んでた。

今年あかねは、こじんまりと小グループ単位で部員たちがそれぞれの音楽をやり定期的な発表会をして、センセたちにも睨まれることの無い軽音楽部をやっていくつもりらしい。

このメンバーたちで大丈夫かよ...、と思ったけど、せっかくやる気になってるあかねに余計なこと言っただけでわざわざビビらせることもねーから、俺は遠くから見守ることに徹する。

ーいつだって田村先輩が見ててやっからな！何かあったらいつでも相談して来いよ！

...と、あとであかねにはちゃんと言っておこうと思う。

ところで、ヒカルの演劇部は苦戦だったようだ。

こっちはヒビクが宣伝ポップを書いて応援したみてーだが、そのポップがどうもいけなかったらしく、

「ヒビク先輩が書いたこれ、誰も見向きもしませんよお...」

と、ヒカルは口を尖らせてたらしい。

ー本城高校演劇部、墨川中学三送会にて公演！！ー

.....と、そのポップにデカデカと書かれてたのを俺も見たけど、へビがのたうちまわってるようなあのヒビクの字に加え、へのへのもへじなイラストなんだか模様なんだかわかんねーマーク

みたいなのが演劇っぽいことやってる絵が描いてあって、それがやたら色だけ原色使いでド派手。

三送会を宣伝のネタにするんだったら、写真を貼ってみるとか、レポートっぽい文句を書いてみるとか、もうちょっとやりようがあっただろうとツッコミを入れてやりたかったけど、だいたいにおいてイラストまで描いちゃう面倒くさい手作業を、ヒカルのためにヤツがやったってだけでも凄い話だ。

けど、それはそれ。

今年の可愛くない1年にはきっと、
「超ダセエ……」

と、ウケが悪くプイされちゃったってところだろう。

結局演劇部には1人の部員も集まらず、たまたまその場を通りかかったチビっこい綾瀬を軽音楽部から貸し出してやったそうだ。

部員数2名の演劇部は3年の鳥海たちが残留したとしても人数割れになっちゃうから同好会に格下げか…っていう微妙なところにあるらしい。今度の予算委員会までに何とか考えねえとヤバイだろう。

けど、ヒビクは、
「ヒカルなら大丈夫。何とかするさ！」

と、余裕かましてた。

でも、俺も何となくそれは信じてる。

ヒカルには、逆境をも跳ね返してそれを味方につけちゃうパワーと才能があるって思うし。だからあんまり心配はしてねーんだけど。

そんなひと段落したような、うららかな春の昼休み――。

風もないしぼかぼかとあったかいし、こんな日は屋上のいつもの場所でのランチの後はそのままバックレお昼寝タイムに――、

「ヒビク、次何？」

「日本史。お前は？」

「現国」

――はい、決まり。

弁当食い終わってそのままごろんと寝転んだ。

空は何処までも青く、流れる雲は綿あめのように柔らかそうで。

目を閉じたらそのままスヤーツと眠れちまいそうな、そんな素敵な昼下がりに、

「田村先輩と風間先輩ってホモなのかなあ？」

なんていう、とんでもない言葉が青空を渡って俺たちの耳に届いて飛び起きた。

購買パンをのんびりとかじってたヒビクも、ほえっ？とした顔で俺を見る。

辺りを見回すと、ちょっと離れたところで1年生らしき女の子が二人、こっちをじーっと見てた

。ひとりが言って、ひとりは言った方の口を押さえ、

「シッ！聞こえちゃうよ！」

と、焦ってるようだった。

ええ。

しっかり聞こえましたよ。

俺とヒビクが…、

「ホモなんか？俺たち？」

ヒビクはハムカツパンの袋を中途半端に開けたままの状態でニヤニヤ笑ってやがる。

まあ、そう見えてもしょーがねえかなってところはある。

だいたいいつもつるんでるし、ここでランチするのも見事に男ふたりってのがほとんどだし、ビジュアル的にも変に目立つ俺たちだし…。

「女っ気がないのがいけないんだろーか？」

ねーしねーしねーし。

悔しいぐらいに。

「けど、そう思われてんなら面倒くせーから、ほんとにホモになってみっか？」

なんて、ヒビクは俺に迫ってくる。

最初は冗談かと思ってノッてやってたけど、何だかコイツ、マジっぽい。

青空の下、悩ましげな顔をして金色の髪を輝かせて俺に近づいてくるヤツは、ドキッとするとほど美しい。

これが女だったら、迷わずぎゅーっと抱きしめちゃうんだけど、コイツはヒビクだ。

いくら女ッ気がねえって言ったって、俺はそっち系に走る気なんてさらさらねー。

「今まで言えなかったけど、俺、やっぱり田村に惚れてるみてーだ」

ヤツはそんなことを言いながら俺に迫ってくる。

「おいおいおい！！」

と、俺は退く。

「愛し合おうぜ、田村ぁ...！」

ヒビクは俺に覆いかぶさり、

「おおおお俺には好きな子いるし！悪いけど！わわ...、ホント、マジやめてええ！」

俺は絶叫。

次の瞬間、ヒビクは俺の真横に転がり、俺たちは同じ格好で空を見上げてた。

「ばーか。何、本気になってんだよ。冗談に決まってるだろーが。あの1年生たちを喜ばしてあげようとしただけ」

「ばーか。そんなの分かってるに決まってるじゃん。ノッてやっただけ」

ほんのちょっと、いやかなりマジでビビったけど...

「やっぱりあの先輩たちホモみたい...。抱き合ってたよ、今...」

「ええええ～？いやだぁ...！」

1年生の女の子ふたりは、思い通りのリアクションをしてくれた。

寝転んだままヒビクはにやり、と笑った。

「平和だねえ、1年生...」

「...だなぁ」

田村先輩と風間先輩がホモかなんて、そんなことで騒いじゃってさ。

けど、俺たちも2年前はどーでもいいくだらねえことで大騒ぎしてたしな。

難しいことなんにも考えねーでよかったあの頃が懐かしい。

「さーて。寝るか」

と、ヒビク。

「おやすみい～」

別に今も、難しいことなんかひとつも考えちゃいねーな...

◇

5時間目、6時間と見事に寝ちまって放課後。

部活もねーから、俺たち5人はとっとと帰宅だ。

下駄箱で5人揃うのを何となく待っていると、

「あら、田村くん。5、6時間目サボってついでに掃除もさぼって悠々とお帰り〜？」

と、イヤミっちらしく言い放ち、下駄箱をふさいでる俺をクイツと押しのけたのは環ちゃんだ。

そこへ、柏木と小春ちゃんがやって来て、松山ブラザーズが週間ジャンプをどっちが買うかで揉めながらやって来て、ヒビクがのそ〜っとやってきた。

「早く帰ってもやることねーんだよなあ…」

と言う松山兄に環ちゃんは、

「予備校とか行ってないの？」

と訊いてきた。

「ヨビコウ？それって日本語でえすかあ〜？」

「……あんたに訊いたあたしがバカだったわ…」

そりゃ、間違いなく当たってる。

そのまま何となく6人で昇降口を出ると、そこで渡り廊下をバタバタ走って来たヒカルにバツバリと出会った。

「先輩たちお帰りですかあ〜？」

ヒカルはハツラツとした笑顔で言った。

「おお。ヒカルは部活か？」

「はい！ヒビク先輩！あたし、やること見つかりましたよ〜。今度の予算委員会ではバッチリ予算取っちゃいますよ！」

「やることって…、演劇部のことか？」

実働部員ふたりで何をやる気んでいるんだろう、と俺や柏木たちが顔を見合わせたとき、今度は

「あらー、みなさん大集合〜？」

道着を着た凜々しい麻耶ちゃんが渡り廊下を歩いて来た。これから剣道部に向かうようだ。

弟がいつもの、ままま…を言い始めて「耶」まで言わないうちに、さらに、

「あ、田村先輩たち…」

チャリを転がした群竹の後ろからあかねが歩いて来た。

「今日は空手も軽音も休みなの？」

というヒカルのツッコミに、あかねはうん、と嬉しそうに頷き、群竹はああ、と面倒くさそうに答えた。

こいつら、これから駅までらぶらぶらんでぶーなのね、ちきしょーめ。

こんな風にして昇降口を出たところで一瞬みんなが集合して、再びそれぞれの場に散ろうとしたその時、

「田村先輩！」

聴きなれない声が後ろから俺を呼んだ。

振り返ったところに、見覚えがあるようなないような...1年生の女の子が立っていた。

けど、たぶん喋ったことはねえだろう。

「俺のこと？」

3年に田村ってのは俺しかいねーはずだけど、一応確認してみた。

女の子はツカツカと俺の目下まで歩いてきていきなり言った。

「田村先輩ってホモなんですかー？」

ーはあ？！

とっさになんて返答したらいいのか、すぐ目の前で俺を見上げている女の子を見つめたまま、まさに言葉を失った、という感じの田村くんです。

あかねもヒカルも環ちゃんも麻耶ちゃんも、それぞれやろうとしてた次のアクションをストップして女の子に注目した。

松山ブラザーズでさえいきなりのもので口あんぐりでツッコミも出ないし、柏木と小春ちゃんもきょとんとした顔をしている。

「ぶわっははははっ！！」

バカみてーに笑ってるのはヒビクだけだ。

さっき、屋上で田村先輩と風間先輩って...なんてことを言われちゃったばかりなんで余計に可笑しいんだろう。

けど、

「...ホモなんですか...って言われても.....なあ...？」

どーやって答えりゃいいのでしょうか...？

「だってさっき屋上で風間先輩と抱き合ってたし、なんとなくそーゆー関係に見えたから」

ってことは、あの時俺たちのことをホモだホモだと騒いでいたのは...

「君だったわけね...」

田村くんと風間くんって抱き合ってたんだー、とか、ヒビク先輩本当なんですかーとか、やだー、とか、じい〜と見られたりとか、主に女子たちからのそういう激しいリアクションがあった時、

「私、1年A組の神部唯子です。田村先輩、教えてください！」

と、唯子ちゃんという子は涙目になって迫って来た。

大きな真ん丸い瞳がクリクリと動く、なかなかプリティーな女の子だ。

けど、今はそんなこと思ってる場合じゃねえ。

教えてくださいも何も...、いったい何がここで起こっているのか、わけがわからない田村くんです。

「バレちゃったらしょーがない！君が見たとおり、俺とここにいる田村先輩はおホモダチなのよ！」

またヒビクが余計に混乱させるようなことを面白がって言う。

「え〜っ!？」

唯子ちゃんを含めた女子全員が揃って絶叫した。小春ちゃんまで。

「田村せんぱあい.....」

あかねが搾り出すような声で言った。その横で群竹が珍しいものでも見るような目で俺とヒビクを見比べてやがる。

だから、ちょっと待って。

勘弁して。

「...んなわけないだろ？全部ヒビクの冗談だったの...。神部さん...だっけか？俺はホモじゃねーよ？いったいなんで...」

そんなことつつこむの？

「神部唯子、ゆ・い・こです！」

唯子ちゃんは名前の方をやたら強調して、

「ホモじゃないんですね？ってことは、田村先輩はちゃんと女の子の人を好きになるんですよね？」

と、俺に確認する。

ここで、こらえきれなくなった松山ブラザーズがふたり揃って腹抱えて笑い出した。

「女は好きになるけど、非モテクラブの会長なんだよなあ！」

兄は余計なことまでも暴露しやがって。

もう、俺は本当にわけがわかんねえ。

何なの、これ？

もしもの話で、俺がホモだろーがゲイだろーが非モテだろーが、唯子ちゃんには何の関係もねえことだろ？

唯子ちゃんは、よかったあ.....、と胸に手を当ててふかーい息を吐いた。

何がよかったのか、それもわかんねえ。

ほんと、今年の1年生は宇宙人みてーだ。

ふと気がつくと、あかねたち女子組も柏木たち男子組も、俺と唯子ちゃんを囲むようにしてじーっと注目してやがる。

「...で、神部さん...？これで納得してくれた...？」

田村くんはちゃんと女の子を好きになる生き物ですーけど？

はい！と唯子ちゃんがすがすがしく笑った時、

「唯子、帰るぞー」

ひとりの男子が昇降口から出て来た。

ソイツを見て俺は、げっ！と思ったし、ソイツは俺を見てうっ...、と声を出した。

だってコイツ、中庭乱闘事件の暴れん坊ズのひとりじゃん...。

「あたし、今日は田村先輩と帰るの！」

唯子ちゃんがいきなり俺の左腕を取った。

「俺と帰るっ...?!」

そう言ってるそばから俺は既に唯子ちゃんに引っ張られている。

「おい、唯子...！」

暴れん坊ズが慌てて後を追って来た。

たしかコイツ、女の子のことで喧嘩してたんだっただよな？

唯子、に変な虫がつかないように見守るのが自分の役目だとかなんとか喚いてなかったか？

喧嘩の相手は `虫、だったから、コイツにぶん殴られたんだっただよな？

ってことは、この状態の俺ってすんごくまずくないか？

俺、殴られちゃうんじゃないか？

ー待て待て！勘弁してくれよ！

乱暴者とは関わりたくねーんだってば、俺！

「ちょ...、ちょっと、神部さん、待って...？」

「唯子です、ゆ・い・こ！」

「ゆ...、唯子ちゃん...。あの。何で、俺が君と帰るの...？」

「田村先輩、鈍いですね。決まってるじゃないですかあ！」

ーは？

「先輩が好きだからです！惚れちゃったんです！よろしくお願いします！」

唯子ちゃんの手を、耳から聴いて身体中を巡って心臓に到達するまでにずいぶんの時間がかかった。

そして、状況とか意味とかをやっと理解した時、

「ままままマジかいやあ！？」

「田村くん！？」

「田村先輩！？」

「田村あ？！」

っていう、ブラザーズとか環ちゃんとかあかねたちとかヒビクの絶叫のあとに、

「唯子～？！なんで！？」

暴れん坊ズが泣きそうな声で叫んだ。

唯子ちゃんは、掴んでた俺の腕をパッと離し、ボーゼンとしてる俺をくりくり動く真ん丸い大きな瞳で見つめながら、

「だって...、田村先輩、カッコイイんだもんっ！」

と、サッパリ笑った。

そして今俺は、何故か唯子ちゃんに引っ張られて駅までの道を歩いている――。

3 羊と狼とゴリラ その1

ヒビクとブラザーズ、柏木と小春ちゃんに小早川、あかねと群竹が俺の後をついてくるような形で歩いてくる駅までの帰り道。

んでもって、俺はというと…、

「あのお…」

俺の左腕に絡まってる華奢な腕と、その腕の持ち主を見下ろした。

「なんですか？田村先輩？」

腕の持ち主、神部唯子ちゃんなる1年生がニッコリと微笑んで俺を見上げる。

すると、

「だあああああっ！！」

俺のすぐ後ろで男が叫ぶ。

「うるさいよ、圭吾！何でついてくるのよ！」

後ろを振り返った唯子ちゃんが、そこで鼻息を荒くしているソイツに怒鳴る。

「しょーがねえだろが！帰り道同じなんだから！」

唯子ちゃんにそう言い返して、ソイツはおもむろに俺を睨む一一。

一一超怖いんですけど……。

田村先輩ってホモなんですか？のあと、何故かこうゆうことになっちまった。

もうそこに駅が見えるってとこまで歩いて来てるのに、未だに俺はこの状況がよくわかっちゃいない。

唯子ちゃんはここまで来る間に、出身中学とか家族構成とか得意教科とか不得意教科とかを俺に教えてくれた。

んでもって、時々後ろで雄たけびを上げる暴れん坊ズを振り返って怒鳴った。

俺は一応、彼女の話は聞いていたけど、いつ後ろから蹴りを入れられるかわかんねーから気が気じゃねえ。

それに、ヒビクたち。

心配してくれてんだか面白がってなのか、黙ってぞろぞろついて来る。

それだけじゃなく、チャリを転がす群竹と、ヤツと並んで歩いてくるあかねの存在。

あいつら、何だってチャリに乗らねえの？

いつもは二人乗りしてササーッと行っちゃうのに。

「あ、先輩！ここに入りましょう？」

と、唯子ちゃんは駅前のドトール珈琲を指差した。

「え？ここ...？」

まごついてる間に、唯子ちゃんは俺の腕を自動ドアに向かって引っ張っていく。

いつも寄ってるけど少し別に入りたくないってわけじゃねえんだけど、俺の体は引っ張られる方とは逆の方向に抵抗がかかっている。

それはやっぱ、何でこうゆうことになってるかわかんねえからだ。

「田村先輩、鈍いですね。先輩が好きだからです！惚れちゃったんです！よろしくお願いします！」

...と、さっき唯子ちゃんは叫んだけど、そんなの信じられねーし。

これには何か裏がある。

絶対にある。

「おい、唯子！いい加減にしろよ！」

暴れん坊ズが俺を引っ張る唯子ちゃんの腕を引っ張った。

「せ、せ、せんぱい...が、困ってんのわかんねーの？」

暴れん坊ズの身体からは、俺に対して明らかな大嫌いオーラが発散されていた。

けど、ここは一応1年バーサス3年ってことで、義理を立てての「せ、せ、せんぱい...」だ。

「田村先輩、困ってますか？」

唯子ちゃんは俺の目を見つめておもむろに訊いた。

「はい。困ってます...。非常に困ってます。」

あっちであかねが見てるし。

心配気な目でずっと俺を見てるし。

叶わねえ恋だとは重々知りつつも、あかねの前でこーゆーのは俺的に非常にマズイんです。

なんだって群竹はこーゆー時だけみんなに協調すっかな？

いつものように、さっさとふたりに消えてくれっての.....。

けど、

唯子ちゃんに迷子の子羊みて一な目で見つめられちゃったら、困ってるなんて...言えない。

「...あ、いや...べつに.....」

「それじゃ、入らましょ〜！」

田村先輩、優柔不断ですー。

◇

小さいテーブルを挟んで唯子ちゃんと向かい合う、夕暮れ時のドトール珈琲。

「うふふ」

テーブルに両肘をついた唯子ちゃんが、珈琲を飲む俺をじいっと見つめる2階席。

こうゆう、一見ラブラブカップルなシチュエーションには全く慣れてない田村くん。

っていうか....、

「何でおめーらまで...！」

俺と唯子ちゃんが座るテーブルの両脇に、ヒビクとブラザーズ、柏木と小春ちゃんと小早川も、そして、俺の後方にはあかねと群竹まで、唯子ちゃんの後方には暴れん坊ズがしっかり取り囲んで俺たちに注目してやがって。

「だって、こんなおもしれえもの、見とかなきゃ損じゃん？」

見世物じゃねえっての！

第一、俺自身がなんでこーゆー場に自分がいるんだかわかってねーんだから。

「で、お前らは何?!」

ヒビクたちはいいとして、あかねと群竹だ。

おめーらまで律儀について来ることねーだろが。

「...風間先輩に引っ張って来られちゃって何となく.....」

と、あかねが呟いた。

群竹は、当然俺に興味があるわけでもねーだろうし、あかねが言ったとおりヒビクに無理やり引っ張られて来たんだろう。ひとりだけ退屈そうに窓の外をぼーっと見てた。

「なんか、みなさんが心配してるみたいなので、あたし、自己紹介しますね」

と、唯子ちゃんが立ち上がった。

「神部唯子、ゆ・い・こです。出身は北山3中、好きな科目は音楽で嫌いな科目は数学です。これからこんなふうにお世話になると思いますが、どうぞよろしくお願いします」

唯子ちゃんはヤツらみんなに向かってぺこりぺこりとお辞儀をしてみせた。

「こ、こんなふうにお世話になるって...？」

どんなふうにお世話になるってんだ？

「だから、あの。田村先輩はいつもこちらのみなさんと一緒に登下校してるんでしょ？」

「あ、ああ。まあ...」

約3名、いつも一緒じゃねーやつらも混ざってっけど。

「そのお仲間に、今日からあたしも入れてもらうので、そういう意味のご挨拶です」

「あ、そうか...」

.....って？！

「ちょ、ちょっと待ってよ、神部さん！」

それってもしかして、ホントにホントのマジでマジなわけ？！

「唯子って呼んでください！」

唯子ちゃんはまたそう言って恨めしそうな目で俺を見た。

――待て、待て、待ってちょうだい。

田村先輩が好きってアレ、マジだってーの？

なんで、なんで、なんでなのよ？！

「あのさ、神部さん？」

頭の中がパニくっちまってる俺に代わって小早川が発言した。

「なんですか？」

「さっきから田村くんには状況がわかってないみたいだし、あなたの言ってることはあまりにも唐突すぎる気がするのだけど」

う...、と唯子ちゃんはうつむいた。

するとすかさず、暴れん坊ズが小早川に向かって鋭い睨みをきかす。俺の大事な唯子をイジメんじゃねーよ、ってその目は言ってた。

しかし、小早川はひるみもしねえ。逆に暴れん坊ズを無敵の眼差しで睨み返し引かせてる。

「で、君はここにいる田村先輩に惚れちまったってわけね？」

と、今度はヒビクだ。

ヤツの言い方は、昨日の晩飯何だった？って訊くのとは変わんねえぐらいあっさりしてやがる。

けど、唯子ちゃんは顔を真っ直ぐあげて、

「はい。そうです。あたし、田村先輩が好きなんです」

と、ハッキリ言い切った。

「マジかよ？田村のどこがいいわけ？」

松山兄が喚き、

「うわあ...ストレートお～」

柏木が感心し、

「それ、ホントなわけ？」

小早川がツッコミ、

「勇気...あるなあ...」

あかねが呟いた。

その全部が俺のキモチだったりもする。

自分のこと好きだって、こんな風にハッキリ言ってもらったのは生まれて初めてだ。これで田村くんも18年間の非モテライフにオサラバだぜ！と、普通なら大喜びするところだけど、何故かヒトゴトのように思えちまう。どうも、唯子ちゃんのキモチってのが、俺の心臓に刺さらねえ。

「だから、田村先輩とお付き合いしたいんです。させてください、みなさん！」

唯子ちゃんは、ヒビクや小早川たちに向かって懇願した。

「俺たちに言ってもなあ？決めるのは田村だから...」

と、ヒビク。

なんにしても。

お付き合いさせてくださいと来ちまった。

ほとんどさっき知り合ったばかりで、互いのことな一んも知らねーのに。

そう。

唯子ちゃんの気持ちがググッと刺さってこねえワケはこれ。

俺とこの子は今の今まで何の接点もなく、唯子ちゃんは俺の目の前に突然わいて出た1年生だし、唯子ちゃんにしてみたって入学してまだ2、3週間しか経ってねえのに、俺の何を知って好きとか言ってるんだ？俺は羊の皮を被った狼かもしれねえんだぜ？

「いい加減にしろよ、唯子！」

突如、暴れん坊ズがぶちきれた。

ガタン！と椅子を蹴って立ち上がり、その拍子にテーブルの上の珈琲を転がし、自分のズボンにおもいきりひっかけて、それでもそんなことは気にしないって感じで唯子ちゃんのか細い腕を掴んだ。

「帰るぞっ！」

「ちょっと、待ってよ！」

「お前、おもいきりバカにされてんの、わかんねえのかよ?! コイツらにさらし者にされてっぞ?!」

てめえ、その口の利き方はなんだ! と、中庭乱闘事件を知らない松山兄が息巻き、それを弟がおさえた。

やっぱこの暴れん坊ズ、礼儀ってものをわきまえてない正真正銘のお子様ランチだ。敬語を使えとは言わねえけど、仮にも先輩たちに向かって1年坊主が `コイツら、はねえだろう。

「あんた、バカじゃないの? いきなり飛び込んで来たのはどっちだと思ってるの? 場の空気をちゃんと読みなさいよ。中学生じゃあるまいし...」

サラッと言い放ったのは小早川サン。

表情を変えないで冷静に言う環ちゃんの一言は胸に突き刺さる。

暴れん坊ズはカーッと顔を赤くして押し黙った。

「お前、早く座れよ...。ここにいるの、その女の子以外全員先輩だぜ...?」

鼻息を荒くしたまま立ち尽くしている暴れん坊ズに、クールな一言を浴びせたのはなんと群竹クン。

けど、ヤツはそれだけ言ってまた窓の外に目を移した。

きっとヤツは、 `先輩、に逆らえずにこんなとこまで来ちまったんだろう。可哀想に。

暴れん坊ズはやっと場の空気を読んだらしく、掴んでた唯子ちゃんの腕を離して再び席にいた。

「...田村先輩、この間言ったじゃないですか...」

暴れん坊ズの手が離れた腕をスリスリさする唯子ちゃんが、静かに口を開いた。

「俺? 何か言った...?」

唯子ちゃんに会うのは、ほんと今日が初めて...いや、もしかしたらどっかで会ってたかもしれねえけど、話をするのは絶対初めてのはずだ。

その俺が、何を言ったってんだ?

「圭吾と海東くんに言いました」

「俺がコイツともうひとりの暴れん坊ズに?」

ってことは、あの日だろ? 柏木が喧嘩の仲裁に入ってひでえ目に遭った日。

けど一一、

「何、言ったっけ...?」

「おめーらどっちも、そんなんじゃ女の子なんて守れねえな？俺がもらってやるからよこしてみろ、って…。『俺がもらってやるから』って言いました！」

あ———。

「そういや…、確かに言ってたぜ、お前…」

と、その場に一緒にいた松山弟が呟いた。

「田村先輩カッコイイし、高校生になったらかっこよくって強くて頼りがいのある先輩とお付き合いしたいなーってずっと夢見てたから、だからあの時一瞬で先輩のこと好きになっちゃったんです！」

「い……っ？」

確かにあの時にそんなことを言ったような記憶はあるけど、言葉のアヤだってわかるだろ、普通…。

「あれは、あの場をおさめようとした田村くんがとっさに言っただけのことでしょう？そうだったよね？」

小早川が小春ちゃんやあかねにも確認するように言った。

そうでしたね…、とあかねはチラリと俺を見た。なんか、やな感じの視線だった。

「だから、田村先輩！」

「は、はい…」

唯子ちゃんにじい〜っと見つめられた田村くんは生唾ゴックンだ。

「——あたしをもらってください！」

「いっ…！？」

ガタン…、と椅子から転げ落っこちまった。

4 羊と狼とゴリラ その2

脱非モテの第一弾がいきなり「もらってください、ってあんた...、過激すぎですよ...。

「い、いてえ...」

しこたま打ち付けたケツをさすりながら立ち上がろうとして、四方からの突き刺さるような視線を感じて見上げると、俺を取り囲んだヒビクやあかねたちの目が全部、俺一点に集中してた。

「...こうなっちまったらしょうがねえな、田村。もらうしかねーんじゃん？」

「お、おい！ヒビク！」

「風間くん！何てこと言うのよ！！」

ほんと、無責任な発言をしないでくれっての。

ほら、唯子ちゃんの目が輝いちゃっただろ。

んでもって、暴れん坊ズは今にも俺に跳びかかって来そうな形相だぜ。

とにかく、この場の渦中はやっぱどう考えても俺のようだし、ここは俺がちゃんと話をつけねえといけないんだろう。

「おめーら先に出ててくれない...？神部さんとちゃんと話しをすっから」

スッと立ち上がり、一番に出口に向かって行ったのは群竹だ。

そのあとをあかねがちょこちょこついていき、柏木と小春ちゃん、ブラザーズ、ヒビクがそれぞれ無言で出て行った。

「ひとりで大丈夫なの？」

最後までここにいた環ちゃんが、行く寸前にコッソリと囁いた。

「たぶん...」

「頼りないなあ...」

「いいから、お前も行ってろって...！」

ふんっ、とポニーテールを振って環ちゃんが行ったあと、

「圭吾も行って！」

テコでも動かねーぞ、と言いたげに俺を睨んでいた暴れん坊ズの背中を、唯子ちゃんはドンと押した。

「お、俺はここにいる！」

「なんでよ？あたしと田村先輩の問題なんだから！」

「俺の問題でもあんの！」

「圭吾には関係ないでしょ?!」

唯子ちゃんと暴れん坊ズの言い合いが始まっちゃったんで、とりあえずおさまるまで黙って待つことにした。

けど、このふたりの関係もよくわかんねえ。

暴れん坊ズの方は唯子命！ってな具合だけど、唯子ちゃんの方はさっきからこの調子。どう見ても暴れん坊ズのひとりよがりだ。

好きな子を守ってやりてえってキモチはよくわかる。俺だって、あんなあかねと群竹を間近で見てたってあかねのことはいつまで一も守ってやりてえと思ってる。

けど、それはやっぱこっそりと陰ながらってところに落ち着いてる。間違っても群竹やみんなの前で、俺が守ってやるぜ！と宣言するとか、あかねに近づく男を片っ端からぶん殴ったりはしねーよな。

「俺はお前を虫やゴミどもから守らなきゃなんねーの！」

ほら、言ってる――。

「だから、何だよ？あたしのことなんか別に好きでもなくせに、何でそうやっていっつも余計なことするわけ？」

「お前には関係ねーだろ！」

――はあ？ちょっと待って。

関係ねーことはないだろ？

第一好きでもねーってどういうわけよ？

ますますわかんねえ……。

けど、余計なツッコミをいれて変に関わりたくもねーから、そうゆう疑問は固唾と一緒に飲み込んだ。

「関係ないなら、これ以上あたしの恋の邪魔はしないでよ！小学校の時から今まで圭吾にどれだけ邪魔されて来たと思ってんの？」

「しょーがねえだろ。それが俺の役目なんだから！」

「誰が決めたあんたの役目なのよ！？」

「俺、だよ、俺！」

「そんなの勝手じゃないの！」

うんぬんかんぬん――。

――…これじゃいつまで経っても終わらねえなあ。

「もういいから、お前もそこにいる…。神部さん、話はすぐ終わるからコイツそこにいさしとけよ」

「でも…」

俺のキモチ、この暴れん坊ズにも聞いてもらっといた方が、この先面倒もねえだろう。

暴れん坊ズはドカッと元のテーブルに座った。

わなわなと体が震えてるところを見ると、そうとう頭に来てるらしい。

—やべやべ…。

早いとこ終わらせねえと、マジで一発飛んできそうだ。

ヒビクたちもいねーし、俺、ボコボコにされちまう…。

「あのさ、神部さん」

「だから、唯子って呼んでくださいってさっきから言ってるのに…」

「あ、ああ…。でも、やっぱり神部さん」

唯子ちゃんは、うう…と唸ってうつむいた。

ちょっと心が痛んだけど—、

「君の気持ちは分かったし、ありがたいて思うんだけど…、俺、好きな子いるのね」

「それって、まさか風間先輩ですかぁ……？」

おいおーい。

まじめな顔して訊かないで…。

でも、この際なんだっていいや。

「…まあ、相手のことはいいじゃん？とにかく俺には好きな子がいて、その子のこと考えるだけで精一杯なのね。ちょうど、その1年坊主みたくさ」

と、`1年坊主、を強調するとヤツはふんっと顔をそむけやがった。

「だから、悪いけど君とは付き合えない」

そんなあ、田村せんぱあい…、と唯子ちゃんは目を潤ませる。

今までの俺だったら、こーゆー目をされちゃどうなったかわかんねえ。もしかしたら、コロッと態度変えて、羊が狼になってたかもしれねえ。狼とまではいかななくても、こんなふうに見つ直ぐに好き好きビーム発射されて押しかけられたら、たぶん受け入れてただろう。

けど、今はどうしてもそーゆー気にはなれなくて。

「悪いな、神部さん。せっかくこんな俺を好きになってくれたってのにさ」

ほんと、非モテ歴18年のこんな俺だぜ？そのことについては素直に感謝、多謝、謝謝。

「…やっぱり漫画のようによくはいかないんだな…」

唯子ちゃんはぽつっと言ってため息をついた。

「漫画…って？」

「相手に有無を言わせないで自分のペースに巻き込んでやって、気がいたら付き合っていましたって。よく漫画にあるでしょ？そういう恋の展開って。それを真似してみたんです。あたしのペースに巻き込んで先輩を引っ張って行っちゃおう～って。上手くいくと思ってたのに…」

「…はっ。じゃあ、ホモ？からのあの強引な展開は…」

漫画の主人公になりきってたってワケですか…。

バカみてえ…！と、暴れん坊ズが吐き捨てるように言った。

バカ、というよりは幼い。

漫画の主人公になりきろうだなんて。

人のキモチ無視して自分のペースに巻き込んでおもうだなんて。

上手くいくと本気で思い込んで行動しちゃうなんて。

——そんなことが上手くいくのであれば、俺だってやりてえよ……。

現実には漫画やゲームみてえに都合よくはいかねえ。

それが、現実ってヤツなんだから。

「そーゆーことだから、俺のことは諦めてね？」

でもまあ、これで一件落着だろ。

田村先輩にその作戦は通用しなかったってことで、潔く諦めてもらわねーと。

……と、いうため息をひとつ落として立ち上がろうとした時——

「——いやです。諦めません……！」

俺よりも先にスクッと立ち上がった唯子ちゃんが、宣言するように高らかな声を発した。

「か、神部さん…？」

「唯子…？」

やな予感、やな予感、やな予感。

「漫画みたいな展開はもう期待しませんけど、あたしが田村先輩のこと好きだっていうキモチは嘘じゃないから、これからもずーっとオッカケやらせていただきます」

「オッカケ?!」

「はい！」

唯子ちゃんはニッコリと笑った――。

「ふざけてんじゃねーぞ、唯子！」

テーブルの上にドン！と両手をついて叫んだ暴れん坊ズ。ますます鼻息荒くなっちまって、動物園のゴリラみてーだ。

唯子ちゃんにおっかけられるってことは、コイツももれなくついて来るってことだよな...？

「唯子ちゃんさあ...？」

それはほんとに困ります...、と言おうとしたら、

「唯子ちゃんって言うてくれましたね、田村先輩！すごく嬉しいです！」

唯子ちゃんは、それこそ漫画のようにぴょん、と飛び上がって俺の左腕を両手で持って、くたーっと寄りかかってきた。

サラッと揺れた髪から柑橘系コロンの爽やかな香りが漂い、田村くん、不覚にも一瞬くららしちまった。

「ああ...あたし、こうゆうの、憧れてたんです〜」

唯子ちゃんはうっとりとしながらますます俺にくた〜〜っともたれてくる。

完全に漫画の世界に逝ちまってる。

結局、ちゃんと話したところで結果は何も変わんなかった――。

◇

唯子ちゃんに寄り添われたまま、欲求不満のゴリラと化した暴れん坊ズを背後に従えてドトール珈琲を出た時、

「おっ!？」

「ああ?!」

「嘘お!!」

店の前で待ってたヤツらが、それぞれとんでもない声を上げやがった。

「おめーら、そーゆーことになっちまったんかい!？」

「もらっちゃったの？」

「自制できなかったのか、田村？」

「狼男め！」

ヤツらは俺の気も知らねーで口々に言いたいことを言いやがる。

けど、その中にはもうあかねと群竹の姿はなかった。

ホッとしたキモチとどこか寂しいキモチが混ざり合い、ほんのひと時、自分の世界の中に佇んでいたけれど、

「田村先輩、行こう～！！」

唯子ちゃんに腕を引かれ、現実に戻った。

唯子ちゃんは改札に向かってズンズン進んでいく。後ろをヒビクたちがぞろぞろついてくる。

ポケットから定期を出して自動改札に挿し込もうとしたとき、背後で切羽詰ったような少年の叫び声がした。

「唯ちゃん?!」

やな予感、やな予感、やな予感。

「な、な、何で?どーして、これ?!」

案の定、叫んでいたのはもうひとりの暴れん坊ズだった。

暴れん坊ズその2は、唯子ちゃんが腕を絡めてる俺の顔をマジマジと見て、

「せ、せ、せ……ひでえっ！」

と、言葉になってない言葉を発した。

ギラギラした燃えるような目で俺を睨むその2。

コイツからも、田村先輩大嫌いオーラが発散されている。

「ひでえって言われても……」

超困っちゃうんですけど。

「どーゆーことだよ唯ちゃん!俺と付き合ってくれって返事、まだ聞いてねーのに！」

「あ、ああ～、あれね。断る。あたし、田村先輩にもらってもらおうことにしたから」

――だから、そうじゃないでしょ!何を聞いてたんですか、この子はっ!!

「も、もも、もらってもらおう～?!せ、せ、せんぱい…ひ、ひでえ!!」

泣きそうになったその2の後ろから、

「田村くん、サイテー!!」

と、叫んだのは小早川環ちゃん。

ひでえだの、サイテーだの、どうして俺が?

勘弁してよ、もう。

「てめえ、海東！まだそんなこと言ってんのか！」

「げっ！圭吾！お前もいたのかよ！」

「いちゃ、わりーか！」

「はん！お前がついてながらこのザマなワケ？唯ちゃん親衛隊長もざまぁねえな！」

「...ンだと、このやろっ！！」

ボカッと――、またやっちゃった。

「てめー、気に入わねえんだよ！」「いい男ぶってんじゃねーよ！」「唯子から離れろ、こらあ！！」

...と、叫びながら欲求不満ゴリラな暴れん坊ズその1はその2相手に大暴れ。

悪い時に悪い場所に現れちゃったその2だったな...、と多少同情した。

その1が叫んでることは俺に対する言葉で、拳に込めた力も、実は俺に向けられてるエネルギーだろうってのは容易に想像できるんで。

――やっぱコイツらとは関わりたくねえ.....。

「やめなさいよ、ふたりとも！こんなところで！」

唯子ちゃんが俺から手を離してふたりの仲裁に入った。

――い、今だ、チャンス...！

そーっと乱闘現場を離れ、ちょうど手にしてた定期を改札機に潜らせて、そのあとはダッシュでホームに走った。

ヒビクたちもあ、うんの呼吸で俺に続き、そのまま駆け込み乗車成功だ。

「はあ、はあ、ぜい、ぜい...」

「大丈夫かよ、田村あ...」

走り出した電車のドアの前で呼吸を整えてる俺の肩に、ヒビクやブラザーズたちの手が優しく乗る。

こいつら、何だかんだ言いながら心配してくれて.....、

――え？あっ？、うううう...！！

「ぐ、ぐ、ぐるじい` いいい！！」

ヤツら3人分、合計6本の手で首絞められた。

「いい思いしてんじゃねえかよ～」

「腕組んでもらっちゃって、目がもろ狼だったぜえ？」

「田村、やらしー！やらしーぞ！！」

兄、ヒビク、弟がそれぞれ喚く。

「だ、だから！！俺に言うなよ、俺に！！」

文句あるなら唯子ちゃんに言って。

お願いだから。

田村くん、エネルギー消耗しつくしました。

こんなに疲れたの、体育祭で800メートルを全力疾走して以来だ。

惚れられて、こんなに困るとは思ってなかったぜ。

明日からの俺はどうなっちまうんだろうー。

5 カップル誕生

「田村せ～んぱいっ！」

ぎょっとして振り返ると、そこにいたのは鼻をつまんだヒビクだった。ヤツはニヤツと笑い、「な～んてな！」

と、鼻の横に手を `パー、の形に広げた。

「ばかじゃん、ヒビク...」

――完全に面白がってやがるぜ、コイツ...

朝の駅。

今まで並んで歩いてたのに、いつの間に後ろに回りやがったんだよ、ヒビクめ。

わざわざ鼻つまんで女の声色出しちゃって、朝からご苦労さんなことです。

「おめーら、遊んでねーで急げよ。また権田の説教食らってもいいの？」

先に行くブラザーズが振り返った。

このところ、毎日ギリギリアウトなもんだから、ヤツらも多少焦ってるんだか、ほとんど小走り状態。

その、ギリギリアウトの原因は一応俺...ってことになるんだろう――。

――田村先輩、あたしをもらってくださいっ！

...の、あの日から、唯子ちゃんは朝の駅、帰りの校門で俺を待ってるわけだ。

あん時、一応お付き合いの申し込みはお断りしたはずなんだけど、彼女も漫画のような展開は期待しないって言ってたはずなんだけど...

「田村せ～んぱい！」

と、毎日さり気なく当たり前のように腕組まれちまって。

それだけじゃねえ。

唯子ちゃんにはあの、暴れん坊ズその1とその2が常にくっついてるわけだから、彼女が俺に対してラブラブアクションをするたびに、ヤツらは互いを相手に八つ当たりし合い、本当のところは二人揃って `田村、テメエ、コロス！、なぶっ飛ばしあいをおっぱじめるという、どう考えたって漫画としか思えねえような展開になっちゃう。

いい加減疲れちまって、電車を一本遅らせた。

それまで乗ってた電車が、遅刻ギリギリセーフ、下手すりゃアウト、な時間だったから、一本遅らせりゃ完璧アウト。

それでも、朝からどっと疲れるよりは、まだ遅刻の▲が生徒手帳に並んだ方がいい。
唯子ちゃんもさすがに遅刻はできねえらしく、この時間にしてからは、朝の「田村せ〜ん
ぱい！」はなくなった。

けど、帰りは――。

今日はどうやって唯子ちゃんと暴れん坊ズたちを撒くか――。これを、朝一に考えるという
のが、ここ最近の日課になっちゃった。

心の中、モヤがかかって晴れない5月の田村くんでありんす。

「はあ...」

「ん？田村くん、どうしました？」

生徒手帳を千田先生に渡しながらか、思わずふかーいため息が出ちゃった。

優しい千田先生はそんな俺を心配した言葉をかけてくれる。これが権田だったら、

「ため息つく前に学校にちゃんとつくよう来い！！」

って、生徒手帳で頭をパシッと叩くだけじゃなく、あとで職員室に来い、のオマケがついて40
分の説教というオツリ付きだから、今日は校門係が千田先生でラッキーだ。

「このところ、毎日遅刻のようですねえ？どこか具合でも悪いんですか？」

「...いえ。そうゆうわけでは...」

いつまでもこんなことやってるワケにはいかねえってことはわかってるけど、朝から唯子ちゃん
& 暴れん坊ズたちのテンションに付き合う元気はねーし、今んとこ他の方法を考えるのもめんど
くせーしでこの状態。

柏木は電車を一本遅らせるようになってから、小春ちゃんを道連れにするわけにもいかねえっ
てことで今は一緒に来てない。っていうか、別にヒビクやブラザーズだって俺の事情に付き合う
ことねえんだけど、ヤツらは当たり前のように一緒に遅刻してくれてる。

千田先生はきっとマジで心配してくれてるんだろう。優しさが伝わってきてちょっと心が痛ん
だりもした。

が...

「もしも進路について悩んでいるなら相談に乗りますよ？いつでも進路相談室に来なさい」

と、千田先生はにこやかに言った。

その微笑みと優しい言葉は、今までちっとも考えてなかった進路ってことを俺の脳内に運んで
来て、心には新たなモヤがかかった。

「――はい。そんな時はお願いします...」

と、一応答えてみたものの、進路相談室ってところは、今の俺にはまだまだ関係ない場所って気がしちまって。

「進路相談室かぁ…。後で行ってみつかないかぁ…」

本鈴が鳴り終わった廊下を教室に向かって歩いてた俺、ヒビク、松山弟はそのひとことを耳にしてピタリ、と立ち止まった。

柏木でもいるんじゃないか、と周りを見回したけど、いるのは俺たち4人のみ。
ってことは、今喋ったのは間違いなく松山兄ってことになる。

「誰が進路相談室に行くって…？」

一応確認してみると、

「俺に決まってんだろ」

と、兄はすまして言った。

「今日ってエイプリルフール？」

と、ヒビク。

「今日は5月1日！ばかじゃん？」

兄はまともに言い返す。

「おめー、進路相談室が何するところか知ってて言ってんの！？」

「進路の相談するところだろーが！」

「誰の進路を相談すんだよ？」

「俺のに決まってんだろーが、ボケッ！」

兄弟喧嘩が始まると、既にホームルームが始まっている教室から先生が飛び出してきて、早く教室に行け、と怒られた。

で、とりあえず俺たちは各教室に散り、兄の進路についての話もそこまでになった。

しかし、松山兄が進路かよ。

今朝、何か悪いもんでも食ってきたんじゃないかーだろうか。

でなきゃ、松山兄的5月病ってヤツだろうー。

◇

ところで、今月の20日から3年は修学旅行だ。行き先は今時珍しい京都・奈良。

っていうか、中学の修学旅行も京都・奈良だったんだよな、俺たち。貧乏都立だから近場の歴史的観光地ってことでしょーがねえけど、正直言って、つまんねえ！って思ったさ。

別に京都が嫌いってんじゃないかねえけど、中学の時と行動範囲がほぼ同じってのはどうよ？泊まる

旅館がある場所も見学するところもほとんど変わらねーんだぜ？ただ、高校の修学旅行には完全自由行動日が1日あるってだけで。

で、そのつまんねえ修学旅行を少しでも自分たちに都合よくするために考えたのが、ブックキャスルで実行委員会を牛耳ってしまうってことだった。ちょうどいい塩梅にA、B、E、Fとクラスもバラけてるんで、俺、次郎、太郎、柏木がそれぞれ実行委員に立候補した。ちなみに俺の相方は小早川環ちゃん。D組からは小春ちゃんが出てるし、F組には大島がいるらしい。

今日の昼休みからその実行委員会が始まり、メンバーたちは生徒会準備室に弁当持参で集まった。

けど、メンバーがメンバーなんで、特にこれ、と決めなくてもなるようにしちまうヤツらばかりな実行委員会だ。おまけに実行委員長はお祭り男の松山兄、ときてる。

日程と全体行動の見学場所はもう決まっちゃってるから、俺たちが決めることは自由行動日についてや最終日の夜に予定されてるレクリエーションなどってことだが、

「自由行動は自由行動。完全自由ってことでオッケー」

で、決まりだし、

「宴会にはコンパニオン！ってことでコスプレ大会、シメはブックキャスルライブ！」

で、会議終わり。

「早っ...」

と、小早川。

「何のために俺たち揃って実行委員やってると思ったわけ？自分らに都合よくしなきゃ意味ねーだろ？」

と、委員長が呆れてる小早川に言った。

自由行動日なのにああだこうだとうるさい決まりがあっちゃつまんねえし、最終日の宴会は去年の体育祭文化祭みたく盛り上げちまおう、っていうか...、ようするにブックキャスルやりてーってことなただけ。

「そんなのはわかってるけど...、だってまだ実行委員集まってないよ？」

そういや、柏木がまだ来てない。

「柏木、どうしたの？」

同じF組の大島にきくと、さあ？と首を振る。小春ちゃんが心配そうな顔で入り口の扉を振り返った。

「そのうち来んじゃねえ？で、他に決めることはもうねーんだろ？だったら今日のところはこれで解散？」

「ちょっと待ってよ！いくらなんでもこれだけじゃマズイでしょ？もう少し具体的に詰めないと！」

という、小早川の意見はもちろんもつともだ。

「具体的って別にねーじゃん？自由は自由、宴会はコンパニオンとライブ、これだけでしょ？」

「自由行動の班編成とか、宴会の式次第とか決めなきゃならないことはたくさんあるでしょ?!」

そーゆーことを松山実行委員長に求めても無理ってヤツだ。なんたって、ホームルーム合宿の予定表に『女の子とボートに乗る』って堂々と書いちゃったヤツだぜ。だからそこら辺はいつものようにきっと環ちゃんが頑張ってまとめてくれるんだろう。

けど、

「ああ、そうかあ。そういうことも決めねーとダメなのね? んじゃ、柏木が来るの待つか」
素直に頷く松山兄に、俺と弟は顔を見合わせちゃった。

「ヤツ、なんかあったのか?」

「さあ...、知らね...」

――やっぱ、5月病らしい。

「そう言えば田村くん、なんか大変なことになってるんだって?」

と、全然関係ねえ話題をいきなり持ちかけたのは大島だ。

「どんな1年生なの? 可愛い子?」

「田村くんにはもったいないぐらいに可愛い子」

俺が答える前に環ちゃんが言った。

「へえ〜? 田村先輩も隅に置けないねえ? そんなに可愛いんだったら付き合っちゃえばいいじゃない?」

「簡単に言うなよ。俺の気持ちってのもあるんだから...」

確かに唯子ちゃんは可愛いさ。

見かけだけじゃなく、天真爛漫に田村先輩って走ってくる姿とか、めげないところとか、1年前のヒカルを思い出すような雰囲気あるし。

けど、今の田村くんは、そうゆうことだけで女の子とお付き合いしたいと思えなくなっちゃってる。それが俺にとっていいんだか悪いんだかはわかんねーけど、俺がそうなんだからしょーがねえ。

「田村くんの気持ちねえ...」

と、大島は面白そうにニヤニヤしやがる。

「田村くんの気持ちなんて全然関係ないって感じだよね、神部さん」

と、小早川。

「だから困ってるんでしょーが...」

好きな子がいるって言っても、ハッキリ付き合えないとまで言っても、田村せんぱ〜いって来ちゃうんだから...。

「だったらさ、別の子と付き合っちゃえば? そうすればその子だって諦めるでしょ?」

「だから、簡単に言いなさんなって!」

本当に付き合いえて子は彼氏持ち…。

んでもって、その子以外の子とはお付き合いしたいと思えねえし、第一…、

「…いねーっての。別の子なんて」

何たって非モテ歴18年。

やっとその哀れな世界から脱出したしよっぱなが、あたしをもらってください！の唯子ちゃんなわけだからー。

そうお？と大島は隣の小早川をトン、と俺の方に押し出した。

「例えば、ここにいる環とかは？」

「えっ!？」

「ああ?!」

思わず小早川と顔を見合わせちゃった。

「やややや、やめてよ雪乃！ななな何言ってんのよ!!」

「そそそそ、そうだぜ、大島！わわわわ悪い冗談やめろって！」

小早川が妙に焦って言うもんだから、俺まで変に焦っちゃった。

しかし、大島のヤツ、とんでもねえこと言い出すもんだ。小早川と付き合えだなんて。しかも `例えば、で。

「別に本気で付き合わなくたっていいじゃない？田村くんはその子に諦めてもらえればいいんでしょ？」

「そりゃ、まあ…」

「だったら、環と付き合ってることにしちゃえばいいじゃない」

「ようするに、カムフラージュってこと？」

「そう。何焦ってんのよ、ふたりとも！」

と、大島はカラカラと笑う。

1年のとき、戸島に追いかけて困ってたマドンナ先輩の頼みで、偽彼氏をやったのはヒビクだった。

あん時のヒビクとおんなじ役を小早川にさせるってわけか？

「…そりゃ、出来ねえよ」

「何で？」

「そんな役、小早川に頼めねえって」

ヒビクたちだって最後はややくしくなっちゃってたし、ヤツはあれで俺たちの知らねえところで

ずいぶん傷ついたはずだし。

いや、もちろん小早川を傷つけようなんて思っちゃいないし、別に傷つくもんでもねーのかもしれないけど、やっぱ、嘘ってのは――。

「そーゆーことなら、あたしは別にいいよ...？」

――は？！小早川？！

「田村くんが本当に困ってるんだったら、あたし、協力してもいいよ？」

そりゃ、困ってるってのは本当だ。

けど、やっぱこーゆーことは...

「いいんじゃないねえ？田村あ！小早川なら無敵の最強だぜ？」

と、無神経に叫んだ松山兄の後頭部に、環ちゃんの無敵の一発が打ち込まれた。

「嘘でもあたしなんかは彼女じゃイヤだ、っていうならどーしょもないけど！」

小早川は兄をひっぱたいて痛くなった手にフーフーと息を吹きかけ、怒ったように言った。

「ヤダなんてこたあ、ねえよ」

ねえんだけど、相手以前の問題でカムフラージュで恋人ごっこってのは、やっぱ人としてのモラルに反するんじゃないかかって思うだけ。

俺が困ってるってことで、関係ない環ちゃんを巻き込んだり、田村先輩って無邪気に突進してくる唯子ちゃんに対しても誠実じゃねーし。

かと言って、このまんまにしといたら俺はいつまでも遅刻してなきゃなんねーし、帰りのこともある。

唯子ちゃんとお付き合いするってことは、やっぱどうしても出来ねえから....、

「断ってもダメ、撒いてもダメじゃ他に方法ないでしょ？」

待て待て。

今、考えてっから。

「一個だけあんじゃねーの？」

たった今、突然やってきたヒビクが言った。

「あれ？風間くんどうしたの？柏木くんは？」

「調子悪って保健室に行っちゃったから俺が代理で来てやった」

え...？と小春ちゃん。

「直弥くん、調子悪って...？」

「頭が割れるぐらいに痛てえって言った。でも、そんな顔色悪くなかったからちょっと休めば大丈夫じゃん？」

うん...、と小春ちゃんは半分浮かしてた腰を戻して座りなおした。

「んじゃ、柏木は来ねーみたいだから、風間を実行委員代理に迎えて話し合いの続きをはじめっか！」

松山委員長が早速仕切るけど、その前にヒビクに続きを聞いとかないと！

誰も傷つけず、小早川にも迷惑かけず、唯子ちゃんに諦めてもらえる…、

「……一個だけある方法って何？」

マジでヒビクに詰め寄った。

やっぱ俺、かなり追い詰められてる模様――。

ヒビクもマジで俺の目を見つめ返し、やがてニヤッと笑った。

「ホモになる！」

――……ガックリ…。

「それしかねーだろ？な？そう思うだろ？」

ヒビクは小早川とか大島とか松山ブラザーズに同意を求める。

「確かにそうかも知れねーけど…、」

そこまで自分のプライド傷つけなきゃなんねーの？

ここでホモになるってことは、卒業までホモを通さなきゃなんねーってことだろ？

唯子ちゃんだけを都合よく騙せるわけもないから、全校生徒に分かるようにホモになんきゃいけねーんだよな？

ってことは、あかねにも、田村先輩って本当はホモだったんだ、ってゆう印象を、一生持たれちまうってリスクまで背負うってことだろ？

「もういい…。やっぱ自然に諦めてもらえるまで、毎日遅刻すっから」

――と、ふかーいため息を吐いたら、

「それじゃ、田村くんの内申ボロボロになっちゃうよ？もう、進路のことだってちゃんと考えなきゃならないんだからね？」

と、環ちゃんがいやーなひとことを口にした。

内申とか進路とか、こんなところで話題になっちゃうんだな、やっぱ。

「でも、カムフラージュは苦しいぜ～？好きでもねーのに好きなふりするってのは相当な根性いるんだぜ？ベタベタしたくなくたって状況によっちゃイチャイチャしなきゃなんない時もあるしさ？」

と、経験者は語る。

う…、と詰まって小早川は俺を見た。

そうだよな。

そんな苦勞はやっぱ小早川にはさせらんねえぜ。

「...だから、もういいって...、」

と、言いかけた俺の声に、

「じゃあ、ちょっと練習してみな？」

ってゆう大島の張りのある声がかぶさり、同時に俺の左腕に環ちゃんの右腕が大島の手によってさり気なく絡められた。

されるがままになってた俺と環ちゃんは、一瞬の間呆然として、そのあと同時に顔を見合わせた。

「うにゃ?!」

変な声が出ちまった。

何だかみよ〜に照れくさくて。

なんだかみよ〜に心臓バコバコで。

「あら、とってもいい感じに似合ってるよ、ふたり！変にベタベタ恋人のふりをしなくたって、これだけで十分じゃないの？」

と、大島雪乃。

「...小早川、マジでいいわけ？」

「あ、あたしは別にいいよ？」

結局、大島のベタベタ恋人のふりをしなくたって、これだけで十分って言葉に変な安心感を持ちまい、ここに偽カップル田村優作&小早川環が誕生しちまった。

「じゃ、今日から早速ふたりで下校しなさいよね？風間くんたちも口裏ちゃんと合わせるんだよ？」

しっかり大島に仕切られて。

「悪りいな、小早川」

「うん、いいよ。その代わりに、あとでハムカツパン奢ってね！」

――可愛いじゃんかよ、小早川環。

「了解」

環ちゃんのために、明日の3時間目はまた裏技使ってハムカツパンゲットに走ってやるぜ、とマジで心に決めたところで予鈴が鳴った。

「なんだべ？田村の色話で委員会終わっちゃったじゃねーの」

松山兄が委員長らしいことを言いやがる。

「直弥くん、大丈夫かな...」

小春ちゃんは柏木を心配する。

「風間くんも困ったことがあったらいつでもあたしが協力するよ？」

大島はヒビクの肩をポンと叩き、

「サンキュ！でも、今のところ困っちゃいねーから」

ヒビクは大島に惱殺ウィンク。

そんな昼下がりの生徒会準備室。

小早川の右腕は、まだ俺の左腕に自然に回ったままだった。

6 だいじな人

小早川と肩を並べて帰り道を歩くようになって5日――。

実行委員会のあったその初日は、並んで歩く俺と小早川の間は1.5メートルほど空いていて、唯子ちゃんはずっと変わらず普通に俺と小早川が歩く真ん中で、普通に俺の左腕につかまって歩いてた。

3日目で1.5メートルが1メートルぐらいになり、それでも唯子ちゃんは何のためらいもなく、ほんの少しだけ狭そうに俺と小早川の真ん中を歩いた。

そして今日になって小早川が、1メートル空けていた俺との距離を30センチに縮めたことで、やっと唯子ちゃんは気がついたようだ。

「あれ？」

と、俺と小早川を見比べて首を傾げた。

「田村先輩、なんか...変...」

「...変...？」

「うん。変です.....」

どーゆー意味で変なのかよくわかんないけど、もともとよくわかんない女の子だからその辺はあんまり気にしないようにして、とにかく、今やっと、彼女が、なんか変だ、と感じ取ってくれたってことが肝心だ。

じい〜っと、俺たちを見つめて佇む唯子ちゃんに、心が痛まないといやあ嘘になる。

俺と小早川のこの30センチの距離は、唯子ちゃんを遠ざけるためだけに仕組まれたものなわけだから。

でも、ここでいつものような優柔不断な田村先輩をやっちまうと、この先、唯子ちゃんを余計に傷つけちゃうし、この茶番自体が無意味なものになっちゃう。

だから、あえて唯子ちゃんを無視し、

「...い、行こうぜ、小...、」

...早川、と、環ちゃんを促そうとしたら、

「変なのはおめーだろーがっ！」

と、相も変わらずに唯子ちゃんにひっついてる暴れん坊ズその1が怒鳴った。

ちなみにこの5日間、俺と小早川の間に唯子ちゃん、その後ろに暴れん坊ズその1、その2と唯子ちゃんのオトモダチの女の子がついて来て、さらに昨日まではその後ろをヒビクたちがついて来てたっていう、不気味極まりない金魚のフンぞろぞろな帰り道だった。

「いいかげん気付けよ！田村...せん...ぱい...は、おめーが迷惑だってよ！俺に近づくんじゃねーって、田村...せんぱいの左腕がおめーを拒絶してんの、わっかんねーの?!」

不動明王みて一なおっかない顔をした暴れん坊ズその1は、唯子ちゃんの右腕を掴んで喚いた。何もそんなふうには言わねーでもいーじゃんか...

って、身を乗り出そうとした俺の腕を、小早川がさり気なく引いて首を横に振る。

そして唯子ちゃんの横では、さっきからずっと、金剛力士みて一な顔をして俺たちとその1に睨みをきかしていたその2が、唯子ちゃんの腕をつかんでその1の手を、汚いものでも触るみたいにして振り払った。そして不動明王と金剛力士は当然、何すんだよ！、唯ちゃんにさわんじやねえ！、うるせーバカ！あっち行ってろ！ってなお約束どおりの小競り合いを始めた。

いつもなら仲裁に入る唯子ちゃんだか、今日は無視して俺をじっと見据えている。代わりにオトモダチがふたりの後頭部をパシッパシッと勢いよく叩いてヤツらは静かになった。

「うそ...」

と、唯子ちゃんは呟いた。

「圭吾の言ってること、嘘ですよ？田村先輩はそんなひどい人じゃないですよ？」

——ひどい人...か。

その1の言い方にはもちろん異議有りだけど、言ってる中身は間違っちゃいねえ。

俺は、唯子ちゃんの想いに応えられないし、いつまでも唯子ちゃんに追っかけられるのは困るし、だからここに環ちゃんがいるわけだ。

ひどい人、って言葉にはちょっと抵抗あるけどしょーがねえ。

彼女にとって最低最悪のひどい人になっちゃった方が、あとあと面倒なさそうだから、ここは心を鬼にするしかない。

「田村...くん？」

小早川が心配気に俺を見上げる。それに、おう、と頷いて応えて、ついでに生唾も飲み込んで

「嘘なんかじゃ...、」

ねえよ、って言い切ろうとしたのに、俺が最後まで喋らないうちに、

「その先輩は何で田村先輩の隣にいるんですか？」

唯子ちゃんは話を変えて小早川を見た。

「これ？」

「あたし？」

俺は小早川を指差し、小早川も自分を差し、唯子ちゃんは、頷く。

——コイツは俺のカノジョだから。

そう言っちまえばこの件は終わりだ。

明日から俺はわざわざ遅刻をしねーでもおっけーだし、元通り非モテの田村くんに戻って平和なスクールデイズが返って来る。

「ここコイツは...おお俺の...、か、か、か...」

しかしこの口が自分のものじゃねーみてえに、言葉が前に進んでいかない。

それは、俺のどこかが小早川をカノジョ、と言っちまうことに抵抗してるからだろう。唯子ちゃんに嘘をつくことへの罪悪感とか、小早川に対しての申し訳ない気持ちとか、それ以上に俺の本当の...

ってなことをうたうだ考えながら「か」を6回ほど言った時、

「彼女に決まってんだろーが！」

俺の代わりに不動明王が答えてくれた。

「うそ！」

唯子ちゃんは間髪をいれずに不動くんの言葉を否定した。

「田村先輩！あたし、信じられません！」

「...って言われても...」

「だって、田村先輩とその先輩、全然恋人同士に見えないもん」

横で小早川が、うっ...とうめいた。

「恋人同士だったら、もっとそうゆうオーラが出てると思うもん」

...だよなあ。

本当に付き合ってるわけじゃねえんだから、恋人オーラが出てるはずもねえ。

そこに一緒にいる男女が惚れ合ってるのか、ただのクラスメートなのかってのは、俺だって見ただけで分かる。

——やっぱ、嘘はよくねえよ...。特に、こうゆう嘘は。

悪りいことしちまった。

唯子ちゃんにも小早川にも。

やっぱ俺には人を騙すなんてことできねえよ。

「だから、田村先輩の彼女っていうのは違いますよね？」

「あ、あのさ、唯...神部さん...」

一歩前に歩み出た俺の腕を、小早川がぎゅっと掴んだ。田村くん、と小早川は小声で俺を引き止める。

けど、

——やっぱやめようぜ、こんなのは。

痛てえぐらいに掴まれてる小早川の手を、そっと外して本当のことを白状しまおうと思った時——、

「圭吾はあたしを騙してるんだ！」

「何で俺がおめーを騙すんだよ！」

「あんたは昔っからそーゆー意地悪を言ってあたしの邪魔してきたじゃない！」

「あのね！俺は別にお前に意地悪とか邪魔とかしてんじゃねーよ！」

「じゃあ何なのよ！」

「見たまんまのこと言っただけだろーが！」

いきなり展開が微妙に変わっちゃった。

っていうか、唯子ちゃんって話を最後まで聞かない子なのね.....。

まあ、だから `田村先輩ってホモ？、のあの日から今日まで、こんな事態が続いちまってるわけなんだけど。

何にしても、話の中心部が俺から不動くんになっちゃったようだ。

しかし、コイツらの話って、いつもかみ合っただけでねえように思うのは俺だけだろーか？

唯子ちゃんはずっと、やたらヒステリックになって怒ってるし、暴れん坊ズもずいぶん独りよがりなこと言ってるし、通じ合わないまま本気で喧嘩してるとしか思えねえ。

好きな子を守りたいんだったら、もっとこう...優しく出来ねえもんか？

押し付けるんじゃなく、包みこむ感じで、こう...、ふわあ〜っと。

俺の知ったこっちゃねーことなんだけど、そこんところが気になってたりもする。

「圭吾はあたしに恨みでもあるの?! あ! 小学校3年生の夏休みに圭吾のカブトムシを踏んづ

「けちゃったこと、まだ根に持ってるんだ!？」

「バカか! そんなガキの頃のこと、いつまでも根に持つかよ！」

「じゃあ、5年生の冬のことだ！」

「冬? 忘れちゃったな！」

「あたしが圭吾にだけバレンタインのチョコレートあげ忘れたこと! あの時、圭吾泣きそうになってたもん！」

「はあ?! お前、そーだったのお~? 唯ちゃんにチョコ貰わなかったんだ~? 俺は貰ったけどなあ？」

「うるせー! クラスみんなに配布された義理チョコ貰って喜んでんじゃねーよ！」

「はん! その配布もなかったお前が威張ってんじゃねー！」

「ちょっと3人とも、声が大きいよ? いいかげんにしなつてば！」

「とにかく、圭吾も海東くんも、これ以上あたしの邪魔しないでよ！」

「海東くんも!? 唯ちゃん! 俺もそこに入ってるワケ?!」

「あんたたちふたりはセットだもん！」

「冗談じゃねーぜ! こんな野郎とセットにすんなっ！」

「勘弁してよ! こんなヤツとセットにしないでくれよ! ...っていうか、唯ちゃん! 俺の気持ちはどーなんの!？」

いつまでやってんだよ、コイツら...

ここにちゃぶ台出して梅こぶ茶でもすすってやりたくなくなっちゃった。

「田村くん、あたしこれから予備校があるんだけど...」

俺の袖を引きながら、うんざりしたように言う小早川のこめかみには、しっかりとぷんぷんマークが浮かんでいる。

「おお、わかった...。じゃ、行こうか...」

「うん...」

1年生4人の揉め事は小学校の思い出に次元を超えちゃったようで、今は俺も小早川も関係ねえようだ。

わけわかんないけど、ひとまずホッとして彼らをその場に残し、俺と小早川は並んで歩き出そうとした。

が。

「――だってあたしが好きなのは田村先輩なんだからしょーがないじゃない！」

久々に俺の名が唯子ちゃんの口から飛び出したんで、俺たちは再び立ち止まった。

「だから！おめーがいくら好きだったって、相手は彼女持ちだろーが！」

「田村先輩たち、違うってば！圭吾はまだそんな意地悪言うの!？」

「意地悪じゃねえって言ってんだろ?!」

.....話が振り出しに戻っちゃった。

小学校3年生の夏休みにカブトムシがうんぬんって話の頃にさっさと帰っちゃえばよかったぜ...、とため息が出た時、俺の横でイライラと足のつま先を動かしていた小早川が、突然その動きを止めて言った。

「神部さん」

唯子ちゃんは、不動くんからゆっくりと小早川に視線を移した。

「あたしたち、そうゆうオーラは出てないかもしれないけれど、それは付き合いが長いから。だって1年のときからだもの」

小早川の言葉にはズシリとした重みがあって、唯子ちゃんも不動くんも、湖面に立った波が消えてくみて一に静まっちゃった。

「もうお互いに空気みたいになっちゃってるから恋人同士には見えないかもしれないけど、だからこそだいじな人なの」

まるで小さな子どもを諭すように小早川は淡々と言う。

――だいじな人...

その声に聴きなれない響きがあってドキッとした。

「た...まき...ちゃん...？」

小早川の耳元で小声で言うと、環ちゃんは、黙ってなさい、と言わんばかりに俺の脛をガツン、と蹴飛ばした。

よしよし、いつもの環ちゃんだ、
と、脛の痛みとともにホッと息をつく。

「あたし....、あたしは...」

唯子ちゃんは放心したように呟いた。小早川の言葉はかなり効いたらしい。田村くんとしちゃ複雑に心が痛む。

今までの俺の態度が思わせぶりに見えちまってたんだろうし、唯子ちゃんをこんなふうに騙す形で傷つけていい権利なんて俺にはねえんだし…。

うつむいて佇む唯子ちゃんを見て、俺は底なしの自己嫌悪に陥った。

やっぱ、最低最悪のひどい男だぜ、田村優作――。

「ごめ…、」

「圭吾のバカ！！」

――は？

ガバッと顔を上げた唯子ちゃんのその言葉は、当然俺に向けられるものじゃないかと思うのだけど、どういうわけか不動くんに向かっていて。

「圭吾なんか、大っキライ！！」

「俺かよっ?!」

自分をおもいきり指差して素っ頓狂な顔のまま凍結する不動明王――。

「もう、知らない！バカ！！圭吾なんか死んじゃえっ！！」

そう叫んで、唯子ちゃんはバタバタと走って行っちゃった。そのあとを金剛くんが慌てて追いかけて行った。

「……はぁ…っ!？」

しばらくしてからやっと解凍した不動くんは、今尚、唯子ちゃんが自分に浴びせた言葉を疑っている様子だ。

「死んじゃえって…、おいっ！待てよ、唯子っ！！」

慌てたように、ヤツもふたりの後を追って行った。

残ったのは啞然としちまった俺と小早川と唯子ちゃんのオトモダチ…。

「アイツら、ほんとに地球人...？」

そのオトモダチに訊くと、

「一応は...」

と、答えてくれた。

けど、やっぱ俺には宇宙人としか思えねえ。頭の中の回路が地球上で一般に使われているものとは違うように思う。

「田村先輩たちにはご迷惑をかけてすみません。唯子もすぐに頭が冷えると思うから...」

オトモダチはペコッとお辞儀をくれてから、彼らの後を追って行った。

――やや、ボーゼン...。

「...とりあえず、一件落ち着いたみたいだね...」

ヤツらの姿が完全に見えなくなってから小早川が言った。

「これって、落着...したのか...な？」

すっきりとしないエンドマークで後味が悪すぎる。

だけど、唯子ちゃんを俺が傷つけちゃったってことだけは確かだ。

でも、これは最初から嘘ついて騙すことを前提にして仕組んだ茶番だし、今さらそんなこと言ったところでしょうがねえ。

最後はどういうわけか、俺の代わりに不動くんが暴言を吐かれて終わったけど――。

「田村くん、気にしてるの？」

「...悪かったな、小早川。嘘言わせちゃってさ...」

俺が言いたくねえことを代わりにあんなふう――、

「あたし、嘘なんか一個も言ってないよ？」

「...へ？」

嘘じゃねえってのか？

1年からの付き合いだとか、恋人同士には見えないだろうけどとか...、

「あ」

俺と小早川は1年からの付き合いで、恋人同士になんか見えなくて、もう空気みたいな存在で――。

「ね？ついでに言うと、あたしが田村くんの彼女だなんて嘘もひとつも言ってないよ？」

小早川は気がついたように腕時計を見て歩き出した。

「だから、気にすることないよ、田村くん。あたしと田村くんはただ一緒にいただけで、それを付き合ってるって都合よく勘違いしてくれたあの子たちがそれなりに納得して、とりあえず一件落着きただけの話だから！」

喋りながら小早川はスタスタと歩いていく。

——小早川環、鮮やかなり。

付き合いが長いから、もう、空気みたいな存在だけど、だからこそだいじな人、か——。

無敵で最強のだいじな環ちゃんに、ハムカツパン1か月分プレゼントしてやりてえって思った。

7 珈琲牛乳

修学旅行を1週間後に控え、松山太郎を委員長に据えた実行委員会は連日のように開かれている。

といっても、昼休みに生徒会議室に集まって、一緒に弁当を食いながらだらだらとしゃべってるだけだ。

何たって、自分たちに都合のいい修学旅行にしようってのが目的で集まったヤツらばかりだから、その都合のいい案が決まっちゃったあとは、特に決めることや準備することもね一わけで。

「これ、権田先生が黙ってないと思うんだけど……」

1週間前、まとめた案を見ながら小早川が言った。

環ちゃんの指は、『自由行動について――1日完全自由』と、書かれた項目とレクリエーションの『コスプレ大会』の上を交互に差していた。

「うん。特に、自由行動日の1日完全自由っていうのは厳しいチェックが入りそうだよな…。これじゃ、どこで何やってもいいですよ、って言ってるようなものだし…」

小春ちゃんも頷いた。

「んじゃ、ストリップ劇場やポルノ館へは立ち入り禁止って書いとくか？」

松山委員長が真顔で言うと、

「んだなあ。おめーみてーのがホイホイ浮かれねーとも限らねーしな」

と、弟も真顔で同意した。それに、

「けど、ストリップとかポルノ館とか特定して書くと、それ以外ならいいんだって勘違いする太郎くんみたいな人もいるかもよ？」

と、柏木がツッコミをいれ、すると、

「それもそうだなあ。じゃ、ピンク関係一切禁止ってことでどう？」

委員長はさらに案を出す。そして、

「おお。それがいいんじゃないの？」

と弟も納得し…、

――ばかか、コイツら…。

案の定、環ちゃんの鉄拳がたろじろブラザーズに飛んだ。

「マジメに考えなさいよ！」

—いや、コイツら最初から大真面目…。

「自由行動日については女子組がまとめるから、男子たちはレクリエーションのことを詰めてくれる?!」

「はい…。了解しました…」

結局、いつものように環ちゃんが仕切ることになった委員会で、それからはあっと言う間に妥当な案がまとまった。

以下がそれ。

1、自由行動日について。

・最低3名以上のグループで行動。（男女混合グループ不可。ただし、別グループでの同行動は許可）

- ・各グループごとに決めたテーマに沿って行動する。
- ・時間内に宿舎に戻れる範囲で行動する。
- ・高校生にふさわしくない場所、地域、施設への立ち入りは禁止。

2、レクリエーションについて。

- ・一発芸コンテスト。（各クラス選手制）
- ・ミニブックキャスルライブ&仮面ダンスパーティー

こんな感じ。

自由行動日についちゃ、やっぱ完全自由どこでもおっけー、というわけにはいかなかったらしい。

けど、環ちゃんたち女子が決めたことは修学旅行っていう常識範囲を逸脱しちゃいかん、ってことであり、かなり自由度は高いはずだ。

レクリエーションに関してはそのまんま。

ブックキャスルにミニがついてるのは、新幹線で移動する修学旅行にドラムを持っていけねーから。

柏木はマラカスでリズムを刻むことになり、

「ヒカルちゃんに特訓してもらわなきゃ…」

と、困惑したようできてどこか嬉しそうに笑ってた。

ヤツの気持ちはよーくわかる。

やっぱ俺たちは軽音楽部ブックキャスルが一番だってこと。

部活がなくなっちゃった今、ライブが出来りゃ、たとえ「ミニ」がついたとしても全然オ

ッケー。

この時、生徒は全員昔の貴族様の仮面舞踏会みたく、仮面を被ってダンスパーティーに参加する。

案の定、コスプレ大会に権田のチェックが入っちゃったんで、松山委員長が悔し紛れの代替案に出したわけだけど、仮面被って何の意味があるんだろうと思わないでもない。

「気分よ、気分！学校ジャージのダンスパーティーなんて雰囲気出ねーじゃん！」

学校ジャージに仮面被るってのも雰囲気怖いもんがあるけど、まあ、修学旅行最後の夜のお祭りだから何でも有りだ。

つまねー京都奈良の修学旅行も多少楽しみな行事になり、1週間後のその日にはギター持ったの大荷物になることさえ我慢すりゃあいい。

高校最後の修学旅行なんだからまともなことやれ、って権田は言ってたけど、最初も2番目もなかったわけだから、この唯一の旅行を思いっきり盛り上げてやろーじゃねーの。

「んで、俺たちはマジメに班行動するんかい...？」

松山兄が弁当箱に一個だけ残ってたからあげを口の中に放り込んで言った時、予鈴が鳴っちゃった。

◇

実行委員としての仕事はマジメにやるとして、自分らが最大限に楽しむ計画ってのもそれなりに練らなきゃならねーため、その会議は放課後ドトール珈琲にて行うことになった。出席メンバーは俺たち5人と柏木の彼女の小春ちゃん、俺のカノジョって唯子ちゃん一味に思わせてる小早川（ちなみに唯子ちゃんはその後も毎日のように俺の前に出没する。けど、前みたいに田村せ〜んぱいっ！と左腕につかまるようなことはさすがにしない）、そして大島雪乃。

6時間目が終わり、部活もねー俺たちはさっさと昇降口に集合だ。

こんな生活にも慣れはしたけど、やっぱホームルームが終わったあとは音楽室の方に気持ちが向いちまう。

今の軽音楽部はあかねを中心に回ってて、俺たちが入る場所なんてねーってのに、音楽室の方向に後ろ髪を引かれるような思いで昇降口に向かっている、ってな毎日だ。

階段を降り切った時、渡り廊下に向かおうとしてるあかねの後姿が見えた。

「おお、あかね！どこ行くんだー？」

あかねはピタリと足を止めて振り返った。

「田村...先輩...」

光を背にして佇むあかねの顔はよく見えなかったけど、何となく元気がなさそうな声が気になったんで、昇降口とは反対方向の渡り廊下に向かって足を進めた。

「元気ねーな？肩が下がってるぜ？」

「...元気、ですよ？」

近くまで寄ってハッキリ見えたあかねの顔は、いつもと変わらずふんわりと微笑んでいた。

元気がなさそうに感じたのは、夕暮れ時の光があまりにも儂くあかねに似合ってたんで、俺の脳みそが勝手にイメージを作っちゃったようだ。

「田村先輩はもう帰っちゃうんですか？」

「ああ。残っててもやることねーしな」

そうですか、とあかねは呟いた。

「部活の方はどうだ？あの悪ガキ新入生たちはおとなしく言うこと聞くか？最近俺たちも全然顔出してないし心配してたんだ」

別に、何の気なしに、普通に言ったつもりだった。

なのに、あかねはいきなり、

「ふ...ふえええん...っ！」

と、顔を歪めて変な嗚咽を漏らした。

「お、おいっ、あかね?!」

何かヤバイこと言っちゃったのかと、今自分が言った言葉を頭の中で巻き戻ししてみたけど特に思い当たらない。

あかねも自分で焦っちゃったようで、

「す、すみません...っ！何でもないです！」

と、言いながら真っ赤な顔で笑う。

けど、コイツ....、

「.....あかねえ？」

今年の1年坊主たち。

暴れん坊ズその1、その2みて一のが揃ってるわけだから。

「かなり無理してるんじゃないか？」

うつむいたあかねの顔を下から覗き込んだ。

その途端、張ってた糸がプツリと切れちゃったように、あかねは顔を覆って泣き出した。

——やっぱな....。

「あかね、ちょっと来い？」

俺はあかねの手を取った。



購買部で珈琲牛乳を2本買ってから、あかねを中庭に連れ出した。

「...まったく、一人で我慢してないで相談してくりゃよかっただろ？」

珈琲牛乳を一本あかねに差し出すと、あかねはありがとうございます...と小さな声で頷いてそれを受け取った。

懐かしいフローラルの香りが漂った。

「ひとりで頑張れると思ってたんです。ヒカルちゃんだってたったひとりで頑張ってるし、私だってって...」

あの悪ガキどもは最初っからあかねの言うことをちっともきかなかっただらしい。

そればかりか、おとなしいあかねをバカにしてひとり孤立させ、自分ら1年だけで団結して好き勝手なことをやってるそうだ。

ヒカルに、俺たち3年に相談してみろ、と言われたらしいが、たったひとりで演劇部を守っているヒカルを見て、自分だけ俺たちに甘えるわけにはいかねえと考えたようだ。

「...気持ちはわかるけどさ、ヒカルとあかねじゃ中身が違ುದろ？」

ヒカルに出来ることがあかねにも出来るかって言ったら決してそうじゃないだろう。

あかねは、うっ...と声を詰まらせてうつむいた。

「俺たちはあかねに相談されて迷惑だなんて思うはずがねーし、逆に、相談してきてくれた方が色々安心なんだぜ？引退したって言っても、部活のことは卒業する日まで無関係じゃねーんだからさ」

ひとりで頑張るあかねもいいけどさ。

やっぱ俺は、少し頼りないぐらいのあかねの方があかねらしいって思ってるから。

「あとでヒビクたちにも相談してみるけど、とりあえず、俺とあかねで今後のこと決めておこうぜ？」

「今後のこと...？」

「修学旅行が終わったら、少しは手伝えると思うぜ？」

「先輩たち、部活に出てきてくれるんですか？」

「夏まで残留ってことでどう？」

「...はい！ありがとうございます...！」

やっと、あかねは本当の笑顔になった。

今までの俺だったら、さっきの涙やこんな笑顔を見ちまったら、その場でほにゃらん〜と萎えちまってたのに...

「だからもう、ひとりで無理すんじゃねーよ？」

なーんて、あかねの頭を撫で撫でしちゃったりしてずいぶん余裕じゃねーかよ田村優作、と自

分にツッコミを入れてみる。

こんなところ…、

「群竹に見られたらえらいことだな？」

「小早川先輩に見られちゃったら大変…」

ふたり、同時に言って、

「えっ？」

「あ…」

と、同時に顔を見合わせた。

「小早川？」

「田村先輩と小早川先輩、自然な感じがとってもいいですよ…」

——げっ。

「あたしも、先輩たちのように群竹くんと話が出来たらいいのに…」

——うっ。

「羨ましいです。先輩たち…」

「あのさ、あかね…」

ここ最近の俺と小早川の30センチの距離で、俺たちがそーゆーことだって思ってるヤツらは本城高校にはたくさんいるだろう。

けど、

「小早川は最高の友達。けど、それ以上の付き合いはしてねーぜ？」

あかねにはいつも真実の俺でいたい。

俺が唯子ちゃんと付き合えねーのは、やっぱこの気持ち俺にとって一番大事であるからだ。

「最高の、友達ですか…」

「おお。あかねたちのにぎやか組とおんなじようなもん、かな」

あんな爽やかじゃねーんだけど…。

「じゃ、田村先輩は…、」

「うん？」

「…田村先輩は好きな人いますか？」

あかねは珈琲牛乳の瓶の蓋を無意識にさすりながら、俺の目をじーっと見て言った。

—おめ—だよ。

...と、言えたらどんなにいいだろう、と、左隣のあかねを見下ろしながらマジで思った。

唯子ちゃん、小早川。

新学期に入ってから俺の左側は何故か空いてたことがね—んだけど、この場所に居てくれる存在で、空気がこんなにも優しく流れていくのはおめ—しかいない。たとえ、永遠に俺のものにならなくたって、たとえ、永遠に俺の想いに気づいてもらえなくたって、今も昔も窒息するほどに感じるこのフィーリングだけは間違いないんだ。

「あの...先輩?どうかしたんですか?」

あかねの声で、いきなり我に返った。

「いや...」

やべやべ。

自分の世界にどっぷりとはまり込んでしまったぜ。

こんな夕暮れの中庭で、ふたりきりでいるからいけね—んだ。

今、そっちの廊下からこの空間を写真に撮ってみろ?最高にセンチメンタルな一枚が撮れるってもんだぜ。

「いきなりそんなこと聞くもんだから、焦っちゃったよ。こ、珈琲牛乳、飲めよ...」

はい、とあかねは蓋に手をかけてから、

「...だって、田村先輩の彼女になる人って幸せだろうなって思って」

またまた、あかねちゃん。

せつないことを言いなさんな...。

「ヒビクとホモか、なんて言われちまう田村先輩は非モテですから...」

「けど、唯子ちゃんは真剣に田村先輩を追いかけてますよね?一途に真っ直ぐに」

「一途に想われるより、想ってた方が俺の性には合ってるんだけどなあ...」

蓋がなかなかあけられずに紙の縁がどんどんめくれてドツポにはまってるあかねから瓶を取り、丸い蓋をクイツと下に押しやった。

「ほれ」

「...すみません」

肩をすぼめて赤くなるあかねを見て思った。

ひとりで立って歩けるヤツもいれば、誰かに支えてもらわね—とダメなヤツだっている。

そんでもって、俺はそ—ゆ—ヤツを、あかねを、支えてやりて—と思う人間だってこと。

「...好きな子はいるよ。その子は俺のことなんかまったく眼中にないけどな」

口をつけない珈琲牛乳を手にしたまま、あかねは俺の顔を見上げた。

「そう...なんですか?」

「ああ。そいつには彼氏いるしね」

「そんなあ...」

泣きそうな顔であかねは呟く。

「田村先輩が、そんなせつない恋をしてるなんて意外...」

思わず、はっ！と笑っちゃった。

「だって、好きな人に見てもらえないのってせつないです...」

「そりゃせつないけどさ、その子が幸せならボクも幸せなのよ！」

——おめーが笑ってりゃ...な。

珈琲牛乳を両手で大事そうに握っているあかねが、フーッと小さな息を吐き、

「田村先輩に見守ってもらっているその人は幸せですね」

と、笑った。

——幸せ、か...。

「すげー、救われた気分...。サンキュー」

「え？どうして？」

「あかねがそう思ってくれてるから！」

しなやかに伸びたあかねの頭をわざとくちゃくちゃに撫で回してやった。

「...んじゃ、俺はそろそろ行くぜ？昇降口でヒビクたちが待ってるから」

...いや、もう待ってねーかもしれないけど。

「...えっ！？さっき声をかけてくれた時、帰るところだったんですよ？もう30分以上経っちゃってますよ！すみませんっ！」

「なーに、いいって！奴らよりあかねの方が大事だし！」

最後に何気なく本心をぶちまけて、俺は中庭を出た。

今日ここで、こんな話をあかねとするなんて予想もしてなかったけど、何となく気持ちが軽かったのは、俺自身のことをあかねに話すことが出来たからなのかもしれねーな。

アイツは自分のことだなんて、これっぽっちも思っちゃいねーだろうけど、それでもさ。

——田村先輩に見守ってもらっているその人は幸せですね。

見守っててやるぜ。ずっとさ。

ひとりじゃ上手いこと歩けやしないのに、ひとりで歩こうと無理してる、

そんでもって、

——群竹くんが好きで好きでたまんない、おめーをそのまま丸ごと。

昇降口に行くと....

「おせーぞ、田村！」

松山ブラザーズが二人揃って跳び蹴りしてきやがった。

「何やってたんだよ！便所にでもこもってたか！？」

「...まあ、そんなところ」

ヒビク、ブラザーズ、柏木に小春ちゃん、小早川に大島。

みんなで律儀に待っていてくれちゃったらしい。

「...あかね、何かあったのか？」

俺の肩にさり気なく手を回して来たヒビクが耳元で囁いた。

「...見てた...わけ？」

あの、センチメンタルなショットを...

「通りかかっただけ」

と、ヒビクはニカッと笑いやがる。

——こりゃ、バレたか...？

と、思ったけど、ヤツはそれ以上はつつこんでこなかった。

「修学旅行が終わったら、しばらく部活に顔出さなきゃならねーぞ」

「そうか。わかった」

ヒビクはそれだけ言って、先に校門を出て行った。

「なんか、さっぱりした顔してるよ？」

小早川がいつものように俺の左側に立った。

校門の陰には相変わらず唯子ちゃんとオトモダチ、そのまた陰で暴れん坊ズのふたりがこっちを観察しながら待機している。

「そう？デッカイヤツ、出して来たからかなあ〜」

「あのねえ.....」

すっかりオレンジ色に染まった空を見上げ、

そういやあの珈琲牛乳、あかねは飲んだのかな、と何気なく思った。

8 修学旅行～国際友好

修学旅行出発の朝、洗面所で髪型セット中――。

「……………」

痛いぐらいの視線を背中に感じ、なおかつ鏡の中からも同じ視線。

「…なんだよ？」

背後霊のように突っ立っていたのは、5才違いで現在中1の弟、周作。

ヤツは無言でじーっと鏡の中の俺の顔を見つめてやがる。

「だから、何？」

ベツタリとムースをくっつけた手で髪をなぞりながら、鏡に映る背後の周作を見て言った。

「兄い、今日から修学旅行に行くんだって？」

「ああ。それがどうした？」

「何で、オレに言わねえの？」

「何で、おめーに言わなきゃなんねーの？」

今生の別れってわけでもねーのに…、と思ったそばからヤツは言った。

「だって、飛行機落っこちるかもしれねーじゃん？最後に喋り忘れて後々後悔したくねーもん！

」

「そりゃどうも…。けど、飛行機乗らねーから安心しとけ？」

行き先は京都・奈良でございます。

空港なんてありませんので…。

「えっ？！高校の修学旅行なのに飛行機乗らねーのっ？！北海道でも沖縄でも電車で行くんじゃ大変じゃんっ！！」

可愛くないガキだ。

っていうか、素で言ってるから救いようがねえ。

沖縄に電車でなんて行けねえし。

「……悪いけど、おめーと喋ってる時間ねーの」

髪型も整ったことだし、そろそろ出ないと間に合わない。

修学旅行に遅刻しておいてきぼりってのは洒落にもならねーから。

「んじゃ、行ってくるから、おりこうさんにしてるんだよ？」

周作の天然に突っ立った髪を、くしゃっと撫でてやった。

「ああ、待てよっ！兄いに『せんべい、！』」

――せんべい？新幹線で食うおやつでもくれるってのか？

周作は俺の手を広げ、その上に五百円玉をポン、と乗せた。

「……せんべいは自分で買ってか？」

「せんべいでもまんじゅうでも好きなの買って来れば？それ、兄いにやるから！」

——……………。

こづかい千円の中からの五百円。

ちょっぴりじ〜んときちまった。

麗しき天然ボーイだけど、こーゆーところは俺譲りで可愛いヤツだ。

「サ、サンキュ…」

周作からの餞別を大事にしまい、バック背負ってギター持っていざ、出発！

田村くんのうるわしき修学旅行は、こんな朝から始まった。

◇

新幹線で3時間。

やってきました、雅の都、京都。

「いやー、久しぶりだねえ、京都！」

「懐かしいなあ〜、京都」

「たった、3年ぶりだしねえ〜、京都…」

駅も人の雰囲気も3年前と何も変わっちゃいねえ。

おんなじように新幹線でやってきて、おんなじように京都駅で降りて、おんなじように待機してる観光バスに乗って、おんなじように清水寺からお決まりコースを各自散策。中学の時との違いといえば散策範囲が広がったってことぐらいだけど、それは単にバスが待機する場所までの歩く距離が長くなっただけとも言う。

「中学の修学旅行とコースが同じだって？そうか〜。それじゃ文句も出るわなあ。おんなじとこ行ってもつまらねえからなあ？」

珍しく、権田が俺たちの意見に同調した。

中学で京都に来てる生徒は何も俺たちだけじゃねえ。

学区内ほとんどの中学が行動パターン同じわけで、現3年の3分の2が京都修学旅行経験者だ

。いくら実行委員が頑張ったとしたって、やっぱシラケる空気ってのはある。ここまで来てやっと、権田は気がついたのかって感じだけ。

「んじゃ、俺が特別、面白い修学旅行にしてやろう。ふふふ…」

権田の口元ひん曲げて晒う顔を見た瞬間、背筋に冷たいものがほとぼしった。

直感的に、こりゃマズイ！と思ったんで、

「あ〜、権田センセ！文句なんてちっともねーしっ！京都、いいところっスからっ！！」

と、挙手してよからぬ思いつきを阻止しようと試みたけど遅かった。

——国際友好の輪を積極的に広げよう！

ってなスローガンと共に、突如生まれちゃったのは、
「夕方までの散策中、金髪外人観光客に英語で話しかけて日本や京都の印象を取材して来い！明日の朝食時にレポート提出！」

っていう、権田らしい底意地の悪い課題だった。

「どうだ？中学の時にはこんなのなかっただろ？え？」

権田は生徒たちの顔を見回して、不気味に晒う。

「修学旅行に来てまでレポート提出なんてのは、中学じゃなくてもねーよ！」

「英語ってのは使ってみて何ぼのもんだ。外国人と堂々と喋れるチャンスなんざ、おめーらにはあんまりないんだから俺に感謝しろ」

権田はまたまた不敵に晒う。

「声かけた相手がフランス人とかドイツ人だったらどーすんだよ！」

「金髪がみんな英語喋るってわけじゃねーだろが！」

ウチの金髪は日本語喋ってるしよ、と、文句を垂れたのは英語万年補習組の松山ブラザーズ。

ヤツらにとっちゃ、拷問のような課題であることは確かだ。

「見ず知らずの外人に何て話かけりゃいいわけよ...？」

カメラ持ってそこらを歩いている外人さんたちをチラチラ見ながら、すっかり怖気づいちゃった松山弟が情けない声で呟くと、おんなじ顔でも脳天気な兄は、

「はじ〜めまして〜。あなあ〜た〜、ニッポンのキョート〜、どう〜おもーいますーかー？とか言うしかねえだろ」

ってなことを大真面目に答える。

「それ、完璧日本語じゃねーか！一個も英語入ってねーし！」

「にっこり笑ってりゃ何となく通じるんじゃないの？」

「通じねえっ！」

いきなりこんなヤツらに声をかけられた外人さんが抱く日本の印象ってのは、きっと最悪になるだろう。

使ってみて何ぼのもん、ってのはわからねえ話じゃねーけど、はっきり言って、無謀。

これじゃ、国際友好の輪はぐにゃぐにゃのいびつなものになっちゃう。

「あ。まてよ...？ウチの金髪は...」

田村くんのラッキーな頭がハタと思い出した。

俺たちには日本語喋る金髪だけど英語完璧なヒビクがいるってことを。

ヤツについていきゃとりあえず、限りなく不審な日本の高校生っていう、国際友好活動の妨げになるような印象はもたれずにすむだろうし、レポートも完璧だ。

「なあんだ。俺たちにとっちゃ別に屁でもねえ課題じゃねーか！なあ？風間あ？」

「んあ？」

「焦って損しちゃった！」

松山ブラザーズたちも安心したところで、早速ヒビクに張り付いて散策開始。

小春ちゃんと一緒にゆっくり散策するから、という柏木を清水に残して俺たちは先に三年坂を下ることにした。

石畳と石段のけっこうキツイ坂だ。けど、立ち並ぶ店とか家とかは数寄屋風のいかにも京都っぽい雰囲気があって、こーゆー風情を見ると京都もいいじゃんか、と素直に思ったりもする。

そんな坂を、男4人でテクテク下っている時、やや息切れしながら上ってくるふたりの外人さんを発見。ヒビクが、面倒な課題はさっさと終わらせちまおう、と、早速そのロマンスグレーな彼らに取材を開始しようとした。それを、

「ちょっと待ったあ！！おっさんに声かけてどーすんだよ！！どうせなら金髪のお嬢さんにしろっての！」

松山兄がヒビクの結んだ長い後ろ髪を掴んで止まらせた。

「いてっ！！引っ張んなよ！！」

いきなり髪を引っ張られりゃそりゃ痛い。

当然ヒビクは瞬間的に兄の手を勢いよく振り解いた。

そして、ここは急な三年坂。

兄は足元のバランスを崩して見事にスッ転んだ。

「やっべっ！！」

スッ転んだと思ったら、疾風のごとく立ち上がった兄が悲痛な叫び声を上げた。

「三年坂で転んじまったじゃねーかっ！俺、あと三年で死んじゃうじゃん！！どーしてくれんだよ、風間あ！」

俺の命を返せ！とぎゃーぎゃー喚く兄に、ヒビクは、

「あのひょうたん買えば死なねえらしいぜ？厄よけだとさ。親切だなあ？」

と、目の前の土産物屋にぶら下がって並んでいるひょうたんを指差した。

三年坂で転ぶと三年で死ぬ、ってゆうオカルトチックな伝説は、三年前の旅行でさんざん聞かされ、当時はバカみたいにビビった話だが――。

「転んで死ぬってのもひょうたんで死なないってのも、根拠がねえ言い伝えだろーが。いい年こいてみっともねえから騒ぐんじゃねーよ！」

「んじゃ、おめーも転んでみるよ！俺が転ばしてやろーか？ほれっ！」

「や、やめろよっ、てめえ！俺は三年後に死にたくねーし！」

「ほら、やっぱおめーも根拠がねえ話にビビってんじゃん！！」

どんなところでも勃発する兄弟バトル。

伝説の三年坂の真ん中で、おんなじ顔が死ぬ死なないでバトッてることの方が、よっぽどオカルトチックな話だぜ。

さっきヒビクが取材しようとしていたロマンスグレーずも、目玉を真ん丸くしておんなじ顔で言い争うふたりを観察している。

「んじゃ、あと30回ぐらい転んどきゃいいんじゃないかねーの？そしたら死ぬのは90年後だぜ？それだけ生きりゃいいだろう」

ヒビクの珍案に松山兄の顔が「そうか！」と輝いた。

で、制服の上着を脱ぎ捨ててさっそく転がる松山太郎って男は、愛すべきトモダチだ。三年坂の新たな伝説を作る気らしい。昔話にこんな話があったけど、まさか目の前で、『まんが日本昔話』が見られるとは思っていなかった。

1回、2回、と数えながらわざとズッコケたり尻餅ついたりしている兄を、せめてもの友情の証ってことで人目にさらさないよう取り囲んでやった。

そんな俺たちは、外人さんから見りゃ限りなく不審な日本の高校生に違いない。

ロマンスグレーずは顔をしかめ、首をすくめて坂道を上って行っちゃった。

まあ、いいさ。

こーゆーのも修学旅行の思い出ってことで。

「ペラペラペラペラ〜？」

滑らかな英語が俺のすぐ耳元で聞こえ振り返ると、金髪のお姉さんがふたり、俺とヒビクが立ってる間を割るようにして、取り囲んだ中の様子を覗き込んだ。

「ペラペラペラペラ〜ペララ〜？」

流暢な英語だから何を言ってるのか俺にはサッパリわからねえが、ヒビクは即座にペラペララ〜と答えた。

ヒビクが英語完璧ってのは知ってたことだけど、実際外人さんと英語で喋るヤツを見たのはたぶん初めてだ。

だからなんだろう、ぞわっとくるぐらいカッコイイと思っちゃった。

普段俺たちと喋ってるのとおんなじように、俺には意味不明な言葉で青い目の人たちと普通に喋ってるワケだ。

ヤツの親父さんは確かにアメリカ人だったかもしれねーけど、いくらアメリカ人の血が半分混ざってたところで生まれた時から英語が喋れるわけじゃねえだろう。

ヤツは日本人のかーちゃんに日本で育てられたんだから。

ここまでマスターするのに、ヒビクはどんだけの努力をしたんだろう――。

いや、何も英語だけじゃない。

俺の知らない努力を、ヤツは人が見てねえところでいくつもやっている。

お姉さんたちと話をするヒビクの金色の髪を眺めながら、俺はそんなことを思ってた。

しばらくペララな会話が続いたあと、ヒビクは立っていた場所をサッとどき、そこへお姉さんたちを入れた。すると、お姉さんたちは、21、22、と数えながらまだ必死に転がってる兄にカメラを向け、パチパチと写真を撮り始めた。

「な、なに？どうしたの？」

「ヤツが何かのパフォーマンスをやってるんだと思ったらしい」

「大道芸みたいな...？」

まあ、見えなくはない。

っていうか、やっぱそうとしか見えないかも。

「そ。だから、三年坂の伝説とかヤツが転がってる事情とかを説明してやったら写真撮らせてくれってさ」

「取材されちゃったってわけ？」

「そうそう」

ヒビクは、あはは、と声を上げて笑った。

「金髪のお嬢さんに取材しろ、と喚いたのがこのパフォーマンスの始まりだったろ？まあ、される側になっちゃったけどそれはそれ。思い残すことなくヤツも逝けるだろう」

「...はっ！」

30回転べは90年生きるって言ったヤツがこれだ。

兄も、素直にひょうたん買っとけばいいものを...

っていうか、マジになってることからしてアレな話だから、不毛なことは考えまい。

晒うヒビクも転がる松山兄も愛しき友であることに何ら変わりはない。

無事、30回転がり終わった兄は、お姉さんたちからワンダフルッ！の歓声と拍手をもらった。転ぶことに夢中だった兄には状況の細かいいきさつなんか分っちゃいねえんだろうが、そこは脳天気な男。金髪お姉さんに喜んでいただいた、というそれだけで今までの大騒ぎを忘れちゃったらしい。

「風間あ！このお嬢さん方に取材を申し込めえ！！」

と、すかさずヒビクに命令。

「りょ、了解...」

先に取材されて写真まで撮られてることも知らずにいる兄の真剣さに、クックッと漏れる笑いをこらえながら、ヒビクがペラペラ〜とお姉さんたちに話をすると、すぐさまOKという快い返事が返ってきた。

で、俺たちと金髪お姉さんはそのまま坂の途中の茶店に直行。

大きな番傘の下の、紅い布が巻きつけられた京都っぽい椅子に座ってお抹茶などをいただきながら雅な取材開始です。

もちろん喋るのはヒビクオンリー。そりゃもう、ペラペラ〜、ペララ〜、ペラペ〜ラとテンポ

のいい会話が弾んだ。

お姉さんたちはハーバード大学の学生でボストンから来たらしい。

神社や仏閣、仏像が好きらしく、インドや中国の仏閣にも興味あるらしいが、日本のそれが一番好きらしい。

「建造物と日本の四季と人の心の調和に趣があるってさ。京都はその調和が絶妙だ、と言ってます」

ヒビクが通訳することを俺たちはマジメにメモをとる。

「京都のどこが一番好きか訊いてみるよ」

兄の言うとおりに、ヒビクは律儀に通訳する。

「三十三間堂の観音像が素晴らしかったって言ってます。知ってるか？と訊かれてるけど...？」

ヒビクも含めて全員が知らない、と首を振った。

するとお姉さんは、`オ～、ダメねえ～、と、日本語で言った。

ここからはまたペラペラペララ～と始まったんで、俺たちの耳じゃついて行けずにヒビクに頼る。

「ふうん…。それは初めてきいた話だぜ...」

お姉さんたちと英語で喋っていたヒビクが、ふと呟いた。

「何だって？」

「三十三間堂の千体の観音像は息を飲み込むぐらいの圧巻で、その千の中には会いたい人の顔が必ずあるんだってさ」

「へえ～。ロマンチックな話だねえ？んじゃ、俺の涼子さんの顔もあるかなあ？」

ブッ！と飲んでた茶を吹き出した弟の背中を、さり気なく叩いてやった。その名はコイツにとっちゃトラウマらしい。

「行ってみろって言ってるけど...？」

通訳するヒビクの横でお姉さんたちは青い目を輝かせながら力強くうんうん、と頷いている。

ズボンのポケットから地図を出して三十三間堂の位置を確認すると、散策コースとは反対方向で外れちまってる。

「あれれ、残念。ま、帰ればいつだって涼子さんの顔は見られるんだし、わざわざ観音様の顔を見てこなくたっていいか」

と、兄はひとりでさっさと完結した。

が、

「いや。こーやって取材した外人さんが勧めてくれてるんだぜ？やっぱ行かねえとちゃんとしたレポート書けないぜ？」

と、言い切ったヒビク。

「はあ？」

俺たちのマヌケな声が揃ってしまった。

ヒビクの口からちゃんとしたレポートなんて言葉が出ちまったもんで。

「書く気かよ!？」

「書く気がなきゃ、こんな取材最初からやらねーだろ」

まあ、確かにそうだ。

考えてみりゃ、今日になって突発的に出されたこんな課題、適当に書きちまったってわかりやしねえのに、俺たちってやっぱマジメだ。

そうじゃなくても、三十三間堂は中学の時も行ってねえし、どうせ見るならただの庭とか寺とかよりもド派手な千の観音像の方が見ごたえがある。

「散策コース無視すれば行けねえ距離でもねえよな？」

と、地図を広げてヤツらに見せた。

「行くか! せっかくお姉さんたちが教えてくれたんだし！」

ってことで、決まり。

行くならとっとと行かないと、時間の余裕はそんなにない。

これから清水寺に行くというお姉さんたちとはここでお別れ。

「さんきゅー、ベリまっち!!」

結局、別れ際に言ったこれだけが、俺と松山ブラザーズが喋った唯一の英語だった。

茶店の前で、坂を上っていくお姉さんたちに両手を大きく振って別れを惜しんでいる時、やっ
と柏木と小春ちゃんが到着。

そのすぐ後から、小早川と大島もやって来た。

「あの外人さんたち、なに...？」

いつまでも振り返って俺たちに手を振ってくれるお姉さんたちをチラチラと振り返りながら、
小早川が訊いた。

「国際友好! バッチリ取材できたぜ？」

「.....マジメにやったんだあ」

「おお! いい話も聞けたぜ？」

お姉さんたちから聞いた千の観音像のこととこれからの予定を話すと、柏木と小春ちゃんも同
行すると言う。

小早川は、

「いいのかなあ? 勝手にコース変えちゃって...」

と、やや渋ったが、

「別にいいんじゃないの? 時間までにバスに戻れば問題ないだろ。お前も一緒に行こうぜ？」

と、誘うと、

「うん。じゃあ行く！」

と、気持ちいい返事。

千の中に、会いたい人の顔があるという観音像。

俺が今会いたい人って誰だろう。

ふと、そんなことを思って何気なくヒビクを見ると、どこか遠くの方を見ていた様子のヒビクが、

「ん？」

と、視線を俺に向けた。

「いや、別に…」

コイツがレポートをマジメに書くためにあんなこと言ったんじゃないってのは分ってる。

——誰かに会いたいのかもしれねえな。

「なんだよ、田村？」

「いや、別に…？」

——ということで、俺たちと柏木カップル、小早川に大島の8人は散策コースを外した三十三間堂に向かった。

9 修学旅行～千の顔

決まった散策コースは清水を中心にするると地図の上方面、三十三間堂は下の方にあたるから、他のヤツらとはまったくの逆方面を俺たちはテクテクとやってきた。

三十三間堂――。

入り口で貰ったリーフレットによると、正しくは蓮華王院という名前らしく、平安時代に平清盛が建立したとある。

金髪お姉さんたちがぜひ見て来い、と言った千手観音がある場所は、庭から見てもえらい横長い堂で、なるほど、さすが千人の観音様が住んでる本堂だな、とまだ本物を見ぬうちから納得しちまうぐらいの重厚なたたずまいだった。

が、ここは立派な観光名所。

広い敷地の中には人、人、人だらけ。

若者からじーさんばーさんはもちろん、外人さん、修学旅行の団体さん、庭を走り回る小学生のチビガキども。

清水も三年坂も人は多かったけれど、やっぱここも例外じゃねえようだ。これじゃまったりと見物も出来ねえだろう。

っていうか、俺たちも、まったり妨害者のウチなんだろうけど…。

「おい、早く中に入ろうぜ？涼子さんが待ってるしっ！」

とか騒いでるヤツなど特に――。

◇

――どわっ！！！！

一步、本堂の中に足を踏み入れそのまま固まっちゃった。

等身の観音像が、横に長い10段ぐらいの階段にびっしりがっしりズラーッと並んでる。段飾りの雛壇が何十倍にも拡大されてるっていやあ、わかりやすいかもしれねえな。リーフレットによると全長120メートル、らしい。

けど、そこに並んでるのは雛様内裏様じゃなく、全部観音様だ。これが左右両側に、50列10段の500体ずつ。合わせて千体だ。

それだけじゃなく、500体の前で威嚇してる風神雷神と阿修羅たち。

そして、中央にデン、と座してる千手観音坐像様――。

「圧巻…って、ハーバードの姉さんたちは言ってたなあ…」

俺の横でヒビクが呟いたが、まさにそうとしか形容しようがねえ。

歴史的文化財とか仏像とか、これまで生きてきた中で多少なりとも見てきたが、こんなすげーのははじめてだ。

蛍光灯とか照明とか、そんなのはいっさいなく外から入る自然な明かりだけがこの広く長い堂に射している。

だから、余計にそうゆう雰囲気誘うのかもしれないが、とにかくすげえのひとこと。ぶったまげた。

「おっ！無敵最強小早川のそっくりさん発見！」

と、さっそく観音像の中に知った顔を見つけた兄が言った。

どれどれ、とそっちの方を見ると――、

「ぶわはははっ！！！」

ヒビクが大笑いするのも無理はない。

兄が指したのは、柔和な観音様たち前で、眼と口をガッと開き、背中に雷を背負って両手を広げる雷神像。

そして、その同じ体勢で松山兄を威嚇する環ちゃん。

環ちゃんの場合、威嚇だけじゃすませずに、兄の後頭部に無敵の一撃が打ち込まれたが。

「いてーな、小早川！仏さんの前で暴力反対！」

最近、ちっとは女らしくつつましくなった環ちゃんだけど、松山兄の暴言だけは許せねえらしい。

「ここは本堂だぜ？もっとおごそかに見物しろよっ」

いてーいてーと、頭を抑えて騒ぐ兄の後頭部に、もう一発食らわせてやった。

環ちゃんはというと、必殺の一撃を放った後はもう知らん顔をして、大島とふたりで堂の奥に行っちまってる。

「...俺たちも行こうか」

柏木も小春ちゃんを伴ってさっさと先に行っちまい、このバカの面倒は残されちまった俺たちの役目らしい。

入り口付近で騒いでる俺たちは、他の見物人から冷たい視線を浴び、ひんしゆくを買っているのは間違いない。

「悪い。すんません。あいむそーりー.....」

松山兄はバツが悪そうに周囲の人たちに詫びてから、涼子さ～ん、とおもむろに口に出して観音様を端から見始めた。

「しかし、そっくりだったぜ、さっきの小早川...」

クックツと抑えた笑いかみ締めながら、この期に及んでまだヒビクは言いやがる。

確かになー、と、後ろで睨む雷神様を振り返り、密かに納得しちまった田村くんですー。

涼子さん、涼子さ～ん、と呟きながら観音様のひとりひとりの顔を確認している兄の後ろでは、弟の方が複雑な表情を見せながら、それでもきっと愛しの麻耶ちゃんを探しているのだろう。無意味な貧乏ゆすりをしてる行動が、「まママ、麻耶ちゃ～ん」と喋っているようだ。

ヒビクはさっきまでのふざけた態度から一変し、マジメな面持ちで目の前の観音様に見入ってる。

ヤツが会いたいと思ってる人の顔にその観音様は似ているのか、俺もおんなじ観音様に見入ってみたが、どう見たってヒカル顔には見えない。

いつまでも立ち止まっているヒビクを追い越して先に進んでみた。

会いたい人イコール想い人、というのであれば、俺にだって探してみたい顔がないわけじゃない。

けど、顔がよく見えるのは前方の列、せいぜい4、5列目ぐらいまでで、奥の方にいらっしゃる観音様の顔などは暗くて見えやしないし、あまりにもビッシリとくっつき合っている観音様たちを目の前にして、掃除が大変だろうなあとか、触ったら細かい後光や手なんか折れちまわないか？とか、無粋なことが浮かんでしまい、そんなことで頭の中がいっぱいになっちまって、どの観音様もおんなじ顔に見えちまう。この中から会いたい人の顔を探し出すのはえらい作業だ。下手すりゃまる1日かかるんじゃないか？

などと思いながら、ゆっくり足を進めると――、

「あ」

突然見つけた。

よく知った顔。

「田村くん、会いたい人の顔でも見つけた...？」

俺の前を歩いてた小早川が、ふと振り返って言った。

「...いや」

これが、俺の会いたい人なんだとしたら、コメントの返しようがねえ。

「...優しい微笑みをしてるね、この観音様」

と、環ちゃんは言うけれど、俺には優しい微笑みというよりも――、

「そうかあ？なんか、脳天気な笑いに見えねえ？」

「そんなこと言ったらバチがあたるよ？」

環ちゃんはやや焦ったように周りを見回しながら小声で言う。

「そ、そっか...」

バチは当たりたくねえから、心の中でごめんなさいを10回言った。

けど、やっぱどう見たって、コイツの顔は、今朝、俺に飛行機落っこちるかもしれねーじゃん

?と真顔で言い、なけなしのこづかいの中から500円玉を餞別にくれた弟周作に見えちまって…。

「トホホだぜ…」

こんなところにまで来て、思い出すのは天然の身内かよ。

「お前は見つけたのかよ、会いたい人の顔」

「うん」

小早川は嬉しそうに笑った。それがあんまりにも可愛い顔き方だったんで、ちと驚いた。

「…へえ〜。小早川にも会いたい人なんていたんだあ…。ちなみにどんなヤツ？」

環ちゃんは、聞いといて何よ！と文句を言った後に教えてくれた。

「3年前に死んじゃった、犬のチロ」

——はっ?! 犬かい! ?

「犬と観音様の顔じゃ、作りとか形とか、最初から全然違うじゃん！」

「だけど、見えたんだもん。そうゆうのは関係ないんじゃないかな? いつも意識してなくても心の中に住んでいる大切なものが観音様の像に映し出されるんじゃないかと思うよ」

——ってことは、俺の心に住んでる大切なものは周作かよっ!!

「トホホだぜ……」

勘弁して…。

◇

一足先に本堂を出て、つつじが綺麗に咲いている池の縁で休憩した。

ブラザーズもヒビクもまだ中だが、柏木と小春ちゃんは、俺よりも先に本堂を出ていたようで、池の反対側で仲良く喋っている。

アイツらにとっちゃ、会いたい人はすぐ目の前にいるわけだから、千手観音もササーッと見てきて終わりだったんだろう。それよか、ふたりの時間を楽しみたいってところだ。

やれやれ、ちきしょーめ。

結局、千体の観音像の中には俺が会いたいと思う人の顔は見つけられなかった。

もともと、後ろのほうにいた観音様の顔は見ちゃいないが、さっき環ちゃんが言っていたように、心の中に住んでいる大切な人が映し出されるんだとしたら、後ろだろうが前だろうが関係ない。一瞬でパッと見つけられるんじゃないか。

俺の心の中に住んでる大切な人は、何でもねえ時には突然フッと浮かんでくるくせに、こーゆー時には現れてくれねえらしい。

ちょいとへこんだが、まあ、そういうもんだらう。

「今頃は部活やってる時間だなあ…。大丈夫かな、あいつ」

腕時計を確認してその人に想いを馳せた。

やんちゃな1年たちにいじめられ、今日も泣いてやしないかと心配だが、修学旅行から帰ったら俺たち引退組もまたしばらく部活にカムバックってことになってるし、それはそれで楽しみではある……。

「なに、ひとりでニヤついてんだよ」

いきなり、ヒビクに声をかけられ、ヒッと飛び上がっちゃった。

「焦ってるし…」

「あ、焦ってなんかいねーし、ニヤついてたつもりもねーんだけど…！」

「そうかあ？じゃ、俺の見間違いだったんかな？」

ヒビクはあっさりそう言って、ちょっと大きめの石の上に座り、長い足をポーンと前に投げ出した。

「しかし、今日はよく歩いたぜ…。帰りはバスに乗らねえ？」

「そうだな。どっちにしたって、歩いてたんじゃ集合時間に間に合わねー」

バスの集合時間まであと1時間ってとこだ。

一度三年坂まで戻って、さらに地図の上まで行かなきゃならねえから、もうのんびりはしてられねえ。

ここでずいぶんゆっくりしちまった。

ブラザーズはまだ出てこないし、小早川と大島の姿も見えない。

そもそも、ここにいるヒビクだって――、

「お前もずいぶんマジメに見物してたじゃねーの。ヒカルの顔でも見つけてたか？」

は？ヒカル？とヒビクはマヌケな声を出した。

「ヒカルなんか見ちゃいねーよ」

ヒビクは投げ出した足の先を、軽くマッサージするようにさすりながら言った。

「へえ～。じゃあ、立ち止まってじーっと見つめていたあの観音様は誰の顔だったのかね～？」

「……ったく、よく人のこと観察してんな、お前」

と、ヒビクはニヤリ、と笑った。

「ま、ヒカルの顔はいつでもどこでも見られるさ」

は？と、今度は俺の方がマヌケな声で聞き返した。

「例えば、上を見上げりゃあの綿あめみて一な雲とか、雲に隠れた丸い太陽とかがヒカルの顔に見えるし、地面を見下ろせばそこらにたくましく生えてる雑草だってヒカルの顔に見えるし、前を向きゃ…、あそこでガキが手に持ってるまんじゅうとかあっちのガキが持ってるせんべいとかもヒカルに見える」

「まんじゅうにせんべいかよ…」

言い方とか例えはあんまりだけど、ようするに、ヒカルはどんな時もヒビクの中にいるってことか。

わざわざ千手観音の中に探すまでもない、ってことだよな。

っていうか、すげー発言だろ、それって。

ポカン、と口を開けてヒビクに見入ってる俺に、ヤツはまたニヤリ、と意味深に笑い言った。「...俺が見つけた顔はジャック・ベリー」

――はっ？ジャック・ベリー？

「.....って、ジャズピアニストの、あの？」

確か、ヒカルとコンサートに行ったんだったよな、コイツ。

「ま、そうだ」

ま、そうだってヒビク。

何でまた、あんな彫りの深い外人の男前が、あののっぺりした観音様.....って言っちゃバチが当たるから...、純和風な観音像の中に見えたっての。

その前に、わざわざあの中で探し出したいほどジャックのファンだったわけ？

いや、何かそれもヒビクらしくねえ。

「ワケわかんねーなあ...」

「実は俺もワケわかんねーの。あの時、一步踏み出したところに見た観音像が何故かジャックの顔に見えちゃったんだから」

「ふーん.....」

まあ、そーゆーこともあるんだろう。

ヒカルと一緒にコンサートに行ったっていう思い出が、ジャックの顔を引き出したのかもしれないねーしな。

「そういや、お前。あの時のデートはどうなったの？」

ヒビクが俺たちみんなの前でヒカルをデートに誘ったのは終了式の日だった。

あれからなんだかんだとドタバタ続きで、すっかり聞きそびれちゃってたけど。

「あの時のデート？」

「ヒカルと行ったジャック・ベリーのジャズコンサートに決まってるだろ？おめーら、ちっとは進展したのかよ？」

「.....またそんな古い話を持ち出してきやがって...」

古くはねーだろ。

たかが、2ヶ月ほど前の話だぜ？

「みんなの前で堂々と誘いやがったんだ。それなりに考えがあつてのデートのお誘いだっただろ？ヒカルにはちゃんと告ったのかよ？」

「だから、そんなんじゃねーってあの時も言っただろうが...」

フーッとヒビクは息を吐き、本堂の方を見て、ヤツらおせーなあ...、と話をはぐらかそうとしやがる。

「おめーも次郎と一緒にかよ...」

いいとこまで持っていくのに根性がねえというか、ヘタレというか...

まあ、それは俺も人のこと言えた義理じゃねえんだけど。

「次郎？何それ？」

「何でもねーよ」

ツッコミがキビシイな、とぶつぶつ文句を垂れてからヒビクは言った。

「...結局、ヒカルとは会場まで行っただけで、コンサートは一緒に聴いちゃいねーんだよ」

「どうゆうこと？」

「ま、いろいろあって...」

と、ヒビクは言いにくそうに語尾を曖昧に誤魔化す。

「まさか、振られちゃった...とか？」

「だから、そんなじゃねーって言ってるだろ？最初からそうゆうことでアイツを誘ったわけじゃねーんだから」

やっぱよくわかんねえ。

デートしようぜ、と誘ったなら、普通はそーゆーことが一番最初にくるだろう。

それを、告りもしねえ、会場までは一緒に行ってるのにコンサートは聴いちゃいねえなんて不自然もいいところだろ。一緒に会場に行く別の理由があったのならそれもわかるけど、そんな理由がヒビクとヒカルにあるはずもない。

「なんか、言いたそうじゃん、田村」

「.....べつに」

...疑問は山ほどあるけど、俺の問題じゃねーから、今ここでしのごの言ったところでしょーがねえことだ。

「でもまあ...、結果は悪くなかったし、ここでジャックの顔が見えちゃったってのもきっと意味があるんだろうな...」

なんだかちっともわかんねえけど、悪くない結果なんだったらそれ以上突っ込むのはやめておいた。

「さーて。ヒカルにまんじゅうでも買っていくかなー」

と、ヒビクは唐突に立ち上がり、さっさと土産物屋の方に歩き出した。

「...んじゃ、俺も.....」

しょーがねえ。天然な弟に餞別返しでも見繕ってくるか...と、ヤツの後を追った。

・
・
・

その後、市バスで戻った俺たちは集合時間にちゃんと間に合い、他の生徒たちと普通に合流して宿舎に向かった。

その夜は、夕食の後に例の『国際友好レポート』を書かされたわけだが、俺たちはヒビクのところに集まって難なく書き終えた。

取材はまともな内容を大真面目にやったし、レポートも完璧。権田も文句のつけようがねえだろうってなものが仕上がったというのに、翌日、即ち今日の朝メシ後、

「おめーら、ちょっと来い！」

と、俺たち4人は権田に呼び出され、くどくどと説教された。

散策コースを外れたことが、やっぱまずかったらしい。

マジメな俺たちは金髪姉さんに教えられた三十三間堂に行ったことを、バカ正直に書きしまったのだ。

っていうか、全員おなじレポート内容だった、ってのも権田の機嫌を損ねちゃったわけで――。

「しかし、権田もチェックが早いよなあ」

レポート出したのは朝メシ前。

なのに、呼び出されたのは朝メシの直後。

「俺らのレポートを先にピックアップして見たに決まってる。なんかしら文句をつけて一んだろ。権田だし…」

それは言えている。

あの課題自体が、俺たちをハメるためのイジメだったとさえ思えるぜ。

京都くんだりまで来て長い説教食らうなんぞ、お約束のようなオチはついちゃったけれど、あの金髪姉さんの取材とコース外れてまで行った三十三間堂はそれなりにいい思い出にはなった。説教はムカつくけど、あの課題は結果的にはよかったってわけだ。

千の中に、会いたい人の顔があるという観音像。

それはただ単に、千の顔があるのだから誰かしら知った顔に出会えるだろうって話が、ロマンチックに拡大されちゃったものなんじゃねーかって思う。三年坂で転ぶと三年後に死ぬって話と似たようなよくある話だ。涼子さんの顔も麻耶ちゃんの顔も見つけれなかった、と双子の兄弟はそれぞれ肩を落としていたし、千手観音は、俺的にはあくまでも等身の観音像が千に群れを成した凄いアート、見て損はないもの、だった。

いつも心の中にいる大切な人は、探そうとしなくてもフッと目の前に現れるもんだ。

無意識の中にあるものや懐かしい思い出なんか、そのロマンチックな話に触れて浮かび上がってくるんじゃないだろうか。

環ちゃんの子口とか、さ。

ってことは、俺の場合、それは脳天気な身内ってわけ...？

んでもって、ヒビクはジャック・ベリー？

——やっぱ、全然関係ねえな。

さて。

これから本城高校3年御一行様のバスは、奈良の東大寺へと向かう——。

10 修学旅行～仲間のカタチ

修学旅行2日目の奈良は、A組からF組を東大寺、奈良公園周辺見学組と、飛鳥方面散策組の二手に分け、俺のA組は前者だった。

松山弟のB組とヒビク&柏木のF組もこっちで、3組がごちゃ混ぜになってあちこちを周ったが、とくにコレ、といった問題もなく和やかな1日が過ぎた。

ようするに、松山兄がいないと穏やかに1日が終わるってことだ。

いつもと同じ面子が揃っているにも関わらず、同じ顔のもう一個がないってだけで俺たちの日常はこんなにも違う。東大寺大仏殿の柱にある`鼻の穴、を大騒ぎで潜ろうとするヤツもいなければ、土産物屋で`鼻くそだ!、と大騒ぎするヤツもいない。若干一名、`ヒカルの土産にするか、と、大仏の鼻くそだってゆう奈良名物を手にニヤつきながら購入してたヤツはいたけれど、三年坂みたいな、無関係な一般人の足を止めてしまうような騒動が起るはずはねえ。

土産といえば、ヒビクのヤツは初日も2日目もヒカルに饅頭だの鼻くそだの買ってやがったが、俺はあかねの土産を決めてない。

奈良公園の近くに焼き物屋があり、メルヘンでファンシーなマグカップだの皿だの花瓶だのがたくさん並んでた。

ふんわりした色合いとワンポイントのウサギの焼印があかねっぽいマグカップを思わずペアーで買っちゃいそうになったけど、やめた。ペアーの食器にイメージするのは、やっぱり新婚さんとか、そこまでいってなくてもカップルに限定だ。コッソリあかねとペアーなマグってのは、いくら俺でもみじめすぎるってもんだ。

だからってわけじゃねえけど、メルヘンなペアマグはちょうどそこにいた環ちゃんに薦めてやった。

「なんで、これをあたしが買わなきゃいけないのよ」

なんでって、そりゃ、ペアーだし。

俺の知らねえところで、環ちゃんもいろいろあるみたいだし。

去年のクリスマスだって、約束があるからってライブ来てくれなかったし。

なりゆきで、というか無理やりというか、唯子ちゃんのせいでというか、俺と環ちゃんは………て思ってるヤツも学校内にはいるみてえだが――。

と、考えると、俺は環ちゃんにはすげえ迷惑をかけちまってる。やっぱ、ハムカツパンを奮発プレゼントして許してもらわねえといけねえな、なんて考えている間に、環ちゃんはクルッと回れ右しちまった。

「あれ？買わねーの？」

「買わないわよっ！」

何でか、かなりむくれていた環ちゃん。

反射した銀色の髪留めがやたら目に眩しかった。

ま、そんなことはいいとして、最終日の今日、俺たち実行委員は班ごと太秦に結集した。映画村でいつものメンバーが合流し、自由行動を共に過ごそうってわけだ。ちなみに、この場を結集地点に決めたのは環ちゃんたち女子組だ。

「あたしたちの班がみんな太秦で集合できれば、離脱とか抜け出すとかの悪いことしなくてもいいし一緒に自由行動も出来るから」

さすがだぜ。

おかげで、実行委員のメンツも守れたし、どこかの太郎がピンク関係にホイホイ出入りして浮かれる失態をやらかさずにもすむ。

環ちゃんに言わせれば、

「あんたたちに任してたんじゃ、こっちの身が持たないもの...」
ってことらしいが。

なんとなく、憂鬱そうな環ちゃんの言い方がちょっと気になった。

◇

映画村の中では丁度時代劇ドラマの撮影をやっていて、新選組の隊士と浪人たちが大チャンバラを展開していた。

狙ってたわけじゃねえから、俺たちがソレに遭遇したのは偶然だった。けど、人気ドラマらしく、ギャラリーはいっぱい。ロープを張られた外側からのかなり遠めだったんで、ほとんど砂ぼこりしか見えなかった。

ま、テレビで見たことがある役者たちの撮影風景を間近で見られただけでもラッキーだろ、なんて思ってたんだが...、沖田総司役をやっていたのが、ジャのつく事務所の人気タレントヒガシカワくんだったもんだから、環ちゃんや大島はともかく小春ちゃんまでもが柏木そっちのけで大興奮。キャー、ヒガシくんっ、と叫びながら、ADさんがロープのところで両手広げて遮ってるのに、ちょっとでも前に出ようとするギャラリーたちの押し合いの渦中に勇敢にはまってしまう。

「さすがの柏木もホンモノの芸能人には負けるのね」

「あれは小春ちゃんじゃないよなあ...？」

ブラザーズを唾然とさせるほど、おとこまえな小春ちゃんをはじめ、普段はあんまり見られない女子たちの一面はなかなか恐ろしい...いや、おもしれーモノだった。

そんな時だ。

「ねえねえ、あれ、もしかしてケントじゃない？」

別の場所から声がして振り向いてみると、5、6人の女の子がこっちを指差していた。

「ほんと、ケントよ！キレイな金髪～」

「制服なんか着ちゃって、なんかの撮影なのかな？」

金髪っていったら、この辺りにはヒビクしかいない。

ってことは、彼女たちはヒビクを人気外人タレントに間違えてるようだ。それだけじゃなく、さっきの小春ちゃんたちみたく、ヒビクに向かって勢いつけて突進して来た。

「け...ん...と？」

さすがのヒビクもやや戦慄。

いくらファンに囲まれるのは普通に慣れているヒビクでも、人まちがいで騒がれるのは普通じゃねえわけで。

「ケントじゃねえから...」

「そそ、コイツはタダの高校生だから」

「修学旅行に来ただけだから」

本人と松山ブラザーズが人違いを訴えてなんとかその場を逃げ出してきたが、ハッキリ言ってケントってヤツとヒビクの類似点は金髪のみ。普通なら間違えられるなんてありえねえ話だ。

「ケントってのは、もういい大人じゃなかったか？」

「てか、結婚して子どもいなかったか？」

と、松山ブラザーズがはあはあしながら首を傾げる。その隣で、

「沖田総司がいるからだよ」

柏木が言った。

「沖田総司のヒガシくんがいるんだから、ケントがいたって不思議じゃないってゆう無意識の思い込みから、金髪だけで風間くんをケントと間違える現象が起こった、というわけ」

最もらしく柏木は言うが、松山ブラザーズの頭の上には、でっかいハテナマークが出現していた。

「純和風の沖田総司と金髪ケントのどこに関連性があるんだ？」

「べつにないよ？だから言ったでしょ？無意識の思い込みだって」

「思い込まねえだろ、ふつう！」

ブラザーズだけじゃなく、俺も当人のヒビクも声を揃えて異議を唱えた。

「ここは時代劇の映画村だぜ？沖田総司のヒガシくんはいても子持ちの金髪ケントが制服着てふらふらするかっての！」

「だからね、ヒガシくんが目の前にいたら、ケントがその辺にいたとしても普通だな～って錯覚するってことだよ。ふたりとも超人気者なんだから」

「子持ちの金髪が制服着て映画村にか？」

ブラザーズは顔を見合わせ首傾げ混乱している模様。一生懸命、柏木の理屈を頭の中で噛み砕こうとしている。

「百歩譲ってそういう思い込みがあったとしても、それが風間に結びつく理由が分からねえな。似てるのは金髪だけじゃん」

頭爆発しそうになってるブラザーズに代わって、柏木に疑問の要点を投げてやったら、

「そうそう！顔、全然違うじゃん」

と、太郎がつなぎ、

「年も全然違うじゃん」

と、次郎も続く。

「そりゃ風間は老けてっけど？」

「そのわりにお子様ランチだけど！」

「ついでに口は悪いし嘘つきだしよお」

「そういや三年坂で、おめーに30回転んどけば大丈夫、なーんて大嘘こいてたしなあ…」

「なに?! アレって嘘だったわけ? ってことは、俺やっば三年後に死ぬのか! ?」

「……チーン。ご愁傷様」

「風間、セーカク、最悪っ!!」

以下、ぐだぐだとブラザーズ。

柏木は飽きちまったのか、途中で小春ちゃんを探しに行っちゃった。

俺は俺で、いつまでも続くブラザーズの不毛な会話を聞き流しながら、さっきの純和風って言葉からふと、あることを思い出していた。

三十三間堂で、のっぺりした純和風な観音像がアメリカ人のピアニスト、ジャック・ベリーの顔に見えた、とヒビクは不思議なことを言ってたんだがー。

……。

さんざんなことを言い散らしているブラザーズの横で、こめかみに怒りマークを浮き上がらせ、己に対する暴言をどこで止めようかと様子を伺っているヒビク。

……似てねえか？

ケントなんかじゃなく、ジャック・ベリーに。

いや、ケントもジャックもいいオッサンなんだけど、仮に見間違うとしたら、ジャック・ベリーにならありえなくもなさそうなぐらいに。金髪はもちろんのこと、目とか口元とか雰囲気みて一なものまでも。ヒビクがあと20才年取ったらジャックみたいなオッサンになるんじゃないか、と思うぐらいに。

ううむ…。

一旦似てると思っちゃったら、とことん似ているように見えちゃう。
さっきの彼女たちも、こういう思い込みをしちまったってわけか？
ってことは、これもただの思い込みってだけか。
柏木が言ったことって、こーゆーことなわけ？
今、何となくだけど分かった気がする。

「おめーら、いい加減に……、あ？何だよ、田村？」

頃合を掴んで、いざブラザーズに抗議に出ようとしたヒビクだったが、突如予定を変更して俺を見た。

「穴あくからそんなに見つめんな？」

「あくのか？」

「あくだろう。何？俺の顔になんかついてる？」

「おお。ジャック・ベリーが」

ヒビクは、一瞬目玉を大きく見開いた。

「……ヒビク？」

ヒビクは何か言いたそうに口を開きかけたが、言葉は音になる前にヤツの中で消化されちゃったらしい。ヒビクは結局何も言わず、ニヤッと笑っただけだった。

「な、なんだよ、そのほほえみは？」

「いや？さすが田村だな、と思って」

――は？どーゆーこと？

意味深に呟いて、ヤツはそのまま俺の傍を離れていく。ブラザーズに対する戦意も喪失しちまったようだ。

「おい！ヒビク？気になる去り方すんなよ！さすが俺って、何？！」

「はは！気が向いたら後で話すよ」

「気が向いたら？！てか、お前、カッコつけて何処行くんだよ！」

「お・て・あ・ら・い！」

なんだよ、あのヒビク。

2ヶ月前、突然と言ってもいいぐらいにジャック・ベリーの名前がヤツの口から出て、ヒカルとコンサートに行ったり、観音様がジャックに見えたり、ヤツの周りにチラチラと存在しだしたジャック・ベリー。

それまでのヤツとの付き合いの中で、ジャックのジャの字も出てこなかったってのに、考えて

みたらかなり突飛で不自然な登場の仕方だ。

俺以外の誰かにも、ジャックに似てる、みて一なこと言われて親近感持ったとか？

で、コンサート行ってみたら、観音様がジャックに見えちまうぐらい心酔しちまった、とか？

それこそ、ありえねえな。ヒビクらしくねえ。

さっきのヒビク、地雷でも踏まれたみて一な顔してた。

おてあらいから戻ってきたら、もうちとつっこんで聞いてみるか。

って、思っていたのに――。

「あれー？風間くんはー？」

ヒガシくんの撮影が終わり、バタバタと帰って来た大島が、見えないヒビクの姿を探しながら聞いてきた。

「知らない女たちに拉致されていった」

バカな応答をしたのは松山兄。

何ですって？！と、大島が美しい顔を鬼のそれに変えた時、当のヒビクがのっそりと便所から出てきたんで、その形相はそのまま兄に向けられた。

「怖え顔！小早川かと思うじゃねえか！」

で、鉄拳は、いつものように環ちゃんから飛ぶ。

「太郎...いい加減学習しろよ...」

「ダメダメ。こいつ、勉強できねえから」

「おめーにだけは言われたくないんだけどな、次郎！」

「はあ？！俺にだけはって、どーして限定すっかな？」

「弟だから！！」

ほお〜と一同、危うく太郎の言に納得しかけたが、一瞬後には一同我に返ってやめていた。

何をやってもこいつらの場合、ただ不毛。ふたりで仲良く学習するのがよろしかる。

何にしても、いつでもどこでも人騒がせなブラザーズだ。

おかげでヒビクには聞きそびれちゃったぜ。

「ねえねえ、田村くん」

鉄拳飛ばしたのはいつのこと？というぐらいに、普通に戻っている環ちゃんが、やや控えめに俺の肩を叩いた。

「何でございましょう？」

「今夜のレクリエーション、本当にアレをやるの？」

アレ？

「ミニライブ？やるから俺、重たいのに頑張ってギター持って来たんですけど...」

「違う違う！仮面ダンスパーティー」

ああ。

そういや、すっかり忘れてた。

今夜のレクレーション、俺たちのライブに合わせて一般生徒は仮面つけてダンスパーティーすることになってたんだっけ。

学校ジャージのダンスパーティーなんて色がなくてつまんねえからせめて仮面で着飾ろう、という松山兄委員長が自分の案をゴリ押しして通したイベントだ。

「やる...んじゃねえか？一応、みんな、仮面用意してきてるだろう？」

「そう伝えておいたし、用意してこない人の為の予備も準備してあるんだけど、やっぱり、どう考えても...、」

環ちゃんの目が、俺に強く訴えてくる。学校ジャージで仮面は怖い、と。

「キミの言いたいことはよく分かる。分かるけど、今さらとりやめると余計にみんな混乱する」

「そ、そうかなあ?! 実行委員の真価を問われそうな気がするんだけど!」

「それを言うなら、もうとっくに、企画出した段階で問われているでしょ...」

そうだよな...、と環ちゃんは肩を落とした。

「最後に足掻いてみたかっただけ。気にしないで、田村くん...」

あらら。環ちゃんらしくもなくしぼんぢまって。

「小早川さーん?大丈夫かい?」

「あのさ、田村くん!」

環ちゃんは、思い切ったように顔を上げた。

「あたし、ずっと思ってたんだけど、あたしたちって変じゃない?あたしたちってというのは、この実行委員メンバーと風間くんのことだけだ」

――へ?

「特に否定する材料もねーぐらい、変は変だと思うけど?」

それは、今に始まったことじゃないでしょ。

「そういう意味じゃなくて、あたしたちみんなで実行委員やったし、今日だってみんなでここにいるけど、意味があるのかなって思って。みんなと一緒にいる意味。みんなで実行委員やってる意味。この、メンバーで!」

なるほど。そういうことか。

ようするに、みんなそれぞれ勝手にてまとまってねえのに、わざわざどうしてなんだ?ってことだな。

実行委員会も大事なことはほとんど女子組が決めて、俺たち...ほとんど全部松山兄だが...は、

やっかいなこと考え出しただけ。今夜の仮面舞踏会も女子組の反対意見は聞かずに、俺たち（松山兄だが）が暴走して決めちゃった。

今日の自由行動だって、みんなで結集したわりには女子組とは別行動してたし、全員集合するときみたいな展開になっちゃう。

例えば、あかねやヒカルたちのにぎやか組みたいな、誰が見ても仲がいいって感じじゃねえのがこの面子だ。

「ね？変でしょ、あたしたち！仲間としての機能を果たしていないと思って！最初からずっと思ってたんだけど！」

あれれ。悩んでいたのね、環ちゃん。

可哀想に。

「まあ、そうだよなあ...」

明らかに、ワガママなヤツが多い。

松山兄とかヒビクとか松山兄とかヒビクとか。

「けど、まあ、いいんじゃないの？みんなで手を繋いでなくても、一応、今こーやって集合してるわけだし。かごめかごめは出来なくても、はないちもんめはできるぞ、みたいな？」

「よく分からないんですけど...」

おっしゃるとおり。俺にもよく分からん。

みんなでひとつの輪にはなれなくても、あっちとこっちにいながらちゃんと一緒にやってる、みて一なニュアンスを伝えたいのですが。

「ああ...、えっと...、超簡単に言うと、イヤイヤここにいるヤツはいねーだろ、ってことだよ」

なんだかんだ言いながら、俺たちは1年のときからこのメンバーで色々やらかしてる。

ま、途中、松山ブラザーズの交際関係で多少の入れ替わりはあったけど。

「特別仲良くもないけど、それなりに仲が良いってヤツでさ？上手くいってるんじゃないか？」

環ちゃんは、じいーっとな俺を見る。

「あれえ？もしかして...小早川サンはイヤだったり...するわけ？」

「ノーコメント」

「あっそう...」

「イヤだなんてあるはずないわよ、田村くん！わたし、考えすぎでいたみたい！」

「こういう仲間関係もあるさ！」

「ええ！そうね！ありがとう！これからも一緒に頑張りましょう！」

ってな、ほのぼのな展開にならないのが、小早川環ちゃん。

「...まあ、とりあえず...、今夜が終わればひと段落だしさ...、苦労かけてすまない...ね？」

環ちゃんは、コクン、と頷いてからちょっとだけ笑った。

仲間としての機能、ねえ。

俺はこのかたち、けっこう気に入ってるんだけど。

「そろそろ宿舎に戻ろうぜ？俺ら、リハーサルやっとなきゃいけねーし！」

あっちで実行委員長が号令をかけた。

修学旅行最後の夜。

仮面舞踏会。

どうなるのやら。

11 修学旅行～涙のワルツ

宿舎に戻った俺たち実行委員は、宿の人たちが夕食の支度をしてくれてるホールに集まって、レクリエーション大会の準備にとりかかった。進行については女子組が担当になってるから、男子組、つまりブックキャッスルのメンバーは楽器のセッティングと演奏曲のリハーサルだ。

「アップライトがあるんだな」

マイクのセッティングを終えたヒビクが、壁際にあるピアノを指差した。

ピアノがあるんだったら、やっぱパートに入れたい。けど、

「うちのピアニストは東京だしな...」

あかねもヒカルもない今夜の俺たちはブックキャッスルじゃなくシャインキャッスルだ。

「.....」

ピアノをじっと見つめながら、何か言いたげなヒビクだったが、

「んで、ワルツはどーすんだ？」

あっちの方からの松山兄の意味不明な問いかけに、出かかってた言葉は飲み込まれちゃったようだ。

「ワルツってなんだよ？」

「仮にも舞踏会だぜ？シャララ、シャララ、シャララ、チャンチャーン！ってやつが一曲ぐらいねえとカッコつかねえだろ」

何度も言いますが、学校ジャージに仮面着けるって段階で、カッコつくつかねえの問題は宇宙の彼方に飛んでます。

「そーゆーことは、曲決めのうちに言えよ。普通、ギターでワルツは弾かねんだし、無理やり奏るにしても練習しねーと即興じゃできねえだろが...」

横から松山弟がもっともな意見を述べた。

が。

「おっ？ピアノがあんじゃん？これで弾けねえか？シャララ、シャララ、シャララ、チャンチャーンってやつ」

「おめーは人の話聞けよ！それに、誰が弾くんだよ」

「ピアノぐらい誰か弾けねえの？」

「んじゃ、おめーが弾けよ！」

「俺かあ...。あと5万年ぐらいしねーと弾けねえなあ」

「あれ？おめーは3年後に死ぬんじゃないっけ？」

「バカ言え！あそこで30回転んでやったんだから、90年は生きるはずだぜ！」

「三年坂のアレ、3年後に死ぬってのは間違いらしいぜ？正しくは、3年以内に死ぬ」

「...3年以内...ってことは...」

「何回転んだところで、3年以内に死ぬってことに変わりはないってこと！」

「は、は、はあ？！そそそ、そんなの、う...嘘だね！お、俺は90年は生きるに決まってる！」

「はは、ビビってる」

「ビビ...ビビってなんかねえ！」

「ま、たとえ90年生きたって5万年には全然足りねえだろ。おめー、どんだけバカなんだよ」

「きゅ、90年も、ご、5万年もたいして変わらねーだろっ」

「.....恐怖でわけ分かんなくなってるな」

ワルツとかピアノの話をしてたんじゃないかな。か。

何にしたってワルツもピアノも出来ないのだから、5万年の話から戻ってこないブラザーズをスルーして、セッティングの仕事を再開しようとしたとき、柏木と小春ちゃんがやってきた。

「松山くんたち、何でもめてるの？」

とりあえず柏木たちにワルツからのことを解説してやると、

「ピアノだったら、環ちゃんが弾けたと思うけど.....」

小春ちゃんが控え目に呟いた。

「小早川が！？」

かなり驚いた。

小早川がピアノを弾くなんて話、今の今まで聞いたことねーし、小早川がピアノを弾くなんて姿、想像できねーし。

...と、俺が目玉を丸くしている間に、いつの間にか5万年から戻ってきていた松山兄が、ホールの隅で予備仮面の確認をしていた環ちゃんのところにすっ飛んで行った。

そして、兄に引っ張られてやってきた環ちゃんは、ピアノの前に座らされてる。

「ワルツ？」

「とにかく、シャララのワルツを弾けよ！」

「あんたに命令される覚えはないんだけど！」

「実行委員長としての命令！」

田村くん...、と、環ちゃんは俺に助けを求めるような目を向けた。

が、俺も環ちゃんのピアノを聴いてみたいという興味に負けて...

「とりあえず弾いてみ？」

後押ししちまった。

キッと俺を睨んだ環ちゃんの目が怖い。

が、その目はだんだんと強い力を失い、環ちゃんは小さな深呼吸をしてから心を決めたように

演奏を始めた。

「……」

松山兄が絶句。

「……………」

ヒビクも言葉ナシ。

「……………」

俺も演奏に聴き入る。

環ちゃんが奏でたのは、間違いなくワルツだ。

清んだ音色の三拍子で、とてつもなくせつない旋律の——。

「泣きそうな曲じゃねーかっ。これでどーやって踊れっての！」

どこまで行ってもせつないばかりのメロディーを途中で止めた実行委員長が喚いた。

「ワルツを弾けっていうから弾いたんでしょーが！」

「なんだよ、この曲は！シャララじゃねーだろっ」

「だからワルツだよ！ショパンのワルツ！」

「ショパン？俺はシャララを弾けって言ったんだよ！」

「何なのよ！弾けっていうから弾いたのに。シャララって何よ？わけ分かんないんだけど！」

環ちゃんは鍵盤をバン、と叩いて怒りまくるが、まあ、当たり前だ。松山兄がイメージしてるシャララがどんなワルツなんだか俺にも分かんねーし、環ちゃんが弾いたのも確かにワルツだったし。

けど、小早川環に、こんな素晴らしき特技があったとは。

兄が泣きたくなる曲、と言ったとおり、胸がきゅーっと締め付けられるようなせつない曲だったけど、上手い。ヒビクの口もさっきから開いたままだ。

環ちゃんは、フン！と顔を横に向けて椅子から立ち上がり、そのままズンズン歩いて行っちゃう。

「待てよ、小早川！」

俺はすかさず、後を追った。

◇

元の場所に戻って、ダンボールの中にしまっている予備仮面を出しはじめた環ちゃん。

その動作はとてつもなく乱暴で、仮面が壊れちゃうんじゃないかと心配になるぐらいだ。

「あの。小早川さーん？」

「何！」

鬼の形相――。

お願いだから仮面つけてください。

「そんなに怒るなって...」

「べつに、田村くんには怒ってないよ！」

怒られてます、しっかりと。

「悪かったよ。いきなりピアノ弾けって言ったりしてさ。けど、ビックリだぜ？あんなにピアノ上手かったなんてさー」

「思ってもないこと言わないでよ。あたしのピアノなんて全然だよ。だから...、」

田村くんの前で弾くのイヤだったのに...、って最後に呟いたのはほんの小さな声だった。

「いやいや？マジだって！何で軽音楽部に入らなかったのよ」

軽音楽部？と環ちゃんは首をかしげた。

「ピアニスト探してた時、教室に張り紙しただろ？あん時、小早川が音楽室に来てくれてたら、きっとウチのピアニストに決まりだったぜ？」

おかげであかねが入ってくるまでの1年間、ブックキャスルはピアニストナシだった。

「あたしなんて無理だよ...」

「そんなことねえって！さっきのワルツ、めっちゃ良かったぜ？最後まで聴きたかったのに、太郎のヤツ、途中で止めやがって」

「...実行委員長のご希望には叶ってなかったようだし」

「まあ、たしかに舞踏会っぽくはなかったけどなあ」

ショパン、だったか？クラシックはよく分からねえけど、ワルツにもいろんなタイプがあるんだろう。環ちゃんが弾いたやつは短調の物悲しいメロディだったから舞踏会で踊るには相応しくないワルツかもしれねえが。

「...涙の旋律、なんだって」

「涙の旋律？」

「そ。さっきの曲に限らずショパンが作る独特の音階のことを、そうやって形容するんだって、ピアノの先生から聞いた」

確かに、言われてみれば涙の味がしてきそうな旋律だった。

「さっきのワルツはため息をついてる物語なんだって。これもピアノの先生が教えてくれた」

「ため息に涙じゃ舞踏会っぽくねえはずだ」

「ねえ、田村くん。もしも...、」

環ちゃんが、手の中で仮面をいじりながら言った。

「もしも、その時あたしが軽音楽部に行っていたら、本当に田村くんたちとバンドやってたのかな？ピアニスト、やってたのかな」

「おお」

「じゃあ...、」

環ちゃんは一瞬言いよどんでから、水沢さんは？と言った。

「あかね？」

「...うん。あたしがもしもピアニストやってたら、水沢さんは軽音楽部には入ってなかったのかな...」

そういうことになるのだろうか。

いや、たぶん、そうなんだろう。

1年だったあの時、もしも環ちゃんがピアニストになっていたら、ブックキャッスルがピアニストを探し続けることはなかったわけだから、ヒビクがあかねの指にピピピ、とくる必要もなかったってことだ。

そう考えると、複雑だー。

「.....軽音楽部、入っておけばよかったかな...」

ポツリ、と呟いた環ちゃん。

今さらどうにもならねえこと言っちゃったよな。

俺たちの軽音楽部はもう終わっちゃったんだし、さ。

だから、

「...今日のミニライブに飛び入りで参加しねーか？ピアノパートの楽譜あるし、あれだけ弾ける小早川ならきっと初見でだって出来るんじゃないか？あ、もちろん、リハはこれからやるけどさ！」

修学旅行の思い出に環ちゃんがピアノで参加するブックキャッスルってのもいいだろう。

ていうか、やってみてえって思った。

けど、

「やめとく。やっぱり、ブックキャッスルのピアニストは水沢さんじゃなくちゃ...ね」

あっさり断られちゃった。

「舞踏会っぽいシャララなワルツも出来なくてごめんね」

「いや...」

例えシャララが出来たとしても、高校生が学校ジャージに仮面着けて普通のワルツなんか踊れるはずがねえ。

今頃気づいたぜ。

松山兄は、マジでワルツをやるつもりでいたんだろうか。

「.....みんな、本当に仮面着けるのかなあ...」

手に持ってた仮面を顔に当てて、ため息を吐く環ちゃんがどこかせつなかった。



案の定一一。

仮面舞踏会は生徒たちのノリがあまりよろしくなく、自作、またはパーティーグッズの仮面を持参してきたのは全体の三分の二の生徒に留まり、実行委員が用意した予備の仮面が大活躍することになった。

「なんでこんなにたくさんの予備が用意してあるんだよ...」

環ちゃんたち女子組が大量に準備しておいた予備仮面がどうも気に入らない風の松山実行委員長の「なんで?」は、全員があえてスルーし、俺たちブックキャスルは各々楽器を手にしてホールのステージに上がった。

学校ジャージに仮面つけた連中がうようよのホール。

ただでさえ個性のない恰好に仮面を着けてるわけだから、誰が誰だか見分けもつかねえ。ていうか、全員が漫画の中のその他大勢みたいで、はっきり言って、おぞましい。

「盆踊りやぐらでのライブ以上の異様さだなあ...」

マイクを握ったまま、ヒビクは呆然状態だ。

ヒビクだけじゃなく、弟もコメントができねえでいる様子だし、

「小春ちゃん、どこにいるんだろう...」

柏木は愛しの小春ちゃんの姿を確認出来なくて不安顔だ。

「三十三間堂の千手観音より圧巻じゃねーか！なあ、田村！」

張り切ってるのは兄だけだった。

が、それも、

「しまったあ！！俺、演奏やってちゃ、ダンスに参加できねえじゃん！！」

ってことに気がつくまでの話。ヤツは大真面目に頭を抱え込んだ。

あんな仮面着けてダンスに参加したいって思える松山兄は、ある意味純粹でいいヤツーだ。

ダンスパーティーのこのビジュアルには苦笑するしかねーが、演奏は俺たちブックキャスルだ。

これまでの後夜祭、文化祭同様、地元じゃ、キャーなファンも存在するヒビクの歌声に、ライ

ブとして盛り上がらねえはずがない。

学校ジャージも仮面も見慣れちまえばどうってことはなく、小うるさいセンセたちも、宿舎の従業員の人たちまでも巻き込んで、仮面舞踏会はますますの盛況だ。

前半が終わって休憩タイムに入ると、歌いっぱなしだったヒビクは飲み物を調達に、柏木は小春ちゃんを探しに、松山兄は大島に呼ばれ、弟は便所にそれぞれ消えちまい、ステージにひとりだけ残った俺は演奏中にちょっと気になった音のズレを直していた。

そんな時――。

タタタ、と小走りに近づいてきた仮面人が、いきなり俺に堅いものを押し付け、何も言わずにまたそのまま回れ右して走り去って行った。

時間にしたら、ほんの数秒。気がついたら、俺の手にはちょっと重みのある小袋があった。

――なんだ、これ？

中身を確認しようとしたけど、ヤツらがまとめて帰ってきちまったんで何となくやめた。

これを押し付けた人間は、既に仮面集団の中に埋もれちまってて、もう誰だったか分からない。けど、髪が長かったから女子だってことは確かだ。

――髪...？

「田村、ぼーっとしてんなよ。後半始めるぜ？」

ヒビクに促され、とりあえず今の出来事は忘れる努力をした。

けど、頭のどこかに何かが引っかかってて、それが気になって仕方なかった。

◇

珍妙な仮面舞踏会も終わってみれば高校時代のいい思い出になるんじゃないか、と思えるぐらいのイベントだった。

最初は退いていた生徒たちも、最後はかなり楽しんでくれてたようだし、実行委員としての任務もちゃんと果たせたんじゃないかと思う。環ちゃんは仲間の意味について思い悩んでいたけど、こんな仲間だからこそ出来たバカバカしくも麗しきイベントだろう。

そんなことをひとりかみ締めながら、修学旅行最後の夜――。

宿舎の部屋で、さっきの小袋を開けてみた。

「...これは」

淡いグリーンのマグカップだった。

独特のふんわりとした色合いとうさぎの焼印には見覚えがある。

奈良の焼き物屋にあったペアーマグの片割れだ。

「あ.....っ」

突如、思い出した。

さっきからずっと、頭のどこかに引っかかっていた何かは、髪留めだ。

これを俺に押し付けた女子の髪に留まっていた銀色の髪留め、それは、環ちゃんの髪にあったものと同じ。

ってことは.....、

「小早川が俺にこれを...？」

あの焼き物屋で俺が無理やり勧めたからだろうか。

——いや、そうじゃねえな.....。

そうじゃねえだろう。もう、いい加減ちゃんと理解しろよ、田村優作。

小早川環ってヤツを。

小早川環の気持ちを、よ。

「——涙の旋律か」

たまたま便所で会ったヒビクとそのまま宿舎のロビーへ下りた。

「俺もクラシックはよく分からないけど、ショパンがピアノの詩人って言われてるってことぐらいは知ってるぜ。さっき小早川が弾いた曲、詩人って言われるのも納得できるキレイなメロディをあいつがあんな風に弾いたのには俺も驚いたぜ。音は心を映す鏡みたいなものだしな」

ヒビクは自動販売機から出した缶コーラを開けながら言った。

ため息。

涙。

あの音が、環ちゃんの——。

「で、どうするの？小早川の気持ちには気づいてるんだろ？」

「ああ」

けど――。

「小早川がウチのピアニストになってたら、どうなったかなあ」

あかねに出会っていなければ…。

「いや、1年の時にももしもあいつが音楽室に来てたとしても、たぶんピアニストには採用してなかったと思うぜ？」

「そうか？」

「今の小早川だから出る音色なんだよ、あれは。んで、今の俺や田村だからそれが分かるってこと」

ああ…、そうかもな。

あの頃の環ちゃんは音楽室には来ないヤツだったし、俺たちに涙の旋律を聴く耳もなかっただろう。

「うまくいかねえもんだよな」

ヒビクはコーラを一気に飲み干し、缶をゴミ箱に放り投げた。

「そうだな。気づいたところでどうすることも出来ねえ…」

「そんなの、小早川も分かってるんじゃないか？」

「たぶん…な」

ブックキャスルのピアニストはあかねじゃないと、って言ってた環ちゃん。

きっと、俺の心の中もお見通しなんだろう――。

「仮面着けて押し付けたか。アイツらしいな」

「…ほんと」

笑っちゃうぐらいに環ちゃんらしい。

「明日の夜は、もう東京か…。なんか、最初から最後まで太郎に振り回されて終わったなあ」

「三年坂とか金髪のおねーさんとか映画村とか、やたらハイテンションだったしな。けど、ヒビクは微妙にヤツを振り回してたんじゃないか？アイツ、お前のひとことで素直に30回も転んだんだぜ？」

ハハ、とヒビクは笑った。

「けど、そのおかげで金髪のおねーさんに取材出来たんだぜ？思い残すことなく逝くだろう」

「三十三間堂にも行けたしな」

三十三間堂で、ふと思い出した。

「そういや、ヒビク」

ん？とヒビクは俺を見た。

その顔は、やっぱり――、

「ジャック・ベリーってさ...、お前の何？」

昼間の映画村から気になってたことを、今、やっと訊いた。

けど、答えは聞かなくてももう、俺のどこかが察していて――。

「.....親父」

――やっぱり。

「あんまり驚いてねえな？」

「不服か？」

「いや」

ヒビクはニヤリ、と笑った。

「親父さんはアメリカ人だって聞いてたし、ジャックの名前が最近不自然にチラチラしてたし。でも、もしかしたらって思ったのは今日だ。映画村でお前がケントに間違えられた時」

「ケントからジャックが俺の親父だって察するとは、さすが、田村だぜ。自分のことにはとことん鈍いくせに、人のことはいちいち気が回るよな」

「褒められてるんだかけなされてるんだか分からねえよ」

世界のジャックがヒビクの親父――。

けど、不思議と驚いちゃいない。

ああ、そうなのか...って納得できるぐらいに、ヤツは音に関して真摯だし、ピアノへのこだわりも強かったし。

「涙の旋律じゃないけどさ、ジャックにも特別な旋律があるんだ」

「どんな？」

それは教えない、とヒビクは笑った。

その顔が、まるで幼い子どものような無邪気な笑顔だったんで、突っ込むのはやめておいた。

きっと、ヤツにとってもそれは特別な旋律なんだろう。

旋律。

メロディ。

その中には物語がある。

環ちゃんが綴った旋律は、俺の胸にはちょっとせつない物語だ。

けどそれも修学旅行の土産として、もらったマグカップと一緒に大事に持って帰ろうと思う。

「ピアノ、か...」

ヒビクは意味もなさげに呟いて、ロビーの窓から夜空を見上げた。

明日の今頃は、もう東京の空の下。

修学旅行最後の夜は、こうしてそのページを静かに閉じた。

12 選ぶモノ、捨てるモノ

きらり、と視界の端で光ったのは環ちゃんの銀色の髪留めだ。

ちくり、と小さな痛みが走ったのは俺の胸の端っこだ。

今まで何気なく目に入っただけの髪留めが、今はこーいった条件反射を引き起こすものになっている。小早川はあの髪留めがお気に入りなんだろうか。そういや、ずいぶん前から同じものが小早川のちょっと長めの髪を留めていた……ような気がする。

修学旅行から帰って来て、久しぶりの昼休みの教室――。

外は梅雨入り前の快晴。

窓際の席はぽかぽかと暖かく。

昼メシ直後で腹は満たされ。

視界の中で遠くに移動して行く銀色の髪留め...ようするに、歩いてる環ちゃんの後姿を眠気の中でぼーっと眺めながら、椅子の前足を浮かして体重を後方に傾け、特別意味もなくゆらゆら揺れてると、突如、髪留めがクルッと勢いよく回転して、環ちゃんがこっちを見た。

「田村くーん、水沢さんが来てるよー」

「んあ...?みずさわ...サン？」

ドアの場所で、俺を呼ぶ環ちゃんの横からひょいと顔を出したのは...

「あ...かね?!」

焦った拍子に前足が浮いてた椅子がバランスを崩し、そのまま体重がかかった後方へと椅子ごと仰向けにひっくり返る形に。

「田村くん...っ」

「田村先輩...っ?!」

環ちゃんとあかね、同時に俺の名を叫んでくれたのはいいんだけど、この状況――なんて無様...

「もう...。何やってるのよ。大丈夫？」

環ちゃんがパタパタと駆け寄って来た。

「いてて...」

どこが痛いんだか分からないぐらい、全身を床に打ちつけたみたいだ。

「変な座り方して居眠りしてたんでしょう...。バカじゃないの、まったく...」

相変わらず可愛げのない辛辣な言葉を吐きながら、それでも環ちゃんは転がったままの俺を引っ張り起こしてくれた。

ほんと、相変わらず、だ。

いくら仮面を着けていたとはいえ、マグカップの贈り主に俺が気づかないと考えるほど小早川環って女子は天然じゃない。俺が分かってることも、それでもあえて黙ってる意味もちゃんと知ってて、相変わらず、だ。

けど、こっちはそうもいかねえから、こんなことになるわけで。

環ちゃんとあかね、ふたりが並んで居ることに体が勝手に妙な反応しちまって。

のどかな昼下がりに、あまりにも派手な音を教室中に響かせしまったもんだから、クラスの連中は、遠巻きにただボーゼンと俺を見てるだけで動けなかったようだ。

環ちゃんに助けられ、とりあえず無事な田村くんを確認して安心したんだか、静まった教室も元に戻りざわつく中から「修学旅行ボケかよ」と晒う野郎たちとか、「田村くんたらカッコわるーい」と噂する女子たちの声が耳に入って来た。

まったくもって、その通りでございます。

だけど、ボケててカッコ悪くても、やっぱ俺にとっちゃフクザツなんですよ、いろいろと。

「ほら、水沢さんが心配しているから、早く行ってあげなさいよ」

環ちゃんに背中をトン、と押された。

「お、おお...」

ドアのところであかねはおろおろしていた。

「だ...、大丈夫ですか？わたし、大変な時に来ちゃったみたいで、すみません」

「いやいや、平気平気」

というか、そもそもあかねが俺のところ来たってことが、ひっくり返る発端になったわけなんで。

3年の教室は1、2年とは校舎違いになってるんで下級生自体まず来ない。来づらい空気ってのもあるはずだ。あかねがここに来たってことは、それだけでこいつにとっちゃものすごい勇気を出したに違いない。

そこまでして俺に会いに来てくれたってことに、今さらながら田村くん、ちょっと感動...。

.....なんてことは、もちろん言えないから、さり気なくそのまま廊下に出た。

「軽音楽部のこと、相談に乗ってもらいたいと思って来ちゃいました...」

「おう、分かってるって」

やんちゃな1年生たちにたったひとりで手を焼いてるあかねのために、俺たちも夏まで部活に復帰することになっていた。

とは言っても、今の部長はあかねだ。俺たちがでしゃばることであかねの立場をさらに弱くし

ちまったら本末転倒だし、今後の活動をあかねはどうしたいのか、俺たちはどうしてやったらいいのか、修学旅行が終わったら話し合おうぜ、と約束していた。

「待たせちまったな。大丈夫だったか？」

「はい、なんとか…。いつまでも自立できない後輩ですみません…。先輩に頼ってばかりで」
本当に申し訳なさそうにあかねは俺に頭を下げる。

「相談しろって言ったのは俺だぜ？あかねはひとりで頑張ろうとしてただろ？そんなこと言わないでいいから」

「…はい。先輩、ありがとうございます」

ふんわり。

……ああ。久しぶりのこの感触。

やっぱ俺、こいつが、好きだ――。

なんて、自分の気持ちを改めて確認し、あかねの柔らかな笑顔に見惚れていると…、

「田村せ～んぱいっ！」

背後から、しばらく聞いてなかったがしっかりと聞き覚えがある呼ばれ方をされて振り返った。

ところでここは3年の回廊で、1年生の教室とは中庭を挟んで校舎も離れている。

普通なら、この場でこの声はありえない。どうせヒビクがまた鼻でもつまんでいるんだろうと、振り返る間のほんの0. 何秒で思った。

だから、

「心臓に悪い冗談はいいかげんにしろよっ」

って、文句を言いながら。

あかねとの話を邪魔されて、顔にも声にも不機嫌が現われちゃってたとも思う。

けど、そこに居たのは、

「う…。田村先輩、怖い…」

――ホンモノでしたっ。

「一週間も先輩に会えなくて寂しかったから会いに来ちゃいました…。メイワクでしたか？」

唯子ちゃん目がうるっとして俺を見上げた。

「いや...っ、その...」

迷惑でしたかって...、そんな今さらなこと言われても何て答えればいいのかのやら。

「私、心臓に悪いんですか...?」

それは、悪いっす。

唯子ちゃんの「田村せ～んぱいっ」てのは、ちょっとしたトラウマになってたりするもので。

けど、こうやって本人を目の前にしちまうと結局、

「...メイワクってわけじゃないんだけど...」

と答えてしまう俺は、相変わらずの優柔不断だ。

唯子ちゃん対策にあれだけ大騒ぎして、小早川に彼女のふりまでしてもらったっていうのに、ちょっと時間が経つとこうなっちまう。

「じゃ、いいですよ！私がお会いに来ても！」

にっこり笑う唯子ちゃん。

これからも、ガンガン来るみたいな言い方じゃないですか、それ。

――はあ...。田村くん、激しく自己嫌悪...

「あの、田村先輩...」

唯子ちゃんに話を中断されちまった形のあかねが、やや戸惑ったように俺の袖を引っ張った。

「部活のこと...」

私も一週間待ってたんです、とあかねはごくごく小さな声で訴えた。

あかねにしてみれば、ひとりじゃどうにもならない軽音部を一日でも早くなんとかしたいがために、頼りにする田村先輩の帰りを待っていたってことだろう。あくまでも部活のため、ってことは十分理解してるけど、待たれていたのは素直に嬉しい。嬉しすぎる。思わず、顔がニヤケちまうぐらいに。

そんなあかねの訴えを聞き逃さなかった唯子ちゃんが、ムツとした顔をあかねに向けた。

「むむむう...」

「な、なに？」

唯子ちゃんとあかねが、俺を挟んで向かい合う形で睨み合う。

「確か先輩には彼氏がいますよね？うちのクラスにも先輩の彼氏のファンの子がいるんですよ？」

あかねが、うっ...と詰まる。

「群竹くんのファン...、いるんだ...」

「いっぱいいます。先輩の彼氏、カッコイイですから！」

そうなんだ...、とため息をついてあかねは俯いた。

2年生のあかねを目の前にして胸を張る唯子ちゃんと、1年生の唯子ちゃんに完全に押されて

いるあかね。軽音楽部の1年生とも、きつとこんな調子なんだろう。

ていうか、話が変わってないか？

あかねが俺を待っていたって、そーゆー話じゃなかったかい？

「とりあえず、今ここで群竹は関係ないでしょ...」

ふたりの間に入ってさり気なく言ってみた。

「ありますよ！あんなカッコイイ彼氏がいるのに、田村先輩のどこ来てるなんて...。田村先輩も小早川先輩と付き合ってるらしいくせに、なんだかこちらの先輩の方に変なオーラ飛ばしているしっ」

――こらこらっ。何を言い出すんですか、この子はっ！

変なオーラ？とあかねが怪しいものでも見るような目で俺を見る。

「と、飛ばしてねえからそんな目で見ないで...」

いや、飛ばしてるだろう。

絶対に飛ばしてる自覚...ありだ。

この前、唯子ちゃんには小早川と俺の間には恋人オーラが出てないと言われた。

恋人じゃねえんだからそんなもの出てなくて当たり前だけど、あかねには意識しねえでも自然と....。

唯子ちゃんと、そしてあかねまで、焦る俺の目をじいっと見てやがる。

「.....なんの話してたんだっけ...？」

――疲れる....。

どうしてこんな展開になってるんだろう？

「...見てらんない」

教室から廊下に出てきたのは環ちゃんだ。口調が心底呆れてた。

「小早川先輩っ」

「げ...っ、小早川先輩...」

あかねと唯子ちゃん、それぞれ正反対の感情を表すような声を発した。

「そこ、教室の入り口に近いから固まっていられると邪魔だよ？それにそろそろ予鈴も鳴る時間だし、1年生の教室は遠いんだから行った方がいいんじゃない？」

小早川に諭され、唯子ちゃんはさっきのあかねみたくしょんぼりと俯いた。

「遠いのは2年生の教室だって同じです...。私にばかり言わないでも...」

「だって水沢さんは部活のことで田村くんに話があって来たんだよね？話、出来たの？」

いいえ、まだ...、とあかねは首を振った。

「...だよ。この先輩、転がったり捕まったりだもんね...」

環ちゃんは俺と唯子ちゃんを交互に睨む。

そうこう言ってる間に予鈴だ。

あからさまなため息を吐く環ちゃんに、おもむろにガッカリするあかねに、やや勢いを失くした目で俺を見上げる唯子ちゃん。

「せっかく一週間ぶりに会えたのに。サイアク...っ」

最初に唯子ちゃんがバタバタ走って帰って行った。

「何も話せなくて悪かったな、あかね...」

いいえ、と首を振って、あかねも小走りで階段を下りて行く。

「優柔不断もいいところ」

あかねを見送りながら環ちゃんは呟いた。

言い方がちょいと厳しい。

いつも環ちゃんは厳しいんだけど、今のは自覚してることだけに余計に突き刺さった。

「あーゆーのって、優しさとは違うと思う」

「分かってるよ...」

「分かってないよ」

ピシャリと言い切られ、次の言葉が出てこなかった。

「どれかを選ぶってことは、別のどれかを捨てるってことなんだよ？神部さんのことは選ばないんだよね？」

『選ばない』

それは『選べない』、とは違う。

環ちゃんの言う通り、俺は自分の意志で選ばないのだ。唯子ちゃんも、そして一一。

「選ぶってことはそういうこと。選ばない方を切り捨てる覚悟がいるの」

俺が選んだのはあかねが好きだという俺自身の気持ちだ。

そこに、おまけやおつりや割引きなんかはあるはずがない。

「だから、さっきみたいな態度はやっちゃいけないんだよ。神部さんのためでもあるけど、それ以上に田村くんの覚悟のために」

「.....だな」

「ほんと、分かってる？あたし、田村くんにはずっとイライラしてるんだけど」

「分かってるってというか、今、分かったってというか...」

環ちゃんの言葉が痛い。

あのマグカップにはこいつの想いが一杯まで注がれているのに、その中身を全部こぼせてことなのか――。

もしかしてこいつは、そういう意味であれを俺に寄越したってのか？

仮面舞踏会のどさくさにまぎれて。

自分だって分からないようにしながら、実は分かりやすいヒントを見せて。

だとしたらあの時…、

「小早川は…何を選んだんだ？」

そろそろ本鈴が鳴る。

教室の中がバタバタと慌しくなる。

環ちゃんは、廊下の自分のロッカーから次の教科書を出し、扉をパタンと閉めた。

そして、

「あたしは何も選んでない。捨てたくないから選ばない」

サッパリと答えた。

「それって…ずるくねえか？」

「ずるいよ？それに臆病であまのじゃくなの。だからあたしにはそういう選択の仕方もあり。

でも、田村くんは違うでしょ？選びたいの、決まってるんだから」

ほら本鈴鳴るよ、と、環ちゃんはさっさと自分の席に着いちゃった。

と、同時にチャイムが鳴る。俺も慌ててロッカーから本を出した。

ずるくて臆病であまのじゃくな小早川環ちゃんは、マグカップに注いだ想いを俺に押し付けて捨てさせて自分は相も変わらず、だ。

ずるいって言えば、ずるいのかもしれねえ。

けど、選びたいものを選んでるはずの俺より、ずっと潔いって思っちゃう。

小早川はやっぱ特別。

俺の中でヒビクや柏木たちとおんなじポジションに居てくれる。

そこに居続けて欲しいって思ってる。

俺もずるいからそこは大事に置いておくぜ。

捨てられねえっての、小早川環って女子への俺の想いは、さ。

教室に入ろうとしたとき、背中に何かがトン、とぶつかった。

「あ…、ごめん…」

消えちまいそうな声で謝ってくれたのは小春ちゃんだ。

もう本鈴も鳴ったっていうのに、べつに急いでるふうでもなく、どっちかと言えばぼんやりとしてる。

「どうしたの？D組はもうセンセ来てるみたいだぜ？」

「…え？もしかして本鈴鳴った？」

たった今、鳴ってたでしょうが。キーンコーンカーンコーンって頭上で高らかに。

小春ちゃんが天然のぼんやりってのは標準仕様だけど、なんか今日はちょっと様子が変わだ。

「そーいや柏木は？いつも昼休みは一緒だよな？」

「...直弥くんは...、保健室に...」

「柏木のヤツ、具合でも悪いのか？」

小春ちゃんの様子も柏木の具合も気になったけれど、D組は授業が始まってるしウチのセンセも階段を上って来た。

「早く教室に行った方がいいぜ？俺もセンセ来たし」

うん...、と元氣なく小春ちゃんは頷いて、廊下をとぼとぼ歩いて行った。

――やたらと儂い後姿...。

気にはなるけど、ここはとりあえず保留だ。

センセが来る前になんとか教室に滑り込んでふと環ちゃんを見ると、しっかりと教科書を開いて真面目に予習に励んでいた。

13 ブラック降臨

「7月に入ったら部内で発表会を開きたいと思います。みんなに一曲ずつ披露してもらいたいからそのための準備を...、」

軽音楽部の活動を覗いたのは、オリエンテーションの後2回ほどあかねや新入部員たちの様子見て以来1ヶ月以上ぶりだった。

1年生たちはギターを適当にジャラジャラ鳴らしているヤツらがいったり、雑誌を眺めてるヤツらがいったり、ぺちゃくちゃ喋ってるだけのヤツらがいったりで、とりあえず音楽室に集合してはいるけどそれぞれ好き勝手なことやってるだけ。あかねが号令をかけようが何をしようが、ほとんどまったく聞いちゃいねえ状態。

これじゃあかねはへこむわなあ...

俺でもへこむ。

あかねは最後まで喋らず、はあ...と大きなため息をついた。

あーあー、肩が思いっきり下がっちゃって...

そっと開いたドアから中の様子を見ている俺のことなんか、1年生たちは誰も気づきやしない。そのままガラッと勢いよくドアを全開にしてやっと1年生たちの目が俺に集まった。

「なんだあ、ここは学童保育所かあ？」

音楽室の中にズカズカ入って行くと、騒々しかった連中が一瞬の間に静かになった。

「べつに止めなくていいぜ？そのまま続けてろよ。キミたち部活やってんだろ？」

部活って言葉をやたら強調して言うと、またさらにヤツらは押し黙る。

ギターを弾いていたヤツはまあいいとして、雑誌を見たり喋ったりしてた連中は部活に関係ないモノをコツソリと隠した。

隠すぐらいなら出してるんじゃないかねえよ、と思ったけど、とりあえずそれは見なかったことにしておいて、俺はそのままピアノの前でぽつん、と佇むあかねのもとに直進。

「ちょっと部長を借りてくぜ？」

あかねの手首を掴んで隣の音楽準備室に引っ張って行く。

「キミたちはさっき部長が言ったこと自分らで考えてやってろ。いいな？」

部長の話などちっとも聞いちゃいなかった連中はずいぶん戸惑ったみて一だが関係ない。

俺はそのまま続き部屋になってる準備室のドアを開けた。

・
・
・

「ーってことで、俺たちはブックキャスルで発表会に参加することになったからよろしく」

学校帰りの牛乳屋でいつものようにタム口するタムらくん一同であります。

たった今、音楽準備室にこもってあかねと話し合っただけを決めてきたことをヤツらに伝えたところだ。

「発表会...ですかい」

松山兄があからさまに不服そうな反応をした。

「その発表会ってのはやっぱアレ？ピラピラなおぼっちゃんお嬢ちゃん衣装を着て舞台上がるわけ？」

「んなわけねえだろ！ちっとは真面目に考えろよ」

弟が不真面目にチャカす兄に膝カックンを食らわすと、ちょうど缶コーラを開けたところだった兄はそのまま勢いよく缶をデコに直撃させ、飛び出たコーラを思いっきり鼻で吸い込んだ。

「ダーッ！！いてえ〜〜！！デコと鼻っ！ぶほっ、げほっ！！」

琥珀色の鼻水を垂らし、兄はその場でじたばた走り回る。

まったく、いつでもどこでもうるさい男だ。

とりあえずほっとく。

「とにかく、あと1ヶ月半の間に1年たちには自由に自分らの音楽をやらせて一曲仕上げさせるんだよ。その間、俺たちも部活に出てバンドの練習をしながら技術面を指導してやるの」

「指導？めんどくせえなあ...」

と、ヒビク。

「あのな、ヒビクさん？ハッキリ言っちゃえば、あかねをてこずらせているのはお前がスカウトした墨中の悪ガキどもなんだぜ？」

ヒビクは、うっと詰まった。

ヤツらのことは例の墨中三送会で有無を言わさねえ状態にしてヒビクが勧誘したわけだ。

楽器になんか触ったこともなければ興味もなかったっていう、普通なら軽音楽部になんか入るはずもない正真正銘の不良っ子たちだから部活に出てもやることがない。だから、学童保育所に音楽室を変えちまうわけだ。

けど、そんなでもさぼらねえで部活に出てくるってところにあかねは希望を繋げている。

俺にしてみれば、それであかねを困らせてるわけだから出てくるだけメーワクだぜ、このやろーってな話だが、ここはあかねの気持ちを優先して、やることのないヤツらにやることを与え、ついでに優しく手ほどきしてやろうってな話になったわけだ。

「文句言ってる場合じゃないってこと、分かった？」

はい、とヒビクは小さくなった。

「ってことで明日から。よろしく頼むぜ？」

しゃーねえな、と弟とヒビク、そしてまだ鼻に入ったコーラと格闘してぴょんぴょん跳ねながら鼻を噛んでる兄は承諾した。

「けど、なんだかんだ言って田村くん、ずいぶん楽しそうだねえ」

柏木がそこでのこにこしていた。

「な、なんだよ、その微笑みは」

「いやべつに？あかねちゃんにずいぶん優しいなって思ってさ」

「そ、そりゃ、可愛い後輩がひとりで頑張ってるからなあ？」

「だったらヒカルちゃんだってひとりで頑張ってるよ？田村くん、何か手を貸してあげたの？」
にこにこ笑いながらサラリと突っ込む柏木に、なにか黒いモノを感じるのは気のせいだろうか。

「まあ、ヒカルちゃんは逆境に強いし、ひとりで10人分ぐらいの結果出すから大丈夫なんだろうけど。ね、風間くん？」

「...な、何で、そこで俺に振るの？」

柏木に爽やかに微笑まれてヒビクもややうろたえている。

「いやべつに。ヒカルちゃんの話は風間くんがよく知ってるから普通に訊いただけ」

にこにこ。

——笑顔の柏木が黒い貴公子に見えるんですけど。

「あ、そう言えば柏木、保健室に行ってたんだって？」

今ふと、昼休みに見た小春ちゃんの様子を思い出した。

「あ、うん。行ってたよ」

「どっか具合が悪かったのか？小春ちゃんがずいぶん心配してたみたいだぜ？」

「.....」

柏木は一瞬の間、返答に詰まったように黙り込んだ。

そして、

「...小春ちゃん、俺が保健室に行ってたこと知ってたの？」

と、訊いてきた。

「知ってるもなにも、俺は小春ちゃんから聞いたし」

「そう...」

——なんだべ？

「小春ちゃんが知ってたらマズイことでもあったわけ？」

「.....」

さっきの笑顔はどこへやら、今度はやや蒼白になってだんまりの柏木くん。

マジでどこか具合が悪いんだろうか。

「そーいや、小春ちゃんは？今日是一緒じゃねえの？」

やっと鼻コーラの地獄から解放されたらしい松山兄が周囲を見回した。

言われて気づくと小春ちゃんの姿がない。いつもあまり存在感のない子だけど、柏木がいるところには傍にさり気なく居るのが小春ちゃんだ。

「なんか、先に帰られちゃったみたいなんだよね」

「ふーん。珍しいこともあるもんだな」

兄が言うように小春ちゃんが柏木を置いて先に帰るなんてことは本当に珍しいことだ。

「急用でもあったのか？」

「さあ？小春ちゃんぼんやりしてるから、俺、忘れていかれちゃったのかも」

ぼんやり...してたな。さっきも。

本鈴鳴ったのも気づかなくて、廊下をふらふら歩いてたし。

「で、具合はどうなんだよ？」

「具合？」

柏木はきょとんとした顔で俺を見た。

「保健室に行ってたんだろ？」

普通、保健室ってところは具合が悪くなった生徒が利用する場所だ。たまにそーじゃねえヤツがフケる口実に仮病を使って行ったりするけど、沢渡センセはそーゆー生徒には厳しい。特に男子にはめっちゃめっちゃ厳しい。ちょっとやそっとじゃ利用させてくれないセンセだ。

「あ...、ちょっとね...」

「もう平気なのかよ？」

「...うん。もう...へーき」

どこか歯切れが悪い柏木だった。

◇

次の日の放課後。

俺たち3年も音楽室に集合し、昨日あかねと俺で決めた発表会の打ち出しをした。

1年たちはブーブー言ってたが、それは元部長のひと睨みで鎮め、軽音楽部の発表会...もとい、部内コンサートは7月の初めに行われることになった。

「んじゃ、久しぶりにブックキャスルの練習でも始めますか」

1年たちを音楽室の後ろのほうにまとめ、ピアノがある前の小ステージに俺やヒビクたちとあかねがスタンバった。

で、気づいた。

「柏木は？」

ドラムに柏木がいない。

「HRまではいたけど、そういえばその後見てねえな」

柏木と同じクラスのヒビクも首を傾げる。

「しょーがねえな。お前らとあかね、はじめててくれる？俺、連れてくるからさ」

たぶん、図書室で待ってる小春ちゃんのところにでも行ってるんだろう。

柏木にそーゆーことは今までもよくあったことなんで、さほど気にもせず俺は図書室に向かった。

が――。

図書室まで行くまでもなく、柏木の居場所は判明した。

「小春ちゃん？」

保健室の前を通りかかった時だ。

保健室の閉まったドアに背中を当ててぼうっとしている小春ちゃんがそこにいた。

「こんなところで何やってるの？ 柏木は？」

何気に普通に声をかけると、小春ちゃんはまるでそこに熊でも現われた時みたく全身を硬直させ、目玉が零れ落ちそうなほど大きく目を見開いて俺を見た。

「どしたの?!」

こっちの方が驚いちまってしばらく一緒に硬直しちゃった。

が、俺の方はすぐに解けて小春ちゃんに一步近づいた。すると――、

「な、なんでもないからっ。こ、ここに直弥くんはいないからっ。た、田村くんは全然気にしなくていいからっ」

ここに100%柏木直弥がいますよ――って態度で教えてくれて、そのまま図書室の方に走って行っちゃった。

田村くんは全然気にしなくていいなんて言われたら気になるだろう、普通。

柏木の昨日の様子も変だったし、今の小春ちゃんももっと変だったし、ここは当然そーっとドアを横に滑らせて中を覗いてみた田村くんであります。

がしかし、保健室ってところは衝立だらけでドアを少し開けただけじゃ中が見えない。

中まで入っていかなきゃ衝立の向こうに沢渡センセはいるのか、そこで誰が何をしているのかってのは分からない。

けど、ぼそぼそ喋る低い声が聴こえてくるから柏木は確かにいるらしい。

「栄養学って面白いですね。他に本あったら貸してもらえますか？」

なんてなことを柏木は喋ってる。

「あら。もう読んじゃったの？ 先月から何冊貸した？ もう私も貸す本ないわよ」

沢渡センセだ。

なんだ。全然普通じゃねーか。

柏木は別に具合が悪そうな声もしてない。

小春ちゃんの様子も普通じゃなかったもんだから実はちょっと心配だったりした。

ドラムを叩いてない時の柏木は、背景に少女漫画風の薔薇の花が咲いてるような線の細い美少年だし見るからにひ弱だし、なんか悪い病気でも患（わずら）って俺たちに黙ってるんじゃないかかって...、タイトル『薄幸の美少年、その儂く華麗なる人生』なんていう田村くんの妄想劇が上演されちゃうとこだった。

センセに借りた本を返しに来ただけなのね。柏木にとっちゃ栄養学もトルストイやゲーテなんかと同じぐらい哲学の入った書物なんだろうーか。

安心したと同時に中に入り、衝立の陰から柏木を呼ぼうとした時、

「……こーゆーのはやめてくれないかなあ、柏木くん」

こっち側に体を向けてた沢渡センセが柏木から返された本を開いた中からメモみて一紙を取り出しているのが見えた。

本能が一瞬でヤバイ空気を察知して、俺はそのまま衝立の裏側に身を隠しちまった。

「なんで今見ちゃうのかなあ、沢渡先生」

いつもと同じ口調の柏木が言った。

「普通、返された本ってその辺にポンと置かない？その場で開くなんて反則だよ」

「何を言ってるの？人に借りた本にこんなメモを挟むなんてあなたの方が反則でしょ？」

「動揺しないんだね…、さすが大人の対応だね、先生」

「ええ。少なくともあなたより7、8年は長く生きているから」

「あ～あ。ずいぶん経ってから先生にそのメモ見つけてもらって俺のこと思い出してもらいたかったのにな。そう…、俺が卒業したあととかね」

「そう。残念だったわね」

「でも、せっかく今見られちゃったんだし、今、考えてくれてもいいんだけどな」

「あいにく、生徒とそういう関係になる気はないの。だからこの話はおしまいね。わたしも忘れるからあなたも忘れなさい」

「あーあ…。やっぱり卒業したあとに見て欲しかったよ…」

——ここここ、これっていったい何？

あのメモには何が書いてあるっていうんだよ？

ていうか、何やってんだよ、田村優作！

これじゃまるで家政婦を見た！の市原悦子じゃねーか。

こんな陰からコソコソと覗いてる俺が一番反則じゃねーの？！

センセと柏木が何の話をしてるんだかだいたい想像つく。

けど、ふたりの口調はいたって普通で、例えば「先生、頭が痛いよー」「そう。じゃあそこで少し休んでなさい」ってな会話と変わんねー調子で際どい話をしている。

「とにかく、もう貸す本もないから栄養学についてもっと知りたければ図書館でも探しなさい」

「冷たいな、先生……」

その柏木の呟きこそ、氷の塊を背中にぶち込まれたようだった。

柏木直弥、おめーはいったい何やってんだ。

患（わずら）ってるのはそこなのかよ。

小春ちゃんって彼女がいながら、年上のしかも学校のセンセに恋煩（わずら）いなんてよ。

「おい、柏木」

これ以上柏木に喋らせちゃいけねえって思ったから、衝立の裏からひょっこり顔を出した。

最初から俺の方を向いていたセンセはやや驚いたようだが、俺に背中を向けてた柏木は、

「あ、田村くん」

普通に振り向いて普通に言いやがった。

「おせーから迎えに来たぞ。みんな音楽室で待ってるんだけど」

「ごめんごめん。沢渡先生に借りてた本を返しに来たんだ」

それだけじゃねーだろが。

って言葉はなんとか呑みこんだ。

「じゃ先生、本、ありがとうございます。失礼します」

柏木は沢渡センセに一礼してさっさとドアに向かって歩いていく。俺は柏木の後を追う形で保健室を出た。

特に何を話すわけでもなく階段を音楽室がある三階までふたりで上る。

踊り場まで来ると、あかねが弾くピアノとか松山ブラザーズが鳴らすギターの音が微かにもれて聴こえてきた。ヤツらは適当に練習を始めているようだ。

こんな空気は久しぶりでさすがに懐かしい。

たった1ヶ月半の間だけど、またここでみんなで音楽が出来るってのは嬉しい。

さっきの保健室でのことは見なかったこと聞かなかったことにして、いざ音楽室のドアを開けようとしたとき、

「聞いてたでしょ、田村くん」

柏木がポツリと言った。

やたら冷めた声だった。

「いつ飛び出してくるかなって思ってた。思ったとおりのところで出てきてくれたけどね」

「なっ、柏木?!」

「ごめん。心配かけただろ?田村くんがいるの途中で気づいたけど、話してたら止まらなくなっちゃってさ」

サラリと言う柏木は憎たらしいくらいにいつもの柏木だ。

「おまえ、いったい何やってんの?」

コイツは本当に柏木直弥なんだろうか。

「小春ちゃん、気づいてるんだね」

「何に気づいてるかは知らねえけど、おまえが保健室に入り浸ってるのは知ってるな」

小春ちゃんは天然だけど、柏木の心の揺れみて一なもの敏感に察知してたんだろう。
で、小春ちゃんなりに心配して悩んで昨日のアレとかさっきのあんな調子とか、さらにぼんやり度が進んじまったんだな。

「そっか…。でも、もう行かないよ。たぶんね。先生にはあしらわれちゃったしさ」

「じゃあもしも、あしらわれなかったらどうしたんだよ」

さあね、と柏木は首を傾げた。

「小春ちゃん、悲しませんよな」

「……ほんと、田村くんって気持ちがキレイなんだな…」

柏木は先に音楽室に入って行った。

おせーぞ柏木、どこ行ってやがった、とブラザーズたちが喚く。

「ごめん。ちょっと用事を済ませてたから」

「早く始めようぜ」

そんないつもの会話をする柏木とヒビクたち。

確かに柏木には俺たちとは違う感性があり、神業的な勘の鋭さや読心術みて一なものを持ってて時々ビビることもあったけど、他にもこんな、こんな…、

――ブラック柏木直弥、降臨かよっ。

自分のポジションにつき、普通に演奏を開始した柏木の白と黒をハッキリ見てしまった田村くんでありました。

14 カレーなる純情男

ところで俺たちは一応3年なんで進路って問題が目の前に迫ってる。

本城高校の3年が部活に参加しないってのが原則になってるのは、一応ここが進学校だからなわけ。

がしかし、ブックキャスルのメンバーで進学とか進路とかを真面目に考えてるのは柏木ぐらいだろう。

あとの連中は俺も含めて、この時期になってものんびりーとしているのが現状ー。

「田村くんはですねえ...、もう少し勉強頑張ってもらって、まあ欲を出さなければ推薦出せる大学もありますけどねえ...」

進路相談の千田先生と向かい合ってるこの状況。

なんだか居心地悪くてしょうがない。

それは、俺の後ろで順番を待ってる松山弟も同じだろう。

6月中日の昼休み。

今日、俺は初めて進路相談室って場所にやって来た。

「はは...。欲を出さなければ...ですか」

簡潔に言えばバとカがつくとりあえず大学ってぐらいの大学にしかお前は推薦できん、ってことだろう。

しかももう少し勉強を頑張るって条件つきで。

ー微妙にへこむ。

「田村くんは、なにか将来の夢はありますか？」

「は？」

夢ー。

そんなこと今の今まで考えたこともなかった。

そういえば俺、将来何やって生きていくんだらう？

「いやあ～、そこまではまだあ～」

「そうですか.....」

千田先生は深いため息を吐く。

専攻学部の選択は将来に重要な関わりを持ってくるんだそうで。

とりあえず、職業選択の間口が広い学部でお願いします……と言って俺は進路相談室を出た。
そのまま屋上へ行ってこれから昼飯だ。
いつもの場所では、既に食い終わったヒビクが寝転がっていた。

「どうだった？初めての進路相談室は？」

「微妙……」

一応大学に進学するって意志は伝えてきたけど、なんかしっくりこない。

それは俺の頭がおバカさんだからってのもあるんだろうけど、来年の今頃、普通に大学生やっ
てる俺ってのが全くイメージ出来ない。

「将来の夢はあるか、なんて訊かれて答えられなかったし…」

ヒビクは梅雨の晴れ間の青空をぼんやり眺めながら「夢ねえ…」と呟いて、

「んじゃ、俺もちょっとその進路相談室ってところに行ってみっかな。将来の夢のために」

100%不真面目な言い方をしてのっそり起き上がった。

そういやコイツ、進路はどーするつもりでいるんだろう？

「おまえは英文科でも行くのか？」

「英文科？なんで？」

ヒビクは、ほけ？ってな顔で俺を見た。

けど、あれだけ英語が出来ればそっち関係に行って将来は同時通訳とか翻訳家とか英語のセン
セとか……、

っていうか、どれもこれもちっともピンとこねーなあ。

俺の大学生よりもはまらねえや。

「ま、適当に進路相談室デビューしてくるぜ。お？またひとり相談室帰りの男がやって来たぜ？
」

屋上から去っていくヒビクと入れ替わってやって来た松山弟は、なんだか知らねえがは一は一
ため息を連発している。

「どしたの？おめーを推薦できる大学はねえってか？」

「それもある。それもあるけどそんなんじゃねえ」

「どっちなんだよ」

「田村あ！」

弟はいきなり大声を出して俺の両肩を掴みやがった。

「いてて！なんだよ次郎！肩がつぶれちまう！」

体力バカのバカ力は半端な力じゃねえ。

「俺たち、卒業なんだぜ！？」

「知ってるよそんなの」

その前にお受験ってのがあらしいけどな。

「来年の今頃は、もうここにはいないんだぜ?!」

「だから知ってるって!俺たち3年なんだから。春になったら卒業するんだろうが」

春になったら卒業.....ってことは、来年の今頃はここにいるはずもねえ。

無事に大学に入ってようが浪人やってようが、ここにはいないってことだけは確かなことだ。
ってことは....

確実にやってくるのはお別れ。

あかねとか、あかねとか、あかねとかと別れる日が来るってことだ一一。

「.....もしかして、そーゆーこと?」

「まままま麻耶ちゃん.....」

弟はしょぼん、と肩を落とした。

進路相談室なんて場所に入ったりして、自分の進路について真面目に考え出したと同時に浮かび上がってしまったのは卒業って二文字らしい。

「卒業したら.....まままま麻耶ちゃんに会えなくなっちゃうんだなあ〜」

その名前を出す時に、いつまで経っても無駄な「ま」が頭についちまうコイツはほんと純情な男だ。

けど、そんだけ大真面目に恋しちゃってるってことだろう。

「まったく会えなくなっちゃうだろーなあ〜。麻耶ちゃんとおめーとじゃ何の接点もねーしな」

たまたまあかねやヒカルとおんなじクラスだったから仲良くなれた麻耶ちゃんだ。

部活がおんなじってわけでもねーし家が近いってわけでもねえ。

学校限定のお付き合いだから、学校が終わっちゃったらそれでお終い。

でもそれは、俺も同じ一一。

「あああ〜、時間よ止まれ.....っ」

弟は青空に向かって吼えた。

「次郎よ。このまま時間が止まったとしてもこのまんまなんだぜ?」

「は?言ってる意味がわかんねえ」

「だから!おめーと麻耶ちゃんがどーにもなってないまま時間が止まったってしょーがねえだろってことだよ!」

麻耶ちゃんにはあかねみたく彼氏がいるわけじゃないんだ。

「告れ!!」

卒業したって普通に毎日会える関係に、今からなっときゃいいんだろーが。

それが出来るんだぜ、おめーには。

うらやましいぜ……。

「う……っ」

弟は絶句しちまった。

「ままままま麻耶ちゃん…って言ってる暇があったら、麻耶ちゃん好きだ！って言っちゃまえ！こっちの方が文字数少ないんだぞ？簡単だろ！」

「簡単に言うなよっ」

「簡単なんだよ、おめーは！」

「おめーはってどーゆーことよ?!」

「細かいことはいいの！とにかく、ここで勢いつけろよ。もう決めちまえ！」

前だって無理やりでも勢いつけていいとこまで持って行ったんだ。あの時は運悪く暴れん坊ズの乱闘騒ぎで流れちゃったけど、勢いつてのは勝手につくもんじゃねえ。自分でつけるもんだ。

「今日の部活の後、麻耶ちゃんを待ち伏せするぞ！」

「今日?!」

「いいか？こーなったのも勢いのひとつだぜ？肚決めろ！」

「またそれかよ…。でも…、」

弟はごくん、と生唾を呑みこんだ。そして、

「……田村の言うとおりでせよ。よし、よし、よーし！こーなったら当って砕けろだっ。告ってやるぜ！」

と、言い切って、ぶるっと武者震いしやがった。

◇

そんなわけなんで、部活やってる間中弟はソワソワ落ち着かず何度もトチリやがって、『ライジングサン』がちっとも陽が昇らねえ。

「…ったく、次郎！どーしちまったの?!」

太郎がキリキリ喚くが、今日のところはちよいと大目に見てやってくれよ。

おめーの弟は人生をかけた一大決心をしたんだからさ。

「今日のところはパー練ってことにしようぜ？」

と、提案してやって、それぞれが自分のパートやったり1年生を指導したりの練習に切り替えた。

。

ガヤガヤとざわつく音楽室――。

こっちで全身が素で「まままま麻耶ちゃん」になっちまってる弟を見、あっちで生き活きとピアノを弾くあかねを見、去年とはまったく雰囲気が変わっちまってる音楽室を見、ちよいとメンタルに浸っちまった。

去年と今がこんだけ違うように今と来年も違っていくんだろうし、そこにはもう俺たちの存在すらない形で変わっていくんだろうし、それを俺は見ることは出来ねえわけだ。

「せっかくブックキャスル再開なんだし、やっぱヒカルのマラカスも欲しいよなあ…」

と、ヒビクが言うとおりに、ここにヒカルはいない。

もうそれだけでも去年とは全然違う。

ヒカルは演劇部の方で何か新しいことを思いついたらしく、無期貸し出し中の綾瀬とふたりでそのことに全力を尽くしているようだ。

ブックキャスル再開の話を持って行った時はもう、そっちに夢中になっちまって忙しくなっていた。

「まあ、言ってもしよーがねえな。あいつはあいつで頑張ってるんだしな」

「そーだぜ。こっちは風間のおかげでコイツら何とかしねーとなんないし、トホホだぜ」

コイツらってのは当然やんちゃな1年たちだ。

俺たちが部活に出るようになってからは、とりあえずあかねを苛める光景には出会ってねえが、空気はやっぱまだ硬い。

それをサラッと和らげるのは白い方の柏木だ。

「だいぶん上手くなったよ？その調子でもっと頑張てね」

「ここのコードはこうやって押さえればいいと思うよ？ちょっと難しいけどキミになら出来るから！」

「そこはこうやった方がいいね。そうそう、出来るじゃない！凄いよ、キミ」

なんてキレイな褒め言葉を連発しながら1年生たちをうまーく指導してやがる。

まあ、これが今まで俺たちが見てきたフツの柏木なんだが、俺にはもう柏木に関しちゃう白い方と黒い方って見方しか出来なくなっちゃった。

まままま麻耶ちゃんな弟がとうとう告る決意をしたり、柏木の白と黒が見えちまったりと、俺たちの中だけでもこんだけ色々変わってるんだ。不変ってのはどこにもねえんだな…、なんてシリアスモードに入りそうだった時、

「やっべっ！！俺、今日権田の補習に行かなきゃならなかったんだっ！！」

突然思い出したように兄が叫んだ。

「また説教食らっちゃう！わりーけど、俺はこれで行くぜっ！！」

あっという間に兄は音楽室から消えた。

――いた。1年の時から何も変わってねえヤツが…。

ちょっとホッとした田村くんであります。



さてさてさて。

とうとう運命の時がやって来ましたよ、奥さん！

部活が終わり、俺と弟は速攻音楽室を飛び出てそのまま剣道場へと続く渡り廊下に走った。

ここで部活帰りの麻耶ちゃんを待ち伏せる。いよいよ松山次郎くんのうるわしきスクールデイズのクライマックスってやつだ。

「うううう…」

さっきから弟は貧乏ゆすりのしっぱなし。

足も手もケツまでも体中の何もかもがカタカタカタカタ揺れている。

「ちっとは落ち着けよっ」

「無理だしっ」

部舎の陰に隠れてコソコソと道場の方を見てるこんな俺たちは、もしもポッターに見つけれたら一発でしょっぴかれるぐらいに挙動不審だがしょーがねえ。

人目につかねえように注意しながら、じっと渡り廊下の向こうに目を凝らした。

しばらくして、麻耶ちゃんが伊藤と一緒に道場から出てきた。

ふたりは仲良くお話をしながら渡り廊下をこっちに向かってやってくる。

「はう……」

弟は意気消沈しちまった。

「ばか。あれはにぎやか組の伊藤だよ！そこでへこむんじゃねえ」

麻耶ちゃんが元1Fにぎやか組の伊藤とか大久保とか群竹と仲がいいのは1年の時からだ。

だから、このツーショットは深刻に考えることじゃねえだろ。

あかねと群竹みたく、カレカノってわけじゃねえんだから。

――へこむぜ……。

って、俺が今さらへこんでどーするっ！

「ちきしょう。なんで結野に勝てないんだよ」

「それは伊藤くんが弱いからでしょ」

ほらな。さすが、麻耶ちゃんだぜ。

キツイというか男前というか。

相変わらずだ。

「いいか、次郎。腹に力入れて勢いよく告るんだぞ？余計なこと考えるな？」

「お、おう...」

「よし、行ってこい！」

すぐそこまで麻耶ちゃんが来たとき、勢いつけて弟を送り出してやった。
弟はまさに勢いがついたまま転がるように麻耶ちゃんの前に躍り出た。

よし！一気に行けーっ！！

「やややや、やあ、まままま、まままま、まままま麻耶ちゃん！ぶ、ぶ、ぶ.....部活...おお
おお終わったたたんだ」

通訳します。

『やあ、麻耶ちゃん！部活終わったんだ』

.....って、おい！

そこでどもってどーするっ。

しかも、分かりきってるようなこと言ってどーする！

——田村くん、心臓が痛いつす.....。

「あれ？ジロ先輩？こんなとこ歩いてるなんて珍しいですね？」

「そ、そ、そそそそんなな...こここと...ある...か」

「どうしたんですか？震えてるみたい。寒いとか...？」

「いいいい、いいいやあ」

「今日は肌寒いですもんねえ。風邪ひかないでくださいね」

「う.....。麻耶ちゃん。ありがとな」

おっ。

麻耶ちゃんの優しい一言で弟のバグが直ったみてーだ。

ところで伊藤くん。いつまでそこにいるんだろう？

ちょっとだけ空気を読んでもらえるとありがたいのだけど、そういや伊藤はかなりの鈍感だ
という話を聞いたことがあったな。

しゃあない。

友のために田村くんが裏技使ってやるか。

「お——い。伊藤~~~~。ちょっと来てくれないかあ~~~~」

裏声使って叫んでみた。

人がいい伊藤くん、声の出所を探しながら校舎の方に走って行ってくれました。

お邪魔虫撃退成功。

さあ、弟よ！もう枷は何もねえんだ。

一気に告れ！告りまくれ！！

「麻耶ちゃん！」

「はい？」

「俺さ！」

「はい」

「す...す.....す.....うっ?!」

どうしたのか、弟は突然腹のあたりを押さえてもじもじ始めちゃった。

「ジロ先輩、どうしたんですか？」

「い、いや...！麻耶ちゃん、ちょ、ちょっここで待っててくれる？す、すぐに戻ってくるから！」

「え?! 待っててって...」

弟は麻耶ちゃんをその場に残し、自分だけ回れ右してこっちに走ってきやがった。

「おい?! 何があったんだ?!」

「は、腹がヤバイ.....っ。ダメっ！便所行ってくる...!!」

言うが早いか校舎に駆け込んで行く弟。

——腹がヤバイ?! 便所?!

そこに勢いつけてどーすんだよっ!!

腹に力入れすぎだろ、それは!!

どうしてこうなる、松山次郎...

とりあえず、せっかくここまで来たんだから麻耶ちゃんを留めておかなきゃならねー。

しょーがねえ。ヤツが帰ってくるまで俺が繋いどくしかねーだろ。

「おー、麻耶ちゃん」

部舎の陰から渡り廊下に出て麻耶ちゃんに声をかけた。

「あれ、田村先輩」

「今、部活終わったのー？」

「はい」

って、これじゃさっきの弟と一緒にじゃねえか。

やべやべ。焦っちまって何喋っていいか分かんねえ。

「た、大会が近いんだったよな」

「そうなんですよー」

「頑張れよー」

「はい、ありがとうございます」

「……」

「……？」

……もう会話終わっちゃったじゃねえの！！

早く来いよ次郎！

麻耶ちゃんの行く手を阻むように立つ田村くん。

超怪しいんですけど……。

お願い次郎くん。

早く来て。

いつまで便所にこもってんだよ。

「あの…、田村先輩」

「え？な、なに？！」

よっしゃ。麻耶ちゃんから話を繋げてくれた！

「今ここでジロ先輩に呼び止められたんですけど」

「あ？うん。で？」

「なんか、突然走って行っちゃって…」

「あー…、どうしたんだろうねえ？でも、待っててとか言われなかった？」

「それは、言われたんですけど」

麻耶ちゃんは困ったような顔で校舎の時計を見た。

「なんかこれから予定あるの？」

「いえ。そういうわけじゃないんですけど」

うん。変だよな。

わかる。キミの気持ちはよくわかるさ！

もう薄暗くなった渡り廊下で、何であたしジロ先輩のこと待ってなきゃならないんだろう…と、そう思うのは当然だ。

がしかし！

ここは、純情男松山次郎の告白のためにこらえてやってくれ、麻耶ちゃん！

その時――。

「あれー？麻耶ちゃんに田村先輩！」

頭上から明るい声がした。

確認しなくても誰だか分かる。この上は演劇部の部室だ。

――出ちまったよ、ヒカルちゃん…。

俺はコイツに何度、チャンスを邪魔されたことか。

ボートとか花火大会とか、今こそって時にサーッとあかねをかつ攫われちまった田村くんのくらーい過去が蘇ってきた。

「麻耶ちゃん部活終わったの？」

「うん」

「じゃあ、これからあかねちゃんも誘って商店街に新しく出来たカレー屋さんに行かない？美味しいんだって聞いたよー」

「ほんと？行く行く！」

案の定、上と下でこんな会話が展開されちまって…。

「田村先輩、すみませんがジロ先輩に会ったら、お話はまた今度聞きますって伝えてもらえますか？」

ってなことになっちまった…。

「いや…、それはヤツを待ってて自分で伝えた方が…」

「はあ？」

何、辻褃合わねえこと言ってんだ田村優作。

麻耶ちゃんにおもいきり変な顔されちまったじゃねーか。

「はいはい……。りょうかいしましたよ。伝えます…」

…ったく、ヒカルだよなあ。

けどヒカルよりも次郎だ。

せっかくのチャンス、てめーで棒にふりやがって。

麻耶ちゃんはヒカルと仲良く行っちまった。

しばらく待ってても弟は戻ってこねえから迎えに行くと、ちょうど便所から飛び出してきやがった。

「遅せえ！」

「焦っちゃったらピーが止まなくて...っ。あー死ぬかと思った……。とりあえずスッキリ」

「手を洗えよっ！」

「そんなことより麻耶ちゃんは?!」

「お話はまた今度聞きます...ってさ」

「こ、今度お〜〜？」

弟はへにゃへにゃと廊下に崩れた。

文字通り崩れて伸びちまった。

「今度もまたこれやるのかよ……。俺、もたねえしっ」

「そんなの知るか。いざって時にピーピーピー腹下すのが悪いんだ」

「しょうがねえだろ。緊張しすぎて限界突破しちゃったんだから！」

緊張で限界突破って...、情けねえ。

どんだけ軟な腹なんだ。体力バカのくせに。

「こ、今度なんて絶対無理だし。今から麻耶ちゃん追いかける！」

弟にしちゃ根性見せたけど、時すでに遅しだ。

「もう帰っちゃったよ！ヒカルたちと商店街のカレー屋に行くんだってさ」

「カレー屋.....」

「そう、カレー...屋だ...」

なんとなくカレーのかほりがぷーんと漂ってきた気がした。

「田村あ...。俺、一生カレー食べねえかも...」

ああ、松山次郎哀れなり。

っていうか、自業ジゴクー。

15 ツッパリカエルとキララのハート

梅雨が明け、暑い夏がやって来た。

今朝は臨時朝会があるっていうんで本城高校の生徒たちは体育館に集められた。

運動部の大会が先月から始まっているみてーだが、サッカー部とか野球部は予選敗退したらしい

が。

「剣道部団体の部 都大会優勝 代表 結野麻耶！」

「剣道部女子個人の部 都大会優勝 結野麻耶！」

「空手部団体の部 都大会優勝 代表 大久保勇斗！」

「空手部個人の部 都大会準優勝 群竹颯士！」

剣道部と空手部は好成績を残したらしく、麻耶ちゃんと群竹、大久保の三人が全校生徒の前で表彰された。

っていうか、臨時朝会はそのためのものだったわけだ。

優勝とか準優勝とか、これまでウチの学校にはあんまり縁がなかった成績だから、学校が浮かれるのも仕方ねえっちゃそうさ。

「しかし、すげーなあ、にぎやか組は！」

朝会が終わって体育館を出るところで、トロフィーとか賞状を持った麻耶ちゃんたちと会った

「今日表彰された3人とも元1Fにぎやか組だもんなあ」

「空手とか剣道とか、怖え集団じゃねーか」

「大久保なんか黒帯だしなあ〜」

「群竹、殴り合いで準優勝だしなーっ」

いや殴ってないから...、と地味に訂正する群竹をそっちに置いて、怖ええだの強ええだのデカイ声で話しながら、調子に乗る大久保とか、仏頂面の群竹とか、そんな群竹の横にピッタリと寄り添ってるあかねとか、それ見て性懲りもなく胸が痛い田村くんとかその他大勢でぞろぞろと体育館から校舎に入る渡り廊下を歩いてると、後ろから来た1年生数人が「失礼しますっ！！」と頭を下げて俺たちの横をそそくさと追い越して行った。

「あ、待って...」

と、あかねが声を掛けようとしたが、ヤツらはまるで逃げるようにして校舎に駆け込んでしまっていた。

「あの子たち、軽音の子...」

「そうだったか？」

あつという間だったから顔は見えなかったが、あかねが言うならそうなんだろう。

軽音と言えば、今日の放課後は『軽音楽部ハッピーサマーコンサート』ってネーミングの部内発表会を音楽室でやることになってる。

俺たち3年もブックキャスルとして出場するために、この1ヶ月あまり部活に参加して練習してきた。

といたって演る曲は『ライジングサン』だし、ブックキャスルだし、俺たちに関しちゃ何の問題もない。発表会は今年の生意気な1年たちを教育するために俺とあかねで計画したようなもんだ。

「放課後はいよいよだね、あかねちゃん！あたしも群竹くんたち引き連れて応援に行くからね！先輩たちも頑張ってくださいね！」

ヒカルがハツラツとした笑顔で激励をくれたとき、ちょうど予鈴が鳴った。

◇

そして、ハッピーサマーコンサートは滞りなく終了したのであります。

「.....っておい！ずいぶんあっさり終わったなあ？」

と、松山兄がポカンと口を開けるぐらいに、コンサートは何事もなく最初から最後まで順調に進んで終わった。

ヒカルたちにぎやか組のヤツらを筆頭に、狭い音楽室でもそれなりにいっぱいになるぐらいのお客さんも来てくれたし、あれだけ手がかかった1年たちも練習の成果が出てて、まあまあな演奏をやったし、俺たちはもちろん完璧だったし。

「みんな、お疲れ様でした。短い期間によく頑張ってくここまで出来たと思います」

あかねは心底嬉しそうに1年たちを労った。

「これからもこんな風に、みんなで楽しく音楽やっていこうね」

「は、はい、水沢先輩っ！」

いつの間にかこんな調子。

気づいてみるとあんなに生意気だった1年たちがあかねに従ってた。

「あいつら、ほんとにあかねイジメしてたのか？」

「今じゃ借りてきた猫みて一になっちまってるけど...」

ブラザーズが首を傾げる。

借りてきた猫...、言われてみればそんな感じだった。

おとなしすぎる。

何がどうしてこうなっちゃったか確かな理由は謎だが、ヤツらはあかねを、タダモノじゃねえんだと認めたってことだろう。

あたりめえだ。

あかねって女を見損なってんじゃねーぜ？

今、1年たちがみんな帰った音楽室で、俺たち3年とあかねとヒカル、正規のブックキャスルメンバーはささやかなおつかれさん会をやっている。

「でも、今年の1年生は手がかかりましたねえ？アクが強いついていうかなんていうか」

と、ヒカルは真顔で言うけれど――、

「俺たちだって1年前は大変な1年生が来ちゃったと思ったぜ…。ヒカルはあのマラカスダンスだったし、あかねはいつまでも俺たちのこと怖がってたし…」

特にヒカル番を任された俺の苦労といたら！

「そうだったねえ～。ヒカルちゃんのマラカス特訓は大変だったなあ～。マラカス振りながらあちこちに行っちゃうんだもんさー」

柏木も1年前を思い出し、懐かしそうに言った。

「マ、マラカスはそうだったかもしれないけれど、あたしたちは最初から先輩にちゃんと従ってましたよ？仲良くやってたじゃないですかー？」

「ヒカルとヒビクはそうじゃなかったと思うぜ？よく喧嘩してたしなあ？」

あ、と言ってヒカルは黙っちゃった。

ヒビクの方は、購買の珈琲牛乳に口をつけながらどこか遠くの方をぼんやり見ている。

きっと、1年前のことでも脳裏に浮かべて懐かしがっているのだろう。

「でもまあ、とにかくよかったよ。これで俺たちも安心して引退できるってもんだぜ」

これで俺の役目は完全に終わり――。

「がんばれよ、あかね！」

「田村せんばあい…」

あかねは目をうるうるさせて俺を見た。

「お～、よしよし。泣くな泣くな」

俺まで泣きたくなっちゃうから――。

「で、ヒカルの方はどうなんだ？人形劇の台本は出来たのか？」

珈琲牛乳を飲み干したヒビクが言った。

ヒカルの演劇部は、今、人形劇を制作しているらしい。

綾瀬とふたりきりの演劇部で、どう活動したらいいかを考えたヒカルが思いついた策らしいが、台本から人形から何もかも試行錯誤しながら作っていると聞いている。

「出来たことは出来たんですけどちょっと...」

「すごいのが出来たんですよ！私、感動しちゃいました！」

あかねが、まだ涙が乾いてない目をキラキラ輝かせてる。

あかねのそんな顔を見つめて、綺麗だなあ...なんて素で思っていると、

「ちょっと...、どうした？」

ヒビクが話を人形劇に戻した。

「`手、が足りなくなっちゃって...。先輩たち、ついでと言ってはなんですが...」

「`手、を貸せ、てか？」

はい、とヒカルはにっこり笑った。

軽音楽部の次は演劇部。

俺たちはまだしばらく引退しなくてよさそうだ。

人形劇の`手、ってのは、ちょっと...と思わねえわけでもないけど、ヒビクはもちろんヒカルのためなら手でも足でも貸す気だろうし、それに俺たちが必要だっていうならいくらでも協力させていただきます。

◇

その帰り。

「田村先輩、ちょっといいですか...？」

ヒビクたちがみんな音楽室を出て、最後になった俺も扉をまたごうとした時、あかねが俺の腕を取った。

「うえ...？」

サラリと柔らかいあかねの手の感触が腕から全身に伝わったもんだから思わず変な声が出ちまった。

「今、もうちょっと時間ありますか？」

あかねは俺の腕から手を放さないまま訊いてくる。

さっきまでうるうるキラキラしてたそんな目のままで言われたら、たとえ家が火事になってようが洪水で流されてようが、

「いいぜ？なんだ？」

って答えるに決まってる田村くんであります。

ヒビクたちはもう先に行っちゃったようだ。廊下を覗くと、階段を下りようとしている柏木の後姿が見えた。

「柏木！」

柏木は、ん？とこっちを振り向いた。

「先に帰ってていいぜ？ヤツらにもそう言っといてくれるか？」

柏木は俺とあかねをチラチラと見比べて、

「りょうか〜い」

と、妙に間延びした返事をしたあと、ふふふ...と意味深に笑いやがった。

――ブラックバージョンだ...

ま、いいさ。

今は柏木ひとり白かろうが黒かろうがどーでもいい。

音楽室に戻ると、あかねは自分の鞆の中から小さな袋を取り出して、

「これを田村先輩に...」

と、俺に差し出した。

「俺に？」

袋には『山中湖 ハッピープラザ』っていう店のロゴが印刷されていた。

「先週、校外学習で山中湖に行っただです。それはお土産なんです...」

――マ、マジですか...っ？

あかねから物を貰ったのはチョコデニッシュ以来だ。

いきなり緊張しちまって、袋から中身を取り出す手が震えちまった。

そんな俺の手の中でふるふると揺れながら出てきたのはカエルのマスケットだった。

カエルのくせに赤色のロン毛をバサバサ肩まで伸ばし、学ラン着てギターを持った、妙にツッパった野郎だ。

「その子、田村先輩っぽいでしょ？」

「...はい？」

このカエルがですか...？

「お土産屋さんでそれを見たとき、あ、田村先輩だって思って思わず買っちゃったんです...」

「...そ、そうかなあ？」

び、微妙だ....。

なんてリアクションを返せばいいのだろう……。

「だって、赤い髪だし、ギター持ってるし」

でも、カエルだしー。

「私、その子にツッパリカエルの優作って名前を勝手につけちゃった」

「ツッパリカエルの…ゆうさく……？」

優作ー。

あかねに初めて名前を呼んでもらったぜ。

しかも呼び捨てで。

ほにゃららら〜〜ん。

久々に足元から萎えちまった。

たとえ、カエルにつけられた名前だとしても、あかねが俺の名を、田村先輩じゃなく優作って方の名前で呼んでくれただけで、全身かいかい病発症しちまいそうだけ。

「先輩にだけしかお土産買ってこなかったの。だから、みんなの前では渡せなくて…」

「お、俺だけに?!」

「はい」

ああ……っ!!

この、じんわりとした感動をなんて表現したらいいのだろう。

「赤髪ツッパリカエルの優作。おめーは今日から俺の兄弟だぜっ」

バレンタインの時は義理チョコもなく、あかねにとっては俺も松山ブラザーズたちとおんなじ扱いなのかと、この世の終わりじゃねーかと思うぐらいにへこんでへこんでへこみまくったけど、こーやって俺だけに土産を買ってくれて、そいつに優作って名前までつけてくれて、田村先輩、特別扱いバリバリじゃねーかっ。

「サンキュー、あかね!大事にするぜ」

「よかった。気に入ってもらえて…」

気に入るものにも、コイツは世界一キュートなカエルだけ。

「珈琲牛乳のお礼です…」

「珈琲牛乳？」

あかねはこくと頷いた。

「いつか、先輩に中庭で珈琲牛乳をごちそうになりましたよね」

「ああ...、あれか」

「私、あの時に先輩に励ましてもらって凄く元気が出たんです。本当にこれからどうしようって思っていたから...」

「そ、そうだったのか...」

夕暮れ染まる中庭で、珈琲牛乳をあかねに渡したあのセンチメンタルなシチュエーションがそんなに...

やべやべ。

思い出すとうるうる来ちまう。

「私、あの時から少しだけ変わったような気がするんです。またひとつ、強くなれた気がして」

「またひとつ、か...」

「はい。あの珈琲牛乳、すごく美味しかった」

あかねはふんわりと笑った。

.....ったく、あかねだな。

俺の気も知らねえで、そんな可愛いこといいやがって。

どーにもならねえ想いがますます募っちまうじゃねーの...。

俺は、ツッパリカエルの優作をその場で自分のギターのネックにぶら下げた。

あかねの気持ち。俺の想い。

兄弟め、そこで一生見守ってろー。

「でね、先輩」

「ん？」

ツッパリカエルの優作を指でゆらゆら弾きながらあかねを見た。

「私...、歌を作ったんです」

「...歌？」

「ヒカルちゃんの人形劇の歌...。田村先輩に一番に聴いてもらいたくて...。いいですか？」

「そりゃ、もちろん...」

あかねはてくてくとピアノの前に行き、そのトップを開けた。

出来上がった台本をヒカルに見せてもらった時に、詞と曲が同時に浮かんじまったらしい。
これまで作曲なんか一度もしたことなかったし、人前で歌を唄ったこともねえとあかねは言う

それを、俺に初めて聴かせてくれるっていうんだ。

「風間先輩のようにはいかないけれど...」

あかねはスーッと深呼吸をしてから、三拍子の前奏を奏で始めた。
そして――。

♪.....

またひとつ夢がうまれた 潮風のシャワーをあびて
光り輝く幸せを よせてはかえす波に祈ろう
キラキラキララさあ手をつないで
キラキラキララ一緒に踊ろう ジュンな心で

詞のひとつひとつ、曲の一音一音が、あかねの柔らかかであどけない声と共に俺の胸の中に染みこんで来た。

初めて聴く曲でも一度聴いたら忘れない簡単で単純な童謡。
けど、残る余韻は優しくてどこかせつなくて――。

またひとつ愛が生まれた 緑のシャワーをあびて
光り輝く幸せを 柔らかな木漏れ日に祈ろう
キラキラキララさあ手をつないで
キラキラキララ一緒に歌おう ピュアな心で

俺は、ツッパリカエルの優作がぶら下がった自分のギターを持ち、アドリブでリードを取った

あかねは最初驚いた目で俺を見て、その後は嬉しそうに笑った。

またひとつ星が生まれた いのちのシャワーをあびて
光り輝く幸せを 果てしない宇宙に祈ろう
キラキラキララさあ手をつないで
キラキラキララみんなで守ろう キララのハートを.....♪

「田村先輩、すごいです！即興なのにこんなにピッタリ合わせてくれて！」

それはな、あかね。

おめーの作った曲をおめーが歌っていたからだぜ？

俺とあかねは音楽的なフィーリングはピッタリなんだ。

俺はいつだっておめーの音には、おめーには合わせられるー。

ってなことは、もちろん口には出さなかったけど。

「キララのハート...ってのはどういう意味なんだ？」

俺は台本を見ていないから、ヒカルの人形劇がどんな内容なのかは分からない。

けど、

またひとつ、夢が生まれた。

またひとつ、愛が生まれた。

またひとつ、星が生まれたー。

こんな詞とあかねの歌でイメージしたのは、素直で優しくて純粋なー、

「まるで、あかねみてーだと思ったんだけど？」

「私ですか?!」

あかねは、心底驚いたように飛び上がった。

「キララのハートっていうのは、みんなのいのち、なんだそうです」

「いのち？」

「誰にでもある勇気と愛、友情と正義の心...って、人形劇の中では言っていました」

勇気と愛、友情と正義...

誰にでもあるってことは俺にもあるんだな、キララのハート...

「私は台本を読ませてもらった時、田村先輩だ...って思ったんです」

あかねはまた、ふんわりと笑った。

◇

あかねの苦しい胸のうちを初めて音楽室で聞いた頃は、ただあかねちゃん可愛って思ってた

。

しり通りの発声特訓をふたりでやった頃から、好きって気持ちに芽生えて、

ロストラブした時から、想いは本気になった。

それからは、ただ見守るだけでいいと。

あかねが笑っていればそれでいいと。

そう思って今日まで来た――。

あかねが初めて作った曲を聴かせてくれたのは、初めて悩みを聞いたと同じ音楽室。

場所は同じでも、あかねも俺も、1年前とはずいぶん変わってたな。

状況も、もちろんそれぞれの中身も。

けど、やっぱり変わらないのはあかねへの想い。

どんだけ思い続けたって将来性なんかちっともないけど、このポジションから俺は動けない。

――これが、俺のキララのハートだ。

夜。

自分の部屋で、ぼーっとそんなことを考えた。

頭の中で、キラキラキララ...ってあかねの歌声がエンドレスで流れている。

ツッパリカエルの優作がギターネックで揺れながら、そんなセンチメンタル田村くんをずっと見てやがる。

「なんだよ、カエルの優作。文句でもあんのか？」

『いや。べつに？』

バカみてーにひとり二役やって、壁に立てかけてあるギターを手に取った時、ふと流れるようにして言葉が浮かんできた。

またひとつ 君への想いが生まれ

またひとつ 君を大切に思った

見つめているよ いつまでも

見守っていたい どこまでも

陽だまりの その笑顔を

いつか届くときまで

君の心がどこにあっても

僕の想いは変わらない

悠久（とわ）に君だけ

永遠に――。

笑っていていつまでも
抱きしめていたい どこまでも
君の幸せが 僕の悦び
たとへ 届かなくても

僕は変わらない このままずっと
変わらないで 君のまま
そのままの君を
アイシテル。
ずっとずっと
アイシテルー。

あれれ、詞が出来ちゃった。
今まで詞なんか書いたことねえってのに。
せっかくだからヒビクに曲でもつけてもらうか？
とりあえず、忘れちまわないように適当なノートを手にとって書きとめた。

.....

これが俺のキモチかよ...。
文字にするとやたらめったら赤面モノだぜ。
っていうか、そのまま直球ストレートで芸がねえ。
ヒビクに見せたら、ヤツは腹抱えて笑いそうだぜ。

やっぱ、俺に詞の才能はねえな。
ってことで、ヒビクに見せるのはやめておくー。

『なあなあ、田村優作よ？その詞（ことば）にタイトルをつけるとしたらなんだ？』
「タイトルねえ...。『きみにとどくまで』とかカッコいくねえか？」
『それはどうだろな？届かねえってのは分かりきってんだから』
「う...っ」

マジ、へこんだ。
ていうか、何やってんだ、俺さっきから。
カエルっぽい声出して二役やって、ネクラもいいとこだぜ。

けどー。

「こいつのタイトルは『きみにとどかなくても』...だな」

ちっと女々しいタイトルだけど、こっちの方が非モテの田村くんらしいぜ。
な、ツッパリカエルよお。

『おう。それぐらいがおまえらしいぜ!』

ネックのツッパリカエルはそこでゆらゆら揺れて、なんだか本当に笑ってるように見えた。
あかねがくれたもうひとりの`優作、。

仲良くしようぜ、兄弟。

これからもずっと、そこにいろよ。

あかねの代わりに...さー。

16 期末試験後の徒然

終業式の今日、期末の結果が返ってきた。

内申に大きく関わってくる大事な大事な定期試験だったわけだが――。

「はあ………」

ここまで自分がバカだったのかと思うと、心底情けなくなっちゃってため息のオンパレードだ。

現国、数学、英語…その他もろもろ、赤点ギリギリの40点代。四捨五入したら全て40点だ。

んでもって、古文はしっかり赤点で追試決定。

こないだの進路相談室で千田先生にも言われちゃったし、今回のテストは俺なりに頑張ったつもりだった。

現国も数学も英語も、それこそ夜を徹して勉強もした。かーちゃんや弟に、せっかく明けた梅雨がまた戻ってきちゃうから珍しいことやってんじゃねえっ、て言われるぐらい勉強したのだ。

が、試験当日。

その真っ最中に、どーゆーワケか腹痛を起こしちゃった田村くんでありました。

前の晩に食った納豆が腐ってたのか、朝食った納豆が腐ってたのか知らねえが、とにかくいつかの松山弟みたく、1時間目の現国でいきなりピーときやがって、痛みとケツを押さえるのが精一杯…覚えた漢字は全部飛ぶは、文章頭に入って来ないわで。

とりあえず休み時間に出して。

そして2時間目の英語でまたピーっが再発しやがって…。

覚えた単語全部飛ぶは、英文頭に入って来ないわ…。

んで、また休み時間に出して。

もう大丈夫だろうと思ってた3時間目の数学でまたピー……。

覚えた公式全部飛ぶは、計算なんか出来る状態じゃなく――。

てなわけでの結果だ。

これじゃ、まったく欲を出さなくても推薦なんかしてもらえねえだろう。

終わったな、田村優作――。

しかし、なんだってあの日に限って3回もピーに襲われちゃったのか。
まったく運が悪い男だぜ、田村優作ってヤツは。

「はあ……」

「はい、これで9回目」

いやいや。9回も出してねーし。

「3回だって」

「9回だよ？」

「いくらなんでもそこまでは出してねーから」

「だって、吐いてたよ？」

「ああ?! 出したけど吐いちゃいねーぜ?!」

「なに言ってんの、田村くん……」

つめたーい声で呟かれ、振り返るとそこにいたのは心底呆れた顔の小早川環ちゃん。

「ため息9回吐いてたよ? って言ったんだけど」

「なんだ…。ため息かよ」

何だと思ったのよ、と小早川は目を細めた。

ていうか、人のため息数えてたのかよ、こいつは。

「どうしたの? 期末の結果でも悪かった？」

「ええ。それ以上の答えはねえってぐらいにドンピシャでございます…」

どれどれ、と小早川は俺の手から定期試験の結果表を奪い取った。

そして。

「……」

目を丸くして言葉も出てこない小早川さんであります。

「何とか言えよ…」

「言いようがないじゃない。今回だけが悪いっていうならまだ救われるけど、中間の結果もこれじゃ大学行けないよ？」

ハッキリ言ってるじゃねーか。

何が言いようがねえだ、まったく…。

「大学進学するんでしょ？」

「まあ、一応…」

とは答えてみたものの、本気で進学したいと思ってるわけじゃない。

将来のこと、何も見えてねえからとりあえず大学に行っとくか、ぐらいのキモチだ。
けど、この成績じゃその望みも絶たれたようなもの。

どーすんだよ、田村優作――。

「ところで、風間くんは進路どうするのか聞いたりしてる？」

いきなり、小早川が言った。

「ヒビク？」

ヒビクがどうするつもりなのか、そういえば真面目に聞いちゃいない。

けど、ヤツもおそらく俺と大差ねえだろう。進路相談室にもこの間になって初めて行ったぐら
いだし、とりあえず大学には進学するか、ぐらいに思ってるんじゃないか。

けど、

「どーして小早川がそんなこと俺に訊くわけ？」

「あ...、それは...、」

小早川は言葉を濁す。

前にもこんなことがあった。

ヒビクとヒカルが付き合ってるのかって訊いてきた時だ。

「ヒビクのことはヒビク本人に訊けよ？その方が確かだぜ？」

「訊いたんたけど...」

――訊いたんかいっ！

「さあな、とか言って教えてくれなかったの。だから田村くんに訊いてるんじゃない」

あっそう――。

なんで小早川がそこまでしてヒビクの進路を気にするのは知らねえけど、

「俺もヒビクの進路についちゃ、ちゃんと聞いてねえよ」

一応正直に答えてやった。

小早川は、そっか...、と呟いた。

なんでか、妙にむずむず悔しかったりする。理不尽なイラつきっていうのは十分分かっちゃい
るんだけど。

「ヒビクも罪な男だぜ...」

小早川の他にも、きっと隠れヒビクファンがゴロゴロいるんだろう。

でもってそいつらはヒビクが決める進路について、日々やきもきしてるんだろう。

できれば風間くんとおんなじ大学に行きたいわ、なんて思っちゃったりしてさ。

こっちは結果表見て、これじゃ大学行けないよ？なんてあっさり言い切られちまってるって
のに。

「小早川がお前の進路を気にしてるから早く決めてやれって、後でヤツに言っといてやるよ」

「はあ?!」

小早川は素っ頓狂な声をあげた。

「もう! 変な勘違いしないでよね! あたし個人は風間くんの進路なんてどーでもいいの!」

「はあ?!」

今度は俺が素っ頓狂な声をあげた。

「田村くんが訊いてないならそれでいいよ。ただちょっと気になっただけ。とばっちり受けてるから!」

――とばっちり?

「とにかく、風間くんが早く進路を決めてくれれば、ちょっとは静かになるのよ!」

「何が?」

「いいでしょ、何でも!」

「わけ分かりません」

「わかんなくていいの! もう、しつこいなあ!」

何で俺がしつこいなんて言われて怒られなきゃならねーの。

ポニーテールをぶらぶら揺らしながら怒る環ちゃんの顔は、まるでヒステリーを起こす寸前のスカンクみてーだ。

けどまあ、ここまてきたらヒビクだけじゃなく、他のヤツらが進路をどう考えているのか気になるところだ。

柏木は別として、あとの連中はやっぱり俺と大差ねーだろうし、期末の結果にしてもブラザーズあたりは赤点ギリギリ...どころじゃないのは毎度のことだ。

「お前はどうかの? 進路決めたのか?」

参考までに訊いてみた。

「あたしは短大に行くつもりで予備校も行ってたんだけど、やっぱり止めたの」

小早川はアッサリと言って笑った。

「止めたってのは、予備校? 短大?」

「どっちも。あたし、専門学校に行くことにした」

専門学校――。

頭に何か降ってきた気がした。

「なんで短大行くの止めたわけ?」

「だって、あたしが就きたい職業に必要な知識とか技術は短大じゃ学べないし、どっちみち短大終わってから専門学校に行かなきゃならないなら時間もお金も無駄でしょ?」

なるほど――。

って、妙に納得しちまったが、小早川が就きたい職業を決めてるってことにちょっと驚いた。将来のビジョン、ちゃんと見てるってことにも――。

はいこれ返す、小早川が返して寄越した結果表をもう一度見直して、再びへこむ田村くんであります。

結果の良し悪しだけじゃなく、その他いろんなことにおいて。

「とにかく、その点数じゃ本当にマズイよ？なんとかした方がいいからね」

何とかした方がいいと言われても、ここに、こーゆー結果が出ちまってるわけだから、これに関しちゃ今さらどーすることも出来ねえ。

しかも、この点数に加えて唯子ちゃん対策の為にわざと遅刻した回数もかさんでるしで、内申はボロ雑巾のようになるだろう。

こりゃ、本当に推薦入学って線は消えたな。

◇

「一般で受験すればいいじゃない？じゃなかったら、センター試験受けるとか」

学校帰りの牛乳屋で、こんな台詞をサラリと言ってくれたのは柏木クンだ。

「っていうか、田村のくせに推薦入学しようってのが最初からお門違いってヤツじゃねえ？」

はいはい。

どうせ、田村のくせに、な田村くんですよ。

「偉そうなこと言いやがって...。おめーはどうなんだよ？万年補習組の赤点男のくせに」

松山太郎のくせに俺に暴言吐くなど百年早いぜ！

.....と、言いかけたのだが――。

「はっ?!」

松山兄がサッと俺に寄越した定期試験の結果表を見て、真夏だったのに真冬みてーに凍っちまった。

「どーゆー不正を働いたら、こーゆー結果が出るわけ...？」

「失礼なっ！それは、俺の実力だったの！」

どれどれ、とヒビクも横から覗き込んできて、

「ああ?!」

と、固まっちゃった。

「これは何かの間違いだろう？ありえねえから...」

ポカーンとした顔のヒビクは、何度も目をこすっては紙面を見直している。

松山太郎の結果。

現国76点、数学85点、英語69点、その他もろもろ全て60点以上也一一。

「おめーらなあ！俺の努力の結晶に向かってなんて暴言吐きやがる！これは正真正銘の実力！俺、3年になってから、かなり、かなーり頑張ってたの知らねえの？！」

「知らねえし！！」

「知らねえよ！！」

ヒビクと声が揃っちゃった。

「こんな太郎はノストラダムスだって予言できねえぜ！」

「っていうか、1999年7月、ノストラダムスの大予言が当っちゃうぜ！」

「マジ？！世界滅亡？！」

「地球崩壊！！」

「おめーのせいだ！！」

「太郎のせいだ！！」

ヒビクとふたりで兄をおもいきり指差してやった。

「くあっ！なんなの、こいつら！弟よ、何とか言ってやってくれ！！」

兄は弟に助けを求めたが、その弟もアイスクャンディーを口に持って行く途中のまま、目だけ兄の結果表を凝視して凍結しちまってる。溶けたアイスが弟の手にダラダラ垂れてボタボタ地面に滴り落ちていた。

「そういえば太郎くん、頑張ってたよね？勉強だけじゃなく、生活面においてもさ」

「生活面？」

「修学旅行の実行委員長やったり、遅刻しないように頑張っていたり、補習も真面目に出ていたし、もしかして内申対策だったわけ？」

そういえば...、俺たちの中で一番最初に進路相談室に行ったのは兄だった。

あれは、まだ5月になったばかりの頃一一。

俺が唯子ちゃん対策に必死になってた時だ。

「柏木のその言い方にはちょっとトゲを感じるけど、まあ、間違っちゃいねえよ。余計なことで内申下げねえように、できればちょっとでも上がるように考えてはいたぜ」

マジかよ！松山太郎のくせに！

「セコイ…。セコすぎる…」

やっと解凍した弟が、先に解凍しきっちゃってるアイスの棒をべろべろやりながら呟いた。

「こそこそ一人で抜け駆けしてたってわけだ。まあ、おめーらしいけどよ」

「それは言いがかりってヤツだぜ？そんなこと言ったら柏木なんかどーなるの？いつもひとりでコソコソ点取りしてるじゃねえの」

べつにコソコソやってないけど…、と柏木はムツとする。

「俺は、自分の夢の為に頑張ってるだけの話！」

夢？！

兄以外の全員の声が揃った。

「そ。ゆーめ！くすっ」

まるで、少女趣味な笑い方をした兄が、やたらと気持ち悪かった。

◇

帰り道――。

「しかし、太郎が夢ねえ…」

ヒビクが呟いた。

松山兄は、足取り軽やかに俺たちの前をサクサク歩いていく。

信じられねえ話だが、定期試験の結果はヤツが本当に頑張ってる出したものだったのだろう。

あの松山太郎をそこまでさせる夢とは何なのか、そういや聞きそびれちゃってたけど。

「ヒビクは進路どうすんの？小早川がずいぶん気にしてたぜ？」

「ああ。訊かれた」

「お前が教えてくれないって、俺がお前の進路訊かれたんですけどー」

ヒビクは、ふーん、と気のなさそうな相槌をうって、俺の一步前に歩みを進めた。

「大学…行くんだろ？」

大学ねえ…、と、ヒビクはこれまた気のなさそうな言い方をする。

「まあ、田村と違って、俺は推薦入学は狙っちゃいないぜ？行くとしたら試験は受ける」

「べつに、俺も推薦を狙ってたってわけじゃねえよ…。ただ、」

流されてただけだ。

進路進路と周りがざわつき始めたから、何となく進路相談室に行って、何となく千田先生と話をし、なんとなく欲を出さない程度の大学に推薦してもらおうと、成り行き上そういうことになったというか。

けど――。

「ヒビクの夢ってなんだ？」

ヒビクはピタリと立ち止まり、おもむろに俺を振り返って、

「ぶはっ！！」

と吹き出しやがった。

「田村まで夢なんて言葉言うのかよ？」

「悪いかよ！」

「いや、全然？太郎が言うより似合ってるぜ？」

似合う似合わないの問題じゃねえだろう。

小早川は就きたい職業があるって言ってたし、太郎は夢のために地球が崩壊するぐらいの努力をしてるみてーだし、今の俺たちにとって、それは真面目に捉えなければならねえ言葉なんじゃないだろーか。

「夢ねえ……」

ヒビクは遠くの空に目をやった。

「俺の夢は……、あれかなあ？」

ヒビクが指差したのは、真上よりやや下がりはじめた太陽だった。

「けどまあ、あれは全然遠いから、とりあえず近いところで考えてることはある」

「教えてくれないわけ？」

「まだ、な」

ニカッと笑ってヒビクは先を歩いてるブラザーズと柏木に追いついて行った。

ヒビクの秘密主義は今にはじまったことじゃねえから、ヤツが考えてることを言わねえのは別にいい。

けど、ヤツはヤツで考えてる夢があるわけだ。

――俺は？

「はあ？！おめーの夢ってそうなの？！」

前方で弟が叫んだ。

「立派な夢だろーが！」

「涼子さんとおんなじ大学に入っておんなじテニスサークルに入って毎日イチャイチャすることの、どこが立派な夢なんだよ？！」

「はっ！非モテのおめーには、夢のイチャイチャライフがどんだけのパラダイスかって想像もできねえだろーな！」

「夢と非モテは関係ねえだろ！たまにまともに勉強しちまったもんだから、頭腐っちまったんじ

やね一の？」

「おめーは最初から腐ってるだろーが！体力しか取り得のない平均点39点の弟が、定期試験合計評価69点のお兄様にたてつくなんぞ、100万年早いぜ！」

「な、何がお兄様だ、ポケッ！」

ヒビクと柏木はブラザーズの真横を歩いてるくせに、ほっときゃいつまでもやってる兄弟バトルを止めようともせずに完全無視して、ふたりでにこやかに話している。

たとえ涼子さんとのイチャイチャなパラダイスが夢だったとしても、妄想...もとい、想像するその未来に向かって今を頑張ってる兄は、やっぱエライ.....と、思う...というか、思っただけでいい。

夢一一。

言葉にするとやたらすぐたいそのことを、初めてまともに考えた田村くんでありました。

17 ジュンとピュア

高校最後の夏休み――。

今日はヒカルの家で人形劇の公演がある。

なんでヒカルん家でかっていうと、ヒカルには幼稚園児の弟がいて、そのオトモダチとか親とかが今日のお客さんだからだそう。

こないだまでの話じゃ、俺やヒビクの`手、も人形操作に貸す予定で、ヒビクなんかそれを結構楽しみにしてたんじゃないかと思うんだが、夏休み前になって、考えを改めたヒカルが解約してきたらしい。

――先輩は、見ていてください。

ヒカルはヒビクにそう言ったそう。

――...ま、俺たちは見守る立場で落ち着いとくか。

って言ってたヒビクの顔は、どこか寂しげだった。

けどまあ、俺もヒビクも音楽で演劇部とコラボレーションはやっても、人形劇って柄じゃねえのは確かだ。

どうしても`手、が足りねえっていうなら、それはもちろんいくらでも協力したが、とりあえずメンバーは揃ったらしいから、そこはおとなしく身を引いた。

で、今日はヒビクとふたり、観劇させてもらいにやって来た。

いつもの駅で降りて学校の前は素通りし、そのまんま隅田川の川べりまで歩いた。

ヒカルん家は、この遊歩道（墨田公園）をひたすら真っ直ぐ歩いていけばいいわけだが、距離はかなりある。

「そういえば...、もう一個先の駅で降りたほうがヒカルん家には近かったんだ...」

と、ヒビクが思い出したときは、炎天下を歩き続けていた俺たちは汗だくになっていた。

夏の太陽は真上にある。

川べりに風は吹いてるけど、それはやたらと生ぬるい。

「ちょっと休憩...」

時間にはまだまだ余裕がある。

俺たちみてえなデカイ男が、あんまり早く行きすぎるのも邪魔だろう。

歩き疲れたってのもあるし、暑いってのもあるし、時間潰しも兼ねて俺たちは木陰のベンチに

座り込んだ。

隅田川から吹いてくる風は生ぬるいけど、直射日光はあたらねえからいくぶん涼しい。
途中で買った缶コーラを一口飲んで、ホッと一息ついたとき、ヒビクが唐突に言った。

「俺、来週からちょっと野暮用で出かけてくるからさ。たぶん新学期まで帰って来ないから」

「野暮用？なにそれ？」

「野暮な用事」

「……………」

俺が思いつく夏休みの野暮な用事と言ったら、盆に田舎に里帰りするか一ちゃんに、ば一ちゃんとじーちゃんが顔を見たがってるからあんたも行くのよ！って言われて無理やりついて行かされることぐらいしか浮かばねえ。

今年はこれでも一応受験生だし、これから夏期講習とか行く予定にもなってるから、ば一ちゃん家にはついて行かねえけど。

でも、それはヒビクも同じだろ。

「新学期までってのは、ずいぶん長いな？」

今日はまだ8月2日だ。新学期まではあと1ヶ月もある。

ずいぶん悠長な里帰りだな？

「もしかしたら…、新学期も間に合わねえかも」

「はあ？どんな野暮用なんだよ？」

「だから、野暮な用事」

ヒビクはニヤリ、と笑ってコーラを一気に飲み干した。

出ました。ヒビクの秘密主義。

ったく、こいつはいったい頭の中で何を考えてんだか——。

「講習会とか模擬試験とか行かねえの？」

「まあ…な」

ヒビクは歯切れ悪く答えた。

柏木だけじゃなく、あのブラザーズでさえ（次郎も！）、この夏休みはそーゆーことで忙しいって言うてるのに、この男は自分の進路をどーするつもりでいるんだろう？太陽は全然遠いから近いところで考えてる夢がある、みたいなこと言ってたけど。

ま、言いたくねえ野暮な用事なんだろうから、そのまんま納得してやったけど、コイツのこーゆーところには、時々イラッと来ることは確かだ。

そろそろ時間もいってことで、先に立ち上がったのはヒビクだ。

ヒカルん家は、もう少し行ったところを曲がってすぐで、隣は群竹ん家らしい。
空き缶をゴミ箱に投げ入れたヒビクは、もうテクテクと歩き出していた。

◇

ヒカルん家の玄関は開け放たれていた。中を覗くと、ちっちゃこい靴がたくさん並んでる。思わずほのぼのしちまった。

「こんちわーっ！」

いくら開け放たれているとはいえ、後輩の女の子の家に勝手に上がりこんでいくのもどうかと思ひ、大声で声をかけると、パタパタと迎えに出てきてくれたのはあかねだった。

「田村先輩！風間先輩！暑かったですよね？どうぞ、涼しいところに入ってください！」

「あかねえ……っ」

キャミソールから伸びてる白い細い腕が涼しげで清楚で、それはまるで乾いた喉に潤いをもたらす清水ようだ。このまんまごくと飲み込んじまいたいぐらいの。

「準備はもう出来たのか？」

っていう、ヒビクの冷静な言葉がなかったら、俺はバカみたいにならなかつたであかねを見つめていただろう。

――やべやべ。

隣は群竹ん家だ。

……って、別にかんげーねえけど。

会場はチビっ子たちがいっぱいであるで幼稚園のようになっていた。

「はやく人形劇やってよー」

「まあだあ〜？」

――はー。

正真正銘、お子様ランチたちだ。

こーゆー空気の中に入るのはもちろん初めてで、チビっ子たちの甲高い声で耳が痛くなるんだけど、悪くねえなって思っちゃう。

お子様じゃねえお子様ランチどもより、本物のお子様たちの方がもちろん可愛いし。

ってなことを、ぼんやりと考えてるうちに準備が整ったヒカルが、設置した舞台の前に出てきた。

黒子の格好をして黒子の帽子みて一のを被ったヒカルは、客席の後ろにいる俺とヒビクに気づいて安心したように笑った。

壁際に立つヒビクを振り返ると、ヤツもヒカルを真っ直ぐ見つめてガッツポーズを送ってる。「なんだかドキドキする...」

隣のあかねが、両手を祈るように胸の前で組んでいた。

「それじゃ、人形劇をはじめようー！みんな、お行儀よく座って見てね！」

チビっ子たちに向かって言うヒカルは、まるで幼稚園の先生のように、

「はあーい」

と、声を揃えて応えるチビっ子たちは、そのまんまヒカル先生になついている園児のよう。

いやあ...、微笑ましい光景じゃねーの。

人形劇はヒカルが台本を書いて、綾瀬がせっせと人形を作り、そしてあかねが主題歌を作り歌った『キララ』。

ジュンとピュアってゆう仲良しの少年と少女が主人公で、自分たちの国の争いを止めさせるために必要だっていうキララのハートを探しに、妖精キララの森の奥に入っていくのが大筋だ。

途中ではいじわるな連中が登場したり、邪魔するヤツがいたり、困ってる人に会ったり、そして最後は化け物と対決！ってな冒険物の王道のような展開があるわけだが、チビっ子たちは食い入るように舞台に見入っていた。

二台の脚立の上に渡した物干し竿に、バサッとカーテンかぶせた舞台。

その上で必死になって頑張ってるジュンとピュアと、それを見ているチビっ子たちは間違いなく一緒にいろんな冒険をしてる。ジュンとピュアが楽しいときは一緒に笑い、悲しいときは一緒に泣いて、怖い時は一緒に怖がって。

で、気づけば俺もこいつらと一緒にになってキララのハートを探してた。

けど、目に見えるそれはどこにもなくて嘆くジュンとピュア、そしてチビっ子たち、んでもって俺一一。

『キララのハートはどんな人のいのちにもあるものです。でも、人々はそれを忘れてしまっているのです』

妖精のキララが舞台上でジュンピュアに真実を語っている。

あかねが、生まれて初めて作った『キララ』を俺に一番に聴かせてくれたあの時から、キララのハートってなんだろうと思ってた。

あの時、あかねは誰にでもある勇気と愛、友情と正義の心、即ちみんなの命だって言ってた

けど、命って意味がよく分からなかった。

けど、

――なるほどね…。

今、こんな空気に触れてて分かったような気がする。

命っていうのは、言葉そのまんまの意味もあるけど、泣いたり笑ったり怒ったり怖がったりの感情で、今、この劇を見てるチビっ子たちの心の動きそのまんまがキララのハートってことだ。

正義とか愛とかって名前がくっついてる純粋な感情のこと。

ジュン（純）とピュア（純粋）、それがキララのハート。

それをあの時あかねは、

――台本を読ませてもらった時、田村先輩だ…って思ったんです。

そう言って、ふわっと笑いやがった。

今頃になって、あの時のあかねの言葉に胸が締め付けられちまう田村くんであります――。

やがて、あかねが歌う主題歌が流れ始め、舞台の上には人形たちが総登場。きーらきーらキララっていう拍子に合わせてジュンとかピュアとか化け物たちまでが踊り、チビっ子たちは一緒になってあかねの『キララ』を歌っている。初めて聴く歌だったのに、まるでずっと前から歌い続けて来たみたい――。

人形劇。

チビっ子。

キラキラな歌――。

どう考えたって、男子高校生には無縁な世界が当たり前のようにここにあって、隣には小さな肩を揺らしながら手拍子をしているあかねがいる――。

――めっちゃ、くすぐってえ…。

顔が熱くてたまんねえ。

けど、同じぐらいに胸も熱くて――。

ヒビクはこの状況の中に、いったいどんな顔でいるんだろうと思い、ヤツを振り返った。

ヤツは真っ直ぐ前を見つめていた。

ニコリともしてなければ戸惑った様子もない、普段と同じ涼しげな顔で舞台を見つめてた。

けど、視点はどこか遠くにあるようで、俺にはその場所がたどれない。

――まったく、ひとりで何を考えてやがる…。

「うう…っ」

微かな嗚咽が聴こえて隣を見ると、あかねが泣いている。

「ヒカルちゃん…っ」

ハンカチで涙をぬぐうってことも忘れて、零れてくるキラキラの涙を手で払ってる、その雫が空に舞う。

綺麗だ。

いつまでも見ていたいって思うけど、それじゃ俺がヤバイから…、

「ほれ、これ使え」

あかねに自分のハンカチを差し出した。

「ありがとうございます…」

あかねは素直にそれを受け取り、俺の汗が染み込んだハンカチでキラキラな涙をふいた。

――うう…。田村くん感激っす…。

そのハンカチは一生洗うまい。

たとえ群竹が必殺技で攻めてきたって手放すまい。

ツッパリカエルの優作と一緒に、俺の宝物にするぜ！なんてベタなことを思っているうちに人形劇は終了。

黒子のヒカルたちが舞台の前に出て、客席に向かって礼をしていた。

◇

ヒカルの仲間たちがひとりふたりと帰っていき、俺とヒビクもそろそろおいとまを…、って思うんだが――。

「追い詰めたぞ、悪者たちめ！覚悟しろっ！！」

なぜかヒカルの弟に捕まり、放していただけない俺とヒビク。

今、ヒビクはキンパツゴーストって名前の悪の親分、俺はその子分の役につかされ、ヒカルの弟は正義のヒーロー役を気取った茶番劇の最中だ。

ところで、なんで俺がヒビクの子分なわけ？

そこんところは、大いに異議ありだ。

ヒカルは部屋の外に帰る仲間たちを見送りに行っちまってるし、あかねの姿ももうない。

ようするに、俺とヒビクだけが帰りそびれちまってるってわけだ。

「逃げまわるとはヒキョウなヤツらめ！正々堂々と勝負しろっ！」

弟がヒーローに成りきって舌足らずな変な口調で言うが、逃げ回ってるわけじゃなく帰れるチャンスをうかがってるだけだ。

「どうしたどうした？俺さまに恐れをなしたか？」

――はあ…。ヒカルの弟だよな…。

ん？待てよ？

ここはヒカルん家。

そして、こいつはヒカルの弟。

ってことは、ヒビクひとりでコイツの面倒を見て残れば、このヒーローも満足するし、ヒカルはもちろん喜ぶだろうし、ヒビクにとってもこの後のチャンスがなんかあるかもしれねえだろう。

さすが、俺。頭いいじゃん？

ってことで、さっそく親分を囮に使う。

「へへん。逃げてなどいるもんかー。こっちにはつよーい親分がいるんだ。お前の相手はキンパツゴーストの親分様がしてやる！覚悟しろー」

ヒビクの背中を、グイッと弟の前に押し出してやった。

「覚悟するのはそっちだ！」

弟は素直に囮作戦にはまってくれ、全神経がヒビクに向いた。

その隙に俺は、そおーっと――。

「た、たむらあ～～？！」

ヒビクの情けない声が後ろから聞こえたが無視。

そのままりビングから…、

「脱出成功！！」

そしてふと、前を見ると、そこにまだ帰ってなかったあかねがいた。

ヒカルとふたり、深刻な話でもしてたんだらうか？あかねの、少し曇った表情が気になった。

けど、俺を見つけたあかねはすぐにふんわりな笑顔を取り戻した。

「田村先輩？風間先輩を置いていっちゃうんですか？冷たいんですね～」

「あいつもたまにはガキの相手でもしてみろっての。俺の気持ちがわかるから...」

「田村先輩の気持ち？」

あかねとヒカルが同時に俺を見上げた。

「お子様ランチなヤツらのフォロー、これでも大変なんだぜ？」

「田村先輩から見ると、お子さまランチ...なんですか、ヒビク先輩たち」

俺から見なくたってお子様ランチだろうよ...

けどまあ、ヒビクに限っちゃ、ヒカルの前ではめいっばいカッコつけて先輩ぶってるから、ヒカルが分からなくても無理ねえか。

「そういうこと！さて、あかね、帰るなら一緒に行こうぜ」

ってことで、ヒビクにだけじゃなく、いきなり田村くんにもめぐってきたラッキーツーショットのお時間です。

あれこれ考えちまうとせっかくの時間ももったいねえから、そのまんまあかねの手を握って逃げ出すようにしてヒカルん家を出た。

隣が群竹ん家だとか、群竹に見られちまってたら必殺技でのされちまうとかってことを考えたのは、隅田川の川べりに出てからだった。

◇

「.....群竹、合宿に行ってるのか」

「はい。麻耶ちゃんたちもみんな」

なんだべ。

慌てて手を放して損した...って、ちょろっと考えちまったのはナイショだ。

ヒビクと来た時は真上にあった太陽が、今はもう西に傾いていて、川から吹く風もずいぶんと優しい温度に変わっていた。

想い人の彼氏が合宿中だってことを幸いにして、このラッキータイムを少しでも長く伸ばしたいがために、ヒカルん家から近い駅があるってことは知らないふりしていつもの駅に向かって歩いている俺ってヤツは、案外女々しい男だ。

「合宿が終わったら、群竹くん、今度は沖縄に行っちゃうんです...」

言ってあかねは、小さなため息をついた。

「旅行か？」

「写真を撮りに...」

「ああ、なるほど...」

群竹には写真の才能があるらしく、去年、写真投稿雑誌の大賞を取った。

去年の文化祭でやったカーテンコールの『ライジングサン』。ステージの上で歌って踊るヒカルとヒビクを写した写真がその大賞に選ばれたのだ。

でも、群竹自身はそれを偶然の一枚だって言い張っていたし、そもそも、その雑誌に投稿したのは群竹本人じゃなかったから大いに困惑していた。

けど、写真を撮りに沖縄に行くってことは、あれからあいつにも何かの変化があったのだろう。

「田村先輩...」

あかねはふと立ち止まった。

ちょうど、川の上を水上バスがサーッと通って行った。

「どうした？沈んだ顔してるぞ？」

「さっきね、ヒカルちゃんに訊かれたんです。群竹くんとは連絡取り合っているの？って」

――は？

「取り合ってねえの？」

あかねはこくん、とうなづいた。

「いつか、先輩に言ったことありますよね。私と群竹くんの関係」

「ああ...」

互いに付き合おうとか、相手を想う気持ちを言い合ったことがねえって言ってたな。

「あれから私たち、ちっとも変わってないんです。あのまんま...。だからきっと、群竹くんは沖縄に行く時も何も言わないで行っちゃうと思います...」

けど、群竹はいつもあかねをチャリのケツに乗せて駅まで送っていくし、あかねの傍にいてあかねを見てる。

俺の目から見れば、それは間違いなく惚れてる相手にする行為と眼差しだ。

ただ、言葉が足りねえだけなんだ。決定的な言葉がさ。

群竹も、そしてあかねも――。

――やれやれ。

やっぱ俺は、どこまでもあかねの`田村先輩、なんだな。

ま、それが田村優作のポジションだからいいんだけどさ。

ラッキーツーショットに浮かれて手まで握っちゃったけど、あかねの心の中は群竹クンでいっ

ぱい。

それが、あかね。

俺の、可愛い`後輩、だ。

「あかね？キララのハートって何だった？」

あかねは、きょとんとして俺を見た。

「愛とか勇気とか...って、言葉にするとちょっと重いけどさ、妖精キララが言ってたキララのハートってのは、ようするにありのままの純粋な心ってことじゃないかって、思ったんだ」

「純粋な心...」

「で、それは誰の命にもあるんだって言ってただろ？あかねにもあるんだぜ？キララのハートはさ」

「...先輩？」

――しょうがねえなあ...。言いたかねえんだぜ、本当は...

「群竹が大好きだっていう...、あかねの純粋なハート！」

「あ...」

「変わりたいって思うなら、ジュンとピュアみたく、ちょっとだけでいいから勇気を出してみるといいかもしれないぜ？群竹にもキララのハートはあるんだから、思い出させてやればいい」

――あかねの気持ちを、伝えてみればいい...

「そうすりゃ、きっと変わっていくぜ？」

「...せんぱい」

あかねは潤んだ目で俺を見上げた。

茜色の空が、瞳の中でキラキラ輝いている。

――ちきしょーめ、と思わないわけじゃない。

このまま、あかねの手をもう一度握って連れ去りたいって思わないわけじゃない。

群竹め。こんなにあかねに愛されてるってのに、おめーは何をぼんやりしてやがる。

言わないのがカッコいいと思ってるなら大間違いだ。

ヒビクにしても群竹にしても、そこんところを勘違いしてねーだろか。

好きなら好き。

それで、そのまんまでいいじゃねーか。

ありのまま伝えればいいじゃねーか。

そこに何の理屈があるってんだ、まったく…。

「さて、行くか！ 駅で茶でも飲んでいくか？ おごるぜ？」

「はい！ 先輩、ありがとうございます！」

またひとつ、何かを吹っ切ったようなあかねが生き生きと応えて笑いやがった。

18 予備校ララバイ

ジージー、ジージー、ジジジジジ.....

田村くんの安眠を、見事に妨害してくれるセミさんたち。

冷房が効いた部屋で閉め切っているにも関わらず、耳元で大鳴きしてくれてるセミさんは、ちょうど真横の窓の外で揺れてる木のどっかにへばりついているのだろう。

高い受講料払ってやってるんだから寝てんじゃないわよ、優作！

シャキッと頭働かせて学びなさい！

――て、念を飛ばしてる、このセミはかーちゃんの回し者に決まってる。

ということで、ここは予備校の夏期講習会場。

んでもって、今は英語の講義中。

馴染みのない講師が、さっぱり意味不明な講義をしてる声の子守唄になっちまって、さっきから夢と現を行ったり来たり田村くんなのであります。

ちょうどいい室温がさらに気持ちよくて、もうズッポリとあっちの世界に行っちゃってしまっただった時に、耳元でセミの大合唱が始まっちゃって、仕方なく戻ってきたところだ。

「ふわああ...」

とりあえず控えめに欠伸を出した時、カランと音がして足元に何かが転がって来た。

「ごめんなさい」

隣の席の女の子が、かがんで俺の足元に転がった鉛筆を取ろうとしている。

体勢がきつそうだったんで、俺が拾って渡してやった。

「ありがとう」

「どーいたしまして」

それだけの言葉を交わすと、女の子は再び前を向いて講義に集中した。

しょーがねえから俺もマジメに学ぶか、と真似して前を向いてみたけど、講師が言ってる言葉が、

「ペララーはペラペラだからペララのペー」

としか聴こえない。

やっぱ、最初に寝ちまったのがいけなかったんだな。ただでさえ理解できない英語の講義を途中から聴いたってサッパリわかんねえ。

ってことで、ジージーゼミの鳴き声を脳内で無理やりあかねが唄う『キララ』に変換して、もう一度おやすみなさいだ。

ジージージジジジ...

キーラキーラジジジ...

.....ちょっと無理があるけど、愛があれば出来ねえことはねえだろう。

なんて、ぼんやり考えてる間にすっかり寝ちまった。

・
・
・

午前中の講義が終わってロビーに下りてきた。

講習会には松山ブラザーズも一緒に来てるが、ヤツらとはクラスが別だ。講義がまだ終わっていないのか、ロビーにふたりの姿はない。ちなみにヒビクは野暮な用事とかでどっかに消えちまってるし、柏木は特に聞いてないが、たぶんもっとおりこうさんが行く予備校に小春ちゃんと一緒に行ってるんだろう。

「...ったく、早く来いっての...」

校内じゃ飲食禁止だし、学食なんかももちろんねえからランチは外でするしかない。

頭も使っちゃいねえのに、腹だけはいっちょまえにグーグー鳴いてやがる。が、ブラザーズはまだ来ない。

階段しかねえ玄関ロビーでぼーっと待ってるだけってのは落ちつかない。その待ち人が彼女ってんならまだ救いもあるが、おんなじ顔したバカブラコンビだ。

腹は鳴ってるし、人は何故だか振り返って見て行くし、あと10秒待って来なかったら、適当に先に行っちまおうって思ってた時だ。

俺がもたれかかってた丸い柱の反対側で、ようするに柱を挟んで背中合わせでおんなじようにして誰かを待ってた人が、顔をこっちの階段の方に向けた。

そこで目が合ったのは、さっき隣の席にいた女の子だった。

「さっきはどうもありがとう」

「いえいえ」

たかが、足元に転がって来た鉛筆を拾ってやったぐらいで、ずいぶん律儀な子だ、と思っていたら、

「あの、バンドやってますよね？」

なんて言ってくるもんだから驚いた。

「やってるけど...、俺のこと知ってるの？」

ちょいとどきどきしてみたりして。

芸能人にでもなったような気分っていうんですかね。

がしかし。

「Shine Castleのたむどん...でしょ？」

——いやあの。

「たむどん、ですよね？」

...間違っちゃいないんだけど、ライブとは無関係な場所で、まったく知らない女の子が、バンドやってる俺のことを知ってて声をかけてくるこーゆー美味しいシチュエーションで、たむどん、ってのは、もうそれだけでコメディだから。

「あはは...は...。もしかして、それが俺の通り名...？」

「通り名っていうか、みんなそう呼んでるから」

——それが通り名って言うんです。

「あたし、公民館ライブは毎年観にいつてるの。Shine Castleのライブも初出場のときからずっと聴いてる。だから、最初に教室で見たときから、たむどんだって分かった」

「あ...はは...、そうなんだ」

ここは地元の予備校だし、毎年派手に公民館ライブに出てた俺たちを知ってるヤツもいるだろう。

「たむどん、目立ってるし...」

女の子は俺の頭髪に視線を向けている。

さっきから俺を見て行く人たちの視線はこの赤いメッシュに注がれてたってわけか。

.....いねえよな。予備校に来ている受験生でこんな髪してるヤツ。

それにしても、たむどんってのは、連呼されると萎える名だ——。

「こんなところで一緒になれるなんて、ちょっと嬉しいかも。サインもらっちゃおうかな」

「そんなふうには言ってもらえると、こっちが嬉しいかも」

ていうか、かなり素直に嬉しい。

内心、舞い上がっちゃってます。

こんな時のために、サインの練習しときゃよかったか？——なんて、ほんの一瞬浮かれたけど

「響くんとかナオヤも来ているの？」

――...やっぱそっちかい。

お決まりの展開に移行して浮かれは一気に冷めた。

ま、ウチのスターはヒビクと柏木で、たむどん他二名はお笑い担当でございます。

「ヤツらは来てないんだ。この夏期講習会に来てるキャッスルのメンバーは俺と...、あいつらだけ」

ちょうど、ブラザーズが階段を下りてきた。

「看板スターがいなくて悪りいね！」

「あ、そういう意味で言ったんじゃないの...！」

「いやいや、気にしないでいいって！じゃ、仲間が来たから俺は行くね！」

こっちに歩いてくるブラザーズと合流して、そのまま玄関を出た。あの子誰？と兄がすかさずつつこんで来た。

「ヒビクと柏木のファンらしい」

は？とブラザーズは首を傾げたが、腹は減りまくってるし暑いしで、説明するのもめんどくせーから無視して、ひたすら遠くに看板が見えている吉野家を目指して歩いたたむどんでありんす。

。

◇

それから、10日。

「たむどん、ほら、起きないと...」

――と、あっちの世界に行ってる俺を教室に戻してくれるのは、隣の席の藤川菜奈美（ななみ）ちゃんだ。

・

・

「毎日講習会に来て寝てるだけなんて、それでいいの？」

「よかないけど、起きてても意味不明だし」

「.....どこが分からないの？あたしが分かるところだったら教えるよ？」

「全部」

「.....来ている意味ないね。模試、あさってだよ？」

なんて、小早川とするような会話ができるほど、初対面の時から「たむどん」を連発してくれる菜奈美ちゃんとは仲良しになっていた。

講義中に寝ちまうと起こしてくれる。

そして、小早川のような小言を言われる。

ランチも、時間が合わないブラザーズと吉野家に行くよりも、同じクラスの菜奈美ちゃんとマックに行く日のが多い。

菜奈美ちゃんは公民館ライブファンだったらしく、出場してたいろんなバンドの情報を知っていた。どこのバンドがインディーズデビューしたとか、どこのバンドが自作CDを作ったとか。

話してて面白いし、可愛いし、予備校にただ寝に来ているだけの俺だけど、菜奈美ちゃんとのこんな毎日は、まあ楽しかったりもする。

けど、

「たむどんたちはこれからもバンド活動続けるの？」

「だから...、たむどんって公に呼ばないでって言うてるでしょ」

「あ、ごめん。田村くん。.....でも、ずっとたむどんって呼んできたから呼びにくいなあ」

田村くんが呼びにくいって言う菜奈美ちゃんに、たむどんって呼ばれるたびに力が抜けちゃう

。

「たむどんって言われると、どこまでも非モテコメディ男になった気がするんだよ」

非モテってなに？とあどけなく首を傾げる菜奈美ちゃんと、今はマックランチ中だ。

「非モテってのは、読んだまま言ったまま、モテナイってこと！」

「あら、そんなことないのに。たむどんのファン、いっぱいいるんだよ？」

まあ、それはライブの時なんかで実感はしている。

けど、ファンと田村優作って男を本気で愛してくれるのとは違うのだ。俺が言うところの非モテってのは、そういう意味のことだ。赤い髪してギター弾いて女の子にキャーキャー言ってもらいてえって思った頃もあったけど、今は違う。

「で、話それちゃったけど、バンド活動。受験が終わっても響くんたちと続けるの？」

菜奈美ちゃんは、温まって汗をかいてるシェイクのカップを、無意味にぺこぺこ押ししながら、目は俺をじっと見ていた。

「俺は続けたいって思ってるけど...」

みんなの環境が変わったらどーなるかは分からねえな。

Shine Castle、もとい、ブックキャッスルはおんなじ高校に通ってる高校生の俺たちだから、軽音楽部があったからこそやれてたバンドだ。

現に3年になって部活が終了しちまった今はもう、みんなで楽器に触ることなんてねえし、公民館ライブに出ようって話も出てこない。俺は毎日ツッパリカエルの優作が住んでるギターを弾いてるけど、ブラザーズはもうギターを触ってもねえだろう。

「Shine Castleは、あの公民館ライブに出てたバンドの中でもクオリティの高いバンドだったから

、ライブ続けて欲しいな。いい曲いっぱい持ってるからCD作ってもいいと思うよ？」

確かに、『光の城』とか『ライジングサン』とか、それに、あかねの『キララ』もCDに録音出来たらいいけど....、

「そりゃ無理だ。金がねえ」

「そうか...。CDはスポンサーがいないと資金はかかるよね」

「けど、ずいぶんコアな評価してくれるね？」

「あたし、本当はPAやりたいの」

「へえ...。それで、いろいろと詳しいわけね」

PAってのはライブ会場の音（演奏）を集めて、バランス見たりの処理して出力してくれるオペレーターのことだ。

「専門学校に行きたいのだけど、親にダメだって言われてて」

菜奈美ちゃんは、ふっとため息をついた。

「あたし、演奏は出来ないけど、ライブが好きだから会場で音を作る人になれたらいいな...って思ってるの」

「音を作る...？」

俺のどこかで何かが響いた。

音楽を作るヤツは身近にいる。

ヒビクとか、あかねもそうだ。音符を並べてメロディを生むヤツ。それを演奏していた俺たちだって音楽を作ってた人間のひとりだろう。

けど、`音`ってのは。

ライブ会場で演奏者が生み出す音楽を、人に伝える音にするのがPA。

PAがいなきゃライブは出来ない。その音を作る人になりたい、か...。

ーバンドは出来なくても、俺もそっち側の何かをやってみてえな。

ふと、そんな考えが頭を過ぎったけど、あまりにも漠然としすぎてるそれは、サラッとどっかに消えちまった。

「いいじゃない、それ頑張ってみろよ」

「うん。なんとか親を説得するつもり」

菜奈美ちゃんはニッコリ笑って、じゅるじゅるとシェイクをすすった。

二週間の夏期講習最終日に実施された予備校模試は、結果が出るのを待つまでもねえ結果となって終わった。高い受講料は高い子守唄料になっちまい、かーちゃんには怒鳴られるだけじゃすまねえ結果にもなると予想される。

「あっという間の夏期講習だったなあ...」

「たむどん、ほとんど寝てたしね」

菜奈美ちゃんとふたり、ロビーに下りてくると、ブラザーズたちが玄関前で兄弟げんかしながら俺を待っていた。

「じゃ、PAの夢、頑張れな」

「うん…。たむど…。田村くんもね」

菜奈美ちゃんは、ちょっと寂しそうに微笑んだ。

「あのさ、田村くん。夏期講習会も終わったし…。明日、一緒にディズニーランドにいかない？」

「…ふたりで？」

「うん…。あたし、実はまだ行ったことないの。初めてのディズニーランド、田村くんとふたりで行けたらいいなって…」

菜奈美ちゃんは顔を赤くして俺を見上げた。

「悪い…。俺、これからちょっと野暮用が詰まっちゃっててさ。遊びに行く時間がないんだ」

ヒビクじゃねえけど、野暮用ってのはほんと。

夏休みの課題、なんも手をつけてねえし、あと一週間の夏休みは一步も外に出られねえぐらいだ。とほほ。

「そっか…。残念」

しょんぼりした菜奈美ちゃんを見るのは胸が痛んだけど。

「田村、いつまで待たせんだよ！」

あっちで、松山兄がキリキリしてる。

二週間仲良くしてくれた菜奈美ちゃんのお別れなんだから、ちっとは気を使えねえのかよ、バカ太郎め。学校も違う菜奈美ちゃんとは、もう会えないかもしれねえんだから。

「ごめん。松山くんたちが待ってるね。行って？」

「あ、ああ。じゃあな！」

名残惜しかったけど、菜奈美ちゃんにぐるりと背中を向けたとき、

「あ、あたしね、`たむどん、のファンだったの！今度どこかで会えたら、サインちょうだいね！」

菜奈美ちゃんは、`たむどん、を強調した大きな声で言った。

振り向いてみたとき、菜奈美ちゃんの目はキラキラ笑っていた。

「…ったく、人を待たせてラブってんじゃねーよ」

と、松山兄がぶーたれる。

「あの子、風間と柏木のファンじゃなかったのか？」

弟の方は、菜奈美ちゃんをチラチラ見てそんな古い話を持ち出す。

「今度会った時のために、サインでも練習しとくかなあ」

玄関を一步出たら、外はキツイ残暑とセミの鳴き声。

「その前に、単語とか漢字とか、練習しなきゃならねーのは山ほどあるだろが」

松山兄のつまんねえツッコミは無視しといて、俺はさっさと歩き出した。

模試の結果が出てかーちゃんにシメられるまで、どんだけの猶予があるだろうか...、と思いながら、最後の菜奈美ちゃん的笑顔をふと思い出して、どこかせつなくなったりした「たむどん」でありました。

19 変化

新学期が始まって3日目の昼休み。

非モテ仲間の松山弟と、屋上非モテランチ大会を開催しようとしていた俺のところに、

「ちょっと田村くん！風間くん、何で学校来ないの?!」

凄い剣幕の大島が乗り込んできた。

「ヤボ用」

「ヤボ用?!なにそれ？」

「知らねえよ。本人、それしか言わなかったから」

ヒビクがヤボ用とやらで消えちまってからそろそろ1ヶ月になる。

新学期に間に合わないかもしれないって言ってたが、その通り、ヤツはまだ現われない。

「風間くん、いつ来るの？」

「さあ。それも知らねえ」

「ちょっと田村くん！なんでちゃんと訊いておかなかったのよ?!」

大島は、美しく整った顔をおもいきり歪ませた。美人が怒った顔はえらい怖い。小早川の比じゃねえ。思わず全身が退いちゃった。

「な、なんで俺が責められなきゃならないわけ？俺はヤツの保護者じゃねえんだから！」

そういえば、昔もヒビク絡みのことで、青筋立てた大島に責められたことがあって同じ台詞を吐いた覚えがある。あれは、いつ、何の時だったか…。

「保護者じゃなくても親友なんでしょ？そのヤボ用ってというのが何なのか、気にならなかったわけ？」

気になったさ、おもいきり！

けど、ヤツがヒミツを厳守したがつてるんだからしょうがねえだろう。

ヒビクはヤボ用で出かけるとしか言わなかったし、それに対してツッコミは禁止、みてえな気を発してたし。

「親友、だから、そーゆー空気は敏感に察知する田村くんなのだが、女には分からねえのかもしれないねえな。」

「そのうち来るだろ。この時期にいつまでも欠席ってのはヤバイし、そんなことはヒビクも分かっていることだろうからさ」

とにかく、今はヒビクのヤボ用よりも暴れてる腹の虫を鎮める方が先決です。

とりあえず大島を納得させて（全然してない顔してたけど）、俺は屋上非モテランチ大会に向かった。

それから、さらに3日が経った日の朝。

「ちょっと田村くん！風間くん、今日も一緒じゃないの?!」

教室に入ろうとした背中をいきなりつかんで引っ張られたと思ったら、必死の形相をした小早川が立っていた。たった今、松山ブラザーズと柏木と登校してきたばかりだが、今日もヒビクはいない。

「いねえなあ...」

「いねえなあ、じゃないよ！なんで新学期になって一週間も経ってるのに風間くん、来ないの?!」

ていうか、何で小早川がヒビクが来ねえからってそんな泣きそうな顔をしてるわけ？

「知らねえよ。ヤボ用ってのが片付かないんじゃないのか？」

「だから、そのヤボ用っていうのは何なのよ?!」

「だから、知らねえって言ってるだろ？」

朝から、なんだか無性に腹が立ってきた。

ヒビクのヤボ用はヤツの事情だろ。

ハッキリ言って、俺だってちっとはヒビクの秘密主義にはイラついてんだ。

「俺は、アイツの保護者じゃねえの！ヒビクのこと、何でも俺に訊けば分かるなんて思うなよ？」

「そんな言い方しなくたっていいでしょ？」

小早川が、俺をキッと睨んだ。

俺にしてみれば、睨まれる理由なんかねえだろって話だ。

「とにかく、アイツの事情は何も訊いてねえから。ヤボ用済ませて学校来るの待ってるしかねえよ」

「うそお...。もう、もたないかも...」

小早川は情けなく呟いた。

――へえ～。そうですか。

そんなにヒビクが恋しいんですか。

まーまー。

「なによ。その怪しい顔...」

小早川は右の眉をヒクつかせて言った。

「べつに」

「田村くん、なんか誤解してる...」

「べつに。とにかく、俺はヒビクの保護者じゃねえから」

ねえちょっと！と小早川は後ろで怒鳴っていたけど無視だ。

ったく、そんなにヒビクが心配なんだったら、本当の保護者に訊いてみりゃいいだろう。

ヒビクに対してなのか、小早川に対してなのか分からないが、どーにもこーにもムカムカしちゃった。

それからさらに4日が経った昼休み。

今度は大島と小早川がセットになってヒビクの消息を訊きに来た。

さすがに、10日も経って学校に来ないヒビクに俺も気にはなっている。けど、俺に訊かれたってどーにもなんねえ。

「田村くん、風間くんから口止めされてるんじゃないの?！」

大島はほとんど半狂乱状態。隣で小早川が、ややシラケモードでうんざりした顔をしてるところを見ると....

「もしかして、もたないって言ったの、こーゆーことなん?」

それとなく小早川に伺ってみた。

「そう。こーゆーこと。分かってくれた?」

――なるほど。

当たりは大島ってわけなのね。

ヒビクが来ねえもんだから大島がこーゆー状態で、オトモダチの環ちゃんは八つ当たりでもされてたってことなのか。そういえば、進路云々の話をした時も、とぼっちりをうけてるとかなんとか言ってたな。

いやまてよ?

今まで小早川が俺にヒビク関係のリサーチしてきたのって、全部大島絡みだったってわけなのか?

ってことは、もうかなり前にさかのぼる話だぜ。

大島がヒビクに...なんて、まったく気づかなかった。ふーん。そうなんか。

「怪我とか病気とかで入院なんかしちゃってて、みんなに心配かけないようにって黙らされてんじゃないの?！」

大島も俺に劣らず、すごい妄想劇場を展開する。

「そなんじゃねえから...。ほんとに何も訊いてないんだよ」

けど、怪我とか病気ってのには確かに引っかかる。

もしかして本当にアイツ、ヤバイ病でも患ってて、夏休みを利用して大手術なんかしてんじゃないねえだろうな。

カッコつけしいだから病気のことを俺にも知られるのがイヤで、だからヤボ用なんて言い方して、でも術後の経過がどうなるか分からないから `新学期に間にあわねえかもしれない、なんて言って、で、未だに回復せずに学校に来られない――。

――ありえる...かも。

真っ白な病室で夢げに弱っているヒビクの図が浮かんだ。
ヤバイ。妄想劇場が始まっちゃう――。

「ちょっと、田村くん！何一人で青くなってんのよっ！」

ほとんどヒステリー状態の大島が、小早川のような口調で怒鳴った。

「大島、ヒビクとは同じクラスなんだから担任に訊いてみろよ」

「そんなの、とっくに訊いたわよ！担任こそ、風間くんに口止めされてて教えてくれないのよ！」

」

「マジ...？」

どうということだろう。

担任が納得済みでさらに口止めしていったことは、ヤボ用どころじゃねえ話だろ。

――やっぱ、大手術説が当たりかよ...。

「と、とにかく。ヒビクが来るの待ってるしかねえだろ。俺にはどうにもできねえよ」

大島は、もう...！と言って、何も無い床を蹴飛ばした。

「大島はヒビクに急ぎの用でもあるのかよ？」

「ええ！大事な大事なヤボ用が！」

大島はクルッと回れ右をして、自分の教室に向かって歩いていった。

ヒビクの話は気になるが、とりあえず今は昼休み。これから屋上非モテランチ大会だ。

購買部でゲットしたパンと珈琲牛乳を持って、教室を出たところで――。

「田村先輩！」

階段の踊り場からパタパタと駆けてきたのはヒカルだった。

「あれヒカル、めずらしいな！どうした？」

ここは独立した3年の回廊。下級生が来るなんてことはほとんどない。まあたまに、田村せ〜んぱいっ！って、唯子ちゃんが神出鬼没するけれど。

「あのあたし、ヒビク先輩に渡すものがあるんですけど、何だか一人じゃ行きづらくて...。田村先輩、一緒にヒビク先輩の所に行ってくださいませんか？」

らしくもなく、ややうつむき加減にヒカルは言った。

またヒビクかよ...、と思ったけど、ヒカルだったら話は別だ。

「それがさあ、ヒビクの奴、新学期になってから学校に来てないんだよ」

「え...？」

まるで、迷子になっちゃった仔犬みてえな目でヒカルは俺を見上げた。

「田村先輩...、ヒビク先輩どうしちゃったんですか...？一学期から様子がちょっと変だったので心配なんです」

様子が変だった...？

「なんか、大事なことを隠しているみたいで...、どこか遠くに行っちゃうみたいな気がして...」

「ヒビクがか？」

はい、とヒカルは頷いた。

ヤツの秘密主義は元々だし、俺から見ればべつに変わったところはなかったと思うけど、ヒカルがそう見えたってことは、やっぱどこかで何かが変わったのかもしれないな。

——まさか、本当に大手術...？

けど、そんなことヒカルに言えるはずねえし。

「先月、ヒカルんちで人形劇やっただろ？あの時にヤボ用でどこかに行くって言ってたんだ。新学期に間に合わないかもしれないって言ってたから、ヤボ用が長引いてるんだと思うぜ？」

「ヤボ用...ですか」

「アイツ、それしか言ってなくてさ。俺もつっこんで訊かなかったんだけど、ここまで音沙汰がないと訊いておきゃよかったな」

ヒカルはますます不安な目をした。それがますます俺を不安にさせる。そして、わけもなくイラつく。

「し、心配すんな、ヒカル。大丈夫だって。すぐに帰ってくるさ！」

これは、ほとんど自分に言い聞かせる言葉だった。

「ヒビクが来たらお前のところに行くように言っとくから」

「お願いします...」

ヒカルはとぼとぼと廊下を戻っていく。肩が下がっちゃまっててせつない。

そんなヒカルを見ていたら、ヒビクに対して心配以上に腹が立って来た。ヤツが来たら、秘密主義もいかげんにしろって言ってやる。絶対に言ってやる。

腹が立ったら腹が減った。

屋上では非モテ仲間の松山弟と、非モテじゃねえらしい松山兄が既にランチ大会を開催していた。

「遅かったじゃねえか」

大島と小早川とヒカルにつかまっていた話を簡単にして、俺もふたりの傍にドカッと座り込んだ。

「しかし、風間はほんとに何やってんだ？マジで入院してんじゃねえだろな？」

弟が言った。

「さあな！入院してるならしてるでいいんじゃないの？どうせならセーカクの手術でもしてこいっての！」

「あらら…。たむどん、ずいぶんご立腹なのね？」

「べつに！」

ヒビクにイラついているのは確かだ。

入院して大手術してるにしても、他のことでどこかに行ってるにしても、なんでここまで秘密にする必要があるんだ？

担任には所在を話してるみてえだが、だったら俺にも話せての。

意味深なことだけ言って勝手に1ヶ月以上も消えやがって、こっちの心配とか心労をよそに、いつものようにあっけなく涼しい顔をして現われるに決まってる。

クサクサしながら、チョコデニッシュの袋をビリリと破いたとき、あっちからやって来たのは柏木だった。

「やっぱりみんなここにいた」

柏木はサクサク歩いてくると、俺の隣にサラリと優雅に座った。手には弁当箱と購買牛乳を持っている。

「小春ちゃん是一緒じゃねえの？」

「あ…、うん。小春ちゃんはクラスの子とランチするって…」

「ふーん…」

珍しいこともあるもんだ。

柏木と小春ちゃんは中庭ラブラブランチが定番だし、たまに俺ら非モテランチ大会に参入してくる時だって常に小春ちゃん是一緒にいる。

「…なんだよ、田村くん。俺になんかついてる？」

「…いや？小春ちゃんとセットじゃない柏木を見るの、久々だなと思って…」

「俺だって小春ちゃんだって、たまにはこーゆーこともあるんだよ」

柏木は、ややふてくれたように呟いて弁当箱を開いた。

ま、そういうこともあるんだろう。

ってことで、俺もチョコデニッシュにかじりついた。チョコの甘さが、さっきまでのクサクサを少しだけ癒してくれた。

が――。

「あら…。なんか雰囲気変わったね、あのふたり…」

非モテランチ大会の帰り、柏木の声に誘われて廊下からふと中庭を見下ろすと、いつも柏木と小春ちゃんがラブラブランチをしてるベンチに仲睦まじくいるあかねと群竹を見ちまった。

あかねが膝の上にランチボックスを広げ、群竹はあかねの膝からサンドイッチをつまんでいた。

これまで、群竹がチャリのケツにあかねを乗せたりする場面は何度か見たが、ランチの現場は初めてだ。

しかも、あかねは嬉しそうに笑っているし、群竹の雰囲気もやたらと柔らかい。見たまんまをひとことで言うならば....

「あまあまだねえ〜」

松山兄が言うとおりの。

いきなり雰囲気、変わりまくりだ。

――田村くん、クサクサ復活！

あかねはたぶん、俺が言ったとおりの、群竹に気持ちを伝えたんだろう。そして、群竹も。

それは、あかねにとっちゃめでたいことだ。だから、これでいい。べつに、俺の立場がなんら変わるわけじゃねえんだし。

けど、見たくはねえ現場だったのは確かだぜ、ちきしょーめ。

「田村くん、顔が怖いよ？」

柏木がこっそりとそんなことを言いやがる。

「べつに！」

さっさとその場から離れて、教室に戻った田村くんでありんす。

新学期になってからというもの、いろいろと微妙に変化してる気がする。

ヒビクに対して、やたらとイライラしてる俺とか、

ランチだけじゃなく、朝も一緒にいない柏木と小春ちゃんとか、

昇降口や渡り廊下で見かけるヒカルに元気がねえとか、

あまあまなあかねと群竹とか。

けど、そんなことは比較にならねえ変化が起こっちゃった。

「はあぁっ?!」

俺は自分の目を疑った。

俺だけじゃねえ。ブラザーズも柏木も久々に学校に来たヒビクを見て絶句してやがる。

それも当然だろう。

ヒビクの隣には、ヤツの左腕に自分の右腕をさりげなく絡ませてる大島がいたのだから。

「ちょっとあれ見て？風間くんと大島さん、付き合い始めたの？」

「うそお～」

「やだあ。腕、組んでるよ」

朝っぱらの3年回廊の廊下は、堂々と腕を組んで教室まで歩いていくヒビクと大島を指差した女子たちのヒソヒソ声が飛び交ってる。

俺やブラザーズや柏木は、階段を上りきった場所に凍結したままだ。松山兄など、半開きになってる自分の口に気づいてないようだし、弟の方は目玉を丸く見開いてるし、柏木は呆然と突っ立っている。

そして俺は――。

ますますヒビクに対してムカついていた。

俺たちよりも後から大島と登校してきたヒビクは、3階のこの場所にたむろっていた俺たちの顔を久々に見てるってのに、まったく無視して大島とF組に向かいやがった。

今日は新学期が始まってもう三週間目だ。

ヤツは三週間も俺たちに、俺に何の連絡もよこさないで休んでて、やっと来たと思ったらこの態度だ。大島と腕組んで歩く前に、ひとことねえのかよ。

「どどどどどど、どーなってんだ、アレ！」

ヒビクと大島がF組に入ってから、やっと解凍した松山兄が、廊下の先を指差して喚いた。

パニックになった時のブラザーズは、まったく同じアクションを取るんだなあ、と呑気に場違いなことを思う気持ち半分、俺のほうに訊きてえよ、と反発したい気持ち半分。

だからというわけじゃねえけど、わめく松山兄は無視しとく。すると、

「田村、風間から何も訊いてないのかよ？っていうか、風間は今まで何処行ってたんだ？」

今度は弟の方が俺に訊いてくる。

「知らねえよ。俺だってヤツに会うのは夏休み以来だし、何処に行ってたのかも、何でいきなり大島と腕組登校して来てんのかも、まったく分からん」

ムカつく。

とにかくムカつく。

ムカついてしょーがねえ。

無意識にカバンを壁に叩きつけたその時、

「……ヒカルちゃん」

柏木がぼそっと呟いた。

べつに、ここにヒカルがいるわけじゃねえけど、その眩きが俺に、数日前、ヒビクを訪ねてこの回廊にやって来たヒカルを思い出させた。

「...なに考えてるんだろーね、風間くん...」

柏木はまた、ぼそりと呟いた。

ほんと、ヒビクめ、何を考えてやがる。

腕を組んでたのがヒカルだってんなら、俺だってこんなにムカつかねえだろう。それがたとえ、秘密厳守の拳句、前触れなく起こったことだったとしてもだ。

「どーなってんだよ？こないだ、お前らふたり、俺にヒビクの消息を訊いてきたばかりだろ？」

ちょうど今、階段を上ってきた小早川を捕まえて問いただした。が、
「分からない。あたしもまだ雪乃に何も訊いてないもん。あたしだっていきなりでビックリしてるんだから」

と、小早川も半ば放心状態だった。

毎朝、小早川と大島は駅から一緒に登校してくるが、今朝は大島のヤツ、ヒビクが駅に降りるのを待って、当然のようにふたりで先に行っちゃったらしい。

置いてきぼりを食っちゃった小早川は、事情を大島に確認することもできずに、腕組んで仲良く歩くふたりの後ろを、ずいぶんと距離を取って歩いてきたらしい。

「あとで雪乃に訊いておくよ。あたしも気になるし...。でもね...、」

小早川はチラリと周囲を見回し、ブラザーズと柏木の目を気にするかのようにして俺だけを教室の中に引っ張った。

「この間、雪乃、浅倉さんと対決したって言ってたんだよ」

「な、なんだって?!」

思わず大声が出ちゃったのは仕方ねえだろう。

「た、対決ってどーゆーことだよ?!」

「浅倉さんに直接、風間くんとの関係を問いただしたらしいよ？ついでに自分の風間くんへの気持ちも話したんだって」

「ヒカルにか?!」

小早川がこくん、と頷いたそばで、俺はごくん、と生唾を呑み込んだ。

そういえば、ずいぶん前の話だが、小早川が俺に、ヒビクとヒカルの関係を訊いて来たことがあった。

あの時、俺はてっきり小早川がヒビクに惚れてるんだと思い、脈のない恋に小早川が傷ついちゃ哀れだと思ったから、ヒビクとヒカルはどうしようもなく惚れ合ってた繋がった関係だとかなんだとか、かなり大げさに答えてやった記憶がある。

それを、小早川がそのまま大島に伝えてたとしたら――。

「対決かよ...」

背中が寒くなった。

大島のやつ、ヒカルに何を言いやがった。

そして、ヒカルはそれをどう受け止めたんだ。

「とにかく、あとで雪乃に訊いてみるから。でもまあ、あたしにしてみれば、これで雪乃が落ち着いてくれたら万々歳なんだけどね」

俺にしてみれば、これでヒビクが落ち着いちゃうのは納得いかねえぜ。

何がどーなってこーなってんだか...、俺もヒビクに問いたださねえといけねえな。`ヒビク先輩のところと一緒に行ってください、って...、俺を頼ってきたヒカルの為にも。

◇

放課後。

いつものように、昇降口前で適当にみんなが集まるのを待っていた。次郎、太郎、柏木と集まった後、ヒビクが大島と一緒に現われた。

ヒビクはと俺たちを見もしねえで、憎たらしいぐらいに無表情のまま昇降口を出て行こうとする。隣にしっかり大島をくっつけて、だ。

「ちょっと待てよ、ヒビク！」

呼び止めると、ヒビクは立ち止まり振り向いた。ついでに大島も立ち止まり振り向いた。

「おまえ、俺たちになにか言うことないわけ？ヤボ用ってのがなんだったのか、言いたくねえなら訊かないけど、朝も帰りも無視して行くってどういうことだよ？それに、隣にいるヤツはなんなの？」

大島はあたし？と自分を指差した。

ヒビクは隣の大島にチラッと目を向けてから、

「悪い。無視したつもりはないんだけど、ちと考え事してたから...」

やっと、俺たちに対して声を発した。ヒビクの声聞いたの、ずいぶん久しぶりだ。

「んじゃ、説明してくれる？大島とおまえ、どーなってるの？」

「こーなってるの！」

ヒビクの腕に、わざとらしく自分の腕を絡ませて答えたのは大島だった。

が、ヒビクが横で、べつにどーなってもねえよ...とごくごく小声で呟いたのを、俺は聞き逃さなかった。だから、

「は？ふたり、言ってること違くない？」

間髪を入れずにつっこんでやった。

すると、大島は言った。

「見たままのあたしたちってことに変わりはないでしょ？風間くんはあたしを拒絶していないじゃない？」

確かに...、ヒビクは大島が隣にいるのも腕につかまっていることに対しても、それを受け入れているように見える。だから、わけが分かんねえし、ムカつく。

「だいたい、田村くんは何週間も学校に来ない風間くんのこと、何も知らなかったじゃない？訊

いてもまともに答えてくれなかったくせに、田村さんに、なんだかんだ言われることないと思うんだけどな、あたし」

そうかもしれねえな。

大島が誰としようが何しようが、俺はべつに文句が言える立場じゃねえよ。

けどさ、ヒビクは違うだろ。

コイツが誰を大切に想っているのか、それがどんな想いなのか、そしてその相手がヒビクをどう想っているのかを知ってた。見てきてるんだ。

だから、このカップリングには納得いかねえし、何も言わないヒビクにムカついてんだ。

ヒビクの秘密主義に腹立つ。

カッコつけんのもいい加減にしろって怒鳴ってやりてえ。

「行こう、風間くん」

大島がヒビクを促し、ふたりはそのまま昇降口を出て行っちゃった。

「ふざけんじゃねえよ！」

思わず、下駄箱を思い切り蹴飛ばしたら足がじーんとした。痛いから余計にヒビクにムカついた。

「まあまあ、田村くん、ちょっと落ち着こうよ」

柏木が俺の肩を叩いた。

「風間くんが何も考えなしで自分の行動を決めてるとは思えないよ。何か理由があるはずだから、しばらく様子を見ていようよ」

白モード全開でもっともな事を言う柏木は冷静だ。

「だな。ここで、俺たちがやいのかいの言ったところでしょうがねえし、黙って見守っててやろうぜ」

なんてことを松山兄にまで言われちまって、俺も気分を鎮めるしかなかった。

そこへやって来たのは小早川だ。

「田村さんに話があるの。いい？」

「それじゃ、俺たちは先に行くぜ？」

ブラザーズと柏木が都合よく先に行ってくれたんで、俺と小早川は再び校舎に戻った。

◇

いつ「田村せ〜んぱいっ、と唯子ちゃんが現われるかわかんねえから、とりあえず人気のない屋上へ上がった。

西の空が少しだけ橙色に変わってるし、どこからか金木犀の匂いも漂ってきてて、もう秋なんだなあ〜、とやや感傷的になってるところに、

「雪乃、風間くんに告白したらしい」

早速小早川が本題をサバサバと切り込んで来たんで、センチメンタルは一気に白けて、代わりにまたもや、ムカつきが復活しちまった。

「告白ねえ...」

まあ、そうじゃなきゃ、さっきのツーショットはねえだろうけど、俺にしてみりゃゝある、ってことが問題なわけだ。

あれは、あっちゃいけねえツーショットなんだから。

そんな俺の不機嫌は、小早川にはしっかりと伝わってたようだ。

「田村くんは、雪乃と風間くんが付き合うの、反対なんだね」

「反対も何も...、俺にしてみればありえねえカップリングだからさ」

「もしかして、浅倉さんのこと？」

隙がねえ環ちゃんは、いきなり核心をついてきやがった。

ヒビクとヒカルは、もちろん付き合っていたわけじゃねえけど、ふたりが互いを想い合ってるってのは、本城高校生たちは公認だったんじゃないかなあだろう。去年の後夜祭、文化祭では意図的にそれを見せ付ける演出をしてやったし、ふたりは当たり前のように自然に傍にいた。夏休みの、あの人形劇公演の日までは――。

「まあ、そうだな」

「でも、雪乃は告白をする前に浅倉さんにちゃんと確認したんだよ？浅倉さん、風間くんとは付き合っていないってハッキリ言ったらしい。だから...、」

小早川の言を途中で遮るように、俺は自分の言い分を繋げた。

「そりゃそうだろう。あいつら、別に付き合ってたわけじゃねえから。けど...、」

俺の言を遮るように、小早川が言い分を繋げる。

「風間くんは、雪乃を受け入れたんだよ？」

――それが、俺には納得できねえわけだ。

「あいつら、付き合い始めたってことなのか？」

「そうでしょ？付き合いしていない男女が、あんなふうに腕組んで堂々と登下校する？」

――しねえよな、ふつう。

「田村くんは知らないかもしれないけど、雪乃は1年の最初の頃から風間くんが好きだったんだよ...」

「1年の時から？」

「そうだよ。浅倉さんよりもずっと前から」

風間くんLOVE歴が長いんだ、と小早川は小さなため息をついた。

「雪乃にしてみれば、何度も告白をしようとして、その度に邪魔が入ったりタイミングを逃したりこのこれまでだったんだよ」

その度に、あたしはとばかり受けてたんだけど...、と小早川はまたため息をついた。

「大島って...、」

見かけの華麗さに似合わず、中身は松山次郎だったのか...、と思ったら、少しは同情も沸いてきた。

が、それはそれ、これはこれだ。

「田村くんが、後輩の浅倉さんを思う気持ちは分からないでもないけど、彼女は風間くんのお付き合いを否定したんだし、筋を通して告白した雪乃を風間くんは受け入れたんだし、やっぱり文句をいう筋合いはないと思う」

確かに、それは正論。

「あたしは...、やっと思いが叶った雪乃の気持ちを応援してあげたいって思うんだ」

「そうか。小早川はそうだよな。大島はおまえの大事な友達だしな。けど、俺は、」

ヒビクの親友であり、ヒカル先輩である田村優作は、やっぱこのまま認めるわけにはいかねえ。あいつらの、ヒビクのヒカルへの想いは、俺のあかねへの想いと違わなかったはずだ。

大切なものを傷つたくねえから、とかカッコつけたことぬかして、告げるのに告らずに、付き合えるのにそこまで持っていかねえで自分の気持ちを封じ込めたヒビクは、可笑しいぐらいにヒカルを大切にしていたからだ。

そしてヒカルは、新学期になっても学校に来ないヒビクを心配して、目を潤ませながら俺に言ったんだ。『ヒビク先輩が何か大事なこと隠しているみたいで...、どこか遠くに行っちゃうみたいな気がして...』と。

ヒビクが何を考えて大島を受け入れたんだか知らねえけど、それが、かなわねえと勝手に思い込んでる想いを忘れるためだとか、そーゆー理由でだとしたら、一発殴るぐらいじゃすまされねえ。

「田村くん...、本気で怒ってるんだ...」

「ああ」

「雪乃の気持ち、応援できないんだ...」

「大島の気持ちを考えるから余計なことだ」

付き合ってるにしてもただ拒絶してねえってだけだとしても、ヒビクが、自分に対してもヒカルや大島に対してもいい加減なことしてるのに変わりはない。

「さんきゅー、小早川。そろそろ行こうぜ」

小早川を促して屋上を後にした時、空は焼けるように紅く染まっていた。

21 最後の祭

体育祭、文化祭と秋の祭りが続く本城高校一一。

3年になってやたら落ち着いちゃった俺たち元軽音楽部員の体育祭は、地味の一言。あれ？っという間に始まって、あらら？っという間に終わっちゃったって感じだ。

後夜祭でライブをやる予定もねえからか、ブックキャスルメンバーが集ってることもなかったし、あかねやヒカルたちと絡むこともなく。

それに、ヒビクだ。

ヤツの傍には始終大島がくっついてて、近寄る隙もありやしねえ。大島は俺をカタキか何かと思ってるんだか、やたらと警戒し、俺がヒビクに近づくと、サーッとヤツを連れ去って行っちゃう。

ヒビクもヒビクで、そんな大島の言いなりになってるから、あれから俺たちとヒビクには短くはない距離が出来ちゃっていた。

2年前、よく`響く一ん、ってマドンナ先輩に引っ張られて行っちゃってたヒビクを思い出した。けど、あの頃のヒビクはそれがどこか居心地悪そうで、指をくわえて見ている俺たち非モテ組...いや、正確に言えば当時唯一の非モテだった俺を気にするそぶりは一応見せながら引っ張られていた。

だが今は、ヤツの心は1ミリもこっちには向いてねえ。かと言って、大島にぞっこんって風にも見えない。ただ流されて状況に従っているだけ、そんな風に見える。

だから、訳が分からねえ。

それを問い正したいのに、正さなきゃいけねえのに...

「ちょっと様子を見てようよ。今、風間くんに何かを言っても届かないって気がするよ？」

という、柏木が正しいと思うからとりあえず黙っている。黙っているから、俺たちとヒビクの距離が開いていく。

それから、ヒカルだ。

ヒカルはまったく変わんねえ。ヒビクが大島とイチャイチャやっても顔色ひとつ変わんねえ。いつも通り太陽みたく笑って跳ねて、体育祭では群竹とコンビで敢闘賞を取っていた。

二人三脚やら借り物競争やら、ヒカルと群竹はずいぶんなコンビネーションを見せてくれちゃって、あかねがやきもきしてるんじゃねーかと心配するほどだったが、実際やきもきしたのはどうやらヒビクのようなだった。

借り物競争で、ヒビクより先に走った群竹が`浅倉ヒカル、を借りて来いってカードを引いちゃまい、ふたりは仲良く手を取り合ってトラックを駆け抜けていた。

その後、ヒビクは`黄色いハチマキ、を借りて来いってカードを引いたらしく、`黄色いハチマキを巻いたヒカル、を選んで走っていた。

カードを拾ったヒビクが、間髪を入れずに叫んだ『ヒカル！！』にこれまた間髪を入れずに反

応したヒカル。

変わらないふたりの呼吸を改めて実感した瞬間で、金髪と黄色いハチマキを泳がせてふたりが手を取って走るトラックは、懐かしさに胸が痛くなるほど輝いてて、俺はややホッと胸を撫で下ろしたというのに、それもその時だけの話で、競技が終わるとヒビクは大島に引っ張っていかれちゃったし、ヒカルもそのまま回れ右で群竹や他の仲間がいるところに戻っていった。何事もなかったかのように――。

そして、そんな調子が続いたまま現在に至る。

今日は文化祭。

俺にとっては、高校生活最後のお祭りだ。

3Aの催し物は合唱3曲。というか、日本語、英語、中国語3言語で歌う『本城高校校歌』――。

地味すぎる…。

だが、しょうがねえ。3年ってのはだいたい毎年地味なことしかやってねえ。3Aの場合、とりあえず英語と中国語に校歌を翻訳してるってだけでも凄って評判になっている…はずがねえな。練習もたいしてできてねえし、ほんと、参加するに意義がある、ぐらいな催しだ。

会場は学校隣の公民館だから、俺は早いうちからこっちに来ていた。去年のように常時開店している催しをやるわけじゃないから出番は一瞬だけだし、べつにもう、フィーリングカップル5vs5に行きたいとも思わない。俺の中で文化祭に浮かれる時代は通り過ぎちまっていたから、出番が来るまで公民館の客席借りて寝てるべ、ぐらいに思ってたんだが。

たまには俺にも運が良く回るってこともあるらしい。

たまたまだが、あかねの2Aがやる音楽活劇ってのを観ることが出来た。早くからここでぼけーとしていたのが幸いして、席はど真ん中の良い席だ。今年の文化祭の中じゃかなり前評判がいい催しらしく、開演前になると生徒や一般客たちがどどどとやって来た。

あかねは頑張っていた。

さすが、1年間演劇部で鍛えただけのことはある。俺が特訓してやった発声もしっかり出来るし、音楽活劇…ようするにミュージカルのミニ版みたいなもんだから、歌う場面もある。が、あのほよよんでふわわんなあかねも、大きな口をあけて歌っていた。

だが、そこで気になったのは音響だ。

どうもバランスがよくないし、音割れはしているしで、せっかくの音楽と歌が台無しになっていた。PAなんていないから、自分らで音響セットをしたんだらうけど、会場で聴く音までチェックしなかったんだらう。去年、俺たちがここで『みにくいあひるの子』をやった時は、そういうの、かなり念を入れてやったが、普段慣れてないとそこまで気はまわらねえのかもしれない。

俺がみてやればよかったのに...、と思うと悔しくなった。せっかくのあかねの晴れ舞台が、残念な形で終わっちゃう。

ふと、音を作るPAになりたいと言っていた菜奈美ちゃんを思い出した時、俺は客席から立ち上がり、舞台裏に向かっていた。

・
・

「田村先輩のおかげで助かりました！」

活劇を終えたあかねが真っ先に俺のところに飛んできた。あかねだけじゃなく、他の連中も一緒だったけど...

「いやいや。ちょっと機械をいじっただけだぜ？本番中だからたいしたことはやってやれなかったよ」

実際その通りで、音割れを治してやったぐらいだったが、それだけでも何とかしてやりてえって思ったから、音響係を脇によけて、でしゃばっちゃまった田村くんであります。

「いいえ。途中からどうしたらいいのか分からなくなってパニックしちゃってたんです。だから、本当にありがとうございました」

と、音響係の子が俺に頭を下げた。

まあ、役に立てたならそれでいい。

「じゃ、次は俺たちの合唱だ...。俺は行くぜ？」

「わたし、このまま先輩の合唱見てますね」

あかねのふんわりな笑顔を見て、田村先輩、だらだらモードからキラリンモードにスイッチが切り替わっちゃまったのは言うまでもありません。

◇

そして、あれ？っという間に始まって、あれれ？という間に終わっちゃった3Aの合唱でありました。ちゃんちゃん。

あかねからは、合唱に対して特にコメントもなく、今、俺はあかねが、田村先輩も一緒に行きましょう、って誘ってくれた2Cの『ときめき写真館』にやって来た。

「ヒカルんところは、随分面白いことやってるなあ...」

ハンガーに並んでいるのはコスプレ衣装...もとい、チャイナ服やらウェディングドレスやら近衛兵服やらで、客は好きな衣装を着て、衣装に合わせた背景セットの前で、[本城高校が誇る写真家群竹颯士(ピクチャーライフ大賞受賞賞金10万円獲得!)]にポラロイド写真を撮ってもらえるらしい。それだけじゃなく、出来た写真は手作りのフォトフレームに収めてもくれるらしい。めったに着られない衣装を着て記念撮影してくれるときめき写真館はずいぶんと繁盛していた。

「なあ、ヒカル？この衣装、どこで調達してきたんだ？」

近衛兵服や忍者服なんて、そうそうあるもんじゃねえだろう。

「それは貸衣装屋さんですよ？去年、田村先輩たちが借りた衣装屋さんを先輩に教えてもらったんです」

あ。そうだった。

去年俺は、こんな羽根付帽子を被って、ベル薔薇ベンジャミン田村になったんだった。

ってというか、去年俺が着たテカテカベンジャミンがここにあるじゃんか…。この蝶ネクタイ、びよーんって伸びるんだよな…。

「ドレスはクラスメイトのお姉さんが結婚式に着たものを借りて、チャイナ服は違うクラスの子から借りたんです。あと、長ランは…、」

ヒカルは接客をしながら全てについて説明してくれようとしたが、

「わ、分かったからもういいよ…」

カメラをスタンバイしている群竹が、ヒカルの長話が終わるのを、ややうんざり顔で待っているから止めた。

「群竹くん、疲れてるみたい…。休憩は取れるの？」

「……いや」

「あとで少しクローズするから、そしたら群竹くん解放するから待っててね、あかねちゃん！」

「うん…。待ってる」

――あ～、はいはい…。

シラケモードに切り替わりそうな自分を、よっこいしょと持ち上げて気を取り直し、

「で、あかねはどれを着るんだ？写真、撮るんだろ？」

あかねの気を衣装の方に向けてやった。

「どれにしようかなあ～」

あかねのウェディングドレスなんてめっちゃ可愛いに決まってる。見たいです、ハイ。

田村くんの妄想劇場『純白の花嫁』。

花嫁の隣にいるのは……、そして花嫁が微笑む相手は…。

ちらりと群竹に視線を向けると、ヤツもあかねが選ぶ衣装を気にしている様子……。

――ダメだ。ダメダメ！やっぱ見たくねえし！

「こ、これなんかどうだ？くの一アカネ、って、なんかカッコいいじゃんか？な？これ着て写真撮ってもらえよ、あかね！」

いくらごっことは言え、群竹のためのウェディングドレスなんて冗談じゃないぜ。そんなの見るために俺はここに来たんじゃねえんだから、と執拗に忍者服を勧めてみたが、

「いやだあ、田村先輩！私は…、やっぱりこれです」

あかねちゃん、当然のようにウェディングドレスを選んじまった。

「だよね～、あかねちゃん」

余計なヒカルが、ニヤニヤ顔で群竹を見ながら言い、群竹は照れくさそうに鼻の頭なんかかきやがって。

――田村優作。やっぱ運のない男だったぜ。

目の前で当てられちまって、どーすりゃいいわけ？

いくらなんでも、かわいそうだろ、俺。

けど――。

ドレスに着替えたあかねが嬉しそうに顔を紅くして群竹の前に立った時は、まあしょうがねえなと思ったさ。

――群竹のための衣装...、着られてよかったな、あかね...。

はっ！なんてな！

そこまで神様に懐デカくもねえし、あかねは、一緒に行きましょうって誘ってくれた俺のことなどすっかり忘れちまってるみたいだから、ドレスのあかねをそのままにして俺はときめき写真館を後にした。

――くの一のあかねが見たかったぜ、とほほ...。

・
・

夜になり、文化祭もそろそろお開きかって頃、ホラーハウスをやってた3Fの前を通りかかろうとして、ヒビクがあかねに引っ張られて廊下を向こうに走っていくのが見えた。

ヒビクはドラキュラの役でもやっていたのか、マントを翻して走っていく。そして、あかねの方はなんだか必死な顔をしていたんで、気になって後を追いかけた。

ふたりはときめき写真館の中に入って行った。

廊下の窓からそっと中を覗いてみると――。

「んじゃ、ときめき写真館最後の写真を撮りますから...」

もう、ほとんどくたびれきっているような群竹の前に、ドラキュラのヒビクと、さっきのあかねと同じウェディングドレスを着たヒカルが立っていた。

ヒカルは真っ赤になって下を向いている。

そして、ヒビクもやや呆然としている。

――なるほど。

それで、あかねはあんなに必死な顔して走ってたんだな。

今ここで、ドラキュラ伯爵と花嫁を結ばせるために――。

「...ドラキュラと花嫁だったら...、やっぱポーズは...！」

唐突に、ヒビクはヒカルをひょいと抱き上げた。お姫さま抱っこってやつだ。

その瞬間、群竹はシャッターを切った。ドレスがふわりとなった時、続けてもう一枚――。

ヒビクとヒカル。

ドラキュラと花嫁。

撮影の直前に、群竹が余計な背景セットを取り除かせたからかもしれねえが、まるで切り取った空間に浮かび上がったような眩しい光景だった。

しばらくして、ポラロイドを手にしたヒビクが2Cから出てきて、ここにいる俺に気がついた。

「...田村...。もしかして、見てた？」

ヒビクはバツが悪そうな顔をする。

「ああ、見てた。ずいぶんとドラマチックなシーンだったなあ？ドラキュラ伯爵さま！」

ちょっと意地悪な言い方をしちまったが、まあいいだろう。ヒビクとこーやってふたりで向かい合うのは久しぶりだし、言いたいことはもっともっと山ほどある。

「ヒビク、俺はおまえに...、」

「あのさ、田村...、らい...、」

互いに同時に出した言葉が被っちゃったその時、

「いたいた、風間くん！」

...ったく。

廊下の向こうから大島が走ってきちまった。

俺はべつに大島を嫌っちゃいない。けど、今は真剣に出てくんじゃねーよ！と思った。ヒビクに文句を垂れるチャンスを潰されたってのもあるけど、教室の中にはヒカルがいるんだ。たっ

た今、ドラキュラ伯爵の花嫁になったヒカルがさ。きっとまだ、着替え終わってもいねーだろう。ここに、大島は来ちゃいけねえ。来ちゃいけねえんだよ、俺的に。

「なによ、田村くん。そんな怖い顔して睨まないでよ」

「今ちょっと、ヒビクと話してんだけど」

「あら、ごめんなさい。けど、風間くんが衣装を着たままいなくなっちゃって片付かないって、クラスみんなが怒ってるんだもん」

大島はちっとも、ごめんなさいな顔をしてねえし、もうすでにヒビクの腕を取って引っ張っていく体勢を整えている。

「そうか。悪い...」

ヒビクも大島に従い、引っ張られていくつものようだ。

――ざけんなよ...っ。

「おい、ヒビク！おまえ、今俺に何か言いかけたんじゃねえのか？」

「...ああ...、後で言うよ」

「今、言えよ、ここで！」

そう言い切ると、ヒビクは大島の引力に抵抗してピタリと止まった。

「ここで言えよ、ヒビク」

ヤツの目を見据えてやると、ヒビクは俺から視線を外すかのように2Cの教室に目を向けてから言った。

「来週、例の幼稚園でやる人形劇、ヒカルが見に来てくれって...。俺と...、」

ヒビクは一旦言葉を止め、大島をちらりと見てから、

「.....田村に」

と、続けて結んだ。

「ヒカルがお前にそう言ったのか？人形劇を見に来たって？」

「ああ。俺たちはスタッフってことにするってさ」

いつの間に、ヒカルはヒビクにそんな話をしたのだろう。

こいつの隣には、こーやって常に大島がへばりついてるっていうのに。

「なにになに？浅倉さんが人形劇をやるの？あたしも見に...、」

「ダメだ」

大島に最後まで言わせねえで、ヒビクは低い声で言った。

「どうして？あたしも見たいよ、人形劇！一緒に行ってもいいでしょ？」

「断る」

今度もヒビクはハッキリと言い切った。

「うそ、なんで?!」

大島は、納得いかないって調子でごねるが、ヒビクはもうそれ以上は言わずに先を歩き出した。

「おい、ヒビク！」

ヒビクはひょい、と振り向いて、

「ってことで、来週の開校記念日、あけとけよ？」

また、さっさと行っちゃった。大島がばたばたと後を追いかけて行った。

やっば、ヒビクは何か考えてやがる。大島と一緒にいるのもたぶん、ヤツなりの理由があるんだろう。

さっき、ヒカルを抱き上げたときのヤツは、どこまでも優しい、けど、何かを思いつめたような目をしてヒカルを見つめていた。

あれはやっば、嘘じゃねえ目だ。

来週か――。

大島が来ないなら好都合。

もう、ヒビクに秘密主義はゆるさねえ。

ヤツにもあるはずのジュンとピュア、キララのハートを、俺が、田村優作が思い出させてやるぜ。

来週、11月22日は開校記念日で学校は休み。ヒカルの人形劇がこの日、近所の幼稚園で公演をすることになっている。

夏、ヒカルん家で公演した時、観に来ていた父母会長って人が、幼稚園で人形劇を子どもたちに見せてあげたいとヒカルに依頼。けど高校生が平日に公演には行けないからどうしよう？と悩むヒカルに、開校記念日なら行けるだろう、と助言したのはヒビクだった。ヒカルはヒビクの言うとおり日程を決め、幼稚園側と打ち合わせて来週の公演が決まったというわけだ。この公演はヒカルにとっちゃ去年のコラボレーション以上の意味があるに違いない。

それに、俺があかねと『ハッピーサマーコンサート』を進めている頃、ヒビクはヒカルの台本を見てやったりなんなり助けてやってた。って考えると、ヒビクは最初から人形劇プロジェクトに関わっているということになる。ヤツがスタッフという扱いでヒカルに招かれるのは当たり前の話だ。

「そう言えば、俺がヤツとまともに話をしたのは、この夏の公演が最後だなあ...」

「ん？ああっ？わわ、おい！お前、なにやって...っ」

このあと、ヤツはすぐにヤボ用とやらで行方不明になり、新学期になってからは3週間も学校に来ねーで、来たと思ったらどういうわけか大島を横にくっつけて、そのワケわかんねえ行動に対してヒビクは何も言わねえ秘密主義を貫いてるから俺たちとヤツの間に溝が出来ちまい、現在に至ってる。

けど、大島が隣にくっつけていることは拒絶してねえヒビクでも、この人形劇公演について来ることはあんだけキッパリと受け入れ拒否したんだ。夏休みのあの日からヤツにいったい何があったのか.....、

「.....俺もそろそろマジで問い詰めなきゃなんね一時期だろ」

「おい、田村あ？」

「.....んでもって、鳴り続ける不協和音に終止線を引っ張らせねーとな。.....ったく、世話を焼かせやがるぜ...」

「おーい、たむらー？溢れそうだぜ？！」

「...んだよ、うるせえな」

「だから、溢れるってば！」

「なにが！」

「珈琲牛乳が」

あ。

右手にある珈琲牛乳が左手に持つ弁当箱の中に注がれ、珈琲ぶっかけ弁当が出来上がっちゃってた。

「うわ！何やってんだ俺！？」

「新しい弁当の食べ方かよ、それ？」

「んなわけねえだろ！見てたなら止めろよ！」

「一応、何回か声かけたんだけど？」

う。

考え事に没頭しすぎて珈琲牛乳を醤油瓶かなんかだと勘違いしちゃったのか。

「はあ…。弁当も珈琲牛乳も全滅じゃん…」

「もしかして、こっちをかけたかったわけ？」

松山弟が醤油袋をよこしたが後の祭りだ。俺の弁当は既に珈琲牛乳の海に沈んでる。

弁当箱の、揚げ物とウィンナーとたくあんと珈琲が混ざり合う微妙な香りを嗅いだら一気に食欲も失せ、そのままフェンスにもたれかかり、空を見上げた。

今日は秋晴れ。

真っ青な空がどこまでも続く昼休みの屋上で、松山ブラザーズ&柏木とランチ中だ。

珈琲牛乳に没しちゃった弁当箱をそのままにしていると、ほら、これ食べなよ、と柏木が購買ジャムパンをひとつ恵んでくれた。

「おお。悪いなあ、柏木」

「どういたしまして」

ニッコリと、背中に薔薇の花を開かせて笑う柏木は真っ白バージョンだが、いつもここに一緒にいるはずの小春ちゃんはいない。最近はふたりが一緒にいるところをほとんど見てもいない。夏に降臨したブラックな一件が原因なんじゃないかってことは薄々分かってるけど、小春ちゃん不在を突っ込んで訊くのも気が重いからそのままにしている。柏木といいヒビクといい、裏があまりすぎるぜ。

どうしてこんなふうになっちゃったんだろうなあ。

1年前の頃は、『みにくいあひるの子』制作に向けてワイワイガヤガヤと、みんなで楽しくやってたのにさ。

ヒビクがいて、当たり前前にヒカルもいて、柏木の隣では小春ちゃんが控えめに笑ってて――。

――はあ…。なんだかなあ～だろ、まったく…。

流れて行く雲を見上げながら、ジャムパンの袋を破こうとしたとき、

「……太郎くんさあ。それ、何で持ち歩いているわけ？」

心の底から呆れきった柏木の声に釣られて、松山兄の所持品に視線を向けた。

「げっ！何だよ、それ！」

兄が持っていたのは、文化祭で2Cがやってたときめき写真館で撮影したポラロイドだ。

写っているのは松山兄本人だが、着ている衣装はセーラー服。しかも、スカートをギリギリまで短くあげて、生足出して、ぶりっ子ポーズをキメている不気味なシロモノ。

「心霊写真よか怖い...」

「変態バカだな」

横から覗き込んできた弟も呟く。

「いいじゃねーかよ！記念なんだから！」

「何の記念だよ...。涼子さんにフラレても知らねえぞ？」

「だいたい、いつの間にこんな写真撮ったんだ、このバカは。」

「群竹とかヒカルとか、止めなかったのか、このバカを。」

「セーラー服を着て写真撮れるなんて、文化祭ならではの記念だろーが！」

最近の松山兄は、夢の実現に備えて人が変わったように勉学に勤しんでいるが、本質はちっとも変わっちゃいねえってことがよく分かった。そもそもその夢ってのが、涼子さんと同じ大学に入って毎日イチャイチャしたいっていう不純なものだけだ。

「だからと言って、この生足はないでしょう...」

俺の生足のどこがいけないんだ、と兄は柏木に抗議する。

「生足以前に、あんだけあった衣装の中からセーラー服を選んで着るってことだけでも、おめーの変態さ加減を物語ってるだろ」

これが双子の兄貴かよ...、と弟は背中を丸めて深い深いため息を吐いた。が、

「けどよ？麻耶ちゃんだって長ラン着て撮ってたぜ？そっちはいいわけ？」

の言葉に、弟の丸まった背中が一瞬の間にしゃっきり伸びた。

「ままま麻耶ちゃんが長ラン！？」

「おうよ。俺の前に撮影してたぜ？セーラー服の俺が変態だっていうなら、長ランの麻耶ちゃんだって変態だろうが！」

「全然違うだろっ！」

「まったく違うな」

「それは違うでしょう...」

弟、俺、柏木の声が同時に被って、兄に異議を叫ぶ。

セーラー服生足変態男子と、凜々しき長ラン女子高生じゃ比較になりもしない。麻耶ちゃんの長ラン姿なら、さぞかし似合っていたことだろう。そのまんま応援団長でも出来そうなくらいにさ。

けど、ヒカルたちのときめき写真館は、今年の文化祭の中でもかなりの好評を得ていた。クラスの連中もドレスやら近衛服やら着て撮った写真を持ってたし、柏木だって長ランで撮った写真を俺に見せに来た。まあ実際、柏木のそれはあんまり似合っちゃいなかったがな。

それからあかねもウェディングドレスを着て群竹と見詰め合って……。

……。

——……やなこと思い出しました。

あかねには、くの一になってもらいたかった。忍者がやなんだったら、セーラー服だってよかったぜ、あかねならさ！赤いリボンひらひらさせたセーラー服のあかねってのも可愛いに決まってる。`嗚呼、青春の女神！、だろう、あかねなら！生足だってキレイに決まってる。こんな毛むくじらの野獣生足とは段違いに！

「そんなに見つめてんなよ、たむどん。照れるべ」

`セーラー服と野獣、が視界からススッと消えた。

目の前で兄が自分の生足写真を大事そうに抱きしめながら、お目目ぱちぱちしてた。

途中まで開けていたジャムパンだったが、おかげさまで食欲減退。俺の昼休みは、胃袋に何にも収めることなく終わった。

◇

放課後。

松山兄は英語の補習を自主的に受けるってんで残り、弟は進路相談室にお呼び出し、柏木は図書室でお勉強、ヒビクは言うまでもなく、俺は独りとぼとぼと家路についた。

商店街に立ち並ぶ店のウィンドウを適当にチラ見しながら歩いていたとき、あどけなく真ん丸い目ん玉と俺の目が合った気がして、ふいに立ち止まる。

「ん？」

今見たまん丸目玉が何なのか、その時は分からなかった。左右のウィンドウをきょろきょろ見ていたから、目が合ったのも一瞬だったからだ。

で、もう一度よく周りを見回して、まん丸目玉がペットショップのウィンドウ奥にいるポメラニアンだと分かった。

わんこは狭いガラス箱の中で、尻尾を振りながらくるくる回っていた。時々俺のほうをじっと見て止まり、またくるくる回りだす。キャンキャン吼えているみたいだが、外までその声は聴こえてこない。

——か…、可愛いんですけど…っ。

で、つい店の中まで入って来ちゃった。いらっしゃいませ、と店員に言われたのが、ちょっと居心地悪い。俺んちはペットなんか飼ってないし、この店で買えるものなんて一個もねえからな

。けど、ガラス箱の中にいるわんこは、俺の姿を見ると、まるで前世から待ちわびていたぜ、とでも言わんばかりのはしゃぎ方で歓迎してくれちゃって。

「よう！」

店員があっちに行ったのを確認して、俺はそのわんこに声をかけた。きゃん、と返事が返って来た。

——ダメだ…。可愛くて。

まん丸い目。ふわふわな毛並みとコロコロ体型。

そんなのが、ちっさなガラスケースの中で尻尾ふりふりくるくるダンスをしてるんだ。持って帰っちまいたい、マジで。

「おめーは何て名前だ？」

「きゃん！」

「そーか、きゃんかあ！」

なんて会話をわんこしているとき、あっちに行ってた店員がこっちに戻って来ちゃった。

今、店の中のこの場所に、客は俺しかいない。

もうちょっときゃんと遊んでいたいと思ったけど、怪しまれちゃうのも何だし、

「んじゃ、元気でいろよ。きゃん。いい人に飼ってもらえ」

と言葉をかけて立ち去ろうとすると、

「くうん……」

きゃんは、この世の終わりのような寂しげな声で鳴きやがる。心なしか、まん丸な目玉もうるうるしてるように見えて、それがまるで、迷子の仔犬みてーに頼りなさに目を潤ませて俺を見るあかねに似ていて、

「そんな目で見るとんじゃねえよ、アカネ。また来るからさ」

思わず、わんこの名前をそう呼んじまった。

呼んでから、とてつもなく恥ずかしくなった。けど、

「んじゃな！ア…アカネ」

もう一回そう呼んで、俺はペットショップを出た。

なにやってんだべ、田村優作。

ペットショップにいるわんこにあかねとおんなじ名前つけて、ネクラすぎるだろう。

けど、癒されたぜ。

ヒビクのこととか昼メシ抜きとかセーラー服生足変態男子とかで疲労しきってた心に、ポメラ

ニアンのアカネは暖かな安らぎをくれた。

◇

で、一昨日も昨日も今日もアカネに会いに、こっそりとペットショップに立ち寄ってる田村くんであります。

さすがに何も買わない男子高校生が、毎日売り物のわんこのところに遊びに行くってのも怪しすぎるから、今日は金魚のエサを最初買った。金魚なんてウチにはいねえんだけど。

「おーす！まだいたかあ！」

「きゃん！」

「俺に会えなくて寂しかったんだな？」

「きゃんきゃん！！」

「そうかそうか、可愛い奴め〜！」

「きゃんきゃんきゃん！！」

アカネは絶妙なタイミングで返事を返してくる。これがなんとも心地いい。

いいんだけど、ややせつない。

コイツはペットショップで売られているわんこだ。いつかは誰かに買われて行っちゃう。それはもしかしたら明日かもしれない。

いつものようにここに来て、空っぽになったこのガラス箱を見たときの自分を想像したら、それだけで呆然としちまった。

アカネがここからいなくなる。

俺の前からいなくなる。

それは、ダメだろ。泣いちゃうぜ、俺。

「...ってことで、名前を変更するぞ」

「きゃん！」

名前を変えようが何しようが、このわんこがいなくなっちゃったらそれだけでツライのは確かだけど、それがアカネじゃ寂しさも倍増だ。俺じゃない誰かに攫われちゃうあかねはひとりだけでいい。

けど、いざ別の名前をとなると難しい。アカネはとっさに呼んじまった名前だったけど、今またとっさに頭に浮かんだ名前は、

「サスケ」

アカネ→最近のあかね→文化祭→くの一のあかねが見たかった田村くん→忍者→忍者っぽい名前→猿飛サスケ

この連想が一瞬のうちに頭の中を駆け巡り。

「よおーし、サスケだ！」

「きゃん！」

わんこの了承を得たんで、こいつは今からサスケになった。

店員が近くにいないことを確認しながら、サスケとずいぶん語り合った。

きゃんきゃんとケースの中を飛び回るサスケだが、俺が話かけるとちゃんと止まって首をちょこっと傾げて話を聞くこいつは、かなりおりこうさんなわんこだ。

「おめーがここからいなくなっちまったら、俺、どうしようかなあ〜」

「きゃん？」

「俺が飼ってやればいいんだけどなあ…」

けど無理だ。こいつは13万出さないと、田村くんのものにはなってくれないわんこののだ。

――あかねは俺には遠いなあ、やっぱ…。

心の眩きと共にため息が出ちまった。が、

「違うだろなあ！おめーはサスケだ！」

「きゃんきゃん」

ざっと30分は遊んだか。

そろそろ帰らないと、店員もこっちをチラチラ見てやがる。

けど帰り際が一番大変なのだ。

俺が去ろうとすると、サスケはとんでもなく寂しげに鳴く。すると俺も立ち去りがたくなっちゃってなかなかこの場から動けない。明日はもうここにはいねーかもしれないって思ったらいたたまれなくなっちゃって、立ち上がったたりまたしゃがんでみたりを何回か繰り返し、やっとペットショップを出るって感じだ。

「じゃ、本当に帰るぜ！明日も無事にここにいろよな、サスケ！」

「きゃん」

断腸の思いで外に出て、後ろ髪を引かれながら商店街を駅に向かって歩いていると――。

「……なにやってんだ、あいつ？」

道の真ん中で尻餅をついてるホンモノのあかねがいた。

余所見でもしてつまづいたか人にぶつかったか、そんな感じだが、どっちにしてもあかねらしい。

「...あかね、大丈夫か？」

ひょいと腕を引っ張ってやったら、あかねはひどく驚いた顔で俺を見上げた。

「た、田村先輩っ！？」

「な、なにそんなに驚いてんだよ」

「い、いえ、べつに...」

あかねは何故か真っ赤な顔をうつむかせる。

「なんか変だぜ？そういえば今日はひとりか？むらた.....」

言いかけて、あかねが手に持っていたペットショップの袋に目が行った。さっき、俺も金魚のエサを買っておんなじ袋をもらったから間違いない。

ってことは――。

――もしかして？！

あかねは俺の視線を感じたのか、袋をさっさとカバンの中にしまって、あはは...と笑った。

「見られちゃったか...」

「い、いえ！わたし、何も見てませんよ？先輩がサスケと遊んでるのなんか見てませ... あっ」

――やれやれ...

「た...、たまたまです！うちで飼ってる熱帯魚のエサを買いに寄ったら、たまたま田村先輩が！」

まいったな...。やたらと真っ赤な顔して言い訳するところを見ると、相当俺とサスケの光景が滑稽だったということか。

「そ、そうか...。帰ろうか、あかね」

「は、はい...」

ゆっくりとあかねを立ち上がらせて、制服についた埃を払ってやった。

「ありがとうございます...」

「なんだってこんなところで尻餅ついてたんだ？」

「オバさんにぶつかって飛ばされちゃって...」

ぶはっ！と吹き出したら、あかねもくすくす笑った。

「サスケ、可愛かったですね、先輩」

「あ...、ああ」

「仲よし...なんですね、サスケと」

「お、おお...」

めっちゃ、バツが悪いぜ。あんなとこ、あかねに見られちゃうなんてさ。

それにしても...

——名前付け替えててセーフだったぜ...っ！

アカネのまま呼んでるところをあかねに見られちまってたらどうなってただろう、と思うと血の気がサーッと引いていった。セーラー服生足変態男子に匹敵するぐらいの、ネクラ変態ぶりを見せちまうところだった。だろ。

「先輩？どうしたんですか？顔色よくないみたい...」

「そうか？そんなこと...、」

「ありありです——。」

「そ、そういやあかねんちは、金魚飼ってるのか？」

「あ、はい。熱帯魚ですけど...」

「んじゃ、これやるよ」

さっき買った金魚のエサをあかねにくれてやった。俺には必要ないものだ。

「え...と...？」

あかねは不思議そうな顔をしてから、ひとり納得したみてーに、ふんわりと笑った。

「ありがとうございます、先輩」

もう空は茜色。

明日もサスケはあそこにいるだろうか。

明日もあかねは俺の隣に...、

——そっちはさすがにいねーだろ！はっ！

あかねとふたり商店街を並んで歩く今日は、ほんのちょっとラッキーでほんのちょっとせつない田村くんでありました。

今日は曇り空の上に木枯らしがびゅーびゅー吹きまくるやたらと寒い朝だった。

俺とヒビクは開校記念で休日の本城高校まで行き、そこでヒカルや綾瀬たちと合流、近所のすずらん幼稚園ってところにやって来た。

そして今、水色のスモックとカラフルな体操帽を被ったチビッコたちに囲まれている。

真っ先にヒビクを見つけたヒカルの弟が、「あーっ、キンパツゴーストとその子分のに一ちゃんだ！」と黄色い声で叫んでチビッコ仲間を引き連れて寄ってきちまって。

どうでもいいけど、`その子分のに一ちゃん、って呼ばれ方はどうよ。微妙に萎える。`たむどん、より萎える。

チビどもは、「キンパツゴーストどこどこ?」「ほんとにキンパツだー」「キンパツゴースト、超カッコイイ~」「わーいわーい！キンパツゴースト~！」などなど、ヒビクひとりヒーローにしちまい、`その子分、はあからさまにオマケ扱いだし。

「お、俺はどう対応すればいいんだ...。またキンパツゴーストになりきらなきゃならねえのか？」

ヒビクは次々に集まってくるチビッコたちへの対応に困惑しまくちちまっている。

「田村、黙って見てないでコレ何とかしてくれよ。ヒカルはどこに行ったんだ」

ファンの女の子たちからの`響く一ん、には涼しげに対応できても、純真なお子様の`キンパツゴースト~、にはどう応えればいいのかやらってところだろう。こんな風におろおろしているヒビクの見るのは、妙に心地いい田村くんであります。

「ヒカル？さあな。劇の準備してんじゃねーの？こんな時ばっかヒカルを頼らねえで自分で何とかしろよ」

廊下の向こうでヒカルがこっちを見ているのは知っていたけど、ちょっと苛めてやるとヒビクは絶句しちまった。けど、いいだろうこれぐらい。

「こらーっ、みんなーっ！静かに待っていないと人形劇はじまらないわよー！！」

ホールの入り口付近でワイワイ集まっちまってるチビッコたちを一喝したのは若い先生だった。髪をふたつに結わいてピンクのエプロンをつけて、いかにも幼稚園のセンセーって感じで可愛い。

が、今まできゃぴきゃぴ騒いでいたチビッコたちは、この一喝だけで素直に「はーい」と返事をし、それぞれの教室に駆け戻っていく。

「すげえ。さすがプロ...」

思わず口に出ちまった。

「鮮やかだねえ...。幼稚園のセンセってのは気分よさそうだなあ」

「そうでもないわよ。毎日が格闘技なんだから」

ヒビクの脳天気な呟きをぶった斬る手並みも鮮やかなり。やっぱ`お子様、扱いのプロだ。ヤツは、あはは...、と笑って誤魔化し、そのままホールの中に消えて行った。ホールでは綾瀬たちが人形劇用の舞台を作っている。スタッフとして参加している俺たちも手伝わなきゃいけない

のに、ここに到着した早々にチビッコたちに捕まっちまっていたからな。

「準備が出来次第、子どもたちをホールに入れますので声をかけてくださいね」

「あ...はい。そう伝えておきます...」

スタッフだけどちっとも役に立ってねえ俺は、さっきのヒビクじゃないがヒカルの姿を探した。さっきは廊下の向こうにいたはずだ。

いた。

ヒカルは、ダンボールの箱を抱えて玄関からホールに続いているこの廊下の先に突っ立っていた。

劇に使う背景とか小道具を、ヒカルの親父さんが車で配達してくれたらしく、今、群竹とあかねがそれらをホールに運び込んでいる。ヒカルもその途中だったようだが、なんだかぼんやりと佇んじまってて。

「ボケッとしてどうした？大丈夫か？」

肩を叩いてやると、ヒカルはぼんやりしたまま俺に顔を向けた。

「え...、あ、はい。なんか、ヒビク先輩のああいう雰囲気を見たの、久しぶりだなって思って...」

ヒカルの視線の先には、ホールの入り口で綾瀬たちをかまっているヒビクがいた。

「まあ、そうだな。あいつ、最近おかしいし」

「ヒビク先輩、今日は雪乃先輩と一緒にじゃないんですね...」

真っ直ぐにヒビクを見つめ微笑んだヒカルが、だからこそとてつもなくせつなく見えた。

「ヒカル...」

新学期になってからこっち、ヒビクと大島がどんなに密着していようがヒカルに様子の変化はなかったけど、そんなのは嘘っぱちだったってことが今の一瞬で分かっちゃった。

ヒカルは、ぼろりと出ちまった自分の言葉に自分で焦っちゃったようだ。

「あ、いえ、何でもありません！荷物運んじゃわないと！」

顔を引きつらせながら、そそくさとその場を立ち去ろうとしたヒカルの腕を、俺も思わずつかんじまった。

「田村先輩？」

「大島、一緒に来たいって言ってたんだ。けど、ヒビクがそれを断ったんだぜ」

「え？」

「けっこうごねてたけどな、大島は」

あの時、ヒビクは大島に口を挟む隙を与えずに、`ダメだ、`と言い切っていた。ヤツにとって特別だと考えているはずのヒカルの人形劇には部外者を介入させたくないという思いからなのか、それともヒカルと共有する時間そのものに大島の存在を挟みたくなかったのか、理由はどうであれ、ここに来ることを許さなかったってのは事実だ。そのことはヒカルに伝えてやりたかった。ヒビクは本気で大島といるわけじゃねえんだってこと、知らせてやりたいって思った。なのに、

「そうなんですか…。一緒に来ればよかったのに…」

こいつも心にもないことを口に出しやがる。

「本気でそう思ってるのか？」

「…思って…ますよ。当たり前じゃないですかっ」

ぺこり、と俺に頭を下げてヒカルはまるで逃げるようにホールの方に走っていった。

「…ったく、どいつもこいつも…！」

—なんでもこうも素直じゃねえんだ！

「田村、そんなところで遊んでねえでこっちを手伝えよ！」

ホールでヒビクが呼んでいる。

「遊んでなんかねえよ…」

ったく人の気も知らねえで好き勝手言いやがる、と思ったが、とりあえずスタッフとしての仕事をするため、俺もホールに向かった。

◇

人形劇は舞台や小道具たちが改良されていたし演技にも広がりも出ていて、ヒカルんちで観たものからずいぶんとレベルアップされていた。それに100人近いチビッコたちの歓声に加わって迫力も満点。劇団のそれと大差ないと、先生たちにも大層喜ばれて終わった。

だが、ヒビクの様子がおかしい。

始まるまでは、綾瀬をイジって遊んでみたりヒカルを激励してみたり、普通のヒビクに戻ったかとも思ったのに、今はまた陰気なオーラを纏っただんまりに逆戻り。たった30分ほどの劇の間に変わっちゃった。

「いったい全体、どうしちゃったわけ？」

もう、にこりもしないヒビクに訊いてみても、べつに、と答えるだけだ。

「なんかあった？」

「——いや」

返事があるまでにずいぶんな間があった。そして、そこからは何を訊いても何を言ってもヤツはどこか上の空で、曖昧な返事しか返して来ねえ。結局それが地元に戻ってくるまで続いた。

これじゃ今は何を言っても無駄だろうから、とりあえずはそのまま別れた。

けど、俺ももう、このまんまにしておくつもりはない。

明日からまた、ヒビクと大島の茶番を見るつもりはねえし、ヒカルをあのままにしておくのもツライ。いつまでも素直じゃねえヒビクとかヒカルを見ているわけにはいかねえ。

ってことで仕切りなおし。

気温が一段と下がり、ヤツの頭も冷えただろう夜になってからヒビクんちに斬り込みに行った

。

「こんな時間に何だよ...？」

あからさまに迷惑そうな顔をしたヒビクが出てきた。部屋の奥からは「田村くん、寒いからあがってねー」と、ヒビクの優しいおふくろさんが誘ってくれたが、これから俺がコイツにしたい話は、ぬくぬくした部屋でまったり話す内容じゃねえから、

「ちょっと顔貸せよ。おまえにはたんまりと訊きたいことがあるからさ」

ヤツを屋外へ誘う。

「訊きたいことって何だよ...？」

「本気で分からねえわけ？だとしたら、おめーは相当なバカだな」

俺の真剣（マジ）が伝わったのか、ヒビクは一瞬言葉に詰まってから黙って誘いに乗ってきた。「あれ？ふたりしてどこに行くのー？」と、おふくろさんが奥からパタパタ走ってきたけれど、ヒビクは答えずにドアの閉め、先を歩く俺の後について来た。

「で、どこまでついて行けばいいんだよ」

「どこまでも！」

「.....ガキみてえなこと言ってんなよ」

「どこかのお子様ランチと違って俺は普通のガキだから」

「...突っかかりやがって」

ふたり同時に立ち止まったところはちょうど公園だった。最初からヒビクとはここで話をするつもりでいたから、そのまんま公園の中に足を進めると、ヒビクも渋々ついてくる。木枯らしは止んでいたが11月の夜は冷える。ヒビクは両手をブルゾンのポケットに突っ込み、肩を上げて寒そうに凍えていた。

「田村も物好きだな...。夜の公園なんか連れ込んで俺を襲うつもりか？」

俺が何を言いたいのか分かっているくせに、話す前から論点を反らそうとするようなヒビクの軽口にカチンと来た。こいつはいつもそうだ。触れたくない部分に触れられそうになると、口も態度も軽くなってそこに近づけまいと自分で防壁を作る。

「いい加減にしろよな、ヒビク。バカじゃねえか、おまえ！」

とうとう怒鳴っちゃった。

ヒビクは「バカ」にカチンときたらしい。闇の中でヤツの瞳が光り俺を見据える。けど、俺も退かねえ。ここまで来たら、今まで我慢してた言いたいことを全部ぶちまけるつもりだ。

「最近のおまえが変だってみんな分かってるけど言わねえだけなんだぞ?! 秘密主義もいいけど、カッコつけんのもいいかげんにしろよ！」

「べつに...、カッコなんかつけてねえよ...」

ヒビクは拗ねたガキのように言ってから視線を遠くに飛ばし、顔を背けた。

「話したくねえってんならいいよ、聞かねーから。けどな！辻褄が合わねえことやってんじゃねーよ！ヒカルが好きなんじゃなかったのか？何でそこすっ飛ばしていきなり大島と付き合ったりしてんだよ!？」

「大島とは付き合っちゃいないさ...」

ヒビクにしたらそうなんだろう。こいつの心が大島にあることじゃねえのは分かっている。だが、

「学校の行き帰りも一緒、昼メシも一緒、教室でもいつでもどこでもおめ一の隣には大島がいやがる。そのどこが付き合ってるってねえっていうの？誰がどう見たっていちゃいちゃカップルだろーが！」

いくら非モテの俺だってそんぐらいのカップル方程式は知っている。付き合っていないと言いながら、周りが認識するぐらいに堂々とカップルごっこをやってるなら、そっちにだって問題大有りだろう。どっちにしたってこいつの今の行動はめちゃくちゃすぎて納得できるもんじゃない。

「何、熱くなってんだよ田村.....」

ヒビクは、はぁ...とおもむろにため息を吐いた。

「悪かったね！おめ一は涼しすぎだろが！余裕がないくせに余裕ぶって、だからカッコつけてって言ってんだよ」

「余裕がないのに余裕ぶってか...。よく分かってんな、田村」

やや自嘲気味に笑い、ヒビクはまた息をひとつ吐いた。

「けど...、余裕ぶっちゃいねーよ。マジで余裕がないんだ。自分にも時間にも...」

「時間にも？どうゆうこと？」

そのまんまの意味、とヒビクは呟いた。

「今のままの俺じゃ全然ダメだろ...。俺はもっと自分を光らせねーとき。だから...、」

「ちょっと待て。何が全然ダメなんだ？」

確かに、今現在のヒビクを言えばダメダメだろう。だが、こいつが言ってるのはそれじゃないようだ。

「風間響って人間」

「は？9月からのおめ一の奇行は自分否定に帰結すんのかよ？」

「.....」

ヒビクは黙っちまった。

自分をダメだって思うのはべつにいい。そんなの俺だってしょっちゅう思い知らされてへこんでいる。だが、自分をダメだと思うのと、ヒカルや大島の想いを巻き込んでる今のヒビクの状態はどう考えても無関係だろう。

「もう一回訊くぜ？時間に余裕がないってどういうこと？何が全然ダメなんだ？おまえが何を考えてんだか俺にはちっともわかんねーっ！」

「おまえに分かってもらえなくてもしよーがねえよ...。俺の価値観、俺の問題だから...」

「はあっ！お前はいつだってそうだよ！自分一人で生きてみたい顔をしてさあ！お前と俺の価値観にいったいどれだけの違いがあるっていうんだ？！」

自分否定の次は価値観ときやがった。その価値観ってやらのせいでヒカルにあんな顔させてるんだとしたら...

「ヒカルはおまえのお宝だったんじゃないのかよ...」

以前、こいつは自分の口でヒカルを宝だと言い切っていた。だからこそ、その輝きをくすませないために独占することを選ばずに、どこまでも見守っていく先輩って立場でいる自分を選んだはずだ。

「好きでもないヤツと付き合うふりなんかして、その大事な宝がどんだけ傷ついて...、」

「宝だよ！一番大事な宝だよ！」

突如叫んだヒビクの声が夜空を突き抜けていった。

「けど、俺だけのものにはならねえ宝なんだよ！」

唯一しかないのに独占できない宝物。独りが持つには眩しすぎる宝物。それがヒカルだとヒビクは呟いた。

「...ヒビク」

ふいにヒビクが触ったシーソーがきしみ、キィと大きな金属音を鳴らした。冷えた外気がさらにその音を浸透させるのか、やたらと周囲に響き渡り、ヒビクと俺はとっさに顔を見合わせた。

「かなりデカイ声で怒鳴りあっちゃったなあ...」

こんな金属音とは比較にならないぐらいの大声で、バカだとか宝だとかずいぶんと恥ずかしいことを一一。

「ご近所さんに通報されてたりして...」

「中学の時、似たようなことがあったなあ...」

ヒビクや松山兄弟たちとのいたずらが過ぎて通報されて...

「おまわりさんから逃げ回ったねえ...」

ヒビクも懐かしそうに目を細めて呟く。

まだ、4人がつるみだしたばかりの頃の話だ。

「中学の時、おまえとか太郎次郎に出会うまでの俺はさ...、やたら尖がっていただろう」

目の中に懐古の色をにじませたまま、ヒビクはぼそりと呟いた。

もうずいぶん前のことだし、今のヒビクに慣れちまっているから中学時代のことは思い出そうと意識しなければ出てこないが、ヤツの言うとおりで。

学生服に映えすぎる鮮やかな金髪。

父親の無い私生児。

風間響って人間を、周りはそう形容し色のついた眼鏡でヒビクを見ながら陰口を叩き、そんな連中を冷ややかに睨み返していたヒビクは確かに見かけも中身も尖っていた。

けど、

「そうしてないと自分を見失っちゃいそうだったお前の状況は理解してるつもりだぜ？」

それほどに、あの頃はヒビクに対して周りの風当たりが強すぎた。だから、

「見失わないで、誇りを守ってきたお前のことを尊敬もしてる。照れるけどな」

我ながらクサイ台詞だぜ。

照れるどころの騒ぎじゃねえこと言ったかもしんねえ。だが、これは俺の本心だ。

ヒビクはいかにもバツが悪そうに、ハッと笑いやがった。

「言われる方も相当照れるぜ…。俺は冷めた顔の下に隠した腹の中で、生き別れになった親父のことをどうしようもなく憎んでたし、俺を侮蔑してた連中のこともいつか見返してやるって思いでいた。俺はそういう醜悪な心を持ち続けていたんだぜ…」

「それは普通だろ？おまえの境遇なら俺だってきっとそうだったぜ」

「普通…、そうだな。それが普通だったのかもしれない。けどな…、ヒカルは俺に言ったんだよ。親父に感謝する、って…」

「感謝…？」

「ああ。それもごく自然に、まったく自然に言ったんだよ。俺がここに生きているのは親父のおかげだ、俺の音楽は親父から受け継いだ財産だ、俺の名、`響、は`ヒビク、で俺らしく堂々と響いているってさ…」

「おめーら…」

いつの間にそんな濃い話をしてたんだ。

もしかして、ヒカルはヒビクの親父がジャック・ベリーだってことも知ってるのか？

そういや、ジャックのコンサートにヒカルを誘ってやがったしな。結局ふたりでコンサートは聴いてないとか何とか、ヒビクは言っていたけれど、そういうことを俺にはちっとも話さねーでうやむやにしたままにしやがって。

「ヒカルが言った言葉は俺の普通じゃなかった。ヒカルのあの一言で俺はいろんな意味で解放され、だから『ライジングサン』が出来た」

「ライジングサン…って、じゃあ、あの時か…」

一年前の合宿だ。

「そ。あの時、ヒカルと早朝の湖畔を散歩しててさ…。あいつ国宝級音痴の癖に、俺の音楽について色々鋭いこと言ってくれちゃって。そのひとつひとつが胸に響いたぜ」

合宿の時はまだ、ヒビクも自分の親父さんがジャックだとは知らなかったらしい。自分とおふくろさんを捨てた親父さんを恨んだままでもいたらしい。けど、ヒカルはヒビクの親父さんに感謝すると、普通に言ったそうさ。

「目からうろこって言うんだろうな。ヒカルの言葉ひとつで視野が開けた。それまでくすぶっていたものが燃え尽きて、ライジングサンが生まれて…」

合宿所の談話室で、楽譜に歌詞を書き込んでいたヒビクの晴れやかな顔が浮かんできた。あれは、まさに夜明けと共に昇っていく太陽のような顔だった。

「なのに、俺ときたらヒカルを無意識に自分だけの宝箱にほうり込んでカギをかけちまうことばかり考えてた。ヒカルを誰にも渡したくない、触れさせたくもない。俺だけのヒカルでいて欲しい、しちまおうって無意識にだぜ？気がついた時、自分が怖かったぜ…。ヒカルは俺を解放してくれたのに俺はあいつを縛ろうとしていたんだ…」

「問題は自分だって言ってたのはそういうことか…」

ああ、とヒビクは頷く。

「あいつに告げちまったら、もう自分でそういう自分が抑えられそうになかった。俺はどこまで

も身勝手に未熟な男だ。なのにこんな俺を、あいつは先輩、先輩って慕ってくれる。だから俺は、先輩って立場からあいつを見守ってやろう、あいつ支えてやろう、って決めた。なのにさ...、」

ヒビクはまた自嘲的に笑った。

「支えられているのはいつも俺だったんだぜ？俺はあいつの前を歩いているつもりでいて、振り向いた時のあいつの笑顔に救われていたんだ」

情けねえ話だろう、と消沈したようにヒビクは呟く。

「あいつがそばにいななくちゃ、俺は自分の親父にも会いにいけなかったんだ」

「会場までは行ったけど、一緒に聴いちゃいないっていうコンサートの時か？」

ヒビクは頷いた。

初めてジャック...、自分の父親に会ったのがあの時のコンサートだったらしい。ヒビクは、ヒカルを連れて初めて親父さんと対面し、それまで自分の中にあっただ親父さんへの迷いを一掃出来た、と言った。

「何が俺のお宝だ、だろ？」

「ヒビク...」

「だから、俺...、」

真剣な目を光らせたヒビクが真っすぐに俺を見た。

「アメリカに行く」

「アメリカ...？」

「ピアニストになる。親父を超えるピアニストになる...」

——ちょ、ちょ、ちょっと待て。

今こいつ、すげえ変なこと言ったぜ？

「ピアニストって何だよ。おめー、ピアノは弾けないって...」

「それは嘘...」

ヒビクはあっさりと言いやがった。

「嘘だ?! どんだけ長い間の嘘だよ、それ!」

「悪い...。親父の影がチラつくピアノを遠ざけたいって思った頃があって...、そのまんまズルズルと訂正しないまま来ちゃった...」

「...ったく。どこまで秘密主義のカッコつけ男なんだよ、おめーは...」

「曲を作るのにはピアノが一番やりやすい。本当は一番得意な楽器」

「バンドのピアニストを探すのにどれだけ苦労したと思ってんだ？最初からおめーが弾いて歌えばよかったじゃねーか...」

まったく...、と文句をつなげようとしたが、

「おかげであかねに会えたんだから文句言うな」

さらりと言われて、文句は引っ込み俺の肩が跳ね上がった。

「なっ?!はあ?!」

ヒビクはにまにまと口元を緩ませているが、今はそっちよりもヒビクの話が優先だ。

「...で!アメリカの話を持続けろよ!」

「ああ。夏にジャックのツアーにアルバイトのバンドボーイって扱いで参加させてもらってさ...。親父としてじゃなく、世界のジャック・ベリーを目の当たりにして強烈な衝撃を受けた。音楽的にさ。ジャックに俺のピアノを聴かせたら『なかなか上手に弾くじゃないか』だぜ?参ったよ...」

俺たちには隠していたが、ヒビクのピアノの腕前はあかねをしのぐほどらしい。

物心ついたガキの頃からピアノを玩具代わりに弾いてきたのと絶対音感のおかげで、楽譜を見ただけでどんな曲でも頭の中でイメージが瞬時に沸くし、指は鍵盤の上を自在に滑る特技が身に付いているようだ。まさに天才の域に達している才能なのだろう。

「お前のヤボ用ってのは...」

「音楽学校の適性試験...、ちょっと面倒な課題出されてさ...。時間がかかっちゃった」

夏から1ヶ月以上も消息不明でいた理由がジャックのツアー参加と音楽学校の適性試験かよ。スケールがデカすぎる。

その頃の俺は、予備校でただ居眠りをしてただけだっていうのに。

――ちょっと自己嫌悪...

けど、今はここでへこんでいる場合じゃねえ。

「音楽...、いやピアノには自信があったのに、ジャックには赤子扱い、音楽学校の試験は最低ラインのギリギリ...。アメリカに自分のプライドを木っ端微塵にされにいったようなもんだった」

「けど、最低ラインのギリギリってことは...」

ヒビクはゆっくりと深く頷いた。

「俺が自分に試練を与えるのはこれしかないんだ。音楽しかない俺はジャックがいるアメリカで音楽を磨くしかさ。音楽を磨くことでしか、俺自身を磨くことはできないから...、もう決めてきた。準備も全て整えて来た」

「それって、いつから行く?」

卒業式のあとすぐに、とヒビクは答えた。

「いつ帰って来るんだ?」

「...とりあえず5年はやって来ようと思ってる...」

「5年...?!ヒカルはどうする...?!」

暴走魔もいいところだろう。

アメリカって言ったら、海を渡らないと行けないところだぜ?

そんな遠くに行っちゃったら、ヒカルは――。

「...どうもしないさ。あいつは俺がいなくなったら何ら問題はないだろう...」

「そんなはず、ねえだろうが!どこまでバカなんだよ、ヒビク!あいつの気持ち、考えてやった

ことあんのか!？」

だから!とヒビクはまた声を荒げた。

「こんな俺じゃダメなんだよ。今のままの俺じゃ、あいつを幸せにはしてやれないから!あいつを縛って壊しちゃうから!あいつへの想いを引きずったままじゃアメリカに行ったところで何も変わらない。だから大島のことも弁解しなかった」

「結局、大島とはどうなっている?」

告られたが付き合っていない、とヒビクは言った。

一年のときからヒビクに惚れていた大島は、想いを受け入れなかったヒビクに、一方的でかまわないから卒業するときまで傍にいさせてくれと懇願したそう。もちろんヒビクはそれも断つたらしいが、ヒビクのそういう気持ちも納得の上で大島は退かないらしい。

「根負けして勝手にしろって言っちゃった…。で、こういうことになってる…」

「おめー、バカだろう…」

バカだな…、とヒビクは自分に呆れたように呟いた。

「流されてるってのは自分でも分かっている。筋が通らないことやってる自覚もある。けど…、」

大島はそのまんま俺なんだ、とヒビクは言う。

「けど、このままじゃ大島も傷つけることになるんだぜ?」

「あいつはもう傷ついてるよ」

大島もバカだ。

けど、自分の気持ちに一番正直にいるのが大島なんだろう。

太陽は遠すぎるから手が届くところの夢を見ている、といつかヒビクは言っていた。

ヒビクにとって、遠い太陽がヒカルで手が届く夢がピアニストってわけだ。だが、本当にヒカルはそれほど遠いのだろうか。いつでもそこでコロコロ笑ってるのがヒカルじゃねえのか。それは手を伸ばせばすぐ触れられる場所にあるお宝じゃねえのか。

――いや。

sonだけ、ヒビクにとってのヒカルが大切だってことだろう。

簡単に手を伸ばして手に入れてしまうわけにはいかない、大切な、大切な宝物。

そういう宝が、俺にもひとつだけある。

けど、

「……そんなにヒカルに惚れてるってのに自分に嘘つくんじゃないよ。俺たちまだ高校生だぜ?人生悟り切った大人じゃないんだ。欲しいものは欲しいって素直にダダこねてもいいだろう?!おまえの気持ちは分かるけど、それじゃあまりにもヒカルが可哀想だ…」

「おまえがそれを言うな…」

ヒビクはニヤリと笑った。

「な、何だよ...？」

「おまえだって同じだろう？あかねに対する自分の気持ちに嘘ついてんじゃないのか？」
言われちゃったー。

けど、俺とヒビクでは宝側の状況がまったく違う。

手を伸ばしさえすれば、欲しいって素直になれば、ヒビクのお宝はすぐにでもー。

「田村こそ、欲しいものは欲しいってダダをこねろよ」

「いいんだよ、俺は。あかねの幸せってやつを見守ってるだけで...満足！」

ていうか、それ以外ないんだよ、俺は！

「へえ...。人生悟り切った大人みたいだな」

「お、俺のことなんかどうでもいいの！おめーだよ、おめー！ヒカルはこの話知ってるのか？」

いや知らない、とヒビクは首を横に振った。

「このまま黙って行っちゃうのはダメだろう。5年は長いぜ？そんなにヒカルは待っていてくれないぜ」

「いいさ...。俺はここで一旦あいつへの想いに決着をつける。自分で認める俺になれば、その時にかっ攫いに行くからさ！」

「芸術家の気持ちってのは理解できねえな...。もしもその時ヒカルがもう誰かの嫁さんになっててガキなんかもいたりしたらどーするんだよ？そんなのシャレになんないぜ！」

「そうだな。けど、もしそうなってたらその時の俺が答えを出すだろ...」

「カッコつけやがって...」

「つけてねえって...」

つけてる。

カッコつけてる以外の何物でもねえだろう。バカめ。

「どっちにしても、これ以上自分に嘘はつくなよ...」

決着と嘘は違う。

今のヒビクはやっぱ違う。

いくら大島が勝手に暴走しているとしても、このままでいていいはずはない。

自分の気持ちに正直になったからといって、ダダをこねたからといって、欲しいものが手に入るかと言ったらそうじゃないけれど。

「だな...。心配かけて悪かった...。ちゃんと考えるから...もう少し時間をくれないか」

「時間に余裕がねえんだろーが」

ヒビクは、まあな...、と呟いて空を見上げた。

木枯らしが分厚かった雲を吹き飛ばしたのか、夜空にはたくさんの星がきらめいていた。

「なあ田村、キララのハートってどう探せば見つかるんだろうな？」

「妖精が言ってたじゃねえか」

「愛とか勇気とか...ってアレだろう？難しいな。人生悟りきった大人じゃねえから、俺にはよく分からないぜ」

ヒビクはキラキラ輝く星空を見上げながら、似たような輝きを深い緑色の瞳に宿して話す。

「けどあれは、ヒカルの中から溢れた物語なんだよ」

「まあ、そうだな」

「.....参ったぜ。夏の時もそうだったけど、今日はもう...、本当にお手上げだった」

寒さからなのか、それとも人形劇を思ってなのか分からないが、ヒビクの目が濡れたように光っていた。

「俺にとってのキララのハートはヒカルなんだ。だから、ヒカルを手にするに相応しいぐらいの、俺自身のキララのハートを見つけなきゃ...さ」

このまま忘れていくわけにはいかないから、と思いつめたように呟くヒビクに、俺はもう何も言えなかった。

24 感傷的な徒然

来週から期末試験が始まるという12月の初め、天から降って地から沸くようなニュースが俺の耳に飛び込んできた。

「田村、知ってるか？奥田とヒカルが付き合ってるって話」

発言元は松山兄だ。

「そんな話は聞いちゃいないぜ？フカしてんじゃねーよ！」

最近はずいぶんおとなしくなったが、こいつはほら吹き太郎だ。それに、ヒカルと奥田のカップリングなどありえるはずもない。だから、当然本気になどしなかった。

ところが昼休み。

中庭で仲睦まじくランチしているヒカルと奥田を見ちまった。

ヒカルはいつもどおりニコニコして、奥田の方はお約束のようにデレデレ鼻の下を伸ばしやがって、あろうことか、ヒカルの弁当箱の中から玉子焼きなぞつまんでいやがって。

「あれ、マジか？」

一緒にその場を通りかかった松山弟も目玉飛び出させてふたりを凝視してたし、俺は喉に言葉が詰まっちゃった。

——やっぱ、あれか…。

ヒカルのやつ、ヒビクと大島の仲を誤解したまま、奥田にほだされちゃったか…。

こういう展開になっちゃうことは予想していなかった。

けど、奥田も去年からずっとヒカルを狙っていやがったし、ヒビクがあーなんだから、ヒカルがこーなったってなんら問題はねえはずだ。相手が奥田ってのがヒカルの趣味を疑っちゃうだけで。

ヒビクめ。カッコつけたことぬかしてるから、奥田なんかに横からかっ攫われちゃうんだ。

けどまあ、これはヤツの自業自得。俺が口を出せる域は、もう、とうに越えちゃまっている——

。

「はあ…。なんか、時の流れを感じちゃうなあ…」

隣で安心してた弟が、らしくねえことをぼそりと呟いた。

「学校一の体力バカが、なにを感傷的につぶやいてやがる…」

そんなコメントを返してさっさとその場を移動した。ただでさえ昼休みの中庭は、春夏秋冬問

わず、目に毒な幸せカップルがうようよしているスポットだ。

だが、1年の時はあの場に一時、松山ブラザーズもいやがったし、マドンナ先輩と仲良しだったヒビクが居た時もあった。今はそこに居る顔ぶれはあの頃と同じじゃねえ。当たり前のように時は流れている。

弟はややムツとした顔で俺を睨んだが、特に言い返してくることもなく、俺たちはそのまま屋上へ上がった。

いつもの場所では、柏木がたったひとりでパンをかじっていた。サラサラの黒髪が12月の冷たい風に泳がされているその姿はどことなく物悲しい。見渡す限り、他に屋上ランチしている生徒はいない。こう寒くなっちゃ、風当たりの強いこの場所はランチするには不向きなスポットだし、それも当然のことだが。

「こんな寒空の下でひとりランチかい？柏木くん」

柏木は伏せていた目を上げた。

「そういうキミたちだって、男ふたりで寄り添うつもり？」

「気持ち悪いことをサラリと言うんじゃないよ。俺たち非モテ組はこれが定番なの」

柏木の横にどかりと座り込んだ俺と松山弟は、コッペパンの袋をビリリと破いてパサついた中身にかじりつく。

屋上のフェンス前で3人横並びしてパンをかじっている俺たちを、ちょっと離れた正面から見たとしたら、さぞ虚しい光景に映ることだろう。おんなじ学校内でも、中庭とここじゃ天地の差がつく風情を醸し出す昼休みなのだ。

「雲が流れて行くなあ…。まるで、時が流れていくように…」

弟が、またぼそりと呟いた。

「時の流れ、にこだわっているのか、今度はやや詩的な言葉を並べてやがる。けど、なに笑っちゃうようなこと言ってるわけ？」

真顔の柏木にそうコメントされた弟は、

「もう言わねえよ……」

不機嫌を全開にして黙ってしまった。

ぼそぼそ。もぐもぐ。

しばらくの間、3人とも無言でパンをかじる。

ひゅーひゅー鳴く木枯らしが、目の前で小さな竜巻を起こした。

ぼそぼそ。もぐもぐ。

あくまでも無言。そして、時々ため息。それを吐いているのは主に柏木だ。

ひ弱でナルシーの柏木が、真冬の空の下に小春ちゃんも連れず、誰も居ない屋上でひとりランチしてたってことは、それなりの理由があるに決まっている。もうずいぶん前からのことだが、小春ちゃんが柏木の傍にいる姿を見かけていない。

「雲……、流れて行くね。新幹線なみのスピードで…」

さっきは弟の言葉に辛らつなコメントを返した柏木が、おんなじようなニュアンスの言葉を呟いた。

確かに上空で風に押される雲の流れは速い。

「ヒコーキ雲ってのはあるけど、新幹線雲ってのはどうかねえ？柏木らしくもねえ情緒無しの表現だな」

弟が逆襲したり、な顔で返した。

「新幹線雲なんて言ってないよ。新幹線なみのスピードって言っただけ」

柏木も大人気なく反論する。すると、弟も、

「新幹線なみのスピードだったら、あの雲はもうとっくに品川あたりまで行ってるだろーが」
さらに食いつきやがる。

「次郎くん、俺に喧嘩売ってるの？」

「勝負にならない喧嘩なんか、売ってもしよーがねえだろう」

ピキッと柏木のかめかみ辺りで音が鳴ったような気がした。

「はいはい、そこまで。つまんねえこと言い合ってるじゃねえよ」

雲が流れるように時は流れ、その変化のスピードが速いってことを、弟も柏木も言ってるわけだ。ようするにおんなじような感傷に浸ちまっているってこと。

俺だって一一。

アメリカに行く決意をしちまってるヒビクとか、奥田と一緒にいるヒカルを見ちまったりとかで、感傷的になってないわけじゃねえ。

けど。

「流れているものは止められねえの。もう、どうしたって止まらねえ勢いがついちまっているんだからさ」

「……そうだね。俺、もう小春ちゃんとはダメみたいだ」

柏木は呟いて、パンの袋をぐしゃっと丸めた。

「やっぱそうなのか…。最近一緒にいねーなあって思ってたけどよ」

さすがの弟も、柏木と小春ちゃんの変化には気づいていたようだ。俺の場合、保健室での一件を見ちまってるからコメントもし辛いものがあるが、もしもあれが原因だとしたら、それは柏木の自業自得。

「……柏木もヒビクも種をまいてるのは自分だろーが…」

おっと、やべやべ。

思ったことがつい口に出ちまった。今の柏木はピリピリしてるし、今度は俺に突っかかってくるか、と思ったが、

「風間くんもってなに？大島さんと何かあった？」

柏木が突っ込んだのはそっちの方だった。そして、

「大島じゃねえよ。ヒカルの方」

答えたのは弟だ。

「ヒカルちゃんがどうかした？」

「奥田と付き合いはじめたみてえだ。今、中庭で一緒にランチしてた」

「ふーん。でも、ランチしてるからって、べつに付き合ってるわけじゃないんじゃないの？」

弟の言葉を柏木はあっさり否定した。

「俺もそうは思うけど、太郎はふたりが付き合いはじめたって断言してたぜ」

今朝、松山兄から聞いたことをそのまま柏木に喋ってやると、

「……どっちにしても、風間くんが知ったらショックなんだろうね」

柏木は顔を曇らせて呟いた。

◇

6時間目は選択授業。教室を美術室に移動して、他のクラスのヤツらも合同で美術のお勉強だ。

卒業制作とやらで肖像画を描いている美術選択組は、ペアーになった相手と互いの顔を見合いながら手を動かしているわけだが、俺の相手はヒビクだ。んで、ヒビクの相手は俺。

「田村、ちと横向いて」

「ん？こう？」

「そうそう、いい感じ。そのまま動かないで」

「…ってそれじゃ俺、描けねえじゃん…」

「男前に描いて欲しかったらちょっと我慢しろよ。デッサンは大事だろ」

とか言ってるけど、コイツの腕前は演劇部のために描いた宣伝ポスターで知れている。どうせ…、

「……やっぱ、ただの `もへじ、じゃねーかよ…」

ヒビクの手元にチラリと目を向けると、案の定、俺のまゆげは『へ』、目は『の』、鼻は『も』、口は『へ』、輪郭は『じ』だった。しかも、線はへろへろ。いつも五線譜に書く音符のように、のたうちまわってるへびみたく歪んでやがる。

「俺…、可哀そう…。卒業記念の肖像画なのに…」

「これは下描きだからなの！だいたい、田村の顔はもともと凹凸もないし特徴もないし描きにくい！いいから少しじっとしてろよ」

デッサンの腕前をけなされて、ヒビクはややむきになって言い訳をこく。しかも、自分の腕の

まずさを俺の顔のせいにしやがって。

「特徴無しの地味な顔で悪かったね...」

「おお。髪の色で印象づけるしかねえ顔だよな」

画用紙と俺の顔を真面目に見比べるヒビクが絵画的見解で言ってるのは分かるが、ここまで言われるとさすがにへこむから、かなり、かなーり男前に描いてやった俺の方のヒビクに、三本ほど線を付け足してやった。

「あ、おい！なんだよ、その鼻毛！そんなの出てねえだろ」

ヒビクは自分の鼻の下を指でこすり、嘘を描くなと抗議しやがる。

「『も』の字の鼻の方がありえねえほどの嘘だろーが。描きあがったらこの肖像画はアメリカへの土産に持たせてやるからよ」

そんな鼻毛男の顔はいらねえし...、とヒビクはぶつぶつ文句を呟きながら、『へ』の字の口の下にあっかんべーのベロを付け足しやがった。もうどうでもいい肖像画になっちまいそうな俺たちの顔だ。

互いの鼻毛男とベロ男に、それなりに格好つけた線を重ね、下描きが形になってきた頃、

「アメリカ...マジで行くんだろ？」

不真面目な裏側に隠れていたことが、なんとなく自然と言葉に出ちまった。

目を上げたヒビクは、ほんの一瞬だけ周囲にその目を向けた。ちょっと離れたところには大島と小早川がいるからだろう。

「マジじゃなかったらお前に話したりしないだろうが...」

「まだ、大島にも言ってねえの？」

「お前にしか言ってない...」

ヒビクは抑えた声でぼそりと答え、サラサラ手を動かす。

9月から始まった暴走劇に含まれている色んなことへのけじめについて、ちゃんと考えるからもう少し時間をくれ、と言われた日から二週間ほど経っているが、あれからこいつが何か行動を起こした様子は無い。

太郎が言っていたこと、昼休みに見たこと、今ここでヒビクに言うべきだろうかと考えた。

黙っている理由はねえ。

アレが真実でも太郎のフカシでも、もしもヒビクが目にしたらどっちにしてもショックだろうと言った柏木の言葉が脳裏にチラついた。もちろん、コイツはショックを受けるだろうが、自分が撒き散らした種から生えた邪魔くさい雑草は、簡単に摘みきれものじゃねえってこと、ヒビクが一番よく分かってもいるだろう。

もうすぐ二学期も終わり、その後冬休みに入ってしまったら、そのまま卒業まで流れちまわないとも限らない。

確かにもう、ヒビクのことで俺が口を出せる域は越えている。ヒカルのこと大島のこと、コイツが自分で決着をつけるしかねえことだし、このまま流してアメリカに行っちまうなら、それもひとつだろうからヤツに意見をすつつもりはないが――。

これは、俺が出来る最後の背中押しだ。

「なあ、ヒビク」

ヒビクは、ん？と簡単な調子で俺に目を向けた。

「ヒカルだけどな...」

ヒカル、という名に、一瞬ヒビクの手がピクリと反応して震えた。

「.....ヒカルが、どうかしたのか？」

「奥田とつきあいはじめたらしい...ぜ？」

ヒビクが持っていた鉛筆が床に落ち、カランと音を立てた。

「...え？」

ヒビクは、鉛筆を落したことに自分で気づいてないようだ。手がなくなったものを持ったままの状態だ。放心している。

「...まあ、本人たちに確認しちやいねえけどな」

ヒカルが...、とヒビクは小さく呟いた。

「誰がそんなこと...」

「太郎。ヤツの言うことだから信憑性はないぜ？けど、さっきヒカルと奥田が中庭でランチしてるのは俺も見た」

「...なっ!？」

マジかよ...、とヒビクは放心を通り越して失心状態になっちまったようだ。しばらくの後、ゴクリ、とヒビクが飲み込んだ生唾の音が重苦しく響いた。

「奥田が2年の時からヒカルに惚れてたっての、俺は知っていたし、あいつ、卒業を眼前にしてとうとう打って出たんだろーな」

わざと煽るようなことを言って、うつむいたヒビクの顔を下から覗き込んだ。両目を見開き、わずかに震えている唇が、コイツの衝撃の強さを俺に伝える。

「は...はは...」

前髪を押さえ、ヒビクはやや自嘲的な乾いた笑いをこぼした。

「ヒビク先輩...って、来なくなったしな、あいつ...」

もう、滑稽なくらいヒビクの肩がどよーんと下がっちまった。画用紙の中のヒビクに、無数の棒縦線を引っ張ってやりたいぐらいに。

足元に落ちたままの鉛筆を拾い、ヒビクに手渡してやった。無言のままそれを受け取ったヒビクは、気を取り直したように肖像画の続きにとりかかる。

だが、すぐにその手を止め、やめた、と鉛筆を放り出した。見ると、『へのへのもへじ』の真ん中に、一本の横線が荒々しく走り、俺の顔（なんだろうなあ...）が、上下に分断された見るも無残な画になっている。

「...ひでえなあ、おい...。俺をスプラッターにするつもりかよ」

俺の抗議もまともに受け取らず、ちょうど鳴ったチャイムと同時にヒビクは立ち上がり、そのままふらふらと美術室を出て行っちゃった。

俺の言ったことは、ヤツに予想以上のショックを与えちゃったようだ。夜の公園で話をした時は、カッコつけた言葉を並べていたヒビクでも、ヒカルが誰かのものになっちゃうという現実を目の前につきつけられ、冷静さを失っちゃったのだろう。

これでヤツがどんな行動に出るのか、出ないままなのかまでは俺の知るところじゃねえが、卒業まで3ヶ月しかない残りの時間、せめて、後になってアメリカで独り後悔するようなことはしないでもらいてえ。時はあっという間に流れちゃうのだから。

こんな俺は、ヤツに対してつくづく過保護だと思う。

◇

放課後、階段の踊り場で前に行く柏木を見かけた。呼び止めて柏木が振り向いたちょうどその時、俺たちの真横を小春ちゃんが無言で通り過ぎ、そのまま階段を下りて行った。

「……………」

柏木は、小春ちゃんの背中をただ見送り、やがて彼女の姿は階下へと消えて見えなくなった。いつもさりげなく柏木の隣にいた小春ちゃん。

存在感はまるでなかったはずなのに、こうなってみると彼女がいた場所がくりぬいた穴のように感じる。

「彼女とちゃんと話をしたのか？」

「……まあね」

「お前、まだ沢渡センセのこと…」

「違うよ。もう先生のごことは諦めたから。でも、だからといって小春ちゃんを傷つけちゃったことに変わらないからさ」

こいつは小春ちゃんて彼女がいながら、沢渡センセに恋煩い、あわよくば二股をかけようともくろんで実行に移し、センセには玉砕。大切だったはずの小春ちゃんまで失っちゃったのだ。けど、

「全部お前が悪いからしょーがねえな」

柏木に同情する言葉は、正直言ってまったく出てこない。

そうだね…、と柏木はため息を吐いた。

「そういえば、風間くんになにか言ったの？選択の後、ずっと黒い瘴気をまとっていたよ？」

「瘴気って…」

「近づいたら悪いものに感染するんじゃないかと思うぐらい、どよよん…と…。大島さんのことも先に帰しちゃったみたいだし」

毎日一緒なのにねえ、と白々しく言う柏木は、いつの間にかブラックバージョンになっている。

「お前、感染したんじゃないか？真っ黒だぜ？」

そう？と柏木はシレッと言い放った。

「…で、大島を帰してヒビクはまだ教室にいるのか？」

「いないよ。たぶん音楽室に行ったと思う。軽音の部活でも覗きに行こうかって誘われたけど、俺は図書室で勉強したいから断った」

「部活か...」

そういえば、俺も夏以来部活には顔を出していない。今の軽音楽部はあかねを中心にしてちゃんとまとまっているみたいだし、俺たちの出る幕も居場所もない。けど、ヒビクが行ったなら、俺もちょっと覗きに行ってみるかな。あかねの顔も見たいしさ。

図書室に向かう柏木と途中で分かれて音楽室の前まで来てみたが、中はやけに静かで部活をやっている様子はなかった。

ドアを開けてみると、やっぱりあかねも一年たちもいない。

けどー。

「ヒビク？」

夕暮れの校庭が見渡せる窓際の席で、机の上に書きかけの音符が並んだ五線譜を何枚も広げたヒビクがひとりいた。

「お前、なにやってるの？」

「た、田村...。何しに来た？」

「べつに。部活やっていたら見ていこうかと思って寄っただけ」

「今日はないみたいだぜ？俺が来た時も誰もいなかった」

「だからひとりで作曲か？」

散らばった五線譜を覗くと、『x』で消されていて、ぐちゃぐちゃと塗りつぶした跡があったりする五線譜もある。かろうじて無事な紙も、どれもがほんの数小節しか音符はなく、メロディが繋がっているようには見えない。

「また苦労してる...とか？」

ヒビクはチラリと俺に目を向けてから、ああ、とぶっきらぼうに答えた。

「まとめることができなくてさ...」

ヒビクは、紙のほんの一行目や二行目ぐらいまでしか音符を書いてない五線譜たちを、無造作に俺の前に滑らせた。

「これみんなフレーズか？」

「...まあな」

こんな時期にいったい何を作曲しているのだろう。繋がっていないフレーズは何を意味して生まれたものなんだろうか。

首を傾げる俺の思惑を察したのか、

「これはあいつを見て勝手に溢れてきたフレーズたち...」

ヒビクはバツが悪そうに笑った。

「まさか、こんなに溜まっちゃうとは思わなかったぜ」

確かに、フレーズはずいぶん数がある。これが全部、ヒカルを見ていて溢れたものとしたら、これだけいつもヒビクはヒカルを見つめ、その度に想いが溢れまくっていたってわけだ。

こいつが紡ぐメロディは、心からの言葉と同じー。

「...ったく。立派なストーカーじゃねえか」

「しょうがねえだろう...。勝手に目の中に飛び込んでくるんだから」

散らばっている五線譜をかき集めるヒビクの目は、無意識なんだろうが校庭の奥の部舎に注がれている。そこにあるのは演劇部の部室だ。

勝手に、なんて言ってるがそうじゃねえだろう。無意識にその姿をいつでも追いかけているんだ。自分で。

「こんなに溜まっちゃったフレーズ、どうやって繋げるんだ？一曲におさまらねえだろう？」

「おさめ.....」

ヒビク言葉は中途半端に途切れ、ヒビク本人は校庭の一点を見つめたまま固まったように動かなくなっていた。

「どうし...」

た、と聞くまでもなく、その理由が分かった。

いつの間にか部室から出て来ていたヒカルが、廊下の手すりに自分の体を預けて下を覗き込んでいるが、下から上を見上げてヒカルと喋っていたのは奥田だった。ふたりの声はここまで聴こえてこないが、昼休みに中庭で見た雰囲気そのままある。

「.....っ」

声にならない声を発し、ヒビクは校庭から視線を外していた。そして、手元の五線譜をそそくさとまとめるが、

「.....おい」

震える手が上手く動かないのか、五線譜たちはいっこうにまとまらず、束ねたそばからまたバラバラと散らばっていく。

不器用なその様子について手が出ると、ヒビクは束ねる作業を俺に任せ、小さなため息を吐いて呟いた。

「あの手すり、錆びてボロボロになってるから寄りかかるんじゃないって...、あいつには何度も注意したのに...な」

しっかりと手すりに寄りかかり、下の奥田と話をするヒカルの笑い声が、ここまで響いてくるようだった。

25 想いと惑いのパズル

過ぎるほど暖房が効いていた満員電車からホームに降り立てば、今度は凍えるぐらいの冷気に頬を撫でられて、全身がぶるっと震えた。人の圧力で型崩れしていた首のマフラーを巻きなおし、両手はポケットに突っ込んで、学校まで10分の道のりに備える。

「あ～、寒い。寒い。寒い！！」

「冬なんだから当たり前なの。いちいち寒いって言うんじゃない！」

「寒いときは寒いって言った方が寒くないの！」

「こっちは横で寒い寒い連発されると余計に寒いの！」

「寒い寒いうるせーよ、バカ」

「はぁ？どっちが先に騒いだんだよ、バカ太郎め！」

「おめーよりマシだ、偏差値30未満男！」

「脳みそパラダイスなおめーに言われたくねえな！」

俺にしてみれば、朝からどうでもいいことをハイテンションで言い合い、いつの間にか論点がズレまくっているこいつらブラザーズ、両方ともすさまじくバカだ。だが、こんなのはいつものこと。1年の時から変わっていない光景だ。

けど、変わっちまっていることもいくつかある。

同じ電車で着いたのに改札で待っている大島に引っ張られて離脱しちまうヒビクとか、柏木を素っ気無く追い越して先を急ぐ小春ちゃんとか、構内を出たところで待っている唯子ちゃんとか。

「...いっ!？」

「田村せ～んぱいっ!!」

俺を見つけた唯子ちゃんが、パタパタと走ってきた。

「出た！」

「ゲリラ少女！」

「久々の登場だね～」

唯子ちゃんの出現は、ブラザーズの喧嘩を止め、柏木の憂いも乾かしたようだ。

「ど、どうしたの？」

唯子ちゃんは何かを確認するように周囲を見回し、いない、よし！と気合を入れてから言った

「田村先輩を待っていたんです！」

「...んと...？」

「二学期も今日で終わりだし、最近は先輩と全然会えなかったからここで待ってたんです！」
ふと殺気を感じて振り返ると、売店の陰に隠れるようにしてこっちを覗いている男子がふたり...

——いるじゃねえか...

暴れん坊ズ、その1とその2がしっかりと。

「...いるみたいだよ？あそこに」

「あれはいいの。放っておいて大丈夫です」

「じゃあ、いないって誰のこと？」

「もちろん、小早川先輩ですよお～」

唯子ちゃんはもう一度周りを見回して、よしよし、いない、と呟いた。

「今日はあたしと一緒に学校まで行ってもらいますよ、先輩」

唯子ちゃんはにっこり笑って俺の腕を引っ張る。

相変わらずだ。

唯子ちゃんもあそこで俺を睨み殺そうとしている暴れん坊ズたちも。

「先に行ってるぜー」

「まだ時間もあるからゆっくり来なよー」

ブラザーズと柏木がサクサクと行っちゃった。

「はい。お気遣いありがとうございます！」

唯子ちゃんは先に行くヤツらの背中に向かい、元気に手を振る。

「あたしたちも行きましょ？先輩」

「...あ、ああ」

唯子ちゃんのパワーに抵抗しきれない俺も相変わらずだ。

田村くん、油断しました。

こんな朝ゲリラに対抗策を練っていた時期もあったが、ここしばらくは沈静化されていたから忘れちゃっていた。

「そんな困った顔をしないでくださいよお」

唯子ちゃんがプーッと膨れた。

「あたし、これでもずいぶん遠慮しているんですよ？」

「...そ、そうなの？」

そうですよ、と唯子ちゃんは俺を見上げて訴える。

「先輩と会えるの、もうあと何ヶ月もないから、本当は毎日だって一緒にいたって思ってるん

です」

「えっとお...」

そう思ってもらえるのは嬉しいけれど、そういうことはやっぱ付き合っている相手に対して言うことじゃないだろうか。

てなことを思いながら、唯子ちゃんを見下ろした。

「あー、そうですね。先輩が言いたいことは分かりますよ？あたしは先輩の彼女じゃないんだから、毎日一緒にいるなんて出来ないし、求めちゃダメだってことも分かってますから」

でも...、と唯子ちゃんは立ち止まった。

「あたし、よく考えたんです」

俺を見る唯子ちゃんの真剣な目が、寒さのためか少し潤んでいた。

「あたしは少しでも先輩と話をしたり一緒にいたりしたいって思ってる。先輩があたしを好きになってくれればもっといいけれど、そうじゃなくてもいいんです。好きな気持ちって、相手に合わせて都合よく変えたり忘れたり出来ないでしょ？あたしの気持ちはあたしのものなんだから」

俺の深いところが、ズキン、と痛んだ。

「先輩にとっての特別なひとりになろうなんて、もう全然思っていませんよ！でも、今みたいに先輩がひとりである時は隣にいたいなーって思います」

ひとりであるっていうか、強制的にひとりにされちゃったっていうか...

「放課後は小早川先輩とか他の先輩がいるから我慢して遠慮しますけど、今はあたしが先輩と一緒にいたって普通でしょ？」

かなり、強引な普通だとは思うけど。

「後ろにいる圭吾や海東くんも、今言ったあたしとおんなじなんで放っておくんです」

唯子ちゃんはまたにっこり笑って歩き出し、俺はチラリと後ろを振り返る。

ずいぶん離れた後ろを、その1とその2がふてくされてついてきていた。

俺にもきっと同じものがある。

相手が誰を想ってしようが誰と付き合っているようが、こっちの気持ちは変わらない。変えることができない。

そして、傍にいたいって思っている。恋人としてじゃなくても、相手が俺を見ていなくても、いつでも傍に行きてえと思っている。

けど、理性もあるし、余計なことも考えちゃうから、そういう感情を自分で抑えて行動もしない。

唯子ちゃんは、素直に行動しているってことだ。

そして、多分大島がヒビクの隣にいるのも、同じような感情から現われた行動なんだろう。

大島はそのまんま俺だ、といつかヒビクが言っていたが、こういうことだったのかもしれないな。

「負けたよ...」

俺、ヒビクとおんなじ道を辿りそうかも…。

唯子ちゃんは、うふっ、と声に出して笑った。可愛い笑顔だって思った。

けど、これだけはやっぱ言うておかなければならねえだろう。

「俺には好きな子がいて、これも変えられないんだ」

「はい。問題ないです。小早川先輩との間は絶対に邪魔しませんからー」

いや、あの。

ちょっと違うんですけど。

まあ、いいか。

「明日から冬休みですね。夏休みほど課題も出ないから嬉しいな。でも、3年生はどうなんですか？勉強とか忙しそう」

「まあ、そうだね」

明日から冬休みに入るが、俺たち受験生に休みはあってないようなもので、進路が決まっているヒビク以外は年末年始も予備校の冬期講習会だ。

滑り止めも合わせて数校を受験をする俺は、年が明ければすぐに入試が始まるから、二学期になってからは受験勉強ってやつも真面目にやっていた。これまでの不真面目で失っていた内申の評価も、おそらくはほんの少しだけ取り戻しているだろう。

けどー。

「田村先輩はどこの大学を受けるんですか？あたしも2年後は同じところ、受けようかなあ」

いや、あの。

それは、その。

「大学を選ぶときって、何を基準にして考えるんですか？いろんな学部があるんですよ？高校みたいに普通科とか理系科とか、そういう大きな割り方されているんじゃないでしょうか？」

「ああ」

「先輩は何の学部に行くんですか？」

「俺は…」

社会情報学部とか産業学部とか…、何の勉強をするんだかよく分かんないところの願書ももらってきているけど、何故かそれを唯子ちゃんに言う気になれなかった。

「学部決めるのも大変そう…。だって、将来のこと、ちゃんと考えてないと決められませんよね？今のあたしには、まだ全然思いつかないし」

ーー落ち着かねえ…。

無邪気に放たれる唯子ちゃんの言葉に、どこか追い立てられるような気がした。

次々と落ちてくるテトリスのブロック。

方向転換間違ったり手が滑っちゃったり、スッキリはめられねえで、どんどん積みあがっちゃう時の焦りと不快感に似ているだろうか。

自分の進路に対して、無理やりはめ込もうとしていることに、魂の底の方で抵抗しているようなざわつきを、もうずっと前から感じている。

校門に到着して、昇降口で唯子ちゃんとは分かれることになる。

「今日みたいに普通のこと、先輩といっぱいお話するだけでいいんです、あたし。3学期もそういう時間があればいいなーって思います」

唯子ちゃんはぺこりとお辞儀をしてから、1年生の校舎に駆けて行った。

◇

終業式が終わって放課後。

今日は補習も進路相談室も図書室学習もないから、昇降口でみんなが降りてくるのを待っていた。

まだ誰も来ないところへ、ひとりうつむき加減にやって来たのは小春ちゃんだった。

「あ...」

俺に気づいた小春ちゃんは、ちょっとだけ驚いた目をしたすぐ後に、そそくさとその場を去ろうとする。思わず、

「ちょっと、待ってよ」

呼び止めちゃった。

小春ちゃんは素直に立ち止まってくれた。そして、頼りない目をおずおずと俺に向けて、何？と訊いてくる。

「いや...、あの...」

何と問われて困った。

柏木のことを小春ちゃんに訊くのはどうかと思うし、けど、小春ちゃんのことはずごく気になっているし。

上手い言葉が見つからずに言いよどんでいると、小春ちゃんの方から話を切り出してくれた。

「もしかして、直弥くんとのこと...かな？」

「いや...、あ、うん...。そう」

「田村くんは、直弥くんから聞いているのかな...。沢渡先生のこと」

「聞いているというか...」

現場に居合わせたというか。

「まあ、だいたいことは聞いている。それに関しちゃ、柏木を弁護するつもりはまったくな

いぜ？ただ、俺は小春ちゃんの方が気になって...」

ありがと...、と小春ちゃんは笑った。

「直弥くんは何度も謝ってくれたけど、私、許さないの」

ぼんやりが定番な小春ちゃんからは想像もつかなかった強い言葉と目の力に驚いた。

こんな小春ちゃんは初めてだ。

それに、

「柏木、謝ったのか」

うん、と小春ちゃんは頷く。

「でも、許さないの」

許さない、は許せないとは違う。小春ちゃんは強い意志で柏木の不誠実を許さないと決めているような口ぶりだった。そこに、何か覚悟みたいなものが見える。

「直弥くんはどうして私なんかと一緒にいてくれるんだろうって、ずっと思っていたの。私、こんだし、全然直弥くんにふさわしくないのに。でも、一緒にいてくれることが嬉しかったから、私、今まで直弥くんが私に望むこと、全部受け入れて来たの。私にはそれしか出来ないから、それで直弥くんが私の傍にいてくれるならいいって思って」

それは、ふたりを見ていて分かった。小春ちゃんは柏木の傍にさりげなくいて、柏木直弥を全肯定していた。

一番印象に残っているのは、去年のクリスマスライブの時だ。柏木の彼女ってことでファンの女の子にヤキモチを焼かれて粘着的な暴力を受けたにも関わらず、小春ちゃんにはここにこ笑っていた。モテる彼氏を持ちちゃったからしょうがないと言って。跡が残るぐらいにつねられて痛かったろうに、それでも。

「直弥くんが頻繁に保健室に行くようになったのは、3年生になったばかりの頃に、中庭で1年生の男の子に突き飛ばされて脳震盪を起こした時からだったように思う。あの時、沢渡先生がずいぶん心配してくれたし、直弥くんに優しくったから居心地が良いんだなって思ってたんだけど...」

あったなあ。そんなこと。

暴れん坊ズその1とその2が唯子ちゃんを巡って乱闘して、それを止めた柏木が突き飛ばされて、俺が口を出して...そのとぼっちりが未だに...、って、それは小春ちゃんには関係ない話だけど。

「直弥くんが沢渡先生のこと、どれだけ想っていたのかは分からないけど、他の人に目移りされちゃう彼女の私が悪いんだと思っている。だから、謝ってくれたときはいつものように受け入れてしまいそうになったけど...」

小春ちゃんは、自分を納得させるかのようにゆっくりと首を横に振った。

「そういう私だから、直弥くんは他の人を好きになっちゃったんだって気がついて...、許さないことにしたの。好きだから、絶対に許さない」

「そっか...」

「田村くん、ありがとう。私のこと、気にかけてくれて嬉しいって思う」

なんか、胸が詰まっちゃった。

こんなに優しい子に、柏木のヤツ、何てことをしちまったんだ。

階段の方からガヤガヤと声が聴こえてきて、それが松山ブラザーズと柏木だと分かると、小春ちゃんは、じゃあ、行くね、と小走りで昇降口を出て行った。

「あ...っ」

校門を出て行く小春ちゃんの後姿を見たのか、柏木が小さくうめいて足が一步前に出たようだ。だが、それだけで追いかけることはしなかった。柏木の後からは松山ブラザーズが続々と合流してきたし、今日はめずらしくヒビクもいる。

久々に揃った5人で流れるように校門を出た俺たちは、そろそろと駅に向かう。

「帰りは来ないんだな、田村せ〜んぱ〜いって、ゲリラ少女」

「他の先輩たちもいるからって、遠慮してくれてるらしい...」

唯子ちゃんは、主に小早川先輩に気を使ってくれているようだったが、そこまではあえて説明しないでおいた。

「先輩たちに遠慮しながらも追いかけてくるなんて可愛いじゃない。田村くんも罪な男だねえ〜」

ややチャカしたように柏木は言うが――。

「お前ほどじゃねーだろう...」

思わず柏木の腕をつかんでいた。無意識に力も入っちゃって、ひ弱な柏木は、いててと鳴く。

「痛いよ、田村くん...」

「さっき、小春ちゃんと話したぜ」

つかんでいた手を放してやると、柏木はその腕を振って痛みをごまかす。それほど強くつかんだわけでもないのに、柏木にはずいぶんこたえたらしい。ドラマーのくせに、しばらくスティックをふらねえでただけで見かけどおりの柔になっちゃって。

「小春ちゃん、何て言ってた...?」

「おめーのこと、絶対に許さねえって」

やっぱりそっか...、と柏木はうつむいた。小春ちゃんに謝るたびに、同じことを何度も言われたらしい。

「お前、バカだよ。何だってあんなことした？沢渡センセのこと、本気だったわけじゃねえんだろ？」

前に行くブラザーズやヒビクたちには聴こえないように、声を抑えて柏木を問いただす。だが、柏木は答えず、3メートルほど先を歩いているヒビクの背中をじっと見つめている。そして、唐突に言った。

「.....ヒカルちゃん、奥田くんと付き合っていないって」

「今はその話じゃねえだろうが」

何をはぐらかしてやがる、と思ったけど、柏木は白でも黒でもない、柏木直弥のマジな目をし

ていた。

「ヒカルに、訊いたのか？」

柏木はたまたま会ったからね、と頷いた。

「ヒカルちゃん、どうしてそんな話になっているんだって驚いていたよ。奥田くんとは空手部との関わりで親しくなっただけで、誘われればランチもするけどそれだけだって」

俺が言ったとおりだね、と柏木。

今、こんな話を柏木がする意図が分からないが、とりあえず黙ってきくことにした。

「風間くん、ずいぶん落ち込んでいたし、あれから大島さんへの態度も少し変わったようだけど、どうしてそんなにも好きなヒカルちゃんを自分のものにしないのかな？」

それは――。

「あいつにはあいつのこだわりがあるんだろう...」

「本当に好きな人への想いがキレイすぎるんだよ。風間くんもヒカルちゃんも...」

田村くんも、と最後に聴こえたような気がしたが、それはごくごく小さな声だった。

「好きな相手を大切にしているってことよく分かるんだけどさ、俺は――」

小春ちゃんを大切だって思ったことがなかった、と柏木は言った。

「な...っ！？大切じゃないって...じゃあ、何で付き合ってたんだよ」

「それは、好きだから」

好きイコール大切じゃねえんだろうか、こいつは。

「俺、沢渡先生のこと、たぶん本当に好きだったよ。けど大切だとは思ってなかった。風間くんがヒカルちゃんを想うみたいな、綺麗な想いは俺にはなかったと思う。先生にも小春ちゃんにも...」

「綺麗じゃねえって、じゃあ、どんなんだったわけ？」

それは、色々だよ、と柏木は明言を避けたが――。

「は...、そういうことね。サイテーだな、おめーは」

「だって綺麗事は言えないし...、俺にとっては正直なことだよ」

でも今は、と呟いて柏木はずっと遠くのほうに目を向けた。

「俺を許さない小春ちゃんを本当に好きになったよ。彼女の気持ちも彼女自身のことも、今は大切だと思えるんだ」

「遅せえよ！」

「分かっている。でも俺、小春ちゃんに沢渡先生のことバレたとしても、彼女は怒ったりしないで許してくれるんだろうなって思った。そうやって何をやっても許されちゃう俺とか許してくれる小春ちゃんを頭で想像するだけで無性に寂しかったからさ、今、俺を許さない小春ちゃんにどこかで安心してたりもするんだ...」

分からねえ。

柏木の想いはどこか文学的すぎるんじゃないかと思う。

好きとか大切だって気持ちは理屈じゃねえし。

「理解はできねえな。おめーがやったことは愚行、不実、それ以外の何物でもねえし、その報い

で小春ちゃんはいなくなっちゃまったっていう結果があるだけ。因果関係ハッキリしてるぜ」

「キビシイねえ...」

当たり前だ。

「でもやっぱり、今になって小春ちゃんが大切だって思うんだ」

柏木はもう一度呟いた。

「おーい。早く来ないと電車行っちゃまうぜ？」

気がつくのと、駅まで来ていた。

ヒビクたちはもうすでに改札の中に入れて、俺と柏木を待っている。

電車がホームに入ってくる音が響いているから、俺と柏木も急いで改札をくぐった。

「田村にしちゃ深刻な顔して、どうした？」

電車に乗ってからも俺はずいぶんとムツリとしていたようだ。

色々考えるとなんだか気が滅入っちゃまって。

俺、こんなに考え込む人間だったろうか――。

なんか、どこまでいっても気苦労が絶えない。肩に悪霊でもものっかってんじゃねーかと思っ
ちまうぜ。

「田村も明日から冬期講習か？受験生は大変だなー」

進路が決まっているヒビクが呑気なことをぬかすが、そうだけ。そのこともあった。

ていうか、本当は自分のこれを一番に考えなきゃならねえだろうよ、田村優作。

ヒビクとか柏木の難しい恋愛観なんかよりも！

「ヒビクは音楽学校か。しかもボストンの...。やることが派手すぎだよな」

英文科の大学にでも行くんだろうと思っていただけ、親父さんを越えるピアニストになって、
いつかヒカルを両手で堂々と抱きしめてやる...なんてロマンを抱いて、こいつはアメリカに行っ
ちまう。

「田村は...社会...なんて学科だっけ？」

「失礼なヤツめ！ちゃんと覚えておけよ！俺は、社会...、あれ？なんだっけ？」

自分で忘れてちゃ世話ねえだろ、とヒビクは呆れる。

それ以上に俺が呆れる。

自分が受けようとしている学部の名前も出てこないだなんてさ。こんなんでもいいのだろうか、
俺は――。

もう、何度も繰り返し自問しているが、明快な答えが出て来ねえ。

喉もとの、ここまで上がってきているのに言葉にすることが出来ない想いに似た答え。

天から降ってくるのにキャッチできねえで見失っちゃまう答え。

そして、流されるまま先生が勧めてくれた進路を歩こうとしている。

—いいのか、俺？

ヒビクは音楽を作るだけじゃなく、それを奏でるスペシャリストを目指す。
俺は、大学に行って社会の...、もしくは産業の...

—いや、違うだろう。

俺がやりたいのは、そんなんじゃない。

俺だって、どこまでも音楽に携わっていたいんだ。

けど、俺にはヒビクのような作曲やピアノの才能はねえし、ギターの腕もごくごく一般的だし、音楽、を作ることはできない。

けど、作られ奏でられた音楽を、広く人に宣べ伝える形にすることが出来たら...

—アーティストの想いを形に！目指せ、音のクリエイター！—

想いを形にするクリエイター...

—CD制作に欠かせない音の演出家を育てる—

アーティストが奏でる音楽、そのCDを制作するエンジニアなら—。

突然、キーンと頭の中で音がした。

さっきから何気なく目に入っている、それが、くすぶり続けていたことに正しい答えを導き音を鳴らしたのだ。

今、俺の目の前、ドアの横に貼ってある広告。

【毎日が音楽！キミの夢をサポートする東京レコーディングエンジニア専門学校】

—レコーディングエンジニア、。

これだ。

ライブの会場で、音、を作る人になりたい、と言っていたのは夏に出会った菜奈美ちゃんだった。

俺は、演奏者の想いを形に、CDに記録したい。

ヒビクやあかねが作る曲たちのように、想いから生まれるメロディを形にして、誰にでもどこ

にでも宣べ伝えられる音を作る人間になりたい――。

バラバラに落ちて来ていたテトリスのブロックが、全て揃って消えた瞬間のような爽快感が駆け巡った。

「そうそう。社会情報学部だ。思い出したよ」

「いや、違うな」

ヒビクは、ん？と俺の顔を見た。

「社会経済学部だったか？」

「いや。俺、大学には行かねえことにした」

「何それ？いつ決めたんだ？」

「今」

「は...？」

何だよヒビク、間抜け面しやがって。俺はこんなにも気分爽快だったのに。

もう時間もねえから、すぐにでも都内中の専門学校を調べなきゃならねえな。

人の恋愛事情になんてかまってられねえぜ。でもって、冬期講習にも行ってられねえ。

たった今、奇跡的に降って来たこの天啓を、もう見失うわけにはいかねえから――。

大学には行かない。

そういうことだから冬期講習会にも行かない。

と、かーちゃんに告げたところ、今の社会を生きるには……から始まって、けどまあ、あたしの子だし高望みもしてないよ、で終わるまで3時間15分の講釈と説教を食らい、最終的に、「あなたの大学受験のためにかけたもろもろの費用（夏期講習会分を含む）、利子をつけて5年以内に返納せよ」

と、言い渡されて、結果的には俺の決断を納得してもらえた。

それから俺は本屋に直行して専門学校の案内本を購入。とにかく、これと思うところに電話をかけて資料請求をしたり、見学会、体験入学の有無を確認した。

12月25日。

今日は日比谷にある学校を見学して来た。

時期外れで特別に許してもらえた見学だったから、俺以外に見ているヤツはなく、講師が学校やカリキュラムについて詳しく説明してくれたし、間近で機械も見せてもらえたし、ずいぶんラッキーだったようだ。

おかげで長居しちまい、外に出た時はもう夕暮れ。普段よりも一層、きらびやかに賑わっている街を見渡して、思い出したことがひとつ。

――クリスマス…。

洒落込んでいちゃいちゃ寄り添うカップルたちとすれ違いながら、クリスマスの夜に行くところも逢う人もない俺は、イルミネーション輝く街をひとり駅に向かうだけだ。

けど、今日はそんな惨めな自分にもさほどめげちゃいない。

クリスマスにひとり身歴18年だろうが、非彼女歴18年だろうが、今の俺は見えてきた夢の方へという塩梅に気持ちが向いているしい。

とは言っても、つまんねえのは確かだから無駄にふらふらしねえでサクサク歩く。やたらと明るいジングルベルが耳につき、さらにサクサクと歩く。

そんなとき――。

「いいじゃない。一緒に行こうよ。せっかくのクリスマスなんだしさ。ひとりであるのもつまらないでしょ？」

「行きません。あなたと一緒にいく理由はないし、あたし、暇じゃないので」

クリスマスにナンパなんかしてる見知らぬヘラ男と、何故かナンパされている見知った小早川

に遭遇した。

「またまた、そんな強がり言っちゃって～」

「.....あなたにそんな風に言われる筋合い、全然ないんですけど！」

ずいぶん強気に対応しているみてえだが、一応小早川は困っているらしい。
ってことで、とりあえずオタスケマンだ。

「おーい。こんなところで何してるんだ？」

ヘラ男の方は無視して、小早川の目の前に登場してやった。

「た、田村くん!？」

背後でヘラ男が息を詰めた気配が伝わってきた。

小早川はぼかんとした顔で俺を見上げている。

「こんなところにひとりでいると、へんなヤツにナンパされるぜ？」

「へんなヤツ」と「ナンパ」を強調し、さりげなく小早川を促して歩き出すと、ヘラ男はそっ
とその場を離れるようにそろそろと逆方向へと去って行った。

「.....情けねえやつ...。あんなのにナンパなんかされてんじゃねえよ」

「さ、されたくてされてたわけじゃないよ」

「だいたい、何でこんな時間にこんな所にひとりでいるの」

もう陽はすっかり暮れちまっている。

「田村くんこそ何やってるの？デートの待ち合わせとか？」

「それ、ありえねえの分かって言ってるだろ...」

もちろん、と小早川は小悪魔的に笑いやがった。

思わぬところで思わぬ人間と遭遇したが、ホーリーナイト、どうやら小早川もひとりらしいし、
せっかくイリュミネーションがチカチカしてる街にいることだし、茶でも飲んでいくかと誘っ
てみると、べつにいいよ、という返事。

で――。

「茶でもっていうから、どんなお洒落なお店に連れて行ってってくれるんだろうと期待したのに...」

小早川はシェイクのカップを指でペコペコ押しながら、立派に文句を垂れた。

「俺と小早川でお洒落な店に行ったってしょうがねえだろ」

小腹が減っていた俺はハンバーガーと珈琲が乗ったトレイを、ちょうど空いた窓際席に置いて、
よっこらしよと座り込む。

ま、我ながらロマンはねえとは思いますが、貧乏な高校生には日比谷のお洒落な店など敷居が高すぎる
ってもんだ。それでも、小早川が持っているシェイクは俺の奢りだ。誘ったのは俺の方だし、
一応今日はクリスマスだし。

「田村くん、ありがとう。クリスマスに偶然会えて嬉しいわ（にこにこ）……ぐらい言えねえのかよ」

「田村くんありがとうクリスマスに偶然会えて嬉しいわかっこにこにこかっことじる」

「いっそ、爽やかなぐらい棒読みな台詞をありがとうございます…」

「どういたしまして」

小早川環はどこまでも小早川環だった。

放っておいてもきっと、自分でヘラ男を撃退したんだらう。

「お前、あそこで何やってたんだ？」

「あの洋菓子屋さんは知り合いの店で、ちょっとお手伝いをしてきた帰り」

小早川は、ここから見える遭遇場所を指差した。さっきは気づかなかったが小さな洋菓子店があり、店頭で箱に入ったクリスマスケーキが売られている。

「さっきのナンパ男はお客さんだったんだ。店を手伝っているときから、終わったらどこかに行こうって誘われてて、さっきに至っていたわけ」

ありゃ。

「もしかして俺、営業妨害の余計なお世話様だった？」

「さあ？お店に来るお客さんはひとり減っちゃったかもしれないけど、あたしの店じゃないし、べつにいいよ」

「……………」

さすが小早川環ちゃん。知り合いのお店なんでしょうに…。

「で、田村くんはクリスマスの日比谷で、ひとりで何をしていたの？」

「学校見学」

え？と小早川は訊き返して来た。

「オープンカレッジってこと？」

「いや」

もらって来た学校案内のパンフレットを小早川に差し出してやると、それを手にした小早川は

、「専門学校？田村くん、大学受験するんじゃないの？」

ずいぶんと驚いていた。

・
・
・

「ふーん。田村くんにしては思い切った決断をしたんだねえ」

ここに至る経緯をざっと話してやると、小早川はやや感心したような、だいぶん呆れたような反応を返してきた。

「田村くんにしては、ってどういう意味よ？」

「優柔不断の田村くんにしては、って言えば分かりやすかった？」

く…っ。相変わらず厳しいお言葉。

「でも、ちょっと安心したよ。社会情報学部とか産業学部とか、何を勉強するのか分からないで決めていた時は、それでいいのかなあって思っていたから」

厳しいけど心配してくれているところが小早川のいいところだ。

「まあ、先にその思い切った決断をしたヤツが身近にいたしな」

「誰？」

ひとはヒビクだ。あれは思い切ったというか暴走しているというか評価が微妙なところだが、それでも、自分の中に大きな目標を打ち立てて未来を見て決断したことは尊敬に値する。

そして、もうひとり。

「小早川環ってやつ」

「あたし?!」

「予備校まで通って受験に備えていたのに、自分のやりたい職業のために進路変更したじゃねえか」

あれはもう、夏休み前の話だ。

就きたい職業に必要な知識とか技術は短大じゃ学べないから専門学校に行くことにした、と言ったこいつの言葉は、あの時の俺に軽い衝撃をもたらした。

今思えばあれからだな。俺が、進路についてもやもやしたものを抱くようになったのは。

もやもやしてるのに流されて、進路相談の先生に勧められるまま、社会なんか学部や産業かんとか学部を受験することに決めちまって。

さっき、こいつが言ったとおり、優柔不断。

今さらながら、自分が情けなくなってくる。

「あたしは思い切ったわけじゃないよ。現実的だっただけ」

「小早川が就きたい職業ってどんなの？」

それは...、と小早川は照れくさそうに頬を赤くした。

「あ、言いたくねえなら無理しなくていいぜ？小早川は何の専門学校に行くんだか、ちょっと興味があっただけだから」

「言いたくないってわけじゃないけど...」

小早川はさらに赤くなる。

こんな小早川はちょっとらしくねえけど、自分の夢を人に喋るのはどこか小っ恥ずかしいものがあるのも分かる。

小早川は視線を彷徨わせてそれを窓の外に落ち着かせた。夜になった街路はさらにクリスマス全開で人通りも多くなっている。ガラス一枚を隔てた向こう側は雪が降っているわけでもねえのに、何となく世界が白い。そして、キラキラチカチカ目に眩しい。

「しかし...、幸せな人が多いんだなあ？こんだけ人がたくさんいるのに、その8割ぐらいがカップルって...、どうよ？」

夢のことは話しくそうだから話題を適当に変更した。

「べつにいいんじゃないの？幸せな人がいっぱいいるってことは良いことだと思うよ」

「小早川さんってば寛大！俺は心が狭いからダメだね。幸せそうなあのヒトたちの真ん中に、こ

こから「くさや、でも放り投げてやりたいぜ」

「くさやって……」

どこから出てきたのそれ、と小早川は心底呆れた顔をしたが、俺も自分で呆れた。いくらなんでもクリスマスにくさやはねえだろう。第一、くさやなんて持っていたら自分が臭くてしょうがねえじゃねーか。やべやべ、変えた話題が適當すぎたぜ。

てなことを、ひとり頭の中でぶつぶつ喋り繋いでいると、

「田村くん、あのふたり…」

小早川が視線を向けたガラス窓の向こう。その先を追いかけて見ると――。

「あ」

俺ってやつは、つくづく運のない男だと思う。

普段ほとんど来ることのないこの日比谷で、しかもクリスマスという日に、学校外で遭遇することはないはずのあかねと群竹が仲良くデートしているその場面を見てしまうわけだから。

付き合っているあかねと群竹がクリスマスにデートしているのは普通のことだ。けどそれは、俺がいる日比谷じゃなくてもいいだろう。池袋とか渋谷とか原宿とかにしておけよ。

最近のふたりは学校の中でも仲良しオーラを出してはいる。だが、制服を着ていない今日のふたりは、そこらに溢れているいちゃいちゃカップルたちとまったく変わらないぐらい、いちゃいちゃオーラを発散させていやがる。

「群竹くんって、あんなに優しい顔をする子だったんだ」

抱き寄せるようにして歩くあかねを見下ろす群竹には、普段の鋭さがまるでない。どこから見ても、誰が見ても鼻の下デレ男だ。

「学校じゃ、いつ見てもクールなのにね」

――ふん。そりゃ、彼女があんだけ可愛ければ、群竹の鼻だって伸びるだろうよ。

あかねが幸せそうに笑っているのはいい。

不安に潰されそうな、悲しそうな目をしたあかねはもう見たくねえから、ふたりの仲が上手くいっているのは良いのだ。

けど、何も幸せに笑うあかねと群竹を見たいってわけじゃねえのに。

百歩譲って、あかねだけが笑っているのは見てもいいけど、群竹はいらねえし。

――本気でくさや投げたいし…。

「ちきしょーめ…」

ふいに、呟きが声に出ちまった。

すると、小早川はあっさりと言った。

「それでも、田村くんは水沢さんのこと好きなんだよね」

「な...っ」

「風間くんとか人の面倒ばかり見ていないで、もっと自分のことを考えたらいいのに」

小早川はカップに残っていたシェイクをずずずと飲み干して、ごちそうさまでした、と笑った。

。

「な、なんだよ、小早川...」

「でも、そういう田村くん悪くないよ。自分の想いに報いを求めないで水沢さんのことが好きな田村くん、いいと思う」

俺は小早川になんて言葉を返したらいいのか分からなかった。

こいつには修学旅行の最終日に、想いを浸したマグカップをもらっている。素顔を仮面に隠して手渡されたものだったが、あの時見た銀色の髪留めをこいつは今日もつけている。

あのマグカップの意味に気づいてはいるが、そのことに俺ももちろん小早川も触れることなく、それまでと変わらない俺たちで今日まで過ごしてきた。怒ってばかりいる小早川と怒られてばかりいる俺、そういう俺たちで。

「でも、このまま卒業しちゃっていいの？」

「どういう...意味だよ」

小早川はもう一度窓の外に目を向ける。そこにはもう、あかねたちの姿はなかった。

「伝えなくていいのかなってこと。略奪するとか」

「りゃ、りゃくだっ！？」

「なんてね...。するわけないよね、田村くんだし」

そろそろ出ようか、と小早川は脇に置いたコートを手に取った。

「お前ならどうするんだよ？」

トレイの上にゴミと空いたシェイクのカップを載せ、帰り支度をしながらさりげなく訊いた。

「田村くんの立場があたしだったら、ということ？」

「ああ」

あたしなら...、と言いながら小早川は腰を浮かせた。

「たぶん、そのまま卒業しちゃうな」

「それで、いいわけ？」

「うん。好きって気持ちも一緒に卒業しちゃうと思う。あたしは、それでいいかな。卒業してまでも思い続けるとか、そういう可愛い趣味はないから」

言いながらテーブルのトレイを持ち、立ち上がった小早川は、そのままスタスタとダストボックスへと歩き出した。その前に、一瞬だけ、まっすぐに俺を見た小早川の潔い目が印象的だった。

。

◇

街路に出て、そのまま駅の方に足を向けようとしたとき、小早川はちょっと待って、と反対方向を振り向いた。

「クリスマスケーキ、買っていこうかな。売れ残っちゃったらもったいないし」

知り合いの店だという洋菓子店はすぐそこにある。店頭で売られているケーキは、まだ数個が売れ残っていた。

「このケーキ、すごく美味しいのになあ」

残念そうに呟いて、小早川は箱をひとつ手に取った。

店の中にはシェフの白衣を着た若い職人がひとりいるだけで、店員らしき人も客もいない。「あの人はうちのお隣さんなんだ。昔からお菓子を作るのが上手で、よくケーキとかクッキーを作って持ってきてくれたの。子どもだったあたしはあの人が作るお菓子が大好きで、また作ってっておねだりしたりしながら、自分もいつかこんな美味しいお菓子が作れるようになりたいなーって思って……」

話の途中で小早川はハッと気づいたように俺を見た。その顔が、みるみる赤くなっていく。

「な、なに？どうしたの」

「あたし、何を余計なこと喋ってるんだか…！あたしのお菓子の話なんてどうでもいいよね！」

「いや？そんなことないぜ？何をそんなにうろたえて…、」

――あ。もしかして。

「小早川が就きたい職業って、菓子職人？」

小早川の顔がひきつり、一気に赤味が上昇した顔は冷気に当たって湯気が立ちそうだった。

「当たりか」

「そ、そうよ。あたしはパティシエの専門学校に行くの」

「小早川がパティシエねえ…」

意外ってわけじゃないが、確かに言われなければ予想はできない職業ではある。

菓子の甘さとか柔らかさとか、そういうイメージから来る印象は、はっきり言って小早川にはないし。

「小早川が作る菓子は辛そう…、とか思ってるでしょう？」

「いや、そこまでは思ってねえよ」

そこまでは、ってどういう意味よ！と、いつものように怒鳴って、そしてひとりですいぶんとうろたえて、小早川はそそくさと店内に入っていった。

職人と小早川が、俺を見ながら何かを話している。ニヤニヤする職人と、抗議するように食ってかかっている小早川を見れば、話の内容はなんとなく想像がつく。きっと、俺を彼氏かなんかだと勘違いされて、小早川が怒っているんだろう。

さっき小早川が言った言葉を、今またふと思い出した。

——好きって気持ちも一緒に卒業しちゃうと思う。

卒業してまでも思い続けるとか、そういう可愛い趣味はないから——

言葉だけを聞けばずいぶんと冷めているというか、あっさりしているというか。

そして実際小早川は、たぶんあの言葉どおりのヤツなんだとも思う。決して甘くはない。どちらかといえば辛い。勝気で怒りっぽくてあまのじゃくで、菓子にたとえるとしたら柿の種だ。

けど——。

「お待たせ...」

ややむくれた顔をして、小早川が店から出てきた。

店内を見れば、職人がニコニコ笑いながら手を振っている。

「あの、作るお菓子も甘いけどケーキも甘いんだよね...」

「優しそうだな」

う...、と小早川はうなった。

「どうせ、あたしは無敵で怖いですよ...。鋼みたいに硬くて唐辛子みたいに辛いケーキつくっちゃうかも」

——ほんと、あまのじゃくめ。

「俺は、小早川環が作る菓子、食いてえな？どうせなら、鋼でも辛くもねえ、柔らかくて甘いのがいいけどな」

「.....」

小早川は応えずにサクサクと歩き出す。

「ガキの頃からのその夢、いいじゃねえか。ずっと同じ夢を持ち続けてきた小早川、悪くないぜ？」

あくまでもサクサク行く小早川が、前を向いたまま呟いた「ありがとう、は、ジングルベルの音楽の中に溶けこむほど微かだったが、俺の耳の中には素直に染み込んできた。

3学期になってから、教室の黒板には今日の日付と日直の名前の左隣に、『卒業式まであと〇〇日』というカウントダウンが書かれるようになった。

それが『あと45日』になった頃、俺の進路が確定した。進学先は、クリスマスに見学に行った日比谷の学校だ。決めた理由はいくつかあるが、実習カリキュラムがどこよりも充実しているってのが一番の決め手になった。

同じ頃、松山弟も体育大への進路が決まった。運動部をやってたわけじゃねえからインターハイ出場とか大会優勝なんていう榮譽はひとつもなかったが、学校一の体育バカは体力のみでクリアしやがった。本人いわく、面接で言った小学校から数えて12年間無欠席&虫歯ゼロが面接官の受けを取った、らしいが本当のところは分からない。

柏木&松山兄はまだ結果が出ていない。ふたりとも結果待ちだ。

何にしても、決まっちゃった俺はもうお気楽極楽だ。あとは3月15日の卒業式を待つだけ。

そう。

もう、卒業するだけなのだ。

毎朝、教室に入ると最初に見てしまう『卒業式まであと〇〇日』。

そしてため息が出ちまうのが日課になっている。進路も決まり、夢も見えてパラダイスなはずなのに、一方で過ぎて行く一日の速さがせつない。田村くんのうるわしき青春とバイバイしなくてはならない日が確実に近づいているわけなので。

「田村くん、来てる？」

あと35日、となった黒板の前で、今朝もため息を吐こうかなーと思っていた時、廊下から教室に駆け込んできた小早川が第一声で俺の名を呼んだ。

「いたいた！」

小早川は後ろのドアから教室の一番前までバタバタ走って来る。

単語帳や参考書とにらめっこをしている未だ受験真っ最中組のヤツらが、あからさまに迷惑だと語っている目を小早川に向けたんで、そのピリピリした空気を読んだ小早川は俺の腕を引っ張りながら今度は小声で言った。

「ちょっと、廊下まで来て」

「何？」

「いいから、来て」

そのまま引っ張られて寒い廊下に連れ出されると、周囲の人間を気遣うように小早川はさらに声のトーンを下げ、

「風間くん、アメリカに行っちゃうんだってね。知っていたの？」

と、訊いて来たもんで驚いた。

ヒビクは自分の進路について、俺たち以外には喋ってねえはずなのに、どうしてこいつが知っているんだ。

「おまえ、それどこで聞いた？」

また松山兄でも口を滑らしやがったかと思ったが、雪乃、と小早川は端的に答えた。

――ってことは……。

「あいつ、大島に言ったのか」

「やっぱり、知っていたんだ…」

小早川の目が、心なしか俺を責めている…気がする。

「風間くんと雪乃が、実は付き合ってるわけじゃないってことも、知ってた？」

「……ヒビクから聞いていた」

「ふーん……」

小早川の目は、ますます俺を責めてる…ような気がする。

「あのね、」

小早川の話によれば、昨日の放課後、ヒビクはやっと、卒業後はアメリカへ渡り5年は戻らないつもりでいることと、ニセモノカップル解消を大島に告げたいらしい。

そして昨夜、小早川のところには大島が泣きながら電話をしてきた、というのだ。

あの大島が泣いた、というのにはちょっと驚いたが、大島も、これだけ長い間ヒビクの傍にいれば、変な期待もしちまっただろう。あいつらの間でどういう決め事があってニセモノカップルをやったのかは知らねえが、端から見ればやっぱりヒビクと大島は付き合っているようにしか見えなかったわけだから。

最初にヒビクが大島を拒絶しなかったことが、今になって必要以上に傷つけちゃうことになり、さらにアメリカに行っちゃうことが追い打ちになって、泣きながら小早川に電話するほど嘆かせちゃったのだろうと、俺は普通にそう理解をしたのだが――。

「そうじゃない。雪乃はそういうことで泣いてたんじゃないの」

ヒビクがアメリカに行っちゃうことや玉砕に関しての嘆きは、大島にはなかったらしい。

「だったら、何なんだ？」

「たぶん、自己嫌悪だと思う」

自己嫌悪？あの大島が？

「昨日風間くんがアメリカに行くって告げられたとき、いっそ、遠くに行ってくれちゃった方が浅倉さんともお別れすることになるからいいわ、ってとっさに思ったらしいよ、雪乃」

――というと…？

「雪乃が、あれほど隙なく風間くんにくっついてたのは、浅倉さんに対する対抗心だったみたい」

――…ま、まじ？

「1年のときから想っていた雪乃にしてみれば、風間くんが自分より後から入学してきた浅倉さんにぞっこんになっちゃっているのが許せなかったみたいよ。マドンナさんの時とは全然雰囲気違っていたじゃない、風間くん」

――確かに。

「マドンナさんの時も、雪乃はずいぶん荒れてあたしはとぼっちり受けていたけど、浅倉さんの時はそれ以上だった。だから雪乃、まず最初に浅倉さんとの対決に挑んでやんわりと釘を刺したんだと思う。今、思えば、だけど」

――……背筋が寒いっす。

「もちろん、雪乃が風間くんに押しかけたのは傍にいたいという気持ちが一番だったと思うけど、風間くんを巡って浅倉さんより優位にいる立場が欲しかったのも本当だと思う。そして、その通りになったのに、やっぱりそういう無理は自分を追い詰めるじゃない？だって、相手の気持ちが傍にあるわけじゃないんだもん…」

最後の方は、ずいぶんと沈んだ声になっていた。

「大島、あれで追い詰まってたのか」

かなり向こう見ずのイケイケに見えていたけどな。

「あのね、田村くん。水沢さんみたいな子ばかりが女の子ってわけじゃないんだよ？目に見えないところで、悩んだり苦しんだりしているの。雪乃だってそうだったんだからね」

――うぐっ。

俺も追い詰まっちゃった。

小早川さん、さりげなく言うことがキツイです――。

「雪乃は、ずっと浅倉さんを意識していたんだよ。だから最後まで浅倉さんに敵わなかったことが悔しくて、あさましいこと考える自分が嫌になっちゃったんだよね」

大島は、ティッシュ一箱使い切るほど泣いて、その間小早川はずっと、電話で話を聞いてやったそう。

「災難なのはヒカルだな…」

「ほんと、そう」

あいつは、大島と勝負しているつもりなどまるでなかつただろうし、対抗心を燃やされていることだって考えもつかないでいたに違いない。

「けど、やっぱり話をここまでややこしくした一番の原因はヒビクの態度だな」

「そして、知っていた田村くんも同罪」

「はぁ?!俺も?!」

――何だよ!?

「.....あたしに、話して欲しかった。そうしたら...」

こうなる前に大島をひっぱたいてやっていた、と小早川は呟いた。

「まあ、それで雪乃が止まったとも思えないけど...」

「.....小早川」

俺がヒビクを心配すると同じように、こいつは大島を思っていたはずだ。

外れた道を行こうとしている友を黙認するわけにはいかねえし、それ以前に黙って見ているなんてできねえ。

ことが終わっちゃってからすったもんだの中身を知った小早川は、こいつなりにショックだったはずだ。ティッシュケース一箱分の涙を流す大島の話聞きながら、小早川は違う意味で辛かったに違いない。

「そうだったな...。悪かった。お前には話すべきだったよ」

もういいけど、と言いながら、小早川は俺から目をそらす。

「こうなって、さんざん泣いて、雪乃ももう、風間くんのことに関しては気がすんだようだし、1年の時から飛んできていたあたしへのとぼっちりもなくなるし、やれやれって感じ」

ふう...、と肩の荷を降ろすかのように、小早川は息をついた。

「.....お疲れ...さん」

それに関しちゃ、こうとしか言いようが無い。

あの大島のとぼっちりを受けながら、こいつも1年のときから間接的にヒビクに振り回されていたってことだ。

まったく...、ヤツはどんだけ人間を無自覚のうちに巻き込んでやがるんだ。

「それにしても...、ひっぱたいてやってたって...、ずいぶん過激だな?」

「そう?熱くなっちゃってる人には言葉は通じないもん。パチンってやるのが一番冷静になれるでしょ」

いや、まあ、確かにそうなんだろうけど。

「俺はヒビクに怒鳴りはしたが、ひっぱたきはしなかったなあ...」

田村くんは甘いよ、と小早川。

見えざる女子の真実を垣間見たような朝だった。

◇

そして今日は『卒業式まであと29日』。とうとう1ヶ月を切っちゃった。

「いやぁ～！なんか、世界が昨日までとは違って見えるぜい！待っててね～、涼子さーんっ」

昼休み。

屋上のフェンス越しに景色を望み、松山兄は腹の底からの声を出してその人の名を叫んだ。

昨日、本命大学の発表があり、奇跡の桜が咲いた松山兄の脳みそは、春からのいちゃいちゃライフ妄想劇が上演され、一足先にピンクの花が咲き乱れちゃまっているらしい。

だが、たぶんこいつは俺たちの中で、一番限界を超えた努力をしてくれよう。認めるのは悔しいしバカらしい感がぬぐえないが、そこはやはり称えてやりたいと思う。

「恋の力はすごいな...」

しみじみと呟くのは柏木だ。

こいつも志望校に進路が確定したが、松山兄のようにはっちゃけてはいない。それどころか暗い。なぜかといえば、志望校を同じにして途中まで一緒に受験勉強に励んでいた小春ちゃんが、柏木の受験リストに入っていない大学へ志望を変え、それが確定しちゃったからだ。

けど、今になって未練を残したところで、もう後の祭りだ。

柏木を許さないっていう小春ちゃんの意志は鋼のように硬く、柏木直弥はこの辛（から）さをしばらく背負って行くしかねえ。それが責任ってヤツだ。

バタン！！

いきなり屋上扉が開いたと思ったら、

「こんなところにいた！田村せ～んぱいっ！！」

明と暗が同座した妙な空気を吹き飛ばす勢いで駆けてきたのは唯子ちゃんだった。

ブラザーズ、ヒビク、柏木は示し合わせたかのように一斉に俺から距離を取る。

その空いたスペースに唯子ちゃんがポッコリと入ってきて、リボンをかけた小さな紙の袋を俺の前に差し出した。

「はい...？」

「はい？って何ですかー？チョコレートですよ、バレンタインの！」

――あ。

今日は2月14日。バレンタインデーだった。

去年までのような期待をする気持ちが1ミリもなかったからか、`あと29日、はしっかりチェックしても、その隣にある日付はまったく気にしていなかったぜ。

「一応、手作りしたんですよ、それ！」

「...そっか。ありがとう」

「本命ですからね、それ！」

「あ...、うん。ありがとうね」

なんだかんだ言ってモテてるじゃん...、と、背後から冷たい響きを浴びせてくれたのは松山弟だ。

「そこにゝくさや、でも放り投げてやりたいねえ〜」

笑顔のくせに目が笑ってない柏木も、いつかどこかで誰かが吐いていたような台詞をのたまう。

「お、俺はべつになんだかんだ言ってねえだろう...」

俺の反論は、邪魔しちゃ悪いから俺たちは行くよ、と去っていくふたりの背中が受け止める。

「あれ？あたし、空気読んでなかったかな...」

唯子ちゃんは、哀愁漂うヤツらの背中を見て、気にしちまったようだ。

空気を読んでない...というのも、今さらって気がするけど、あと29日だからもう気にしないでおく。

なんにしても、このチョコレートは俺が生まれて初めてもらった本命チョコだ。それはやっぱり素直に嬉しいし、喜んで受け取ってやりたいと思う。

「べつに大丈夫だよ。あいつらのアレは標準仕様だから」

唯子ちゃんは安心したように笑い、それじゃあたしは行きますね、と、来たときと同様、周囲の憂いをふっ飛ばしながら帰っていった。

「なんか...、1年前のヒカルを思い出すなあ...」

唯子ちゃんの様子を、ほとんど呆然としながら見守っていたヒビクがぼつりと呟いた。

「言えてるな。アレも毎日が嵐のようだったからな」

相槌を返したのは松山兄だ。

こいつに嵐と言われちまうヒカルに同情したくなるが、確かに唯子ちゃんのハツラツさは、1年前のヒカルを彷彿させるものがある。

「けど、ヒカルはあそこまで天然一途でもなかつただろう。ヒビクせ〜んぱいっ！て、おめーにだけチョコくれたわけじゃなかったもん？俺らみんなまとめて、手作りチョコ配布されたし」

兄に鋭い指摘をされ、ヒビクは黙っちまった。

確かに、去年配布されたヒカルからのチョコは、全員がおもいっきり義理だった。本人がそう言いながら無邪気に配っていたし、ヒビクだけに特別な何かがあったわけでもない。

――本命か...

手の中のそれが、今さらながら重く感じた。

田村くん、ちょっと複雑。

先に行くぜ、と兄は校舎に戻っていったが、ヒビクはまだぼんやりとそこにいる。

もうすぐ予鈴も鳴るが――。

「アメリカに行くってこと、大島に話したならヒカルにも言ってやったんだろう？」

「……」

黙ったまま返事を返してこないってことは、こいつはまだ…、

「まさか、ヒカルには言ってないのか？」

ヒビクは、ああ、と頷いた。

「なんで言わねえの？大島とのことだって誤解させたままなんだろう？」

一瞬だが、嫌な予感のようなものが背中を駆け抜けた。

もしもヒビク以外の口から、このことがヒカルの耳に入ったとしたら、あいつはどれだけ傷つくことだろう。

「秘密主義はもう終いにしとけよ。あと29日しかないんだぜ？これ以上、ヒカルを傷つけるようなことするなよ」

アメリカに行っちゃうのは仕方ない。

5年戻らないつもりでいることも、大きすぎる目標を立てちまったこともいいとする。

けど、ヒカルの中にヒビクの嘘を残したまま行っちゃうのはダメだろう。

すぐにでも話してやった方がいい。大島のことも弁明して、そして5年先のことを――。

「今、話をすると、待ってて欲しいって言っちゃいそうで、切り出せないんだ」

ヒビクは青い空を見上げてふっと笑った。

「そんなこと言っちゃったら本末転倒じゃないか。あいつの未来を俺に縛り付けて安全を確保してからアメリカに行ったって、俺は変わらないだろう」

――だあ〜っ。そうだった。こいつには、こんな頑固なこだわりがあったんだ。

「もうすぐあれが仕上がるから、そうしたら――」

「作っていた曲か」

もう、何も言わねえ。

メロディの中に、嘘はつかねえヒビクだから。

カチャリ…、と再びドアが開く音がして振り返ると、少しだけ息を切らし、肩を上下に揺らしたあかねが立っていた。

「よかった…。田村先輩、見つけた…」

「あ、あかね…?! どうした？俺を見つけたって…」

ヒビクが俺の肩をポン、と叩く。そして、口元にニヤけた笑みを浮かべながら、先に行ってるぜ、と屋上を後にした。

「す、すみません。風間先輩とお話中でしたか？」

「いやいや。ヒビクとのお話なんて、べつにいいし」

あかねに見つけてもらったことの方が嬉しいし。

「あの...、わたし、田村先輩に、これを...」

「これって...、もしかして.....」

あかねが俺に差し出したのは、リボンがかかった小さな箱だった。

「田村先輩にお礼の気持ちも込めて...、ささやかなんですけど...よかったら」

「.....（うるうる）」

あかねから初めてもらう（去年はなかったから！）バレンタインのチョコレート。受け取る手が無意識に震えちまう。

いや、いや、いや！！

これは義理だとは分かっている。間違いなく義理だ。けど、特別な義理だったのも分かる。

だって、だって、だって！！

あかねは、田村先輩見つけた、と言ったのだ。その時、そこにはヒビクもいただろう。その、ヒビクが去るのを追わなかっただろう。軽音楽部先輩たちへの義理だとしたら、ヒビクにもここで手渡したはずだろう。

それをしなかった、ということは――。

――ツッパリカエルの優作と同じ、これはあかねが俺にだけ特別にくれた義理チョコなのだっ！！

「あ、あ、ありがとうな、あかね！」

「いいえ。でも、他の先輩たちにはナイショでお願いします。うらまれちゃいそうだから...」

特に太郎先輩には...、と言ってあかねはふんわりと笑った。

やばいです。田村優作。これは、田村くん高校生活最後の....、

ほにゃらららら〜〜〜ん。

「も、もちろん、ナイショにしとくぜ」

もったいなくて言えません。

あかねの本命チョコは当然群竹に渡るのだろう。

だが、あかねにとって間違いなく俺は特別な`田村先輩、。ヒビクやたろじろや柏木その他大勢いる義理関係の中でも、特別に区別された`義理、だ。

もう、それだけで田村くんは十分...だよな。うん。もう、それだけで.....。

いつまでもあかねとこうしていたいのに、無情にも頭上で予鈴が鳴り響く。ポケットの中に入らないチョコレートは手に持ったまま、俺は教室へと戻った。

・
・
・

放課後になって、ヒカルがまた義理チョコを配布しにやってきた。去年は手作りの義理だったが、今年はチロルチョコ3個という佻しさ。

だが、俺はもう、これ以上は望まない、望んじゃいけないってぐらいの想いを唯子ちゃんとあかねからもらっている。たとえ、ヒカルの義理が合計30円だったとしても文句なんか言うはずがない。

「高校最後のバレンタインがこれだけか...」

「やっぱ高望みしすぎたんだな、俺も...」

小春ちゃんからのチョコがなかった柏木と、あるはずもない麻耶ちゃんからのチョコを期待していた弟は、昼休み以上の暗に飲まれちまっているが、脳みそピンクパラダイスな兄の方は、これから涼子さんとデートらしく、足取りも軽やかに先に帰って行った。

そして、ヒビクは――。

「お前のそれ、明らかに俺たちのチロルとは違うな」

チマツと3つが入った小さな透明袋の俺たちだが、ヒビクの手にあるのは綺麗にラッピングを施したものだ。見るからに重さも大きさも全然違う。ヒカルも今年はちゃんと本命と義理の区別をしたようだ。見え見えってところがヒカルらしくて可愛いが、どこかくすぐったい。俺がくすぐられてるわけじゃねーんだが、それでも。

「きっと中身は同じだぜ」

とか言いながらも、顔がニヤついているヒビクは、もうすでに中を確認済みなのだろう。

「非モテ組はサクサク帰ろう...」

「そうそう、サクサクね...」

柏木と弟が単調に呟き、サクサク校門を出て行った。さすがに俺だって、もうこれ以上のサプライズはねえだろうからヤツらの後に続こうとしたとき――。

「田村くん、ちょっといい？」

俺を呼び止めながら追いかけてきたのは小早川だった。

「田村くん、モテモテ～」

「今日はどうしちやったんだろうねえ」

「もー、知らね。行こ行こ」

柏木、ヒビク、弟は振り返りもせずに行っちまう。

だが、小早川はサッパリと手ぶらだから、バレンタイン関係で俺を呼び止めたわけじゃねえよ
うだ。

「ちょっと、教室まで戻ってくれる？悪いんだけど」

言いながら、小早川は昇降口に戻っていく。

教室にいったい何があるんだか、めんどくせえとは思ったが、断ると怖いし、断れる感じ
でもねえしおとなしく従った。

教室にはもう誰もいなかった。

小早川は廊下の自分のロッカーを開け、中から四角い箱を取り出した。

「これ、田村くんに食べてもらおうと思って作ったの。前に、あたしが作るお菓子、食べた
いって言ってくれたでしょ？」

――.....え？

思わず、小早川の手にある箱をじっと見つめちゃった。大きさは15センチほどだろうか。それ
をはい、と俺によこす小早川。

特別なラッピングなどはしていない、普通の白い箱を受け取って、そっと中を開いてみた。

「これ.....」

直径10センチほどの小さな丸いチョコレートケーキだ。飾りなどはほとんどない。見かけはた
だただシンプルなものだった。

「甘くて柔らかいものがいって言っていたから、そうゆうの作ってみた。よかったら食べて」

「...おお。さんきゅ...」

「じゃ、あたしは雪乃が待ってるからこれで！」

小早川はくるりと回れ右をしてそのまま帰ろうとする。俺は、もらった箱を持ったまま、まだ
廊下に立ち尽くしている。

――これは...、小早川からのバレンタインチョコ、として受け取った方がいいのだろうか...

でも、小早川はそういうこと何も言ってねえし、全然いつもどおりだし。さっさと行っちま
うし。

「あ、そうだ。言い忘れちゃった」

もう、ずいぶん遠くまで行っていた小早川が、ふいに立ち止まって振り向いた。

「卒業式の日、田村くんにひとつだけお願いしたいことがあるの」

「どんなことだ？」

「当日に言うよ」

「はぁ？いきなり言われてできることなのか？」

うん、と小早川は頷いた。

「あとそれ、別に義理とか本命とか関係ないから！ただ、食べたいって言ってくれたから作っただけ。それがたまたま今日だっただけ。じゃあね！」

義理でも本命でもないチョコレートケーキか――。

ならこれは、小早川が俺のために作ってくれた、あまのじゃくなケーキってことにしておくぜ。

そのあまのじゃくが俺に望む卒業式の頼みごと。いきなり言われてできるそれはいったい何だろう？考えてみたが、全然思いつかねえ。

けど、ほかならぬ小早川の頼みだ。断る理由なんかない。世話になったせめてもの恩返しだ。卒業式の日、俺があいつのためにできることなら何だってやってやるさ。

綺麗な包装もなければリボンもない、シンプルすぎるチョコレートケーキは、鋼でも唐辛子のようでもなく、かといってふんわり柔らかいわけでもなく、しっとり濡れたような弾力とほのかな甘さが漂う、小早川らしい味がした。

世の中、何が起こるか分からない――。

2月14日、世界も頭の中身もピンクパラダイスだった松山兄が、涼子さんにフラれた。

正確に言えば、イギリスに留学が決まった涼子さんから、交際解消を告げられた、ということだ。

涼子さんの留学は年が明けてすぐに決まっていたらしいが、自分と同じ大学に入ることを目指して死ぬほどの努力をしていた兄に、涼子さんはどうしてもそれを告げることが出来ず、合格が決まった翌日、即ちバレンタイン当日の告知となったわけだ。

ひでえと言えはひでえ話だ。たった1日で天界から地獄に落されちまったのもそうだが、涼子さんとのいちゃいちゃが目当てで入学を決めた大学に肝心の涼子さんはいなくなるんだ。本末転倒もいいところだろう。完璧なすれ違いどころか結果的にフラレちまった兄の嘆き方は悲惨を軽く通り越しちまい、一週間ほどの間、ヤツの傍に近寄れなかった。不純な夢の末路だな、なんて軽口を言いようものならサラッと殺られちまうぐらいの殺気も漂っていたし。

だが、そこでヤツを慰め、ある程度のところまで浮上させたのは柏木だった。柏木もまだ同種の苦しみを乗り越えきっていないからなのか、ふたりは共感しあい同じ傷を舐めあい、以前よりも増して意気投合しているようだ。ここは、黙って見守ってやるしかねえな、と残りの連中で話し合い、とりあえず今は放置している。

一方、おんなじ顔した双子の弟の方は、今、何故か日本中の有名人になっちまっている。

[――高校生 勇気と機転の人命救助――]

ていう見出しの新聞記事が学校の掲示板に貼られているし、今は大分沈静化したけど、先週まではワイドショーのレポーターが校門の周りを囲んでいた。

ことは2月14日の下校時に起こったらしい。

小早川に教室に連れ戻されていた俺は現場にいなかったから聞いた話だが、弟たちが駅で電車待ちをしていた時、ホームで突然貧血を起こした女子大生が目の前で線路に転落しちまった。電車が入ってくる直前に、弟が線路に飛び降りて助けることが出来たが、打ち所が悪かったかショックからか、女子大生の呼吸が止まっちゃって、たまたま救命救護法を知っていた弟は間髪入れずに救命措置をした。それで女子大生は息を吹き返し、命も助かったというわけだ。転落時の怪我も軽くすんだらしい。

弟は、電車がそこまで見えている線路に飛び降りて助け（勇気）、救命法で助け（機転）、二重の行動でひとりの命を助けた高校生ってことでニュースになり、有名人になっちまったというわけだ。

そして、この話はそれだけじゃない。

女ってのは、危険を顧みずに自分を助けてくれた男に、メロメロっとなっちまうものなのだろうか。弟と女子大生はこの2週間ほどの間に、もう4回も会っているらしい。それも全て、女子大

生からのアプローチで。

1度目は助けてもらった御礼に母親と菓子折り持参で会いに来たらしいが、2度目は改めて御礼だと女子大生ひとりから食事に誘われ、3度目はそれが映画鑑賞になって、4度目は遊園地デートにまで発展したっていうんだからオドロキだ。

「麻耶ちゃんはどうしたんだよ...?」

勇気と機転の高校生松山次郎旋風が巻き起こっている最中、こっそりと訊いてみたが、ヤツも複雑な顔をしていた。

麻耶ちゃんのごことはたぶんまだ好きなんだろう。こっちは長年温めてきた弟の大切な想いだ。けど、積極的にアプローチをかけてくる女子大生に心が持っていかれているのも本当のようだ。こっちは急展開で沸騰した想いだ。

世の中、ほんと何が起こるか分からねえ。

こっちはこっちで見守ってやるしかねえが、同じ2月14日に、ピンクパラダイスにいた兄は女子大生にフラレ、どどめ色に呑まれたまま下校したはずの弟は女子大生と衝撃的過ぎる出会いをし、これからちょっと展開がありそうだ。

なんにしても、女子大生に振り回されるってのは、こいつら双子の共通した運命なのかもしれねえ。

3月一一。

3年の期末試験は、もう先月に終わっちゃい、俺たちはしばらく前から週に1日登校日があるだけになっている。進学組、浪人組もほぼ決まった今、学校に来たところでほとんどやることもないし、サイン帳を交換したりするだけの顔合わせだ。

黒板のカウントダウンは、『卒業式まであと10日』。

明日から1、2年生の期末試験が始まる今日は、卒業式前最後の登校日で、実際のところは『あと1日』に等しい。

その高校生活最後の今日、俺はカバンの中にとあるものを入れて来た。

もうここまで来たら、未練がましいことは言いたくねえし、やりたくもねえんだが、バレンタインにももらったささやかな気持ちに対する俺の気持ちを具現化したものだ。

まあ、早い話がお返してやつ。ホワイトデーにあたる3月14日は試験休みだし、そうでなくとも3年の俺たちは学校に来ねえから。

バレンタインにももらった気持ちは3つだったが、持ってきたお返しはひとつだけ。

本命だと宣言してくれた唯子ちゃんへ義理は返せねえし、もちろん本命を返すことも出来ない。そして、本命や義理は関係ないとくれた小早川には、卒業式の日頼まれごとで返すつもりだ。

義理には違いないが特別な想いを込めてくれたあかねにだけ、俺の本当の気持ちを返したいと

用意してきたのだが――。

――好きだぜ、あかね。

そう、最後に告げちまおうかと...、田村くん思い切ったことを考えていたりしています。いやべつに、略奪したいとか略奪しようとか略奪させろとか、そこまでは考えちゃいない。これは、俺自身につける気持ちの決着だ。

泣いても笑っても、もう後がねえわけだから。

卒業しちまったらおそらく会うことはないだろう。会いたいと思っても叶えることは出来ない望みになっちまう。卒業しても思い続けるなんて可愛い趣味はない――と、小早川のように潔く言えればいいのだが、俺は言い切ることができねえ。いつまでも、あかねあかね、思っちまう自信がある。

だから、サッパリと告げてあっさりとフラれて、この2年間の想いからも卒業しなきゃならんだろう。

.....と、思うところまでは簡単で。

実際告げるのかよ...、と今も自問している優柔不断の田村くんなんですが。

キーンコーンカーンコーン、と高校生活最後に聴くチャイムが鳴り響き、いざ、あかねの元に向かおうと廊下に出ようとしたとき、やたら早足で歩くヒビクを見かけた。

「おい、ヒビク！そんなに急いでどこに行くんだ？」

口では訊きながら、頭の中じゃもうその答えが半分出ていた。こいつもきっと俺と同じことを考えて、ヒカルに会いに行くのだろう。

だが、ヒビクから返ってきた答えは違っていた。

「音楽室」

「は？音楽室？忘れ物でもしたか？」

高校生活最後の最後に、そんなに急いで音楽室に行かなきゃならねえ用事なんてのは...

「あれ、仕上げてくる」

「あれって...、もしかして作っていた曲か？」

そうだ、とヒビクはやや照れくさそうに笑って頷いた。

「音楽室でわざわざやるのか？」

作曲にはピアノが一番やりやすいといつか言っていたが、確かヒビクんちにだって立派なピアノがあったはずだ。おふくろさんのだなんて言ってやがったが、あれはきっとこいつのピアノなんだろう。

わざわざじゃねえんだよ、とヒビクは鼻をかく。

「先に帰っていていいぜ？まあ、俺と一緒に帰りたいてんなら、待っててもいいけどさ」

ニカッと白い歯を見せて笑うヒビクは、何かをサッパリとそぎ落としたような顔をしている。溢れて止まらないフレーズを繋げることに苦労していたあの曲、きっと頭の中でスッキリと

繋がったのだろう。

「待っててやるから、とっとと仕上げて来いよ」

「ああ。行ってくる」

ヒビクは、階段を軽く三段ぐらい飛ばしながら駆け下りて行った。

音楽の中には真実しか込めないヒビクが紡ぎだすメロディが、例えばそのまま言葉になったとしたら、どんだけ熱い詞（ことば）が連なっていることだろう。

自分のこだわりから、それを口にするつもりはないんだろうが、言葉とおなじメロディにするなら結局は同じことだ。

ヤツもつくづく不器用な男だと思う。素直に、好きだ、とたった一言告げちまえば簡単なのに、面倒くせえことをあれやこれや考えて。

「……とか、人のこと考えてる場合じゃねーしっ！」

俺だって、早くあかねのところに行かなきゃ帰られちまう。

ヒビクの真似をして三段飛ばしで駆け下りようとしたらスッ転びそうになったから、安全に二段飛ばしで行くことにした。

◇

2年生の回廊に到着し、あかねのA組に向かおうとしたが、その手前のC組の前であかねを見つけた。

とっさに足が止まっちゃったのは、群竹も一緒にそこにいたからだ。いくらなんでも彼氏の前で告るわけにはいかねえし、ホワイトなキャンディを手渡すのもどうかと思われる。

まったく。

最後までついてねえぜ、田村優作よお。

きっと、あのままふたりは仲良く下校しちまうんだらうから、俺は入っていく隙がねえじゃねーか。

自分の運のなさにつくづく悲嘆しながら、足を前に出そうか後ろに戻ろうか、いじいじとしていたが、

「分かった。わたし、先に公民館に行ってるね」

「悪いな。三問ぐらい解いてる間に行くから」

「群竹くんの三問と私の三問じゃ、かかる時間が全然違うんだけどな...」

ふたりはそんな会話をして、その後群竹はひとりで廊下を走って行っちゃった。

どうやらこの後、隣の公民館で落ち合うらしいが、三問うんぬんって言っていたから、一緒に勉強でもするのだろう。明日から2年生は期末だし。

ということで、田村くんチャンス！！

都合よくひとりになってくれたあかねを、公民館に行く前にちょっとだけ拉致ってしまおう。
それぐらい許されるだろう、俺にだってさ。

ところが――。

ないんです。肝心なものが。

カバンを教室に置きっぱなしにしたまま、ここまで突っ走ってきちゃったってことに、たった今、自分の手ぶらの両手を見て気がついた。

――何やってんだ、田村優作！

さっき、ヒビクに声をかけちゃったのがいけないんだ。

あの時素直に自分のカバンを持って廊下に出ていれば、こんな失態を犯さずにすんだものを！
と、嘆いている場合ではない。都合よく群竹はいねーんだし、あかねをこのまま俺の教室に連れて行けばいいことだ。だが、

「あか……、」

と、声をかけながら2Cに近づく前に、

「じゃ、そこまで一緒に行こう、あかねちゃん！」

ササーっと、あかねを連れて行っちゃったのは、お約束のヒカルちゃんだ。

「あかねちゃんいいなあ～、群竹くんに数学を教えてもらえるなんてー」

「だったら、ヒカルちゃんも一緒に勉強しようよ」

「いくらあたしだって、ふたりの時間を邪魔するようなヤボなことはしませんよーだ」

「やだ！そんなこと、気にしなくていいのに！」

俺の時間を邪魔するヤボは、今も昔もやりまくってくれるヒカルのくせに…。

既に見えなくなっちゃったあかねの残像を見つめながら、2年生の回廊でため息を連発する田村くんではありますが――。

こうなると、ますます諦めがつかなくなるもんだ。

今日を逃せば、もうあとはねえんだし、ここは俺も退けない。退いちゃいかん。

とりあえず、教室にカバンを取りに戻ってから公民館にあかねを追いかけよう。群竹クンと合流するまでには、三問解くほどの時間の猶予はあるみてえだから。

けど、そんなにかからねえさ。渡して告ってフラレるまで、1分もありゃ十分だろう。

3年の回廊に戻り、カバンを取って教室を出ようとしたとき、ひとりの女子に呼び止められ、サイン帳にメッセージを書いてくれと頼まれた。

「今頃？俺、これからちょっと用事があるんだけど…」

「ごめん、田村くんに書いてもらうの忘れてて最後になっちゃった」

へーへー。どうせ、田村くんはそんな扱いですよ。忘れられていた挙句、これから大事な用事があるってこんな時になって書けと足止めされちまう。

「悪い。卒業式の日を書くよ。今日はほんと、時間がなくて」

「ええええ〜〜。あたし、泣いちゃう〜〜」

こっちが泣きたいんですけど...

「しょーがねえ。即効書くからよこせよ。その代わり、字の保障はできない...ぜっえ!？」

突然、背中を直撃した何かのせいで、最後の`ぜ、に変な力が入っちゃった。ていうか、それよりも、

「痛てえ...！」

何がぶつかったのか、背中が超痛い。息が止まりそうなくらいの衝撃だった。

振り返ってみると、そこにいたのは泣きそうな顔をした.....。

「ヒカル?!」

「田村先輩...っ！」

ついさっき、こいつは俺の前からあかねをかつ攫って帰ったんじゃないか。

「どうしたんだよ、ヒカル。何があったんだ？」

息が上がって肩を激しく上下に揺らしているヒカルは、たぶん走り回っていたのだろう。その勢いが余って俺の背中に激突したってわけか。

「ヒビク先輩は?!ヒビク先輩どこですか?!3年生の教室のどこにもいないんです！」

目が尋常じゃねえ。こんな、思いつめたようなヒカルを見るのは初めてだった。2Cの前で見かけてからほんの数分しか経ってないのに、そんな短い間に何がヒカルをこんなに追い詰めたっていうんだ。

「落ち着け。ヒカル...」

「ヒビク先輩、アメリカに行っちゃうって本当なんですか?!」

「...なっ。ヒビクに聞いたのか？」

ヒカルはぶるぶると首を大きく横に振った。

「やっぱり...本当なんですね...。今、校門の前で雪乃先輩から聞いたんです...」

大島かよ。

あいつ、最後に爆弾落してくれたってわけか――。

「ヒビク先輩、私には何も...雪乃先輩とのこともアメリカのことも何も言ってくれなかった...!ヒビク先輩はあたしのことなんて...」

ぽろぽろと零れるヒカルの涙が胸に痛い。

ヒビクが自分の口で告げない限り、いずれこうなっちゃうことは予想が出来ていた。けど、よりによってそれを大島の口から聞かされたヒカルは、今、どれだけ傷ついちゃまっていることか。

「な、泣くなヒカル...。ヒビクが言わなかったのはあいつなりの思いがあつてのことだ。あいつは音楽室にいると思う。行ってみろな？」

ヒカルはこくと頷いて駆け出していった。

――ヒビク。もう限界だぜ？

大切な人、こんなことで泣かしちゃったらそれこそ本末転倒じゃねーか。もうありのまま、お前の気持ちをヒカルに話してやれ。どれだけヒカルが大切かってことも全部話してやれ。この際、おめーのこだわりなんぞどうでもいいだろう。

「やれやれ...」

でもこれで、丸く収まるんじゃないか。雨降って地固まるってやつで。

さーて。お次は俺だ。俺の場合、雨降って土砂崩れになるのは必至なんだけど――。

「あ、ちょっと田村くんってば、帰らないでよ！これ」

クイツとサイン帳を押し付けられて思い出した。そうだった。即効書いてやるって話の途中だったんだっけ。

――ああもう。時間がねえってのに。

だいたい次の展開の予想はつく。

この後、公民館に到着していざ出陣！って時に、スーッと群竹がやってくるんだ。群竹は俺の横をクールに素通りして、あかねの視線も俺を通り越して、群竹く～ん、ここだよ～、なんて手を振るんだぜ。

田村くん見事にスルー！んでもってまたまた空振り！

「.....なんて書いてあるの？字が躍ってて読めないよ...。見事にスルー？空振り？何コレ、どういうこと？」

「俺の高校三年間よ！んじゃ、書いたぜ？これでいいな？」

女子の返答は聞かず、俺はようやく教室を後にした。

が――。

昇降口を出ようとしたとき、救急車のサイレンが聴こえてきて嫌な予感が背中を走った。サイレンの音はずいぶん遠いのに何故だか、足が前に出ない。

「.....なんだよ、おい」

前は交通量の多い通りだし、救急車が走って行くのも珍しくはないのに、ぞわぞわしたこの悪寒はいったいなんだっていうんだ。

「ちょっと、校庭で事故だって！」

「部舎の手すりが崩れて落ちた子がいるんだって！」

廊下をバタバタと校庭に向かって走っていく女子たちがいた。

――校庭で事故？部舎の手すりが崩れたって……。

ふと、蘇ったのはいつかヒビクが言っていた言葉だ。

――あの手すり、錆びてボロボロになってるから寄りかかるんじゃないって…、あいつには何度も注意したのに――

「まさか…！？」

救急車のサイレンがだんだん近づいて来る。

渡り廊下まで取って返しそこから校庭を覗くと、部舎の前に人だかりが出来ていて、演劇部室のすぐ前の手すりが崩れ落ちていた。

「…う、うそだろ…？」

たった今、校庭側の門から救急車が入って来て、部舎前までゆっくりと走ってくる。

「浅倉ヒカル――！！」

人だかりの中で叫んでいるのは群竹だった。

他にも、「浅倉さん！」「ヒカルちゃん！」とヒカルの名を呼ぶ生徒たちの声がある。

「ま、まじ？なんで、ヒカルが…。あいつ、音楽室に行ったんじゃないのか…？」

足がぶるぶる震える。

「そ、そうだ…、ヒビクは…？あいつは…」

人だかりの中にヒビクはいない。

――ヒビク！

震える足を気力で前に出して、とにかく音楽室へと駆け込む。

「ヒビク！」

ヒビクはピアノに座ったまま、背後の窓から校庭の騒ぎを見ていたようだ。

「…田村…？」

振り返り、俺の顔を見たヒビクの顔が、本能で何かを察したのかみるみる蒼白になっていく。

「ま、まさか…？！」

「大変だ！ヒカルが…っ」

瞬間、ヒビクは顔を激しくこわばらせ反射的に音楽室を飛び出した。

ヒビクと俺が部舎前に駆けつけたとき、ヒカルはもう救急車に乗せられ、車の周囲に生徒たちが群がっていた。

「ヒカル！」

ヒビクが人を掻き分け、閉じられようとしている車の扉に飛びついたと同時に、中から、「風間先輩も早く乗って！！」

ヒビクに手を伸ばし、車の中に引っ張り込んだヤツがいた。あれは、「群竹...？」

ヒビクが乗り込むのを待って救急隊員が扉を閉め、車はサイレンを鳴らしてゆっくりと校庭を横切っていく。車が退いた場所を改めて見ると、落ちた手すりの残骸が無惨な事故の跡をその場に残していた。

サーッと血の気が引いていく。

「ヒカルの怪我は?!」

近くでまだ、事故についてガヤガヤやっている2年生に訊いたが、分からない、と首を振る。

「じゃあ、何で落ちた？」

「それも分かりません。群竹くんが助けようとしたみたいだけど、間に合わなかったって誰かが言っていました」

「群竹が？」

救急車が到着する前、ヒカルの名を叫んでいたのは群竹だ。

——群竹が、なんでヒカルと...？

ヒカルは音楽室に行ったんじゃないのか？そして、群竹は公民館であかねと落ち合うんじゃないのかよ。

だがここで俺がいくら考えていたところでしょうがねえことだ。一緒に救急車に乗っていったヒビクなり群竹なりが戻ってくるのを待つしかない。

集まっていた生徒たちもぽつぽつと散りはじめたし、俺も校舎に戻ってヒビクの帰りを待つことにする。

そんな時、

「た、田村先輩っ！何があったんですか?!」

開け放たれたままの校庭門から駆け込んできたのはあかねだった。

「今、救急車がここから出て行ったようで...」

言いながら、あかねは誰かを探すように辺りを見回す。

あかねにヒカルの事故を告げるのは酷かと思ったが、言わないわけにもいかねえ。

「あのな、落ち着いて聞けよ？ヒカルが部舎の二階から手すりごと落ちたんだ」

「ヒカルちゃんが.....?!」

呆然となったあかねは、部舎の二階に視線を飛ばして、あそこから...?と、呟き、そのままずるずると座り込んでしまった。

「あ、あかね」

支えてやると、案の定、あかねはぶるぶると震えている。だが無理もない。俺だってさっきまで足が震えてしょーがなかったんだから。

「ヒカルちゃんは大丈夫なんですか?!」

力が抜けて立てなくなっているあかねは、座り込んだまま震える両手で俺の両腕にしがみつくと。

「見ていたわけじゃないから容態は俺にも分からねえ...。群竹と一緒にみたみてえだが...、」

群竹くんが...?と、あかねは青い顔で俺を見上げる。

「群竹くん、どこですか?どうしてヒカルちゃんと...」

あかねは、昇降口までヒカルと一緒にだったこと、自分はそのままだ公民館に向かい、ヒカルも自転車を取って下校するだけのはずだったこと、そして、部の顧問に呼び出されていた群竹は後から公民館に来るはずだったことを説明してくれた。

「群竹くんがあまりにも遅いから公民館の外に出てみたら...。まさか、ヒカルちゃんがそんなことになってるなんて...っ」

「群竹と一緒に車に乗って行った。ヒビクと及川センセも一緒にだ」

「そうですか...」

「あかねと昇降口で別れた後だと思うんだが、ヒカル、俺のところに来てな...」

大島にヒビクのアメリカ行きを聞かされたヒカルが俺の目の前で泣いちゃった様子をかいつまんで話してやると、その途中からあかねの顔はますます曇り、とうとう堪えきれずに泣き出しちゃった。

「ヒカルちゃん、可哀そう...。なんでこんなことに...」

「泣くなあかね。今は何も分からないし、とりあえず俺はここで待っててみるから。あかねはどうする?」

「私は...、群竹くんが公民館の方に帰ってくるかもしれないので、あっちで待っています」

「分かった。群竹が来てなんか分かったら報せてくれよ。俺もヒビクが帰って来たらそっちに行くから」

あかねはふらふらと立ち上がり、一呼吸ついてから公民館に戻って行く。

それを見送ってから、俺も校舎に戻る。

事故があったのはほとんどの生徒が下校したあとだったから、3年の回廊に残っているヤツはひとりもない。

置きっ放しになっている自分のカバンを手にした時、思わず出ちゃったのはため息だ。中にはあかねに渡すはずだったものが入ったままになっている。だが今は、さっきまであった勢いも浮かれた気分もすっかり引いちゃっている。

――ヒビク先輩、アメリカに行っちゃうって本当なんですか?!

ヒカルのすがるような目を思い出すと胸が痛い。

考えてもしょうがねえと分かっちゃいるが、ヒカルはどうして部舎なんかに行ったんだ。音楽室に行ったんじゃないのか。ヒビクは何をやってたんだ。ヒカルには会わなかったのか。音楽室で、ヒカルへの想いを詞（メロディ）に綴ってたんじゃないのか。ヒカルはその詞（ことば）を聴かなかったのか。

音楽室に来てみると、ピアノは開けっ放しでヒビクが書いた楽譜が譜面台に置いたままになっていた。

相変わらず、解読困難な走り書きで音符が並んでいるが、最後にちゃんと終止線が引かれている。

「仕上がってるじゃねーか...」

次から次へと溢れて仕方ない想いをフレーズにして繋げた曲は、その想いの数だけ長い。

俺には楽譜通りにピアノを弾く技術はねえが、主旋律だけを鍵盤のドレミで追ってみると、意外にもやたらめったらせつないメロディが再現される。

――これが、ヤツの詞か...。

ヒカル自身が詞になったメロディじゃなく、ヒカルを見ているヒビクの視線が映し出された曲。太陽みたく明るく熱い詞じゃなく、せつなくて優しい、そしてとろけちまうぐらいに甘い詞。

俺の視線がこの旋律に重なるからなのか、くすぐってえ。くすぐったくてしょうがねえ...。

このピアノでこいつを仕上げたかったヤツの気持ちが、今になって分かったぜ。

本城高校はささやかで大切な時間を閉じ込めて守ってくれた小さな箱庭でもあり、城壁でもあり、その中にあるこの音楽室は、3年間の高校生活の中で最も意味のある、輝いた時間を過ごした本丸のようなものだ。

ヒビクとヒカルは、

俺とあかねは.....

.....ここで出会い、ここで歌い、笑い、今ある感情のほとんど全て、この場所から発心して、そしていつもここから愛しいものを見つめていた。

――バンドとかロックなんて...ふ、ふ、不良みたいだもんっ！！

――私...、自信がないんです。発声も私ひとりだけがまだちゃんとできなくて...

――あ、田村先輩がこんにやくになっちゃった....。

――私、少しだけ変わったような気がするんです。またひとつ、強くなれた気がして。

次々と蘇る言葉、泣き顔、そして笑顔。

俺にとっての音楽室が中庭や屋上以上の特別なスポットであるように、ヒビクにとってもそれは同じ。だから、魂を注いだ大切な曲の仕上げはこのピアノ以外なかったんだな。

――まったく。

セーカクに似合わずセンチメンタルなことをやってるぜ。

けど分かる。

分かっちゃう。

解読困難な上に、五線譜にある音符そのものも高度な技術がねえと弾きこなせない想いは、技術面の問題によって俺には最後まで旋律を追うことが出来なかったが、高校生活最後の最後にこの音楽室で触れたせつないメロディは、たぶん、一生胸に残るんじゃないかと思った。

◇

ずいぶんの時間が経ち、窓の外はもう薄闇が広がり始めているが、ヒビクはまだ来ない。

楽譜をここに置いたままだし、一度学校に戻ってくるんじゃないかと思っていたが、そんなことも頭の中からすっ飛びしまうほど、ヒカルに大事があったのかもしれないと、嫌な方向に考えが向いて、いてもたってもいられなくなっちゃった。

音楽室を飛び出してヒビクの教室に行ってみたが、明かりが消えた部屋の中は暗いだけで誰もいない。

群竹はどうしたか。

あかねが待っている公民館に戻っているかもしれねえ。

どっちにしても、ここでただ待ってるだけじゃ何も分からないし、公民館の方に行ってあかねと合流した方がいいかもしれない。間違いなくあかねも、不安な気持ちを抑えきれないでいるだろうから。

学校を出る前に職員室に寄ってみると、ちょうど廊下を及川センセが向こうから歩いて来た。

一緒に病院に行ったセンセが帰ってきたってことは…、

「センセ！ヒカルは大丈夫なんすか！？一緒に行った風間と群竹は？！」

及川センセに駆け寄ると、センセは、まだ残っていたのかい？と目を丸くした。そして、ヒカルの怪我はそれほど重傷ではないこと、けど、検査と大事をとるためにしばらく入院にはなること、群竹はまだ病院に残り、ヒビクはもう帰ったことを教えてくれた。

大事な楽譜を置いたまま帰っちゃうなんて、と思ったが、おそらく今、ヒビクの頭の中はヒカルのことだけでいっぱいになっちゃってるんだろう。いくら軽傷とはいっても、ヒカルのあんな

姿を見ちまったヤツのショックは大きかったはずだ。

楽譜はあとで俺が届けてやろう。

そんなことを考えながら公民館のドアをくぐると――。

「田村先輩！！」

あかねがすぐさま駆け寄ってきた。ずっと、ドアを見つめながら群竹を待っていたのだろう。

「群竹来たか？」

あかねは首を横に振る。

「さっき及川センセが帰ってきた。ヒカルは怪我は負ってるみたいだけど大事にはなっていないらしい」

「そうですかっ。よかったあ……」

張り詰めていた糸が一気に緩むように、緊張してこわばっていたあかねの顔に安堵の笑みが広がった。

「ヒビクは学校に寄らずに帰っちゃったみたいだから俺も帰るけど…、あかねはどうする？群竹を待っているか？」

どうしよう…、とあかねは壁の時計に目を向けた。

「センセが病院を出るとき、あいつはまだ残っていたらしいぜ？」

あかねは考えるようにしてうつむく。

「きっと、群竹くんはヒカルちゃんに付き添っているんですね…」

「たぶん、な…」

「もうこんな時間だし、ヒカルちゃんの様子も分かったから私も帰ります…」

「そうか。じゃあ、途中まで一緒に帰ろう」

はい、と力なく返事をするあかねに、俺のどこかが痛む。顔を上げた時のあかねの笑顔が寂しさを凍りつかせたような、必死に作り出した笑顔だったから――。

・
・
・

「ヒカルちゃん、今頃どうしているだろう…」

ほとんど無言でとぼとぼ歩いていたあかねが、もうすぐそこに駅が見えた頃、ぽそりと呟くように言った。

「どうしてるかな…」

「わたし、思うんですけど…、ヒカルちゃんはきっと、風間先輩に会わないで、ひとりで泣いていたんじゃないかって…」

「音楽室には行かなかったってことか？」

それは分かりません、とあかねは首を振った。

「でも、演劇部の部室のところって、ちょうど音楽室がよく見えるんですよ。去年、部を掛け持ちしていた頃、演劇部の活動が終わると、ヒカルちゃんとわたしはあの手すりのところから音楽室を望んで、田村先輩たちがまだ部活やってるか、もう帰っちゃったかって確かめたりしてたんです」

「そうだったのか」

「だから、ヒカルちゃんは部舎に行ったんじゃないかな…。あそこから音楽室を見て泣いてたんじゃないかって」

ヒカルが部舎に行った理由は、あかねが言う通りなのだろうと思った。

だが――、

「俺のところに来たヒカルは、ヒビクを探していたんだぜ？必死になってさ…」

何も、部舎なんて遠くから音楽室を見なくても、そこに行ってヒビクに…、

――あ。

「ヒカルちゃん、いろんなこと考えて風間先輩に会えなかったんだと思います」

「そうだな…」

俺は簡単にヒビクのところに行けと言い、ふたりが会えば丸く収まるものだと考えちゃったが、いっぺんにアメリカだの大島のことだのを知ったヒカルにしてみればそんな単純にすむものじゃなく、ショックも混乱も最大だったはずだ。

あの時俺は、ヒカルに音楽室へ行けって言うより、ヒビクをヒカルの元と呼んでやるべきだった。そして、ヤツにこれまでのことや自分の想いを語らせるべきだったんだ。

ヒカルはきっと、ひとりで立ってられないほど、傷ついていたはずだから――。

「言いたかっただろうな…。行かないでって…」

あかねの声で聴く `行かないで、は、胸が絞られるような響きだった。

「群竹くん…」

「ん？」

いえ、なんでもありません、とあかねはうつむいた。

さっきからあかねが複雑な想いを隠しているのは何となく分かる。

おそらく、群竹はヒカルの気持ちや嘆きを知っていてそれを案じ、放っておけずにいるのだろう。そこに二心はないのは分かっている。

「あいつら、お隣さんだもんな…」

うん…、とあかねは頷いた。

だが、それはそれ。これはこれ。

群竹も、戻って来られないなら来られないで公民館に電話ぐらいできなかつたのか。公民館の職員だって、あかねに電話を取り継ぐぐらいやってくれるだろう。

そうすれば今、あかねはこんな泣き笑い顔なんかしてなかつたかもしれない。

――俺だったら…、

たとえどんな状況にあっても、こいつを放っておいたりはしねえのに。

「…それじゃ、先輩…」

「ん？あ、もう…」

いつの間にか、駅まで来ちまっていた。

あかねとは路線違い。普通ならここでお別れだ。だが今、このままひとりであかねを帰したくなかった。

――放っておけなくて。

「今日があかねんちまで送るよ」

あかねは驚いた目で俺を見上げたが、どこか嬉しそうに、いいんですか？と訊く。だが、
「あかねと一緒に帰るのも今日が最後だしさ。なんか、送りたいなくなっちゃった」

「最後……」

そうですね、と、今度は顔を曇らせる。

「先輩たちはもう、卒業式まで学校ないんですものね…」

「ああ。もう、そうなっちゃったな」

「寂しいです……」

「あかね…」

俺だって寂しいです。

めちゃくちゃ寂しいです。

本当は、このまんまあかねをどこかに連れ去っちまいたいです。

――連れ去っちまおうか。

今ここで予定通り好きだと告げて、あかねがなんと言おうと泣き落としでもなんでもして。
群竹なんて、関係ねえ。

ヤツの空手で、たとえ歯や腕が2、3本折れたとしてもかまわねえ。

あかねさえ、こいつさえ手に入るなら――。

――なんてな。ありえねえ…。

悪魔の囁きを振り払い、ため息をひとつ吐く。

こんな時に何を脳天気と考えてやがる、田村優作。

今日はもう、それどころじゃねえだろう。

「...ってことで、最後の今日は田村先輩に家まで送らせてくださいまし」

「はい。ありがとうございます」

あかねは嬉しそうに笑った。

ホームに行くと、こんな時に限ってすぐに電車が来やがった。俺にしてみれば、少しでもあかねという時間が長く欲しいってのに。

不謹慎だとは思う。

だが、謀らずとも最後の最後に、あかねとこんな時間が持てたことを、素直に喜んじまっているのは確かなのだ。

電車はちょうど夕方のラッシュで、あかねとの密着度も高い。

あかねの髪から香る柔らかなフローラルに、声を上げて叫びだしたいくらいの懐かしさがこみ上げる。

ガタン！

電車が激しく揺れて、あかねが俺の胸の中に飛び込んできた。

これは、2年間片想いに耐えまくった哀れな田村くんに、神様が恵んでくれた最後のつかの間。

「す、すみません、先輩」

「いいから、このまま俺につかまってろ。また揺れるかもしれねえから」

もう、二度とない、あかねとのつかの間。

「は、はい」

素直にうなづくあかねを、どさくさまぎれに抱きしめようとしたとき、電車は駅に到着しちまった。

「...残念」

思わず口から本音がもれると、何がですか？とあかねは俺を見上げる。

「いや。ほら、降りるぞ」

宙に浮いたまま行き場をなくしている手をさりげなくポケットの中に突っ込み、先に行くあかねに続いてホームに降りる。神様の恵みも、それほど都合よくはねえってことだ。つかの間は本当につかの間だった。

◇

降りた駅からあかねの家まではほんのわずかな距離だ。

俺とあかねのささやかな最後の時間も、あと数分で終わりを告げる。
さよならの時間が刻々と迫る。

「あかねを送るの、これで二度目だな」

「わたしも今、同じこと考えてました。前に送ってもらったのはクリスマスライブの時でしたね」

——そういえばあの時——。

『田村先輩...、どう思います？』

『どう思いますってのは...？』

『群竹くん、わたしのこと好きなのかな...』

『う.....？』

無邪気にそんなことを訊かれて、言葉を失くしちまったことを思い出した。

「あはは」

「先輩、どうしたんですか？いきなり笑ったりして」

「いや、あかねのことでちょっと思い出したことがあって」

「何を思い出したんですか？」

「ナイショ」

「ええ～？気になります！」

膨れるあかねの横顔を、じっと見つめちゃう。

こんな他愛のない時間も、もうすぐ終わり....

.....。

.....。

——かあっ！女々しすぎるぜ。

でもあの時、こいつを家まで送り届けた後、空に輝く星を見上げて思った。

俺は、こいつの頼りになるひとつの微かな輝きになりたい、と。

卒業式のその日が来るまで、あかねにとってのそんな俺でありたいと。

なれただろうか。

この、`田村先輩、は、あかねにとっての頼りになる微かな輝きに。

「あの時、田村先輩、この電信柱にぶつかったんですよね」

「ういっ?!」

――...めっちゃ、頼りねえじゃねーか！！

「あはは...。あれは、痛かったっす...」

ていうか、俺が激突した電信柱がここってことは、あかねの家はもう...

「.....」

「.....」

見覚えのある門扉と【水沢】の表札がそこにあった。

あかねは門の前に佇み、綺麗な瞳を揺らしながら何も言わずに俺を見上げている。

「どうした、あかね？」

「さっきまで、田村先輩が卒業しちゃう実感が沸かなかったんですけど...、今になってわたし...」

ダメだってば、あかねちゃん。

そんな顔をされたら、本当に強奪したくなっちゃう。

このまま連れ去りたくなっちゃう。

ここから、動けなくなっちゃう――。

「.....。今日は色々あってあかねも辛かっただろう。けど、ヒカルの怪我也深刻じゃねえみたいだし、あまり心配しすぎるなよ」

「先輩...」

「明日からテストなんだしさ。がんばれよ」

「はい」

これ以上ここにいたら、本当に、好きだと告げるだけじゃすまなくなりそうで。

「じゃ、俺は行くから」

くるり、と方向を転換し、来た道に戻ろうとしたけれど、何かに引っかかって体が前に進まない。

「.....っ？」

あかねの手が、俺の上着の裾をつかんでいた。

だが、あかね自身がそれに気づいてねえようで。

「あかね...？」

「え...？」

「手...」

「あっ！！す、すみません！何をやっているんだろう、わたし...」

あかねは狼狽して裾から手を放した。

——これは反則だぜ、あかね...。

「本当に、何してるんだろう、わたし...」

あかねは本当に自分の行動の意味が分からねえみたいだが、俺を引き止めたいと思ってくれたことは確かだ。それも、無意識に。

もう、渡さないでこのまま帰ろうと思っていたけれど——。

「そうだ。忘れるところだったぜ！」

なんですか？とあかねが首をかしげている間に、俺はカバンの中からソレを取り出す。

「バレンタインにもらったチョコのお返し。ちっと早いけど」

あかねは小さな袋包みを両手で受け取り、それをじっと見つめる。

袋を持つあかねの手の甲に、ぽつり、と一粒の雫が落ちた。

「ん？雨か？」

だが、見上げた空には星が輝いている。

「わたし...、どうしちゃったんだろう」

あかねの手を濡らしていたのは、大きな目からはらりはらりと零れ落ちる涙だった。

「あ、あかね?!」

「もう先輩に会えなくなっちゃうと思うと胸が苦しくて...。何でだか分からないけど、これ、勝手に出てきちゃって止められない...っ」

頭の中が真っ白になっちゃった。

まさか、あかねが俺のために泣いてくれるとは思ってなくて。

こんな、花びらが舞うような涙を流してくれるとは、考えてもいなくて。

「あかね...、好——」

.....きだ...、と最後まで声に出せなかったのは、こみ上げる塊が喉元に詰まっちゃったからだ

。深呼吸をしてからもう一度、今度は最後まで言葉にしようと大きく息を吸い込んだが、空気が肺を膨らまし、続いて中身を空っぽにしたとき、自分の真実が見えちゃった。

俺は気持ちの決着なんてつけられねえ。

サッパリと告げてあっさりとフラれて、2年間の想いから無理やり卒業するなんてできねえ。

一生、`田村先輩、のままでいいじゃねえか。

あかねが別れることを寂しがって泣いてくれる、頼れる先輩でいいじゃねえか。

フラれて傷つくよりも。

フラせて傷つけちまうよりも。

往生際が悪くても女々しくても、最後の最後まで、あかねの`田村先輩、でいてえんだ。

あかねが困ったとき、傷ついたとき、助けが必要なときは、何をしてもどこにいても、この俺が駆けつけてやる。

田村優作の中に、あかね専用のスペースはいつでもいつまでも空けておく。

あかねにとってのそんな唯一の`田村先輩、のままで...

だから――。

「あかね」

はらはら零れる涙を手で払うあかねを、そのままそっと抱きしめた。

「た、田村先輩...?!」

あかねは驚いて固まっちゃまっている。

少しだけ腕に力を込めて、それから精一杯、いつもの田村先輩の声で言った。

「あかねのおかげで、楽しい高校生活だったぜ。ありがとな」

――さよなら。

抱きしめたときと同じように、そっと束縛から解放すると、あかねはまだ目を丸くして固まったまま突っ立っている。

「それじゃ、本当に行くぜ？」

「先輩...」

今度こそ、くるりと背中を向ける。

裾をつかむ手は、もうない。

足は泣きたくなくなるぐらいにサクサクと前に出て行き、あかねとの距離をどんどん遠くしていく

。

いつかと同じように空に散りばめられた輝きたちを見上げた。でも、そこに俺の光の城はない

。

俺にとってのそれは、最初から最後まであかねだった。

たったひとつ、あかねだった。

そう、心から思えるひとに出会えたこと、こんなにもひとりのひとを、想えた俺を誇ってやりてえ。

「田村先輩！さよなら！気をつけて帰ってくださいね」

振り向くと、あかねが手を振って見送ってくれている。

「……おお。サンキュ！バイバイ！」

——さよなら、愛しいひと。

バイバイ、俺の…——。

こらこら。

このままじゃ泣いちまいそうでヤバイだろうよ。

前が霞んでまた電信柱に激突しちまったら、田村くんの青春はただのコメディで終わっちまう。

気持ちを引き締めて人通りの無い夜の住宅街を颯爽と歩いてやった。

前をしっかりと向いて。

背筋をピンと伸ばして——。

とっくに春一番も吹いたというのに、今日は朝から舞う粉雪が街全体を白く包んでいた。そろそろ桜の開花の話題が出始めてる春の日に、粉砂糖をふりこぼしたようなこの光景は似合わない。

3月15日。

卒業式の今日、東京の天気は雪。

いつもの駅でみんなが集合してくるのを待つ間も、雪は街にうっすらと白を重ねていく。毎朝この同じ場所でヤツらを待ちながらいろんな春夏秋冬を見てきたが、まさかその最後になる3月のこの日に雪景色を見ることになるとは思ってもいなかった。

3年の間、俺たちは毎日同じ時間、駅と同じ場所に集合して学校へ行った。

朝から兄弟げんかをかましながらやって来るブラザーズ、ヒビクはだるそうにチンタラと、寝起きの悪い柏木は目が覚めてない状態のままやって来る。俺はそんな風に集まってくるハイテンション組と低血圧組の様子を、毎日この場所から、「うるせーなあ」「歩くの遅せえよ」とか思いながら眺めていた。

それも今日が最後。

雪に視界を遮られた駅前通りを柏木が歩いてくるのが見えた。目が覚めてないのか見通しのせいなのか、人にぶつかりまくっている。そして、通りを渡った向こうからは、ワイワイ騒ぐブラザーズの声も聴こえてくる。

まったく。

最後の朝ぐらい考えりゃいいものを、こいつらときたら普段とちっとも変わらない。

「おはよ。雪が降ってるねー」

先に到着した柏木は、やっぱりまだ寝ぼけた調子だ。ぼうっとしたままそこに突っ立って大きな欠伸をひとつ出している間に、後ろから来る早足のサラリーマンふたりほどに追突された。

「もう…。痛いなあ…」

足元が濡れているから勢いで滑りそうになって、やっと柏木は覚醒したらしい。ぶつかってきたサラリーマンの背中を、じろり、と睨みつけ小声で文句を垂れる。

そこへ続いて到着したのは、激闘中のブラザーズ。

「何とかしろよ！おめーのせいだろーが！」

「それ以上どーにもならねえよ！いつまでもしつこいんだよ！」

「しつこくもなるだろーが！これで卒業式に出ろってのかよっ」

「だから、しょーがねえだろーが！式なんてすぐに終わるだろう」

「そーゆー問題じゃねーだろう！」

「ていうか、おめー臭いから近寄るな」

「だ、誰のせいだと思ってんだーっ！！」

いったい何の騒ぎだよ、と思っていたが、ヤツらが傍にやって来ると...

「なっ。ひでえ臭いだな！何だよこの悪臭はっ！」

クサヤと芳香剤が混ざり合ったような、なんとも形容しがたい臭いを漂わせているのは弟の方だった。おかげで完璧に覚醒した柏木は無言で鼻をつまみ、そそくさとその場から離れて身の安全を確保した。

「聞いてくれよ、田村あ！こいつ、俺の上着に納豆をこぼしやがって！」

「納豆...。それは強烈だなあ。けど、臭ってるのはそれだけじゃねえだろう...」

「それが、このバカは.....、」

今朝、弟は上着を横において朝飯を食べていた。その上着に、小鉢で納豆を練っていた兄が、糸でネバネバとまとまったそれをボトッと落としちまったらしい。それだけじゃなく、タイミングよく配膳にやって来たおふくろさんが上着を納豆ごと踏みつけ、豆は見事に生地ですりこんじまった。さらに、兄はつぶれた納豆をティッシュでふき取っちまったから、それはますます生地に染み込んでネバネバと臭いが取れなくなっちまって。そうなってからやっと濡れ雑巾で患部をぬぐったが生地の極めに染み込んだ臭いは取れず、ごまかすために兄はオーデコロンをめいいっぱいふりかけた。すると、納豆とコロンが混ざり合った悪臭を放つ上着が出来上がっちまった、ということらしい。

見ると、弟が着ている上着のポケットの辺りが妙にテカテカしている。臭いの元はここだ。

「脱いでその部分を洗っちゃった方がいいんじゃないの？」

遠くのほうに避難している柏木が、鼻はしっかり摘んだまま提案した。

「もうそれはやった...」

胸の光沢はその努力の跡らしいが、臭いは絶てていない。

「消臭スプレーかけておけよ。一本まるまる噴きかければどうにかなるんじゃないの？」

いつの間にか横にいたヒビクが、駅前のコンビニを指差していた。

「早く買ってこいよ。電車来ちまうぜ」

弟は素直にうなづくと、てめーが金を出せ！と兄の手を引っ張って構内を飛び出し、コンビニに駆け込んでいった。

「まったく...。騒がしい連中だぜ」

とりあえず改札前での大騒ぎはおさまったが、見慣れないヒビクの様相に俺も柏木も言葉を失くし、ただ啞然としちまった。

「...そんなに見つめんなよ。穴が空くから」

ヒビクは自分に集まっている視線が窮屈そうに顔をしかめた。

「空くの？」

「空く！」

バツが悪そうにそっぽを向くヒビクを、柏木はまだ遠慮なく見つめている。

「だって、風間くんがネクタイしている姿なんて初めて見たよ。ネクタイ、持っていたんだ...」

と、柏木が言うように、今日のヒビクはしっかりとネクタイを締めている。入学式からの標準仕様になっているオレンジシャツは今日もそのまま着用しているが、こいつがネクタイをしめたことは過去にない。

「入学式と同じままってのは成長がないから、ま、最後ぐらいはな」

ヒビクは口を尖らせて言い訳をこき、コンビニからブラザーズが出て来たのを確認すると、一足先に改札をくぐって行く。その背中にはひとつに束ねた金色の長髪が、いつもと変わらずに揺れていた。

・
・

ヒカルの事故があった翌日の夕方、ヒビクが前日音楽室に置いていった楽譜を自宅まで届けてやった。

ヒビクの話によると事故の日、ヒカルは音楽室には来なかったそうだ。曲を仕上げてしばらくした後、騒がしくなった校庭を窓から見ていて、あとは俺が知っている通りらしい。

だからヤツもヒカルが部舎に行き事故に遭った理由と事情は知ってなかったが、病院で、ヒカルとの間に何かあったのか、と群竹に訊かれたそうだ。

事故の前、ヒカルはずいぶんと取り乱して廊下を疾走し、たまたまそれに遭遇した群竹が部舎まで追いかけたそうだ。結局手が届かずにヒカルは事故に遭っちまい、群竹もずいぶんと自分を責めていた、とヒビクは言った。

ヒカルの見舞いから帰ったばかりだというヒビクは、そんな話を俺に聞かせながらずいぶんと沈んじまっていた。

『ヒカルの様子はどうだった？』

『あいつは笑ってたよ。ずっと、最後まで笑ってた...』

『最後までって...』

その見舞いが、`最後、だったらしい。

ヒビクは怪我のために卒業式は欠席になっちゃうヒカルと、そこで最後の別れをしてきたと、そういうことだった。

ヒカルは学校の手すりを壊しちまったことを気にしていたり、ヒビクはそんなスットコドッコイなヒカルをたしなめたり、笑いながら今までと変わらない先輩と後輩の話をしただけ。

『あいつ、俺がアメリカに行くこと知っていた。俺にガンバレって、いつまでも応援してますって笑いやがった』

ヒビクの握った拳の中で、さっき渡した楽譜がくしゃっと音を立ててつぶれた。

『ヒビク...』

無理して笑うヒカルが目に浮かぶようだった。あまりにもヒカルらしすぎて、泣けてくるほどに。

『情けねえな、俺は...』

ぽつりと呟いたヒビクの言葉に、どんな意味が込められていたのかは分からねえ。けど、その声は低く重く、残響がいつまでも耳の中でこだまするほどだった。

「おい、待てよヒビク」

ひとりでサクサクホームに向かうヒビクを後ろから呼び止めた。

「潰しちゃったあれはどうしたんだ？ヒカルに渡さねえのかよ？」

とは言っても、今日はもうヒカルは来ねえ。それにヒビクの方も、今夜の便でボストンに発ちまう。

ヒビクは上着の内ポケットから、二つに折りたたんだ五線譜の束を取り出した。それは音楽室に置いてあったものじゃなく、ふつうに解読できる程度に書き直されたものだった。

「あかねに託す...」

「それでいいのか？」

あかねに託せば、必ずヒカルの元に届けてはくれるだろう。けど、

「最後ぐらい、自分の想いに正直になれよ...。ちゃんと言葉で伝えねえとヒカルには伝わらねえと思うぜ？なんたってあいつは国宝級の音痴なんだし。この音符だって読めねえだろう。永遠にどんな曲か分かってもらえない気がする」

ひでえ言い様だな、とヒビクは啞然としたあとに笑った。

「確かにそうかもしれないな。でも、それならそれでいいんだ」

再び五線譜を内ポケットにしまいながら、ヒビクは意味深な目を俺に向けた。

「他人の世話ばかり焼いてねえで、自分のことを考えたらどうだ？」

肘で俺をツツツン突付くヒビクが、何を言いてえのかは分かった。

「俺とお前じゃ状況が違うの...！」

それに、俺はもう、あかねの気持ちとキラキラな涙をもらっただけで満足している...ことにしている。

「おめー、かけすぎだっで一の！」

「だって、風間が一本まるまる噴きかけれ、って言ってただろーが！」

「だからって、こんな人ごみでスプレーしまくっていたら迷惑だよ？」

「あぶねえ高校生だって思われちまうだろーがっ」

「立派にあぶねえだろーがっ」

後ろからうるせえヤツらが追いついてきやがった。

振り返ると、兄がまるでしぶといゴキブリにしつこく殺虫剤をまくように、弟の臭いの元に向かってスプレーしている。

ちょうど電車がホームに入ってきた。

いつもと同じ。今日も電車は満員だ。

「もうスプレーはやめとけ！」

ヒビクがひとこと言い放って先に乗車した。臭いはまだ微妙に漂っている気がしたが、ブラザーもおとなしく乗車する。

いつもと同じ連中と同じように大騒ぎをしながら、同じ満員電車で人に押しつぶされる卒業式の朝。

違っているのは、押し付けられ変な顔に潰されているガラス窓の外で、粉雪がしんしんと降り積もっていく風景だけだった。

◇

教室の黒板には『あと〇日』のカウントダウンが消され、その代わりに『平成4年度卒業式』とピンクや黄色のチョークで派手に書かれていた。

たった今、予鈴が鳴り終わったばかりの教室では、もうクラスメイトたちはしずやかに着席していて、担任が来るのを待つだけになっていた。

「おはよう」

と、声をかけてくれた小早川を振り返ると、ついこの間までポニーテールにしていた髪がショートに変わっている。あの銀の髪留めも今日はしていない。

「ずいぶんスッキリしちゃったなあ？」

「まあね。一応、調理学校に行くわけだし、髪は短いほうがいいかなと思って」

あっさりした口調はいつもと変わらない。

卒業式っていう特別な日に、他の連中はどこか緊張していたりしんみりしてたりする中で、また明日からも同じ教室でおはようと声をかけてきそうな小早川の雰囲気、だからこそ胸に詰まっちゃった。

「そうだ。お前、俺になんか頼みごとがあったんだったよな？」

「覚えていてくれたんだ？」

小早川は嬉しそうに笑った。

「そりゃ、覚えてるだろう。何だ？言えよ」

「うーん…。式が終わってからでいいや。じゃないと、色々と支障があるし…」

「支障？」

なんだそれは、と聞き返そうとした時、しっかりと制服を着込んだ担任が来ちゃった。

最後の成績表が配られ、涙ぐんだ担任の話を聞いた後はいよいよ体育館に移動だ。

1、2年生たちはもう既に式場に着席しているらしく、卒業生の俺たちは渡り廊下にクラス順に並ばされた。これから拍手で迎えられながら花道を通して入場するわけだが…、

「風間あ！なんだその格好は！ちゃんとしてこいって言うておいだらう！」

横のほうで権田が怒鳴る声が聴こえ、一応静かに並んでいた生徒たちがざわつき始めた。

「だから、ちゃんとネクタイ締めてきたじゃねーの」

「そうじゃなく、その派手な色つきシャツのこと言ってるんだ！俺は！」

似合わねえタキシードをちんまりと着こんだ権田は、顔を真っ赤にして怒鳴っている。ヒビクはその横で金髪をぼりぼりやりながら、

「ありゃ…。これが俺の仕様だから気づかなかったぜ。悪かったな、権田センセ」

と、気持ち悪いぐらい素直に謝ったもんだから、権田は鳩が鉄砲豆食らったような顔で固まっちゃった。きっといつものように「後で職員室に來い！」って言葉を続けるつもりでいたんだろうが、さすがの権田も、今日ばかりは心を広くしているようで、ヒビクの背中をポンと叩いただけで終わった。

「権田先生も風間くんのおかげで成長したんですねえ～」

しみじみ言う柏木に、権田は、生意気言うな！と、肘鉄を食らわし、F組周辺から明るい笑い声が上がった。権田の怒鳴り声には辟易していた3年間だったけど、もう聞けなくなっちゃうのかと思うと100分の1ぐらい寂しい気もする。

ついでにすぐ隣のB組にいる松山弟を探してみると、まだ上着の臭いが気になっているようで、自分で自分をくくん嗅いで顔をしかめていた。横に並んでいる女子が、心なしか顔をしかめて全身が弟から逃げている、ような気がした。

おんなじ顔の兄の方は胸に飾る花がどう刺してもおっ立ちまうようで、元彼女の吉岡さんにピンを刺してもらっていた。

なんていうか…、笑っちゃう。

いろんなことが微笑ましすぎて――。

扉が開き、中から拍手の音が漏れてきた。

A組から順番に、担任を先頭にして入場が始まった。

左側に1年生が、右側に2年生が着席している花道を、会場の前方に用意されている卒業生の席まで歩いていく。

その途中で、花道の際にいたあかねと目が合った。

その途端、上着の裾を引かれた時の感触が蘇り、はらはら零れた涙の輝きが目に浮かんで、思わず足が止まりそうになっちゃった。けど、その時、

「田村せんぱい。卒業おめでとうございます」

左側から小さな声をかけられ、目をそっちに向けている間にあかねの真横はあっさりと通り過ぎちゃった。

声をかけてくれたのは唯子ちゃんだ。

ほんの一瞬しか顔は見えなかったが、唯子ちゃんはにこにこ笑っていた。

◇

卒業証書の授与は問題なく進み（松山弟が壇上に上がった途端、鼻をひくつかせた校長とか、ヒビクが壇上に上がった途端、眉をひくつかせた校長とか来賓客がいたけれど）、区長や区議会

議員の立派な祝辞に生あくびをこらえ、送辞答辞とあおげばとおとして涙をこらえ、式典は滞りなく終了して退場となった。

絶対に泣いているであろうあかねの顔を見ちまったら、絶対につられて泣いちゃうだろうと思いながら花道をあかねを探して歩いたが、入場の際は確かにいたはずのあかねの席が空席になっていた。

まさか、式の途中で具合でも悪くなっちゃったのか...、と気になったが、確かめる術もなくその場を後にするしかなく、卒業生全員が退場し終わってからは、あっちからもこっちからも、記念撮影に誘われてバタバタしちまって。

そのうちに在校生たちも体育館から出てきて、それぞれ目当ての卒業生たちの元に走って行った。

それで、俺のところに真っ直ぐ突っ走って来たのは唯子ちゃんだ。

「田村せ〜んぱいっ！一緒に写真撮ってください！」

まだ雪が降ってる校庭に引っ張り出され、唯子ちゃんは俺を梅の木の下まで連れて行く。その後ろを渋々ついてくるカメラマンは暴れん坊ズその1だった。今日はその2はいねえのか、と思ったが...

「.....」

校舎の前からしっかりこっちを見張ってた。こいつらと唯子ちゃんとの関係は、今も俺には謎なままだ。

もう満開が過ぎた花にカキ氷みてえな雪が積もった梅の前に唯子ちゃんと並び、仏頂面のその1がやる気なさそうにシャッターを切った後、唯子ちゃんと言った。

「あの、田村先輩。最後にひとつ、お願いがあるんです」

「お、お願い...？」

並んで写真を撮る以外のお願いとはなんだろう、と、身構えちゃったが、そういう俺の緊張を唯子ちゃんも察したようだ。

「そんな難しいお願いじゃないですよ！あ...、でも、やっぱり難しいのかな...？」

小早川先輩に怒られちゃうかも...、と言う唯子ちゃんの言葉で、小早川からの頼まれごとをまだ聞いてやってないことを思い出した。

で、小早川の姿を探して首を伸ばしてみると、体育館前でまだ記念写真を撮っているようだ。

「小早川先輩、こっち見ていないから...思い切って言っちゃいますね！」

「お、思い切って...？」

小早川が俺のカノジョだと思ったままでいるらしい唯子ちゃんが、そのカノジョに見られたら怒られちゃうかもしれない思い切ったお願いごとの一つ。

おもわず、喉がごくと鳴る。

唯子ちゃんは遠くの小早川の様子をもう一度確認して、それから一気にお願いごとを口に出した。

「先輩の制服についている前ボタンふたつ、あたしにください！！」

――へ？

あまりにも予想外だったお願い事に、俺は一瞬呆けちまった。

ちなみに本城高校の制服はブレザーで、前ボタンはふたつしかついてない。

学ランなら、卒業式に第2ボタンをちょうだい、なんて話も聞くが、もともと2個しかないボタンに第2もクソもねえし、ボタンをくれだなんて可愛いことを言われるなんて思ってもいなかった。かと言って、予想していたようなお願いごとをされてもきけるワケなかったんだが...

――は...?!何を予想してやがったんだってーの！田村くんのえっち！

もとい――。

「ふたつ...とも？」

「はい。ふたつともです！」

んと。

別にボタンぐらい、くれてやってもかまわない。ボタンをかけて上着を着用したのは入学式と卒業式ぐらいだし、明日からこの制服も用なしだし。

けど、

「ボタンなんかどうするの？しかもふたつも...」

「どうもしませんよ？ただ、田村先輩の思い出に持っていたいんです。でも、他の女の子が同じ思い出を持つのは嫌なんで、あたしがふたつとももらっちゃいたいんです」

「そ、そうなの...」

「そうです」

唯子ちゃんはニッコリ笑ってから、もう一度、小早川の様子を覗いた。

「早くしなきゃ他の人に取られちゃうって思って、本当は式の前にお願いしちゃおうって思ったんです」

田村くんの思い出にボタンが欲しいなんて言ってくれる女子なんか他にいなーだろう。けど、

「はは...。式の前じゃさすがに...」

「支障がありますよね～。だから我慢して、終わってから速攻先輩を捕まえちゃいました」

――...？

今、唯子ちゃんが言った何かが頭に引っかかった。
確か、同じことを今朝、小早川は言ってなかったか。

――式が終わってからでいいや。じゃないと、色々と支障があるし…。

「支障…」

卒業式当日に聞いて出来る簡単な頼みごと。
だけど、式の前じゃ支障があること。

――もしかして、あいつ…も…？

いやいやいや。

小早川環って女子は、田村くんの思い出にボタン――なんて可愛いこと、思いつきもしねえだろう。

「あの…、田村先輩？」

「……………」

プチプチとボタンをふたつ引きちぎり、それをそっと唯子ちゃんの掌に乗せてやった。

「……………あ…りがとうございます」

にっこり笑った唯子ちゃんの中から、涙がぼろりと一粒落ちた。

◇

梅の木の下で唯子ちゃんと別れ、俺は体育館の方へと戻った。

粉雪が降り続けているからか、卒業生たちも在校生もぱらぱらと散り始め、その場所はずいぶん静かになっていた。

だが、小早川はまだ女子の友人たちとの記念撮影が続いているようだし、ヒビクやたろじろたちの姿もそこには見当たらない。柏木が体育館の陰で小春ちゃんと話し込んでいるのが見えたが、うつむく小春ちゃんの様子から、前向きな話をしている風にも見えなかったからそれ以上観察はしないでおいた。

何となく時間を持て余ししまった時、無意識に探しちまったのはあかねの姿だ。

けど、いやしねえ。影も形もねえ。

あかねだけじゃない。麻耶ちゃんも、伊藤も大久保も、そしてついでに群竹も。

――……………。

空いていたあかねの席がまた脳裏に蘇った。

最後の最後にもう一言、言葉を交わしたいと思ったけど、そんなこと言ってたらどこまで行っても区切りがねえ。

だからもう、いいんだな。これで。

―― 〃田村先輩、って、最後に走ってきてくれるあかねをちっとは期待していたんだけど。

「この粉雪が、むなしさもせつなさも全て覆い隠してくれるさ。だから今日は雪が降ってるんだな...」

はあ.....。

「感傷の時間は終わった？」

デカイため息を吐き出したその先に、小早川の顔があった。

「うわっ！いつの間にっ！？」

「、この粉雪が、むなしさもせつなさも全て覆い隠してくれるさ、ぐらいから」

「ななっ！？」

心の中の呟きでいたつもりが、口に出ちまっていたのかいっ。

「まあ...、卒業式だし。感傷に浸っちゃうのも仕方ないよ」

うう...

超カッコ悪いっす...

「でね、そんな時に悪いのだけど、田村さんに頼みたいこと...」

「ああ。言えよ」

だが、小早川は俺の一点を見つめ、

「やっぱり、もういい。ちょっと遅かったみたい...」

気落ちしたため息を吐いた。

小早川が見ていた一点。

「遅かったってのは...、これのことか？」

ポケットから取り出したソレを、小早川に差し出した。

すると、小早川は目玉が飛び出るぐらいに見開いて立ち尽くしちまった。

「な、なんで...」

小早川は、俺の手からボタンをふたつ受け取り、ほとんどボーゼンとしている。

「さっき、唯子ちゃんからこれをふたつ欲しいって言われて、もしかしたらって思ってさ。田村くんのボタンが欲しいわ～って女子が他にもいたら、小早川の頼みごとをきいてやるって約束が

守れねえから外しておいた」

「ば、ば、ばかみたい！もしもあたしの頼みごとが違っていたらどうしたのよ？」

「ってことは、小早川の頼みごとはやっぱコレであってたんだな？」

う...、と小早川は真っ赤になって詰まった。

「か、神部さんにはどうしたの？まさか、断った？」

「いや...」

俺は左袖口を小早川に見せた。

「ここについていたふたつを、唯子ちゃんにはあげた」

前ボタンじゃなく袖についていた方を引きちぎった時、唯子ちゃんは複雑な顔をしていたが、納得したように頷き、何も言わずにそれを受け取ってくれた。

小早川は深呼吸するみてえに、すうって息を吸ったあと、ふう...と大きく吐いて顔を上げた。

「田村くんにしてはずいぶん察しが良くて助かったよ...。じゃ、改めて言うね。田村くんへの頼みごと。この制服のボタンふたつ、あたしにちょうだい」

「ふたつ、なんだな？」

うん、と小早川はうなずく。

「OK。そんなんでよければいくらでも」

いくらでも？と小早川は聞き返した。

「だったら...、残ったそっちの袖のもくれる？」

「あ？ああ。了解」

右袖のボタンを引きちぎると、俺の上着にボタンはひとつも残らなかった。3年間、ほとんど意味を成さないものだったけど、こうやって全てなくなっちゃうとなんだか妙な感じがする。上着だけじゃなく、俺自身がやたらとサッパリとしちまったというか。

唯子ちゃんは、思い出のためにと行ってたが、小早川が同じ理由で、とは思えねえ。

こいつは思い出とかそういうセンチメンタルにしがみつくような女子じゃない。

「でも...、せっかく貰ったのに悪いけどあたし、これを大事に持ってるつもりなんてないの」

――ほらな。

「サッパリと、隅田川に投げてしまおうって思ってる」

――はっ！そうきたか。

「ごめんね、田村くん」

「いや...？どうにしてくれてもいいさ。それはお前にやったんだから」

ありがとう、と小早川は笑った。

「神部さんにふたつ取られちゃったのはちょっと悔しいかな。田村くんのカケラがあの子に残

っちゃうから」

俺のカケラか…。

制服のボタンなんか俺が散りばめられてるはずもねえが、それでも3年間毎日着用した本城の制服だ。本城（ここ）で歩いた時間、その時々の俺が、ここにも染み込んでいるのかもしれないな。

それを、唯子ちゃんは持っていたいと。

小早川は隅田川に投げると。

――まったく。さすが小早川環だけ。

俺にできねえこと、こいつが代わりにやってくれるってのか。

小早川自身の想いも、そこに投入して、さ。

「じゃあ、元気でね田村くん」

「ああ、お前もな」

小早川環はくるりと踵を返し、白く積もった粉雪の上をサクサクと歩き出す。

てんてんと続いて行く足跡と、白の中に隠れ霞んでゆく姿。それが完全に見えなくなる頃、小早川は振り返って小さく手を振った。

――バイバイ、小早川環。

3年間クラスメイトとして俺の傍にいてくれた大切な友。

そんな小早川環の未来が幸せであるようにと、舞い踊る白い天使たちに祈った。

「おーい、たむどーん」

校舎の方から松山兄が俺を呼んだ。

小早川との別れに、ちょっとセンチに浸っていた心が一気に萎えちまった。やっぱ、`たむどん、`ってのはそれだけでカナシイ呼び名だ。それをこの男に呼ばれるとイラつきとムカつきが微妙に加わる。

「そろそろ行かねえかー？」

「.....」

すっかり気分がそがれちまい返事を返さねえでいると、あっちの方で、何怒ってんだー？と呑気に首を傾げやがる。

分からんだろう。

分かるはずもねえだろう。

分かって欲しくもねえけどな。

そのまま兄を無視して校舎に戻ろうとしたが、最後にふと目を向けた梅の木の前にひとりで居るヒビクが見えたんで方向転換。兄は先に行かせた。

何をするわけでもなく、ヒビクはただぼーっと突っ立って梅の花を見上げていた。

何となく近寄りにくい雰囲気があったし、ヒビクの感傷もそれなりに理解できるから声をかけるのにためらいはあったが、

「ヒビク、そろそろ行かねえか」

と呼ぶと、ヤツは素直に、ああ、と答えた。

「アレはどうした？」

「あかねに渡した」

「あかね...、いたのか？」

我ながら女々しい田村くんであります。

入場の花道で目が合ってから今に至るまであかねの姿を見ていない俺は、会ってお話できたヒビクにちょっとジェラシーを感じてしましまして。

「いただろ花道際に。田村は気づかなかったのか？」

「お前まさか、入場の時に渡したのか？」

「ちょうど通り道にいたからな」

涼しい顔をしてヒビクは言うが、その言葉も視線も、どこか遠くに向かって放たれているよう

な気がした。

今夜の便で日本を発つヒビクには、卒業だけじゃねえもっとたくさんのモノたちに対する感傷ってのが押し寄せているに違いない。その最たるものはもちろん――。

昇降口ではブラザーズと柏木が待っていた。

「あ、あれ?! たむどん! その上着、何よ?! ま、ま、まさか、じょじょじょ女子に?!」

ボタンが一個もついてない俺の上着を指差して、ほとんど気が狂ったような声を上げたのは兄だ。

「あ、本当だー。田村くんの上着、ずいぶん寒々しいねえ」

「あれまあ。気づかなかったぜ。田村がそんなにモテ男だったとは思わなかったなあ...」

柏木とヒビクもそれぞれの心境が込められたような口調で言いながら、俺の上着をじろじろ見やがって。

そんな中でひとり、弟だけが俺たちを通り越した廊下の端の方に視線を向けて、はあ...はあ...、とため息をつきまくっていた。そういえばこいつ、さっきからずっとこんな調子だ。

「どうした次郎? まだ微妙に臭うその上着が気になってるのか?」

時間が経ってコロンの匂いだけが飛んだ弟の上着からは、納豆臭だけが香っている。弟は、そんなじゃねーよ、と呟きながら自分の胸にシューッと消臭スプレーをひと噴きしてから、またおんなじところに目を向けて、

「はあ.....」

と、デカイため息を吐く。

ちょっと場所を移動して弟の視線の先を覗いてみた。

「ああ〜。なるほど...」

廊下の突き当たり、東階段の前辺りに麻耶ちゃんの姿が見えた。が、その隣には伊藤と一緒にいる。麻耶ちゃんはこっちには気づいてねえみたいで、伊藤との話に夢中になっているように見える。

「次郎...。おめーは例の女子大生と付き合ってるんじゃないの?」

弟の耳元でコソコソ訊けば、ヤツは、そういうわけじゃねえ、と小声で言って首を横に振った。

「やっぱ、こいつの本命はずっと麻耶ちゃんだったんだな。」

「けど....」

「今日俺、麻耶ちゃんとひとことも口を利いてねえ...」

弟は密かにシヨゲる。

そんな弟の肩を、何も言わずにぎゅっと抱きしめてやった。

こいつのキモチ、痛いほど分かる田村くんであります。

何度も告ろうと決意して、その度にタイミングを外して浮いたり沈んだり、こいつの軌跡は俺のそれと同じだ。いわば、同志。

「な、なんだよ田村! 気持ち悪いことすんなっ!」

「いいんだいいんだ。お前のことは俺が一番よく分かってるからな...」

だが。

「もう二度と...に・ど・と、彼女と口を利く日はこねえだろう。これは現実として受け止めるな、同志！」

うう...、と弟はうなだれる。

今ちょうど目の前にある学校掲示板。そこに未だ貼ったままになっている、[高校生 勇気と機転の人命救助]の記事が虚しく輝いていた。

「ほれほれ。おめーらいつまでわけ分からん漫才やってんだ。行くぞ」

気がつくのと、兄たちはもう昇降口の外に出ようとしていた。

下足に履き替え、上履きをいつものように下駄箱に入れようとして手が止まった。もう、こいつも用なしだ。

「おめーら、上履きどうした？」

3年分の汚れが染み込んで変色したモノを差し出すと、ずいぶん遠くにいるのにヤツらは揃って鼻をつまみやがる。

「べつに？そのまま下駄箱に入れちゃったぜ？臭せえの持って帰ってもしょーがねえし」

俺も、俺も、とみんなが同じ答えを返してきた。

「まさか、田村くんは真面目に持って帰るの？」

いや...、と言いかけた時、

「ピンポン。いいこと思いついた」

ヒビクが戻ってきて、自分の下駄箱からボロ雑巾のような上履きを取り出した。

「お世話になった`あの人、に心ばかりの土産として...」

ニヤリ、と晒うヒビクの顔でピンときた。

他の連中にもヒビクのたくらみが分かったようだ。それぞれ嬉しそうに晒いながら自分の上履きを手にする。どれもこれも、素敵色に染まり、カカトが踏み潰され、破れ、もわんとした温もりと共に、ぷうんと香るシロモノばかりだ。

「上履き禁止！って何度も追いかけられたしなあ〜。`あの人、も、最後にこいつらを没収できて涙を流して喜んでくれるんじゃないか？」

昇降口を出て俺たちが向かったのは、部舎の隣に建つ用務員小屋。

その入り口の前に5足の土産を綺麗に並べると、一面純白の地面にねずみ色のそれらが浮き上がって、世にもみすぼらしい光景が出来上がった。

「世話になったな、ポッター！」

「元気でいろよ、ポッター！」

「少しは痩せないで、早死にするから気をつけて」

などなど、それぞれ惜別の言葉を述べていた時、カチャリ...とドアが開いたもんで、俺たちは一瞬のうちに脱兎のごとく駆け出した。

なんだこれは！待て、お前ら！と後ろで怒鳴る声があったが、待ってやる気なんかあるはずもないから、当然俺たちはそのまま校門を飛び出した。その直前に群竹とか麻耶ちゃんの姿がチラリ

と視界に入ったが、ポッターの怒鳴り声が聴こえていた最中だったから立ち止まることはもちろん、話をする事も出来なかった。

「バカだよなあ、俺たち」

「でも、あそこでポッターが出てくるなんて思わなかったよ」

「どんな顔してたのか、見たかった気もするなあ〜」

「風間もひでえこと思いつくよなあ！」

そんなことを言い合いながら走るのをやめて後ろを振り返ってみたが、さっきよりも随分と大降りになった粉雪に視界を遮られて、もう校門の方は見えなくなっちまっていた。ポッターも追いかけては来ないようだ。

ブラザーズと柏木はそのまま先を歩いていくが、ヒビクがふいに立ち止まる。

「どうした？」

「今、何か聴こえた気がして」

「まさか、ポッターか？」

ヒビクは耳を澄ますが、俺には車道を水しぶきを飛ばしながら往来する車の音しか聴こえない。

「何やってんだ？行こうぜ？」

先を歩いていた兄が振り返り、俺たちを促す。

だが――。

――……………ぱいっ。

たった今、俺にも聴こえた。

微かに呼ぶ声。

「だから、おめーら何をぼーっと突っ立ってんだ？」

「しっ！ちょっと黙れ」

さらに騒ぐ兄を制して黙らせたとき、

――……、先輩…っ。

――風間、先輩っ！

確かに数人でヒビクを呼ぶ声が聴こえた。

「ヒビク…」

ヒビクはじっと目を凝らし、先の方を見つめている。

雪が邪魔する視界の先から、誰かがこっちに向かって歩いてくる。

「あれって、まさか...」

雪がなかなかその姿をはっきりと見せてはくれない。

けど、

「ヒカル...？」

ヒビクの足はもう、その人に向かって前に出ている。

向こうからとこっちから、互いに歩み寄るふたりの距離が近づいていくにつれて、それが確かにヒカルだと分かった。腕には包帯を巻いている。足取りも危なげだ。けどヒカルは早足で一直線にヒビクに向かって歩いてくる。

「マジか？だってあいつ...」

「ヒカルちゃんだよ...」

兄ももう騒ぐのをやめ、柏木と弟もその場に立ち尽くして道の先をじっと見守る。

「ヒビク先輩！」

「ヒカル走るな！転ぶぞ！」

切羽詰ったようなヒビクの声が響き、同時にヤツが差していた傘が放り出された。危なっかしく走るヒカルの元に早く行かなければと、焦っているんだろう。

「おいおい、大丈夫かヒカル...」

「滑るんじゃねえぞ...」

無事にヒビクがヒカルの元に到着したのを見届けてから、俺たちも少しずつふたりに近づくように歩道に戻りはじめたが――、

「ヒビク先輩が大好きっ！！」

走る車の音もかき消してしまうようなヒカルの叫び声を聴いたとき、俺たちの足はその場で止まった。松山太郎、次郎はぽかーんと大口を開け、柏木も呆然と立ちすくみ、俺は――。

――ヒビク先輩が大好き。

ヒビクに対するヒカルの想いを聴いて、色んな感情が一気に駆け巡った。

俺が告白されたってわけじゃねえのに、胸がいっぱいになっちまって。

――おい、ヒビク。何をぼーっと突っ立ってやがる。

おめーがずっと、言いたくて言いたくてたまんなかったことを、ヒカルに先に言われちまって。

ヒカルはおめーに、その言葉を伝えるためだけに、この雪の中を追いかけて来たんだぜ？

いつまでも安心してんじゃねえよ――。

俺たちは息をするのも忘れて、ただ、じっとふたりを見守った。街の喧騒は別の次元にすっ飛んで、しんしんと降り積もる雪の音だけが聴こえてくる。向こう側ではあかねや群竹、麻耶ちゃんたちが俺たちと同じように、ただじっと佇んでふたりを見守っていた。

刹那。

ヒカルを抱きしめたヒビクが何かを呟き、ふたりは唇を寄せ合った。

「ぎょえっ?!」

変な声を出した兄の後頭部を、弟がすかさず叩きのめす。

空気を読めないバカ兄が、いて一な、こら!とわめいているが、そんなのはどうでもよかった

。

――やったな、ヒビクッ!

ヤツがヒカルに言った言葉は聴こえなかった。

けど、長い長い物語。

やっと、ハッピーエンドのピリオドを打ちやがったな。

こんなに寒い雪の中だったのに、おめーらが発散させてる熱がここまで伝わってきやがる。

今日の雪は、なんてあったかいんだ、ちきしょーめ。

「い、いいいつまでやってんだ、あいつら...っ!」

「太郎くん、その言い方、なんかやらしいよ...」

「バカだからしょーがねえよ」

いつまでも放したくなんかねえだろう。

最後の最後でやっと――、

「――互いの心を重ねたんだからさ...」

「く、く、く唇まで重ねてっけどな! なげえっ!!」

まあ、確かに長い。

かなり、長い。

いいかげん、長い。

何となく目のやり場に困り、抱き合うふたりの先に視線を延ばした。

両手を胸の位置で組んだあかねが微かに見える。ただその姿が雪の中に浮かび上がっているだ

けで表情までは見えないが、それでもあかねがキラキラの涙を流していることだけは分かる。

今日、ここにヒカルを連れて来たのは、きっとあかねなんだろう。ヒビクに託されたものを、速攻で届けてやったに違いない。あの空席にはそういう理由があったんだ。

もちろん、これは俺の妄想だけど、今日だけは自分の脳みそが信じられる。

あかねならきっと、そうする――。

――あかね、やっぱおめーはサイコーの女だぜ！

こっちからあっちのあかねに、そんな念を飛ばしてみた。

……………。

が、しばらく待っても何も返ってきやしないから、俺に向かって微笑むあかねを脳内で補完した。

最高の、ふんわりな微笑みを。

やがて、長い長い抱愛中（だきあいチュー）をやったあたりは名残惜しそうにその体を離し、ヒカルはあかねたちのもとへ、ヒビクは俺たちのところへ背中合わせに歩き出した。

だんだんと近づいてくるヒビクの顔は、堂々と晴れやかで微笑んでさえいる。

「ヒビク」

よかったな、の気持ちを込めてヤツの肩を叩くと、ヒビクはひとこと、ああ、と答えて笑う。

「なにが、`ああ、だ！ヒカルの唇を奪ったのはこの口かあ！俺に触らせろっ！」

目の前で見ちまった濃厚ラブシーンに、頭がおかしくなっちゃった兄は、ヒビクの唇に手を伸ばしてぎゃーぎゃー喚く。

「や、やめろ、変態！ヒカルの温もりが穢れちまうっ！」

ヒビクは自分の唇を両手で塞ぎ、兄の暴挙から大切な温もりを守った。

「ぬ、ぬぬ温もりだあ～？！おめーの方が変態だべ！風間のえっち！助平！」

完全に頭のネジがすっ飛んじまった松山兄。

そんなに刺激が強すぎたのか。

「もう…、太郎くん。感動のシーンが台無しになるからやめなよ～」

「もう、このバカはほっとけ」

柏木がたしなめ、弟が見捨てる。

「太郎よ、非モテのひがみはみともないぜ？友の幸せを一緒に喜んでやるのが仲間だろう」

「ちょっと待った田村！非モテってなに？それでも俺、1、2、3年と彼女がいなかった時ねーんだけど？」

兄はむきになって食って掛かってきた。

「この3年間、非モテ非彼女を貰いたのは田村だけだろうが。非モテ大王のくせに人のこと言っ

んじゃねーよ！」

——非モテ大王……。

「か、過去のことなんかどーでもいいの。どいつもこいつもフラれちまって、今現在、らぶらぶハッピーなのはヒビクだけだろーが」

すると、柏木がおもむろにムツとした。

「どいつもこいつもって…、それは俺と太郎くん限定でしょ？どうせね。フラれたよ、俺と太郎くんは！あー、もう！」

柏木のこのキレ方から想像すると、さっきの体育館横、やっぱり小春ちゃんを繋ぎとめることは出来なかったようだ。

「確かに俺は3年間非彼女を貫いたさ。けど！決して非モテじゃねえぞ！制服のボタンがねえの、俺だけだろ？」

「そんなの、てめえでぶちぶち取りまくったんだろーが！あさましすぎるぜ〜」

「なんですと？！」

唯子ちゃんと小早川のキモチを踏みにじる気か、松山兄め。

「おめーら、歩きながら非モテだフラれただうるせーよ！」

弟が偉そうなことを言った。

が、

「はいはい。松山次郎さんは現在発展中ですからね〜」

「柏木くん？ずいぶんトゲのある言い方するなあ？」

「べつに？事実を述べただけ」

「クソ事実だってーの！納豆男のくせに！」

「誰が納豆男だ！おめーのせいで、今日俺は1日大変だったんだぞっ、バカ男！」

以下ぎゃーぎゃー、ぎゃーぎゃー。

結局こうなる。

俺たち一応、今日、立派に高校を卒業したんですけど。

そして今さっき、粉雪の中で、まるで映画のワンシーンのような美しい光景を見たばかりなんですけど。

「あはは！うるわしいじゃねえか」

ヒビクは騒がしい連中を慈しみの目で見つめて笑った。

どこがうるわしいんだ！と、太郎以下3人が傘を持ったままヒビクにのしかかると、真っ黒な巨大だんご虫の出来上がりだ。

まったく。

どこまでもアホでうるせえヤツらだ。

けど、もうこんな当たり前のバカも出来なくなっちまう。

「ヒビク…、何時の便だっけ？」

3人にのしかかられてあっぷあっぷしていたヒビクは、ひとりずつ剥ぎ落としながら20時、と答えた。

「見送りには行かねえぞ」

今まで大騒ぎしていた兄は、急に真面目な顔をして言った。

「いいさ。見送られるのは苦手だし」

「泣いちゃうからか？」

「泣くかよ、バカ」

「マジで行かねえぞ？今度会うのは5年後だぞ？」

「これがあれば、5年...ガンバレそうだ」

ヒビクは右手の人差し指と中指を自分の唇に当て、ニヤリ、と笑った。

「かぁ～！！えろ男め！」

兄は滑稽なくらいに赤くなった顔を隠すようにしてうつむき、スタスタと早足で先に行っちゃまった。

もうここは駅。

兄に続き、弟と柏木も先に改札をくぐっていく。

「ほんと、騒がしい連中だぜ」

ヒビクはニヤニヤ笑いながら、ヤツらの背中を見つめていた。

「寂しくなるだろう？」

「...まあな。けど、」

「それがあれば大丈夫ってか？」

ヒビクのニヤついた唇を指差してやると、大正解、なんて言いやがった。

「まったく...。天下の往来でおめーらふたりは...」

堂々とキスなんかしやがって――。

「はは...。見せ付けちまったみたいで悪かったな」

「べつに...」

そりゃ、多少羨ましかったけどな。

だが、それ以上に満たされた感が強かった。

こいつの恋路には、1年の時からいろんな意味で振り回されたし、俺。

――振り回された...よなあ。

「非モテ大王かぁ...」

確かに3年間彼女ナシだったのは俺だけだ。

片想いは実らないばかりか、最後の今日、あかねとはひとつことも交わすことも出来ずにさよならしちまった。

そして、親友は今夜アメリカに行っちゃう。

それらはめちゃくちゃ寂しい。

寂しいけどー。

「よかったな、ヒビク。頑張れよ」

「ああ。サンキュ」

本城で過ごした3年間は、笑っちゃうぐらいに濃い時間だった。

しょーもないことばっかやってた気がしないでもないが、その一個一個は形のない財産だ。

ヒビク、太郎、次郎、柏木。

ヒカル、麻耶ちゃん、伊藤に大久保と群竹も。

マドンナ先輩に唯子ちゃん。

大島、小春ちゃん。

そして、小早川。

どいつも、どの人も、俺の青春と一緒に歩いてくれた素晴らしき友（たから）。

そしてあかねは、俺の青春そのもの。

ーサンキュ。

田村くんのスクールデイズは、みなさんのおかげで麗しい日々でございました。

「おーい！電車来だぞー！」

「電車が来たよー」

「早くしろよ、えろ男にたむどん！」

ヤツらが改札の中から大声で呼びやがる。

「えろ男って……」

ヒビクは周囲から集まる視線に困惑しながら足早に改札をくぐっていった。その後に俺も続く

。

ホームに入ってくる電車の音は、3年間聴きなれた響きだ。

階段を駆け上がる前にもう一度、もうくぐることもないだろう改札を振り返った。

あの場所で、あの先で、愉快地騒ぐ俺たちが見えたような気がした。

「田村、急げよ！」

「おお、今行く！」

さらば、本城。

グッバイ、青春の日々。

アディオス、俺のうるわしきスクールデイズ。

――な――んてなっ！

-完-

田村くんのうるわしきスクールデイズ 3

<http://p.booklog.jp/book/78424>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78424>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78424>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ